VIRINA REKONSTRUO

女性改造

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十一年十二月一日發行大正十一年十一月十七日印刷納本

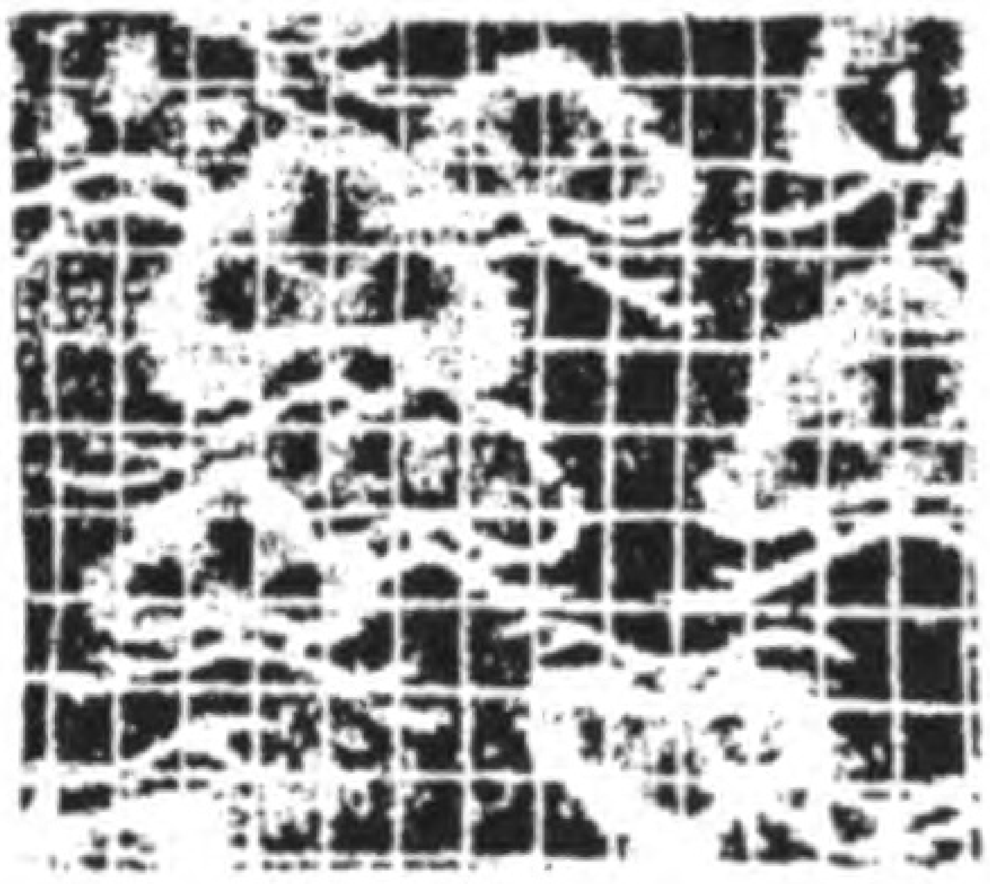
第一卷 第三號

十二月號

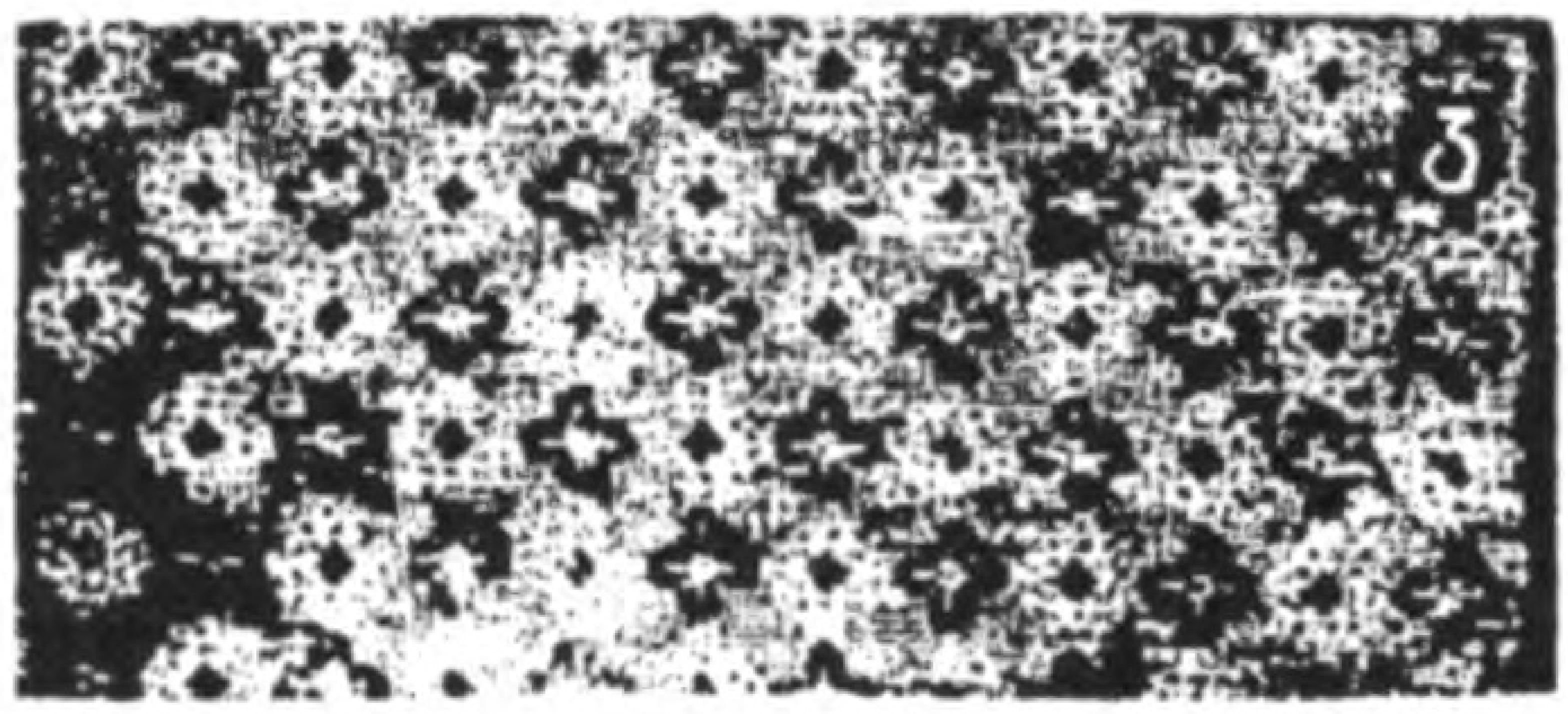
1922

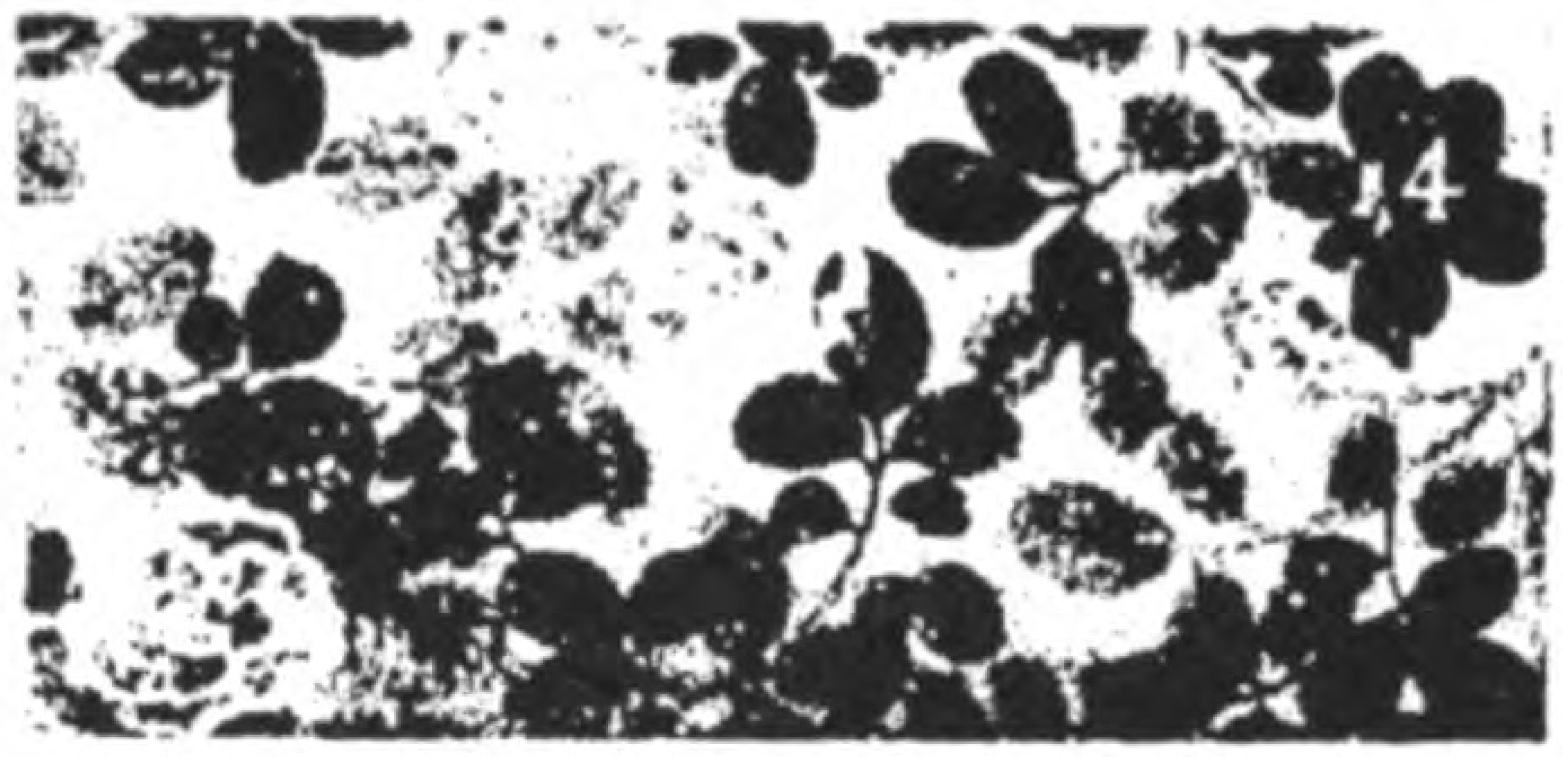
霜どきの

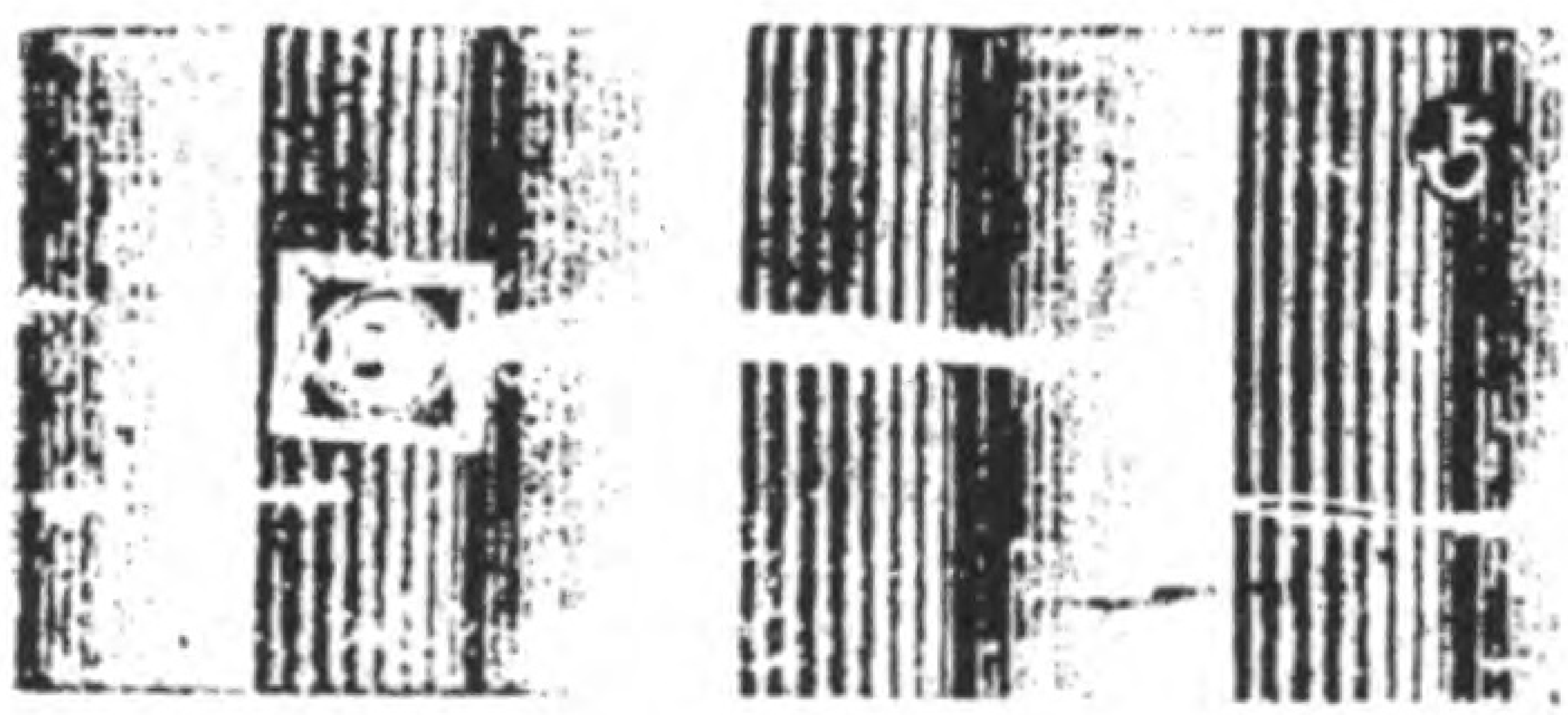
お召物

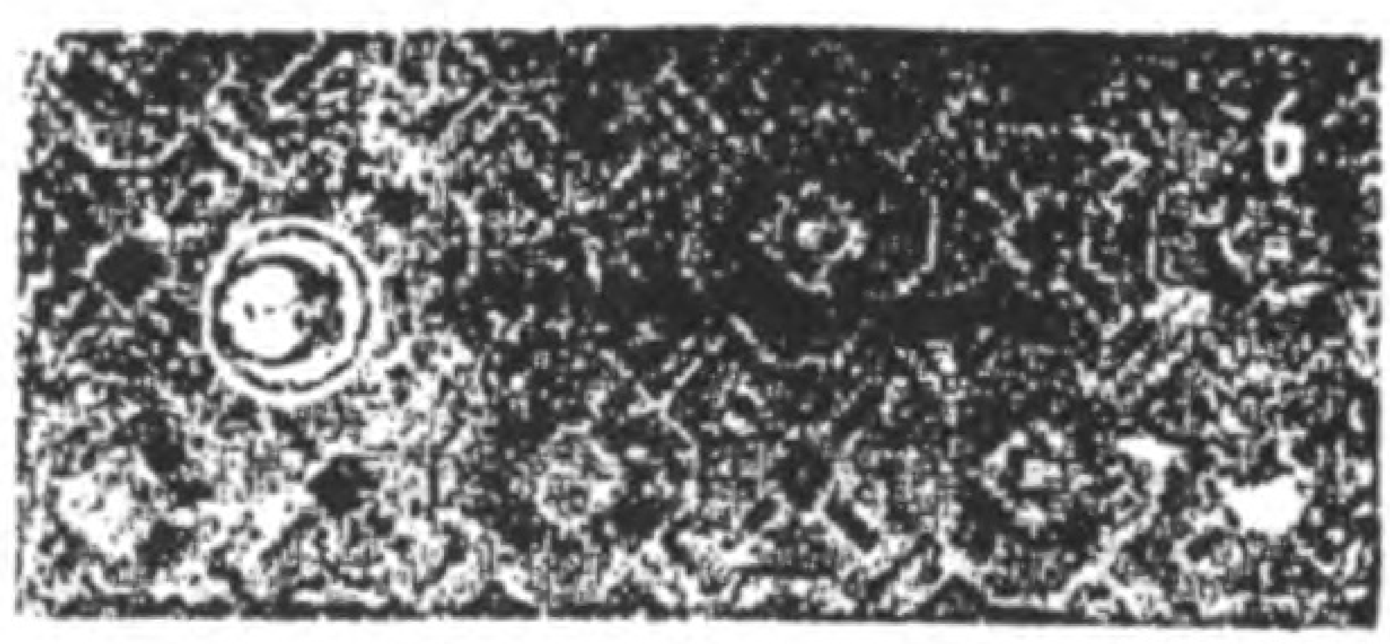












(1) 紡績飛白
黒地の白格子に藍色の松な配ふ十七八歳御令孃向
六圓卅錢

(2) 伊勢崎模様銘仙
栗茶紺に細荷模様
拾六圓五拾錢

(3) 大島銘仙
廿二三歳御婦人向
拾四圓五拾錢

(4) メリンス
藤ローズ地に白鼠の薔薇模様
拾壹圓九十錢

(5) 壁銘仙
紺に藤ローズ新橋黒の三筋柄十七八歳令孃向
拾六圓参拾錢

(6) 新大島
十七八歳令孃向
四圓九拾錢

文學博士 瀧精一著

文人畫概論

定價二圓 送料拾七錢

挿畫拾五葉 菊版上製

最新刊

◇錦繡の我秋を華る本書を見よ◇

文人畫の流行今日より甚だしきはなく、またそれほど喜ばしく美はしきことはない、されど悲しいことには文人畫の概念を得るの一冊だにないことだ、斯界の第一人者瀧博士は、深くそれ等の缺陷を遺憾に思ひ、本年東京帝國大學にて「文人畫概念」てふ趣味深き講演をなされた、本書は實にその講演を基礎として(一)文人畫の起源(二)文人畫の流派化(三)文人畫の原理(四)文人畫と南畫(六)文人畫の精華(六)將來の文人畫を說いたものだ、挿畫も麗しきコロタイプ十五圖を挿入したれば、美術の國の人々が必ず一讀せではすまぬ含蓄多き著書。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二



女性改造 十二月號 目次

改造社出版目錄

◇文學博士 醫學博士 榊保三郎著

學齡より丁年迄の精神發育研究

定價四圓　送料廿七錢　四六倍判上製

四版

著者が十一ヶ年を費して研究した世界的模式の大冊子で、六歳より廿一歳までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一部を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山潜著

自傳

定價壹圓八拾錢　送料拾五錢　四六判上製

四版

赤色露西亞に於てレーニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナショナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無産者の味方として世界的活躍をなせるものは氏を置いて他にない。本書は氏の自傳だ。

◇室伏高信著

靈の王國

定價壹圓五拾錢　送料拾五錢　四六判上製

四版

本書は、ラーテナウの思想精髓を傳へたものである彼は現代獨逸に星の如く輝く最高の政治家兼哲學者であつた。獨逸改造の全責任者として彼は、人の心から崇高なものを抽き出す事が人生の目的だ、靈の王國を建立せよと叫んだ。

◇ラッセル原著　宮本鐵之助譯

數理哲學概論

定價貳圓八拾錢　送料拾九錢　四六判上製

四版

本書は努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば、先づ數理哲學の門を叩くの外はない。

◇理學博士 桑木彧雄著

物理學と認識

定價壹圓五拾錢　送料十五錢　四六判上製

四版

アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題である、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奧を傾けたものだ。

◇文學博士 米田庄太郎著

リッケルトの歷史哲學

文化哲學叢書第一篇

定價四圓七拾錢　送料廿三錢　四六判上製

八版

新獨逸の青年をして、眞に蘇生の思をなさしめたのは新理想主義哲學だ、ハイデルベルヒの彼の講座は、單に新獨逸青年のみならず實に世界の碩學が雲集してをる、彼の哲學を我が米田博士が懇切に解說されたのが本書だ。

◇文學士 板垣鷹穗著

新カント派の歷史哲學

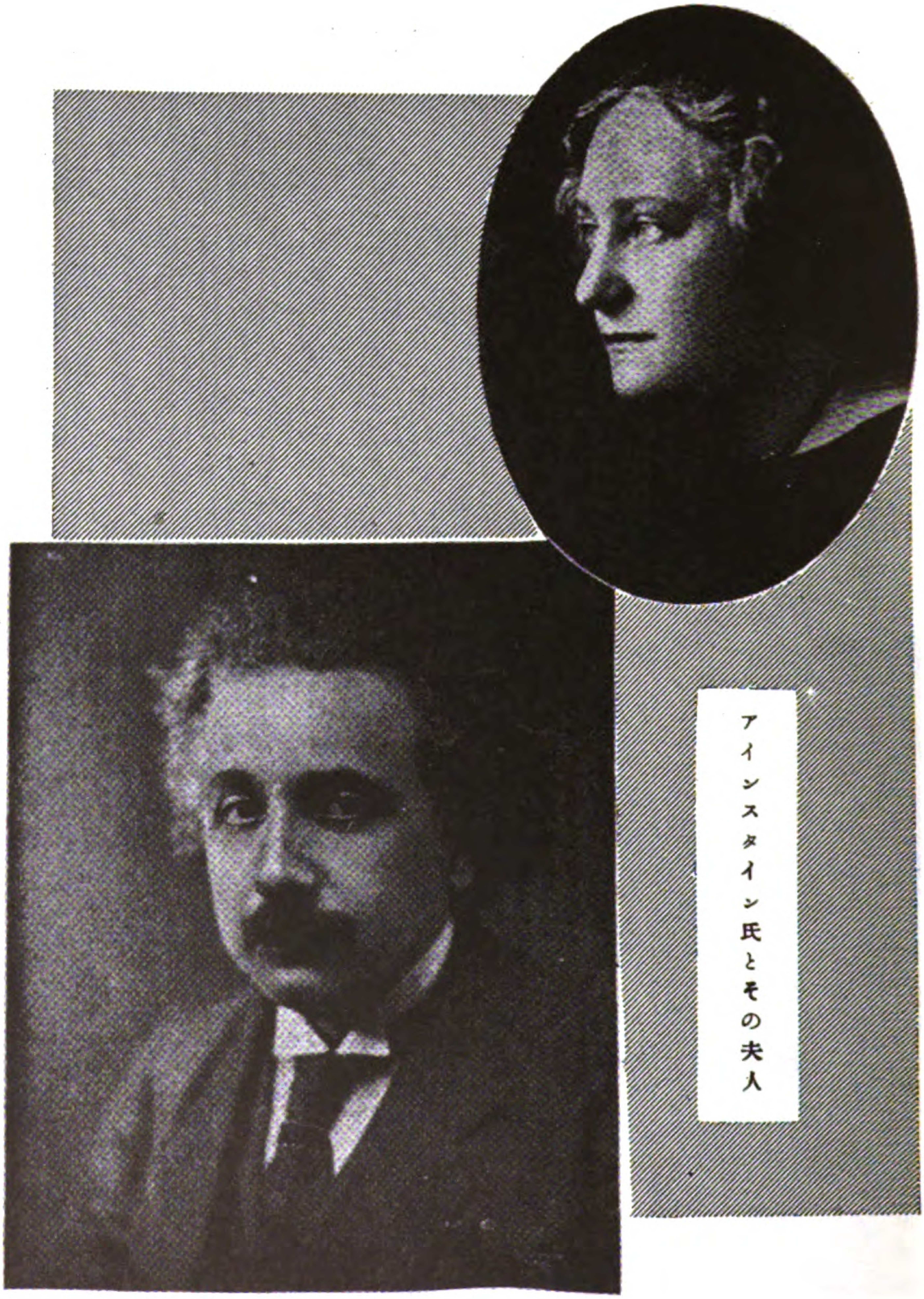
文化哲學叢書第二篇

定價壹圓五十錢　送料拾五錢　四六判上製

四版

本書は歷史哲學の入門書として書かれ、從來の歷史哲學が辿つて來た大體の徑路を瞥見し、新カント派の學說を中心として現代の歷史哲學を概觀したものだ、著者は若き哲學者として儕中の錚々たる人である。


Pompeian
Don't Envy Beauty
Use Pompeian
自然の美
何たる脱俗的な言葉でせう？
諾なる哉人工美の既に及ばざる所！
ポンピアン・マッサージクリームは皮膚の保健營養を主眼として精製せし化粧料にして天恵の美に溌溂とした白美の清彩を加ふ
是れマッサージクリームの特色なるは何人も等しく定評する所也。
POMPEIAN MASSAGE CREAM
米國ポンピアン會社東洋總代理店　東京　佐々木商店



アインスタイン氏とその夫人

北野丸甲板上に於けるア氏夫妻



迎へて東京驛精養軒に於ける記念撮影



前列右よりア夫人、博士、山本改造社長夫妻及花輪花籠を贈れる令孃並改造社員

慶大圖書館に於けるア氏と日本學界の權威



前列向つて左より石原博士、アインスタイン氏、同夫人、禰川博士夫人、山本社長夫人、長岡博士、愛知博士、後列向つて左より禰田博士 稲垣氏夫人 稲垣氏、山本社長、岡谷理學士です。

獸人

ゾラ原作
三上於菟吉譯

戀妻の十年前の情人をさへ生かして置けぬ嫉妬狂。美女を見れば脂切つた白い肌にわが齒を立てゝムズりと嚙み裂かずにはゐられぬ傷害狂。異性の汚物を拭いたハンケチや汚れた手袋を寶物のやうに崇める愛物狂。盗み侵されはしまいかと强迫觀念に夜の目も合はされぬ隱匿狂。戀の叶はぬ恨から列車を衝突させて自殺する怖しいはたち娘。妻の財産を横領しようとして蓄積毒殺を敢えてする老人。女といふ女を一目でたらしてしまう凄い色　などが活躍して、全篇血なまぐさい殺人やねば土のやうな情慾の匂ひで充ちた恐怖すべき大作。しかもそれを裏づけて大ゾラの深甚な人道觀念はまるで潮のやうに凄じく漲るのである。この作者の世に餘る長篇の中で一ばん人間的な魅力を持つたのは何と言つてもこの「獸人だ」。

定價貳圓五拾錢
送料拾九錢
四六版上製

發行所
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番
改造社

沙羅の花

芥川龍之介作

定價貳圓八拾錢

◇送料十九錢◇

◇四六版美裝◇

忽五版

龍之介傑作撰集

現文壇に於ける一異彩として、靈妙豊かなる世界に常にその獨自の藝術境を開きつゝあるは芥川龍之介氏である。沙羅の花に收められたる二十餘種の短篇は、氏がこれまでにものせるものゝ中より粋なるものを拔き取つたものである。氏の絕えざる藝術的精進の力と、年每に加はる作品の精鋭さとは、實に他に其の籌を見る能はざる目ざましさである。眞の藝術を味ひ藝術の深奥を究めんとするものは須らく、本書を繙くに如くものはない。

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

アインスタイン氏
記念繪はがき

アインスタイン教授の來朝を記念する爲に記念繪はがきを發行いたしました、五枚一組みで貳拾錢です、御希望の方は賣切れぬ間に申込んで下さい、繪はがきの内容を簡單に左に説明申上げます。

1 相對原理を證明したる日蝕寫眞
(一)、英國日蝕觀測隊の用ひたる望遠鏡
(二)日蝕時より太陽及星
2 相對原理の基けるマイケルソンの實驗裝置
3 最近のアインスタイン氏夫妻士
4 最ゝのアインスタイン博士
5 アインスタイン氏の筆蹟

改造社

UTRINA KERONSTRUO

DECEMBRO 1922

舊科學沒落とア氏歡迎

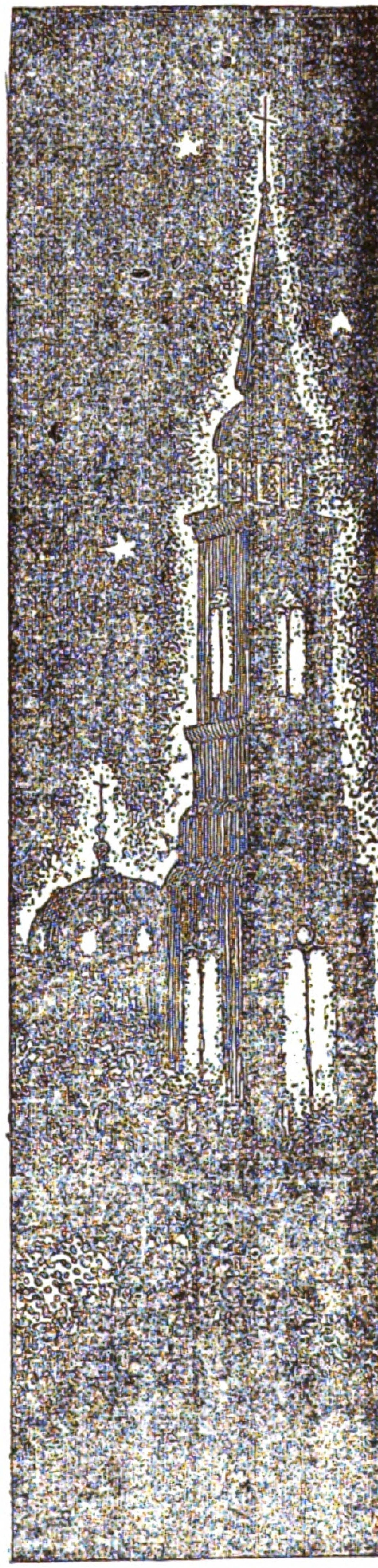
近代の科學の總てが寺院の廢墟にも等しいことは相對原理が絕體眞を確認されたとき一層その感を深くしました。そして私どもの小學や女學校で敎はつたニウトン引力が噓の原理であり、ユークリッド幾何學も自然科學の基礎をなすものでないことをアインスタイン敎授から敎つた刹那、私どもの恐愕と失望はどんなでありましたらう。

かくすべての學問の基礎原理が動搖し始めてからと云ふものは私どもは植物、生理、數學その他の根本理論にも悉く疑問を持たない譯には行きません。又た疑問を持つことが正當であり、且つ眞理に近づくやうに思はれる。相對原理の發見は、理學は勿論、すべての學問の基礎に深き？を投げかけました。私どもの信ずる所では今やすべての學問を解體すべき日が刻々近づいて來たのを豫感せしめる。從來の因襲は不眞理を眞理と思はせてそれに盲從したことのいかに數多いことを思はせます。

この新しい眞文明の再建には誰が當らなくてはなりませんか、それは結局、本誌の愛讀者諸姉より以外に、我國には適當なる候補者はないのです。舊文明に敎育された母性がいかに今後の子女を毒するか、思へば寒心に堪へません。

私どもは幾百萬子女のためにアインスタイン敎授から何を學び、何を求めなくてはならぬでせう。單に一物理學の問題ばかりでなく、それは私どもの一番胸奧を流れる或者を體感するため、氏の一擧一動に深甚の注意と敬意とを拂ふべきだと思ひます。

アインスタイン敎授は私たちに向ひ、私たちの思想に、すべての傳統を超越すべきを誨へてくれます。傳統を超越して始めて眞の原理、眞の改造を發見することが出來ます。すべての物が行きつまつたとき此大偉人を迎ふることがどれほど社會に重大意義を與へませう。



女性の宗教的能力

木村泰賢

一

自分が英國に居た際に、英國敎會に一つの面白き議論が起つた。即ちそれは婦人傳道者も男子の牧師と同じやうに敎會の說敎壇(pulpit)に立ち得るの權ありや否やといふことであつた。蓋し婦人參政權に伴ふ言はゞ婦人參敎權とも名くべき運動に對する議論を解して然るべしと思ふ。之に對して敎會側の方では婦人の說敎壇に立つのは敎會の規定に反するのと且つは原始基督敎時代よりして、集會に於て婦人の發言が禁止せられてゐたといふ聖書の文句などを楯として之に反對の氣勢をとつた。乍併、婦人參敎權論者の側(主として婦人傳道師)では、盛に之に抗議し婦人も敎壇に立ち得る權あるを

主張した許りではなく、實際に於て敎壇に立ちて人氣を集めてゐた婦人もあるといふ始末であつた。

自分は已にこの議論自身に尠からず興味を感じた次第であつが、一層興味深く感ぜられたのはこの問題に引續ける議論として、婦人の宗敎的能力は、男子のそれに比していかにといふ論究であつた。勿論自分の見た限り、それ等の議論も多くは新聞の投書欄内に掲げられた斷片的なものではあつたけれども、ともかく之に對する一般の考を窺ふとの出來る點に於て自分は注意して各種の意見を讀んだのである。而してそれ等の意見なるものは、本より一概に片附けることは出來ぬけれども、要するに男性側では婦人の宗敎的能力の到底男子に及ばざることを主張し、之に對して婦人側又はその同情者側では、婦人も男子と同樣の宗敎的敎類を受け得るやうになれば婦人中よりも男子に劣らざる宗敎的大才を産出し得るに相違がないといふのは大體の主意のやうであつた。要するに結果は水かけ論に終つた形ではあつたけれども、少くも自分としては、この問題に就て種々考へさせられたのは大なる所得であつた。殊に當時、自分は原始佛敎に於ける婦人問題を考察してゐた際であつたからして、比較研究の上からしても大なる刺戟を受けたのを欣んだ次第であつたのである。

今こゝに自分はこの問題を提出して、少しくこの點に關して自分の意見を述べて見ようとするのも實にかゝる因緣によることを斷つて置く。

二

一面からすれば一般に女性は男性よりも宗敎心が强いと言ひ得る。基督敎にせよ佛敎にせよ、寺院に參詣する者は男性よりも女性に多いといふ事實に徵してもこの事は明であらう。乍併、他面からすれば、之は要するに量に就てゞあつて、必ずしも質に就ても然りといふことが出來ぬ。換言すれば宗敎信仰の深みと高みといふ問題になれば、女性必ずしも男性に勝るといふとが出來ぬ。寧ろ卒直に言へばこの點からすれば女性の宗敎心は男性のそれに比して可なりに淺いものであ

るといふことが出來やう。蓋し女性は男性に比して表面的感情に走り易く、且つ依賴心强きが故に稍々もすれば極めて安直なる信仰にも容易に妥協し易き性質を帶びてゐるからであらう。御祈禱を賴み、巫占を信じ、家相を氣にし日柄の吉凶に心を惱ますなどは、必ずしも女性許りではなけれども、特に一般女性(日本の)の好みてすることではないか。特に少しでも不可思議力あるかの如く見ゆるものに對しては、無批判的に傾倒し、毫も反省する所なきかの如き、所謂盲信的狀態は何と言つた所で男性よりは女性に多い現象である。而も其等は必ずしも無識階級のみに行はるゝものでなく、往々にして有識階級と稱せらるゝ婦人連中にも行はれてゐることは不斷に見る現象ではないか。且つ、こは獨り日本に於て許りではない。西洋に於ても往々然りで、自分の乏しき觀察でも屢々實際に相遇したことである。殊に最も滑稽に感じた一例を擧ぐれば、ロンドン滯在中、自分は可なりに高き敎育を受けた一女性と知己になつた。彼女はよく世事を談し、宗敎を論じ、敎會などは寧ろ輕視してゐた程、自ら高く任じてゐたものであつた。けれども、吉凶の兆候を氣にすること深く、嘗て夕方、外出に際して門を出でて間もなく一疋の白猫が道を横切りたりとて一旦、戾つて來た程、かゝることに氣を揉むのを見て、自分は實に不思議に感じた次第であつた。又僕の尊敬する一老夫人は哲學博士の學位を有し、數種の著書を發表した程の人ではあるけれども、その子息の戰歿以來、例の交神術(スピリチユアリズム)の信徒となり、常に幽冥界と交通しつゝありとて靈界からの通信なるものを屢々自分にも示されたが、失禮ながら自分からすれば全く淺薄なもので、要するに迷信の範圍を脫せざるものであつた。その外、かゝる種々の例があるけれども、今はこの位にして置くが、要するに當時自分はかゝることを見聞する每に、宗敎的に可なりに訓練されてゐる筈の西洋でも、所謂、新しき女性の宗敎生活が往々にしてかく脫線するとすれば、況して特殊の敎艱を經ざる日本の女性が稍々もすれば低級なる信仰に走らんとするのも怪むに足らぬ次第と、今更らしく感じたのであつた。

人あり或は之に對して言ふであらう。かくの如きは要するにたゞ女性のみを對象として觀察した結果で不公平を免れぬ。

若し男性に就てかゝる觀察を下すならば矢張、同じく到る所に見出し得る現象ではないかと。然り、自分とても決して之を否定するものではない。乍併、自分のこゝで論じてゐることは、專ら大體に就てゞあつて、個々の場合にまで渉らんとするものではないことを忘れてはならぬ。個々の場合に就て言ふならば勿論、男性中にも驚くべき程、低級なる信仰を有するものもあるけれども、大觀上よりすれば、矢張、何と言つた所で女性の方が迷信やら輕信やらに傾き易いといふことは爭はれぬ事實と思ふ。

加之、女性の信仰は、概ね傳習的で、創始的ではない。此事は世界宗教史を一瞥するならば何人も容易に氣附き得る所であらう。

佛教、基教、回教、道教、扨てはゾロアスター教に到るまで、苟も世界の大宗教と稱せらるゝものは、悉く男性をその創始者とするではないか。

更に下りて佛教や基教に種々の宗派ある中で、基督教のクリスチヤン・サイアンス派を除いて、女性によつて建設されたものは一つでもあるか。日本の近代に於て女性を開祖とする一種の新しき宗教運動の起つたのは、事實ではあるけれども、その思想的文化的價値となれば到底、佛教や基督教などの如き普遍的意義を有するものではない。のみならず其等の中には正當に批判する限り隨分迷信的要素を含み、時に欺瞞的行爲も交りて、可なりに迷信強き現下の日本に於てさへ物議の種となるものゝ尠くないことは今更言ふまでもない所であらう。從て女性を創始者としたといふこと自身には新しき意義を寓しながらも、その獨創的價値に於ては到底、之を餘りに高く評價することが出來ぬ。

即ち、かく觀察して來ると、女性はその宗教を求むるの心に於ては男性よりも強いけれども、その質に到れば到底、男性のそれに及ばぬものがあると言はねばならぬ。所詮、一般に女性は感情生活に於て強きはその宗教を求むるに切なるの原因ではあるけれども、深き透徹した理性的直感に對する修練を缺くのが軈て、稍々もすればその質の低くなり易き所以

であらう。「女性は要するに他の指導によりてその宗教心を滿足すべきもので、斷じて他を指導するの資格がない」などといふ一部論者の批評も實にこゝから來るのである。勿論、自分は後に述ぶるが如く、この早急なる結論には左袒するものではなく、女性と雖も之を親ふことによりて、その中より實に獨創的なる宗教的大才の產出し得る可能性あるは充分に認むるものではあるけれども、ともかく事實として、少くもこれまでは女性の宗教的能力の遙に男性に及ばなかつたといふことは、英國邊りの女子參政權論者と雖も、認めねばならぬことゝ思ふ。

三

然らば女性は遙にその宗教的能力に於て、先天的に男性に劣るものと斷定して然るべきかといふに、自分は、未だ俄に然りといふことに躊躇するものである。いかにも今までの所、劣つてゐたには相違がないけれども、今後、婦人が解放されてからもさうであるとは到底斷言し得られぬ。のみならず今までの處にした所で、たとへそは創始的ではないとしても、女性が宗教思想の開展に多大の貢獻をなした例が歷史的に乏しくないのは事實である。

前項では專ら、言はゞ奪つた立場からの觀察を述べたから、こゝでは、所謂、與へた立場よりこの問題を眺めて、以て公平を期することにしたいと思ふ。

先づ歷史的事例に就て述ぶるに、便利上自分の專門とする印度宗教史に徵するに——少くも古代にありては女性にして宗教的思想運動に携はりて顯著なる活動をなした例の尠からざるを見逃す譯には行かぬ。已に印度最古の宗教詩たる梨倶(リグ)吠陀(ヴェーダ)(B.C.1500—1000)の讃歌中に女性の作と認むべきものあるが、殊に奧義書(ウパニシャッド)時代(B.C. 800—500)となれば明に女性の身を以て、男子に伍して堂々と梵我不二の哲學を論究したものゝあつたことは、奧義書自身の吾等に告ぐる所である。就中、奧義書哲學者中第一と稱せらるゝ祭皮衣仙(ヤージニャヴルキャ)の妻マイトレーイー女の如きは、その最も著明なものであつた。夫の與へんと

する富を拒絶して却て不死の法を知らんと欲し、遂に夫妻の間に於て、奥義書哲學中、最も深奥なる教義の唱和を見るに到つたのである（邦譯ウパニシャッド全書第一卷四一—四四頁參照）。更に下りて佛教（B.C. 500）となるやその教團中に多數の女性を擁した結果として、この中にはその求道心に於て、その修得の境界に於て、男性に劣らざるものが尠くはなかつた。殊に佛陀は道器としては女性も男性に敢て讓ることなしとせられたので、女性も自由に所謂、參教することが出來、彼等の中には異道者と論議して之を屈伏せしめたものあり、國王と問答して之を教化したものあり、高足の上座と法門を論究したものあるなど、その方面にも可なりに活動したものであつた。從て後に佛教會がその教理を組織的に研究するに當つても、其等女性の說法に負ふもの極めて多く、名高い教相にして、女性の說明法を採用したものが稀ではなかつた。（拙著、原始佛教思想論三一三—三一七頁參照）。加ふるにこは獨り原始教團に於ける出家の尼に限つたことではなく後に大乘運動の起るに及ぶや、在家の信女としての女性がこれに參加して大事な役目を演じたといふことはかの勝鬘經一部に徵しても明である。國王の妃たる勝鬘夫人が佛陀に對して自己の宗教意見を吐露し、如來藏哲學のことやら、宗教に基く社會救濟策やらなどを提唱したのを記錄したといふのがこの經の結構である。歷史的事業の詮索はともかくとして、かゝる女性ありて俗土の間に交りて大乘佛教の鼓揚に努めたといふことだけは到底、否定することが出來ないのである。

吾人は不幸にして、他の宗教に就て、かゝる例を擧ぐることは出來ぬけれども、拾ひ集むるならば恐らく基督教史にあつても、將た、回教史にあつても、女性にして、その宗教的進展に對して思想的に功獻した例が尠くはなからうと思ふ。殊に近代にあつて女性にして、一宗一派の創始者たり、若くは創始者に擬せられむとしてゐるものが、世界中に尠くはないのは大に注目に價するものがある。西洋に於てはかのクリスチヤン・サイアンスの婦人によつて唱導せられたるが如き、日本にありては天理教や大本教の婦人を創始者とするが如き、將たペルシヤに於て新宗教の婦人によつて唱導せられて極めて有力であると傳へらるゝが如き、歷史は曖昧ではあるけれども臺灣に於て媽祖女の大に信仰せらるゝが如きその例である。勿論是等の中には、前にも述べた如くその信仰の極めて低調で思想的文化的價値の甚だ乏しきものも尠くはないけれども、ともかく女性にして宗教運動の中心とせらるゝものが、特に近代に於ける著しき現象であるといふことは、大に注目に價するではないか。

即ち、かく種々の事例を擧げ來れば、昔時より近代に到るまで——たとへ、それは大聖といふまでには到りかぬるとしても——女性中に宗教的才能を豊に備へた人に乏しくなかつたといふことは、亦一面の眞理として是非とも認めねばならぬことである。殊にこの際、吾人の大に注意せねばならぬことは、彼等女性は概ね未だ男尊女卑の考の抜けざる徒で、その一般的教艱も男性程に行かなかつた時代の人々であつたといふことである。從て若し假りに彼等をして女性も男子と同じく、一切に於て所謂機會均等に浴し得るの時代に生れしめば、或は一層獨創的で一層深奧なるものと成り得たかも知れぬと思はしむるものがある。加ふるに女性が男性に比して感情に走り易く依賴心の强いといふのも、勿論一つにはその生理的組織に基くのであらうけれども、他面にあつては從來の社會制度が女性をして、餘りに獨立心を失はしめた數百代の習性の然らしめた結果とも解することが出來る。從て亦、今後若し女性に絕對的自由を與へ、之に伴つて女性をして眞に獨立に考へ獨立に判斷し得るやうに仕向くるならば、必ずや女性中よりも眞に獨創的にして調子の高き宗教的境地を開くものが生ずるであらうと期待し得らるゝのである。

この意味に於て吾人は、從來、女性の宗教的能力は男性のそれに比して一段低くかつたことを認めつゝも亦、之を先天的に然るものとする主張には反對するものであつて、前にも述べた如く、女性の獨立を第一條件として、之を艱ふことによつて遂には男性と同等となるべきを主張せんとするものである。否、その感情生活の敏感なるだけ之を純化し、之を深むることによつて女性の宗教能力が却て男性以上になる時期も、到來し得べしと思ふものである。

四

然らば、之を艱ふの方法いかに。所詮、こは、前にも述べた如く、女性の獨立して眞に自己に醒むるを根本條件として、更に深き深き内心の惱みに打たるゝを出發點とすべきものであるから簡單に片附け難き問題である。乍併、差當りその一方法として、——特に現時に於ける急務として——女性にもつと自由なる宗教々育を施すの必要を自分は提唱せんとするものである。勿論、基督教には幾多のミション●スクールあり、佛教にも近來はこの方面の設備が段々殖えて來たけれども

眞に女性をしてその魂にまで徹した宗教的信念を創造せしむる方法としてはこれのみでは不足である。蓋し、ミション・スクールは概ね特定の宗派の信仰を植ゑ附くるを目的とし、且つ稍々もすれば餘りに形式を重じて内心の要求を無視するの嫌があるからである。これ即ち稍々もすれば宗教的女學校から大膽なる懷疑論者又は反宗教的女性を出す理由である。自分のこゝに提唱せんとする宗教々育とは、ミション・スクールよりもつと廣き且つ自由のものである。即ち宗教の本質より人生と宗教との關係、各宗教の特質より進んでは將來の宗教といふが如きことまでも、出來得るならば女性自身をして自由に討究し得る樣に慣すことである。殊にこの事は高等教育を受けつゝある日本現時の女性に對して最も必要のことゝ思ふ。知らずや現在の若き而も高等教育を受けたる女性中には、在來の宗教に對して、極めて無智でありながらも、而も總體的に不信用の態度をとるものゝ尠くはないといふことを。西洋に於てもかゝる女性の多いことは、自分の接觸した範圍からも充分に推知し得らるゝが、殊に日本に於て然ることは、過般某女子大學に於て、その宗教的信仰を調査した結果といふ報告に徴しても明である。而も彼等は決して、それで滿足してゐるものではなく、何かしらん滿たされぬ心の悩みを抱きながらも、依る所を見出しかねてゐるといふ狀態にあるのである。

かくの如きは、勿論、一面からすれば彼等は宗教的に自覺して來た徴候として將來あるかの如く思はしむるものもあるけれども、他面からすれば、彼等自身にとつても亦社會にとつても決して喜ぶべき現象ではない。何となればこの結果として、彼等の中より遣瀨なきまゝ、不健全なる信仰に走るものも出づれば、全くの無宗教者としての唯物的快樂論者をも出すの恐があるからである。自分の自由なる宗教々育の奬勵を提唱する所以は全くこゝにあるものであつて、若し彼等をして、眞に宗教の本質なりその開展の次第なりに對する理解あらしめばかゝる弊を救ふことが出來るのみならず、進んでは、却てかゝる女性中より眞の確固たる信念者を產出し得べき希望があるからである。勿論自分は宗教に關する自由討究は必ずしも一般人を信仰に導く捷徑であると主張するものではない。否、寧ろ、時としては却て已に何程か堅まらむとしてゐる信仰を亂すの因となることのあるのも充分に認むるものである。而もそれにも關らず敢て之を提唱する所以は、女性の宗教的能力を增進する上に於て、且は既成宗教に對して懷疑を抱いて悩める女性に正しき道を開く上に於て、極めて有效と信ずるからである。（大正、一一、一〇、二九）

「女權擁護論」の內容

厨川白村

わたくしは必ずしも原本の次序を逐はずに、出來るだけ簡單にウォルストンクラフトの名著の撮要を試みる。

過去の女性を顧みると、女が一人前の人間であると認められなかつた事は、西洋も日本も全く同樣であつた。佛敎が女人の罪障を說くと同じく、西洋の昔の禁慾思想もまた婦人を以て永久に呪はれたる者と觀じ、羅甸語の Femina (女)は『信仰なきもの』の意味にさへも用ゐられた。ウォルストンクラフトが生きた十八世紀とても、法則因襲萬能の古典主義の時代の事とて、女性の奴隸狀態は依然として舊態を脫して居なかつた。女が生を此世に受くるは、唯だ男性の爲に、その虐使に甘んずる道具に過ぎずと見られてゐた。女が生きる事は、それ自らが『目的』ではなくして、他の何等かの『手段』たるに過ぎずと考へられた。女史は先づ此風潮を憤慨して、

今や女性の風習に一大革命(レヴォリユーシャン)を起すべき時は來た。女性の失はれたる尊嚴を再興すべき時が來たのだ。そして女も亦た人類の一部として、自らを改造することによつて世界を改造すべく努力せし　むべき時が來たのだ。(第三章)

と叫んだ。

十八世紀風に云へば、女性は男性を向上せしめる道具に過ぎないのだから、勢ひ女性の職能は、結婚によつて始めて發揮される譯である。だから未婚女子の唯一最大の目的は『婿(ハツバンド)探し(キャッチング)』と云ふことである。彼等はこの目的のためには、本當の戀愛が芽ぐむまで待つと云ふやうな廻りくどい方法は執つてゐられない。遮二無二その美貌と嬌態(コケツトリー)とによつて、男性の肉情をそゝると云ふ手つ取り早い方法を執る。

ウォルストンクラフトの透徹せる直觀の力は先づかゝる思想より生ずる病弊に注がれた。病弊の第一は、女性に結婚以外の生活樣式を拒否するの結果、結婚は女にとつて男性の就職と同樣に、衣食の道だと考へられるに至つたことだ。生れながらの理想主義者であり、又正しい意味に於ける戀愛の高

唱者であつたウォルストンクラフトは、かゝる「何人も之を實行し、法律も之を認むる賣淫制度」(第九章)を否定し、「その肉體を、夫が妻を扶養する努力に對する適正の報酬」(第四章)と思惟することの迷妄に極力反對したのである。

病弊の第二として女性が徒らに外貌の美を誇り、人間としての修養を忘れると云ふことが指摘された。女史の言に俟つまでもなく、婦人の容貌の美は、「傾く日影であつて、…………眞夏の盛り過ぎて後は夫の心をつなぐに足りないもの」である。その果敢ない美貌の續く限り女性は女王の如く男性を支配する。そして一朝槿花の粧ひ色あせては、奴隷の虐使に甘んじなければならぬ。何れの場合に於ても兩性の平等關係は望めない事となる。女史が望むところは夫唱婦隨でもなければ、況んや婦唱夫隨でもない。それは實に人間と人間との對等平等の關係でなければならぬと喝破したのである。

第三の病弊として擧げられたのは容姿の端麗のために、身體の健康が犧牲に供せられると云ふことである。日本人が肺病やみの撫で肩を讃美し、支那人が不自然な纏足を喜び、歐米人が柳腰を賞めたりするなどは、何れも男子横暴の結果、婦人の弱きを喜んだ實例である。女史は云ふ『その生涯の大部分が病氣の治療と苦痛に費されるやうな人間がどうしてよき妻であり、よき母であり得ようぞ。』しかして女史が最も痛嘆したのは、身體の虛弱が女性隷屬の素因となつて居る點である。古臭い語だが、健全な精神は健全な身體に宿る。虛弱な肉體は必然的に因循な魂を宿す。

人或は云ふだらう。天才は屢々病弱の人に見られる。その傑出した精神力は決して健全な身體に支持されては居なかつたと。女史は此點をも反駁して云つた。なるほど天才は往々にして虛弱であつた。しかしあの異常な精神力は決して不健全な肉體から生れたものではない。われ〳〵は寧ろ科學の探究や詩の創作に沒頭して生命の焰を消盡しながらも、あれだけの大事業を成就したその旺盛なる體力を驚嘆すべきものではないかと。言稍や奇矯に失するの嫌ひはあるが、是もまた半面の眞理を道破し得たものだ。

最後にこの點に關する彼女の眞意を誤りなく傳へんがために、煩を厭はず玆に全文を引用したいと思ふ。

『もしも女性が男性の肉慾滿足のために造られたものでないならば、また若し彼女が男性のために衣食の具を供すべき高等下女たるべく造られたものでないならば、その必然の結果として、眞に女子の敎育に留意する父母の第一の義務は、よし身體を强健ならしめずとするも、少くとも、美と女らしい長所といふ謬想によつて、彼女の體格を破壞しない事である可きだ。『第三點』

また此『女權擁護論』のなかには、殆ど他の問題との均衡を失する迄に力を込めて女子教育論が說かれてゐる。しかし私は彼女の脫線に倣つて玆にまた數千言を費して、本題に餘り關係のない國民教育論なぞを紹介する愚を學びたくない。否、極端に云へば私の最も感心しない箇所は、十八世紀思想の露骨に現れたこの教育論だと云つて差支ない。しかし筆端一たび女子教育論に及ぶや、彼女の文藻は爛々たる光輝を放つて、今猶ほ吾々を首肯せしめざれば已まないと云ふ趣がある。

彼女の達見の第一は、佛蘭西のエルヴユシユースに端を發した教育感化力の過信に對する修正であつた。彼女は女性の地位を向上せしめるためには教育の偉力を借りなければならぬことを主張したが、それに先だつて社會改造が行はれるに非ずんば、その効果が甚だ稀薄であることを指摘して居る。又彼女は、世人が往々にして教育を以て生計を得る爲の手段となす偏見を駁し、それが『漸次完全の狀態に進み行く一個の人間を形成すべき最初の階段』だと說くところなど、之を現代の教育論として見ても卓見たるを失はない。

既に『神と人とをつなぐ糸』である理性の教養を拒否される女性に、殘された唯一の力は本能の鈍き光である。その本能さへもなまじか人間の仲間入りをしただけに、動物の本能のやうな銳敏さを失つて了つたと云ふに至つては、女史の云ふごとく女性は『あらゆる動物中で最も悲慘なものである。』にちがひない。かくて女性は最早その唯一の職能たる妻たり母たるにさへ適しないやうになつてしまつた。小學兒童教育の目的は、母の膝下にある時に習得した惡癖の矯正にあると云つたやうな奇觀を呈するに至つた。

女史は、事のこゝに至つた原因を一に男性の暴戾に歸した。

『女性の眼界を廣め、その理性を磨かしめよ。しからば女性は盲目的服從より蹶起するに違ひない。權力は常に盲目的の服從を要求する。故に暴君や色狂ひ(きちがひ)が、女性を無智の境遇に置かうと努めたのも無理はない。蓋し前者は奴隸のみを欲し、後者は只だ玩具を欲したのである。』(第二章)

男性は女性を壓迫して、自分の思ふ通りの美しい奴隸を造り上げた。しかしそれは女性の不幸ばかりでなく人類の不幸であつた。唯だ賢母良妻たらんが爲にのみ仕立てられた女性は、遂に一個の『人』たるの資格を失つて、結局は妻たり母たるの能力をも完全に有せざるに至つた。

かくて女史は、男女兩性が同樣に教育されなければならぬ事を主張した。

『もしも結婚が眞に社會の結合物であるといふならば、男性も女性も同じ標準の下に教育されなければならぬ。然らざれば兩性關係は決して眞の伴侶と稱することが出來ないし、又女性は女性特有の義務を遂行することも出來ないであらう。これらの事は女性が立派に公民たる教育を受けた時……始めてこれを望む事が出來るのである。』(第十二章)

かくて女史の論は、百尺竿頭更に一步を進めて、男女共學をすらも力說してゐる。今を距る事百三十年前において。

次にまた、女史が兩性の道德に就て言ふ所を聞かう。

善惡の標準とか良心の本質とかは女性には關係が無い。女には唯だ表面の禮儀作法を敎へて、その行爲のみを取締つておけば可い。また女子には世間の評判が大切だ、人間としての獨立の道德的批判なぞは無用だ。まづ恁ういふのが十八世紀の女性道德觀であつた。女子は之に對しても手ひどく反對の氣焔を擧げた。性の相異によつて道德律に甲乙の差あるべきではない。殊に婦人にのみ通用する道德律といふが如きは表面の行爲のみを修めて世間に迎合する事を敎へる功利的のものだ。それは妻として又母として、男性に滿足を與へるためには、かく／＼の行爲をすればよいと云ふことを示すに過ぎない。この場合問題は、行爲の善惡から行爲の利害と云ふことに移つてしまふ。卽ちある女性が一つの行爲をした場合その行爲の善惡は、一にその行爲が男性に致した貢献の多寡によつてのみ判斷される。すると猫は鼠を捕るから善だと云ふことになり、鼠は魚を盜むから惡だと云ふことになる。動物ばかりではない。植物にも鑛物にも器械にも善人やら惡人やらが存在することになる。

　女史はこのやうな女性獨立の存在を無視した道德に反對した。女性特有の道德と云ふものがあらう筈はない。それは男性の場合と等しく『人間としての』義務道德でなければならないと主張した。

　しからば人間としての義務とはどんなものか、永遠の原理に基礎を置いた絕對的の道德とはどんなものであるか、女史はこの問に答へて、一言にして云へば、それは意識的な義務觀念でなければならぬ。卽ち自己內心の理性が命じて善となす者に從はねばならぬ。決して世間の云ふ所によつて左右されてはならない。

　舊式な女性道德觀の最も極端な例は處女の純潔に對する世人の考へ方だ。處女は魂の純潔よりも前に肉體の純潔を要求せられて居る。だから彼女が一朝不慮の災難によつて、肉體の純潔を汚されたとき、彼女はその精神の純潔をも失つたことになるのだ。その時の彼女には絕對的の道德から判斷すれば、毫も責任はないのだが、しかも彼女はいかなる手段を講じても終生拭ふことの出來ない汚辱を蒙つてしまふのだ。しかし本當の意味から云へば、無垢な魂の象徵としてのみ無垢な肉體に價値があるのである。

　ウォルストンクラフトは純然たる理想主義の立場から、只管行爲の動機に重きを置いて、內心の淸淨を要求した。

　『心をして淸からしめよ…………しからば行爲は自ら正しかるべし。』（第五章第三節）

　私が本節に述べた所の女史の道德觀は、今日から觀れば、毫も耳新しいものでないかも知れないが、それを確信し實行する人は今日でも鮮いのが事實だ。

　しかし以上說く所のすべては、女史の婦人解放論から見て寧ろ前提たるに過ぎない。卽ち今日まで女子の道德性の劣れ

ゐは全く婦人虐使の結果である事を女史は指摘した。曰く、

『女性無智の大部分は男性の專制から生ずるのである。又現在巧詐が女性性格の一半となつて居ることは私も承認せざるを得ないが、それも暴虐から生れたものである。』(第十三章五節)

女性の社會的地位を向上せしめずして、その理性德性を開發せんと努むるが如きは、全然本末の顚倒である。先づ女性を解放せよと。彼女は云ふ。

『解放(エマンシペート)されたとき、女性は始めて完全なものとなる。』(同前)

『女性を解放せよ。しからば彼等は卽座に理性あり德性あるものとなるであらう。又男性は更に理性あり德性あるものとなるであらう。女性の改善は同時に男性の改善である。現在の如く全人類の半數を桎梏の下に置く不正義は、必ずやその壓制者にも報復を加へ、男性の德性はその蹂躙しつゝある女性によつて蠹毒さるゝに至るであらう。』(第十二章)

女史の所說に於て多とすべき點は、その眼が常に人類の全野に注がれて居たことである。彼女はいつも女性の幸福といふことより前に、ひろく人類全體の幸福といふ見地から問題を觀察してゐた。單に女性と云ふ立場のみから出發した偏狹な婦人解放論は、結局かの『男女の戰』とやらを激發するに過ぎない無用な論議だ。女史が早くも婦人問題の黎明期に於て示した女性解放の人道的論據は、ながく後人を啓發し指導すべき目標を與へたものである。

しからば女史にかくの如く廣き眼界を與へ、女性通有の缺陷たる狹量偏執から彼女を救うたものは果して何であつたのかと云ふと、それは、彼女の不羈獨立の精神と、熱烈な『自由の愛』とであつた。彼女はその序文の中に云ふ。

『久しい間私は獨立が人生の偉大なる至福であり、あらゆる德行の基礎であることを信じて來た。私は食べる物を食べないでも、たとへ不毛の荒野に眠らうとも、獨立を欲して已まないであらう。』

又第二章にはかう云つて居る。

『自由こそは德性の母である。もしも女性が體質的に奴隷であつて、自由の爽快な大氣を呼吸することが許されないならば、彼等は常に土離れした花の如くに凋み、自然界に於ける美しき瑕ものと見なされざるを得ないであらう。』

女性解放問題の核心は實にこの『自由』の二字に存する。自由のないところに人格はない。人格のないところに道義なく戀愛なく理性がない。自由を與へると云ふことは、つまり女性も一個の人間だと認めると云ふことに歸着する。解り切つた話のやうで、その頃までは人が餘り考へなかつた道理である。

自由が女性に與へられたとき、兩性關係は面目を一新する。それは暴君と奴隷との關係を離れて、人間と人間との平等關係に移る。妻は最早『美しき人形』ではなくて、夫の友人であり伴侶である。かくの如き自由と平等とによつて祝福された兩性關係を、女史は『友誼』の名によつて呼んだ。女史は此語によつて眞の戀愛によつて結ばれた男女の對等關係を現はし、また『獸慾としての愛』『愛なき性的征服慾』と區別せん

と試みたのである。また兩性關係が主從關係を離れて平等關係に移る當然の結果として、一夫一婦の制は避く可からざる者となり、男性の性的純潔が女性のそれと同様に要求されるに至るのである。此點は固より女史が屢々本書のうちに繰返し力說した所であつた。

ウォルストンクラフト女史が此一卷のうちに說く所に、多くの事柄が雜然として、極めて多岐にわたつてゐる。これは如何なる問題にでも最初に先づ手を着けた人の論議に免れない缺點ではあるが、その代りまた婦人問題に關する總ての方面に就て何等かの最初の暗示と示唆とを與へた功は、ながく沒すべからざる者である。たとへば以上のほか女子參政權に關しても、全篇中唯だ次の一節に就て此問題に觸れてゐる。しかも當時いまだ一般世人がかかる點には夢想だも及ばなかつた頃の事とて、女史の口吻は極めて、つつましやかな者である。

『いつかは實行して見たいと、かれ〴〵思つて居ることを申上げたなら或は皆さんのお笑ひを招くかも知れないが、私は女性にも代議士がなければならぬ。現在のやうに出鱈目な政治のもとに在る代りに、女子も亦た直接國政に參與しなければならぬと思ひます。』(第九章)

この婦人參政權問題は、後に三人の「女性の屈從」を待つて始めて論理的根據を與へられて、それが遂に二十世紀現在の婦人參政權運動まで成熟したものである。

女史は又婦人の職業問題にも言及した。經濟的獨立と精神的獨立とは、謂はゞ兩翼双輪の關係をなすが故に、女子職業の自由が認められざる限り、婦人の自由は空名に過ぎないと女史は考へた。然るに當時十八世紀ごろまでの女性に向つて解放された職業と云へば、賣笑の外にはなかつた。そして此貞操賣買の職業が、過去の女性を束縛して奴隸の境遇におき、戰慄すべき汚辱と慘狀を人類の歷史に殘した事は言を俟たない。女史が經濟的獨立を力說したのは、卽ち婦人の屈辱たる此賣笑制度を絕滅せしめんが爲であつた。

かくて女史は婦人に最も適した職業として醫業を擧げた。英國で女醫が許されるやうになつたのは、實に本書刊行の後五十年を經てからであつた事を思ふとき、こゝにもまたウォルストンクラフトの先見の明が知られる。

『女權擁護論』は、十八世の後半すべての解放の思想の黎明期に於て、幾千年の長夜の眠から、はじめて世界の女をめざました曉鐘第一聲であつた。のち更に此書の所說に哲學的基礎を與へて、組織ある纏つた議論としたのが、卽ち後のジヨン・スチュアアト・ミルの『婦人の屈從（サブゼクシヨン・オブ・ウイメン）』である。花しかつた浪漫主義（ロマンティシズム）の初期に一人の女性の筆によつて現はされた主張は、のち半世紀を過ぎて同じく英國のミルによつて遂に思想の問題となるまでに大成せられた。それが更に前世紀の後半から今の新世紀に及んで實際上の婦人運動となつたのである。

人間相愛

石原純

人間相愛、それは何といふ美くしい又希はしい言葉なのでありませう。私たち人間のうちの誰がみづから好んで之れに背かうとするでせうか。私は、そして少くとも私は然う信ずることは出來ません。

それにも拘はらず私たちは始終この人間相愛のこゝろから離れてゐる自分たちの姿を見出します。私はそれに對して深い悲しみを味はずにはゐられません。なにが私たちをその希はしい相愛のこゝろから妨げしめるのでありませうか。なにが私たちをその美くしい樂園への途に於いて阻むのでありませうか。

私たちは恐らくみんな知つてゐるでせう。それは自分のなかに止むに止み難いものとしてもつてゐる自我の強い主張であると。私たちが生きてゐる限り、また積極的に自分たちのいのちを完うしようとして努むる限り、自我の主張はほんとうに私たちのために無くてならぬ事がらなのです。しかもその結果は屢ゝ人間相愛と相容れないいろいろな事實を生み出します。さう云ふ場合に、若し自我の主張の貫徹に對する滿足のみを感じて、これが他の人たちに及ぼす影響を無視することの出來る人があつたなら、私はその人にもつと深く人間相存の意味を自分のまごころに於て考へてもらひたいと思ひます。誰がそのとき人間相存の事實とその深い意味とを抹殺して、どこまでも強く自分ひとりを主張することが出來るでせう。どんなに強傲であり得ても、自分ひとりの能力はこの世界に於て極めて弱いものであり、その生命は云ふに足りない程はかないものであることを悟らずにはゐられますまい。私たちめいめいはみんなお互ひの、遠い昔から現在に生きてゐる他の人たちのお蔭によりて、人間全體としての生命とその有らゆる仕事とを永遠に傳へ、これを偉いなる理想に導くことが出來るのです。私たちめいめいの自我の主張もこれに與かる上に於て始めて意味をもつのです。それならば人間相存の事實を措いて自我の主張はなされてはならない筈ではありますまいか。そして人間相愛はその相存の間にあらはれる

ことゝなつた。萬都士女の必ず見遁すべからざる一大讀物として新春雜誌壇の隨一たるを信ずる。

發行所　東京市芝區愛宕下町　改造社

最も明瞭な一つの理想です。自我の主張がこの人間相愛の理想に矛盾する結果を生み出すとしたならば、私たちはそれに就いて心からの悲みを感ぜずにはゐられない筈です。

　人間の生活には眞摯な、そしてそれだけに深刻な悲痛が伴ふものです。それは只私たちが事がらに觸れて直覺的に感ずる悲しみではありません。自我の主張の滿足されない場合にまたその外の、自分の希はしいと思ふ事がらと相反した出來事に接する場合に、私たちはさう云ふ悲しみの心を起します。けれども、私たちのこゝろの望ましさと人間としての理想との間にあらはれる矛盾に對する悲痛よりもより深刻な悲しみは、斷じてないと私は思ひます。肉親やその外の自分に近い人たちの死は私たちを強く悲しませることの一つには違ひありませんけれども、併し人間の個體の死は遂に免がれ得ない自然の事實であつて、恐らくは私たちの理想との矛盾をこれに就いて云ひ得るものではありますまい。長く生くることの望ましさは通常の場合に私たちのもつ自然の感情ではありますけれども、私たちの個體はどんなに科學が進まうとも、恐らくはその儘で永遠ではあり得ないのです。私たちは自然のゆるす處に從つて私たちの理想を立てなければならない以上そこに矛盾はあるわけにはゆきません。私たちは寧ろ個體の死を止むを得ない事實として肯定し、その嘗て在りし生によるあらゆる事象を人間理想への道程に於て意味づけることによりて、私たちのこゝろに慰みを保たなければなりません。ともかくもこの場合に於ける私たちの悲しみは死別に對する直感的のものであつて、理性的反省によりて或る程度の慰安を得られることは明らかであります。ところが私たちの本能的欲求として自我の主張が人間理想への道程に於て強く積極的にはたらかなければならないのに拘はらず、それが一方に於て人間相愛の理想と矛盾すると云ふ事實に對して、私たちはどう考へたならよいのでありませうか。この矛盾が判きりと取り去られない限り、私たちの之れに對する深刻なる悲痛は遂に癒やすことの出來ないものになるでせう。それとも人間相愛は只私たちの美くしい幻想に過ぎないのであつて、強い生を希ふ現實の世界に相容れないものなのでありませうかそんなことはあり得ないと云ひ張るだけでは、まだ私たちの迷ひは消滅せられはしますまい。そして一々の具體的の場合に出逢うて私たちは原理的の解決さへもなし得ないで、徒らに因襲的に妥協しなければなりますまい。それは眞摯に深く考ふる人にとりて堪へ難いことであります。

　私はいま妥協といふ言葉を用ゐました。それはいつも矛盾を解決する一つの手段なのであります。けれどもこの妥協なるものはそれに對する相當な理由が見出されなかつたなら、

極めて姑息的な、そして剰さへ不當なものとせられなければなりません。たとへば或る數學的の計算に於て一度はその解答として1なる數を得、もう一度は異つた方法を取つた結果2なる數を得たとしましたならば、私たちはそこに一つの矛盾をもつのでありませう。併しさう云ふ場合に私たちがこの矛盾を取り除く手段として、二つの答を妥協せしめ、たとへばその中間の數 1½ をもつてその計算の結果であるとするならば、誰がこれを直ぐに承認するでありませうか。その正當な理由を究めないで單に中間の値を取ることは、恐らくは一つの愚答として笑はれるに過ぎないでせう。ところがかやうな笑ふべき妥協を私は多くの實際の場合に經驗します。たとへ問題の解決が數學的論理のやうに明らかには達し得られない複雜さを含んでゐるとは云へ、私たちは少くともそれに、より深く立ち入ることなしに安易な妥協に赴いてはなりません。私はさう云ふ妥協を充分に忌み嫌ふことに於て、自分の良心の鋭どさを見ようと思ひます。

　私はいま私の論じようとする問題に立ち戻りませう。自我の主張が私たちの當然求むべき事がらであり、また人間相愛が私たちの美くしい理想であり、しかも兩者が屢ゝ矛盾を生み出すとしたならば、私たちはほんたうにこれをどう解決すべき筈のものでせうか。私はその正當な歸結を見出すために先づ自我の主張がゆるさるべき限界があるかどうかを考へなければなりません。

　一つの事がらの主張は若しそれが絶對の價値をもつてゐるならばすべての限界を超えてなされてもいゝのです。自我の存在は自分みづからに取りては絶對なものではありますけれども、併し私たちはどう高く見つもらうとも自我内容の完全であることを恐らくは自覺することはないでありませう。私たちの理想的自我に對して現在の私たちは多くの缺陷を感ぜずにはゐられません。それですから理想的自我の絶對の主張は私たちにゆるされ得るものではあつても、誰も現在の儘の自分を絶對に主張することに心から安んじ得られるものはありますまい。從つて現在の自我内容のうち理想的自我と一致する部分のみは至當に主張してもよいのですが、その外に對しては嚴格な制限を置かれなければならないのです。私たちの欲求は屢ゝこの制限を超えて踏み進まうとします。それが理想と衝突する理由なのであると私は思ひます。若し私たちが理想のこゝろの有り樣に達し得たとしたならば、たとへば人間相愛に背くやうなこゝろの働きは、自分に不愉快なものとして強く感ぜられるために、それは自分の本當の希はしさとしてはあらはれ得ない筈です。つまりそれは自我の主張として存在し得ないわけです。かやうな理想のなかには一切の

矛盾は起ることはありません。斯う考へてゆきますと、人間相愛の理想に反する自我の主張は誤まつた自我内容から由來するものであつて、それはほんたうのものではないこと明らかです。私たちは自我の主張のために人間相愛を少しでも犧牲にしてはなりません。却つて相愛の理想を遂ぐるやうに自我の主張内容を變へなければならないことが悟られます。それが亦私たちの理想的自我に屬すべきものなのです。

　私の信ずる處によりますと、この理想的自我は絶對のものであつて、そして又私たちのすべてに普遍的なものです。私たちの個性的自我はまだそれに達しない途中のものであり、この理想からの外れに於て缺陷をもつものであつて、恐らくはその缺陷の種類差別によりて個性的相異をあらはすものなのです。私たちはお互に相俟つてその絶對な理想的自我の全内容を見出しこれに赴かうと努めなければなりません。この相互的努力に於て並にその理想的自我の絶對普遍性に於て、私は人間相愛の最も正確な根據をおくことが出來ると思ひます。只その理想的自我がどんなものであるかは私たちに決して豫め知られてはゐません。それを最初から勝手に定めてかかることは、人間全體の生命に對し、從つて神に對する冒瀆です。私たちは最も謙虚のこゝろになつて一心にこれを探し求めなくてはなりません。たとへ私が相愛の理想をこゝに立てたと云つても、私たちの行ひのどんな事がらがほんたうに相愛に協ふものであるかは豫め斷ずることは出來ないのです。私たちはあらゆる之等の道程に於て、自分の主張しようとすることの誤まつてゐるのを多く經驗するでもありませう。私たちは併し尙ほ多くの判斷に迷はねばなりません。そしてそこに眞實の深刻な悲痛が伴ふのです。この悲痛に出逢うて尙ほ深く自分の道をもとめるものが、精進の途に於てほんたうに惠まれたものでなければなりません。

　私は人間相愛を論じて、自我の主張に限界のあるべきことに及びました。この限界に衝き當りて、尙ほ敢てこれを超えることは私たちの斷じて取るべき處ではありません。私たちはそこに現在の自我の誤れる主張を觀取して之を矯めなければならないのです。斯やうにしてのみ私たちは人間相愛の美くしい道に進むことが出來ます。人間がお互に憎みお互に鬪ぎ合ふ愚かしさに私たちはほんたうに飽いてゐます。それでありながら、すぐその後からいろいろな憎みあひ鬪ぎ合ひを續けてゐるのです。私たちは心から人間相愛をその名に於てでなく、只その實に於て讚へることが出來ないのでせうか。私たちはもつと深く苦んで省りみなければなりません。その苦みなしに恐らくはすべての罪あるものは拯はれなかつたでありませう。

來るべき次時代の婦人

淘汰と神と女

賀川豊彦

　人間の半分が強くても仕方が無い。今日のやうな弱い女性を連れてゐては、眞正の文化に進むことが出來ない。弱ければ、弱いで、強くせねばならぬ。

　今日の時代は凡てを經濟で計量せんとする。それで女性解放論者はいつでも經濟的解放を繰返す。私はそれに大贊成である。然し經濟的解放だけで決して女性の解放が完いのでは無い。眞正の解放はたゞ富の平均分配などからくるだけのものでは無い。それは必要である。然しそれより大切なものがある。それは戀愛の解放である。

　戀愛の自由によつて、低く落ちた人間の理想を高く引上げねばならぬ。即ち雌雄淘汰の力によつて、人間を高く引上げねばならぬ。今日の變質、發狂、低能、白痴、犯罪性の人間性を雌雄淘汰によつて、除去し、優種を得る工夫をせねばならぬ。

　それは假裝的富の力によつて戀愛を賣るのでは無くして、眞實の人間を得る爲めに戀せねばならぬ。

　この戀愛の力は、眞正の改造の力である。そして、眞正に戀する力は、死を越え、病を越え、苦難を越え、死物を甦らす力を以つて戀せねばならぬ。それが童貞を要求する位のことは何でも無い。眞に愛するものゝ爲めにはボスボラス海峽をも游ぎ渡るアンドロアスの狂熱を持たねばならぬ。

　即ち戀人の爲めには罪をも贖ひ、死をも厭は無い力を持たねばならぬ。

　之が宗教で無くて何であらう。

それは報酬の利念から來たものでも無い。功利主義から來たものでも無い。同情から來たものでも無い。それはたゞ人類を高めんとする、人間殿堂の禮拜から來た實に奇しき努力である。

「神は愛なり」と使徒ヨハネが敎へてくれる、愛するものはいつでも生命の神に觸れる。生命に觸れること無くして愛し得るものでは無い。

婦人の使命は、種族の高擧にある。男性は個性化するが、婦人は常に民族化して行く。そこに婦人が今日までより多く犧牲を要求せられた理由である。

私は婦人がその個性に目醒めてくると共に一層宗敎的となり、一層聖化して行くものであると思ふ。

婦人が參政權を持つことも必要であり、職業的に獨立することも必要である。然し女は決して男になつてはならない。

女は善き娘、善き妻、善き母であらねばならぬ。女が善き娘、善き妻、善き母であることが、彼女が女代議士、女辯護士、女劍術使ひになることより更に身自らに對し、また人類の福祉に大なる貢献をすることが出來る。

女が強くなると云ふことは、男子になると云ふことでは無い。男子の誤謬を訂正して、男子の低く落ちた理想を戀愛によつて淘汰して行くだけの強さを持たねばならぬ。

この力は生命の力といふものである。それが卽ち宗敎であるのだ。

宗敎と生命とを別物に考へる人はさう考へることも勝手だ。然し私はそんな宗敎は信じて居らない。私は強い生命の宗敎を信ずる。それが淘汰の力となつては、戀愛の中に人間を引あげて行くのだと思ふ。「性」の宗敎が高調せられて、人種改良學者の間に八釜敷云はれてゐるのはこの生命宗敎に外ならない。

パンを投うつことが出來やう。然し生命をなげうつことは出來ない。愛と戀とは永遠に生命の內容を形造る。そして、生命は淘汰の力としての戀愛によつて、自らを人類に示現する。神なくして眞正の戀は無い。戀による新生の道は永遠に神の道を步く。

——一九二二年十一月——

婦人の將來を決定する職業婦人

長谷川如是閑

非常に複雜な、そして豫想することの出來ない色々の條件によつて、左右される人間の生活について將來を豫想するといふことほど難しい仕事はない。

原理といふものは、自然界に於いても、人間界に於いても決してそのまゝに現はれるものではないが、殊に社會現象に於いては、原理の進行は、澤山の實際上の條件でその形を變へて了ふのであるから、實際の社會の將來がどうなつて行くかを、原理だけから考へることは全く不可能である。

今婦人の例に就いて考へて見ても、現在婦人の社會上の地位が、一定の方向をとつてゐるといふことは、比較的明に見ることが出來るが、併しこの現在取つてゐる方向から遠い將來のことを決定するのは間違ひの元である。どんな生活事實が、この今の方向をどう押し枉げるか全く人間の知識では見當がつかない。

で、私は、人間社會に關する將來の豫想を試みないのが一番確かなことだと思つてゐる。

併し人間として、現在の生活を意識すると必ずその意識に基いた努力をすることになる。之れは人間が自分達の生活を意識的に方向づける本能を持つてゐるからであつて、この努力のために人間社會の進歩は、動物社會のそれよりも遙かに急速であり、確かであるといふことになる。

さういふ努力が、即ち廣い意味でいふ社會運動なのである。人間が自然及び人意の共同の努力によつて、到達した、ある地位を得ると、その地位に基いた運動を起すのである。

運動とは、即ち生活を方向づける努力の意味であるから、この運動に於いて生活方向が表現されるのである。だから現代婦人の生活方向は、婦人の社會的の活動の上に現はれて來ると見なければならない。

そこで婦人の將來を私達が考へらるゝ範圍で考へようとすると、この婦人の社會的活動に眼を向けることが早道であ

る。それは婦人の社會運動を觀察することである。

「それは婦人の將來を如何にすべきかといふ倫理や哲學の問題ではなく、婦人が現在立たせられてゐる地位を基として、彼女等の生活を方向づけようとする運動である。」この運動は確かに一つの現代的特徴を持つてゐる。卽ちそれは特に經濟的基礎の上に起つてゐるといふことである。

歴史的に婦人運動を觀察すると、文化運動と社會運動との二つの傾向がある。前者は一般の文化的生活及び廣い意味の政治的生活に於ける婦人の地位を目的とする運動であつて、後者はより經濟上の生活に於ける婦人の地位を目的として起つてゐるのである。

文化的の婦人運動は、婦人が生活の上で、より寄食的であり又閑散的であつた時代の要求である。卽ち男子本位の家の組織が壞れずに、男子の經濟上の能力が全く女子を男子の家に從屬する寄食者として養つてゐる時代に於いては、女子は經濟上の要求を持つ必要はなく、たゞ文化上の要求だけが彼女等の生活要求となつたわけである。で、この意味の家族制度が完全してゐる時代に於いては、女子は學問や藝術や殊に政治的權力やを要求した。

「婦人の權利といへば、大學に入る權利、議會に入る權利……全くそんなものをいふのであつた。これが初期の婦人運動の特徴であつた。

ところが、さういふ婦人の閑散的地位は次第に困難となつて、女子の生活が男子のそれに似寄つた社會的の仕事に突き進むことゝなつた。その結果、女子は家庭的の地位から社會的地位へと押し出されて、今迄女子に要求されなかつた種々な人間的能力が彼女等の生活の必要となるに至つた。

昔の文化婦人が、贅澤物として必要したいろ〳〵の人間的能力は、現代婦人にとつては、生活の必要物として要求せなければならないものとなつた。

然るに婦人の從屬的地位は依然として改らない。さうして男子は、この婦人の從屬的地位を利用して、男子專制の產業組織に婦人の勞力を安い費用で虐使するに至つた。澤山の婦人は、今迄の經濟狀態と、從屬的地位が生んだ卑屈な心理狀態から、同じ仕事を男子よりも安い費用で負擔することになつてゐる。その結果一般的に、婦人の間に新らしい奴隷組織が建設されたのである。

卽ち現代の經濟組織に於いて、婦人は丁度男子の勞働者と同じやうな境遇に陷入つてゐるのである。この事實が卽ち婦人の社會運動の動機となつてゐるのである。

婦人のかやうな生活狀態は寧ろ一般的であつて、所謂閑散婦人も、現代社會組織の進行に從つて次第々々にその經濟

上の地位が困難になり、自治を必要とする狀態の方へと押し出されて行くことは、多數の男子が勞働階級へと進んでゆくのに並行してゐる事實である。

この現象は二樣に觀察される、一方はそれを婦人にとつて悲慘な墮落であると觀察され、他方に於いては、それは婦人が人間的生活に進んでゆく必然で又當然のことがらであると見られてゐる。しかし、それは善惡に關らず否定することの出來ない事實である。

この事實が婦人の地位に及ぼす影響、いひかへればそれが婦人の將來を決定するのは如何ともすることが出來ない。茲に於いて婦人の將來を暗示する、現代傾向が認めらるゝわけである。

決論をいへば、婦人の將來は職業婦人の將來によつて決定されるといふことである。それは男子の將來が勞働生活の方向によつて、決定さるべき傾きを持つてゐるのと同じことである。

こゝで職業婦人といふのは、社會的地位を持つた婦人の意味である。而かも社會といへば學問的又は藝術的乃至政治的といふよりは、他のもつと經濟的な意味を持つた生活である。婦人の地位を決定するものは、彼女等の文化的生活方向ではなく、經濟的生活の條件で決まるのである。このことは複雜で、そして甚だ微妙な生活過程の觀察によつてのみ、正しく見分けることが出來るものであるが、こゝでは、たゞ婦人の將來を暗示するものは、その經濟上の地位に他ならないことを云つて置くに止める。

女性の將來

木村泰賢

女性の權利擴張運動は大戰中より戰後にかけて著しく進展しました。少くも歐洲に於ては今や女性はその人格的權利は勿論のこと、職業上に於てさへ略ぼ男性と同等の所まで漕ぎつけむとしてゐます。女性の將來は要するにこの氣勢を

辿りて眞に獨立の人格者として、あらゆる點に於て男性と同じ所謂機會均等に浴する所にまで進む所にあらうと思ひます勿論、國により、兩性關係の異るものがありますから、全世界を擧げて急速にそこまで進むものとは考へられませぬけれども、ともかく遲速の相違こそあれ、最後にはそこまで到るべき方向に向いたといふことだけは、安然に斷言し得ることゝ思ひます。

たゞ問題はいかにしてそこに到るかといふことであります。何分にも數百代に渉りて礎きあげられ來た男性本位の制度であります。それを破壞して、新なる制度を設くるといふことは容易なことではありませぬ。のみならずその制度中には、女性に對して不合理の點が澤山にあるとしても、他面に於ては女性自身にとりても捨て難き澤山のよい所もあります。其等をいかに處理して然るべきか。又女性は職業上男性と同じやうに解放されたとしても、元來兩性の間には生理上の超え難き區別がある上に、女性には特に母たるべき特殊の任務があるので、そのエネルギーの分配上、男性と競爭しても及ばぬ點が定めて多からうと思はれますが、それをいかに捌くことによりて公平を得べきか、扨ては戀愛の自由と結婚道德との關係、育兒と職業の調和等種々無數の難問題が起つて來るに相違がありませぬ。從て女性の獨立といふことは、大體に於て結構なことで、亦、阻止することの出來ぬ大勢でありといひながらも、それを具體的に實現する段となれば、中々容易なことではありませぬ。少くもその途中にありては滑稽なこと、悲慘なこと、不幸なことなどが續出して、動もすればその氣勢を阻がんとするやうなことのあるべきも本より覺悟せねばならぬ所であります。

しかし、かくの如きは何事にもあれ、舊制破れ、新制未だ成らざる所謂過渡期には免れぬ現象とすれば、一部悲觀論者の如く必ずしも嘆く必要もありますまい。所詮は矢張、時の力で、時の經つに從て途中の障碍も次第に甘く排除されて行くことゝ、自分一個だけは信じてゐる次第であります。

然らば最後に女性は男性に對していかなる地位を占むるやうになるかと申すに、本より詳しいことは分りませぬけれども、大凡、次のことだけは確かであらうと思はれます。

一、原則上、凡ての權利に於て男女平等たること、從て一切の職業は男性と同じく女性にも開放せらるゝこと。

二、乍併、實際にありては、少くも職業上、男女の間に自ら分業を生ずること。

三、結婚生活に入るものと、專ら職業を主とするものとに分るゝこと。

四、戀愛關係は自由でありながらも、而も現今よりは一層、

道義的意義を帶ぶること。

等であらうと思ひます。紙數がないから、その詳しき説明は略きますが、要するに男女とも平等なる人格的權利に基きながら而も職業的には何程かの相違ある新しき習慣なり制度なりの確立とならうと思ふのであります。而もこゝに到る爲めには、女性側の自覺と奮闘と自己向上とに俟たねばならぬのは勿論でありますが、亦男性側よりしても之に同情し應援して事を圓滑に運ぶの必要があります。徒らに從來の特權を維持して女性に君臨せんとしたからとて最早、力が及ばぬ許りではなく、却て事態を益々惡化することになるのを吾等男性が忘れてはなりませぬ。

人として、女としての自由と幸福

山川菊榮

□

婦人の未來を豫想するとなれば、勢ひ婦人解放の問題に觸れなければならぬ。未來の婦人とは、取も直さず、解放された後の婦人を意味するからである。

所でこの婦人解放の問題は、既に説き盡され、論じ盡された觀があるに拘らず、遺憾ながら今日なほ十分な、正しい理解が社會一般に徹してゐるとは云はれない。殊に困つたことには、解放論者自身の主張には全然耳も藉さずに、徹頭徹尾たゞ自分の頭から――無智と迷信と偏見とで固まつた空疎な頭から――勝手に描き出し、捏ね上げた婦人解放の幻想を、解放論の本體と獨りぎめして、自分の臆病から生れた幽靈に向つて槌を振り上げる勇士の多いことである。一層困るのはさうした、婦人解放論の本體とは似ても似つかぬ幽靈が、多少知名な馬鹿者によつて發明され、攻撃される時、世間は一も二もなく、その幽靈が馬鹿者の空想の產物だといふことを忘れて、その馬鹿者と杞憂を頒ち、恐怖を共にする點である。これもたゞ文字の上の遊戯なり、座談の際の一興なりに留ま

ればともかくも、日本の今の狀態では、やゝもすれば反動的勢力をいやが上に增大して、若い婦人達の解放への鬪ひを困難にする恐れがないでもない。そこで冗くも同じ說明を倦まずに繰返す必要が起つて來る。

□

未來の社會では婦人の私有が廢止される、と聞くと、所有慾の亡者たるブルジョア思想家は、それでは未來の婦人は社會の共有になるのだ、國有になるのだと早合點する。さういふブルジョアの迷信家には、婦人を人間だと考へることは、餘りに突飛な、新奇な思想でとても解し得られないのである。彼等は、女を牛馬や道具と一所にして考へたモーゼと同じやうに、女を物品視する考が骨の髓まで沁み込んでゐるので、何者にも所有せられぬ女、自主獨立の女、人間としての女を考へることの出來ぬ、精神的不具者である。ロシアで土地や工場が國有になつた、と云へば、直ちに女も國有になつたものと考へたり、云ひ觸らしたりしたのは、此種の精神的色盲患者の幻想にすぎなかつた。

女子の私有を廢するといふ意味は、女性を物品視した在來の制度を廢止し、女子に對する父、夫、兄等の專制的支配權を亡すこと、詮じ詰めれば女子の完全な人權を認めるといふことに外ならない。女子の私有廢止は、道德の廢止を意味すると考へる馬鹿者がある。けれども物品に何の道德があるか物品乃至奴隷として扱かはれて來た在來の女子に、人間らしい高向な要求や理想がなく、媚を賣り、肉を賣つて恥ぢぬ程度の道德心しか持合せがないのは寧ろ當然にすぎたことではあるまいか。人は完全な人權を認められた婦人に對してのみ始めて人間らしい道德的情操を要求し得る筈である。

婦人の國有若くは共有といふことがあり得るとすれば、それは婦人の人權を認めぬ現在の社會に於てのみ可能である。かの婦人の肉體の賣買を公認してゐる賣淫制度は、典型的な婦人共有制度ではあるまいか。この制度を是認し、享樂し、これを讃美することをすら憚らぬブルジョア思想家が、婦人解放——婦人の完全なる人權の承認——を不道德視することは、まことに皮肉極まる矛盾である。

□

未來の婦人は母性に對していかなる態度を採るか。これも亦婦人解放論に對する多くの反動論者の臆說を生み易い問題である。解放論者は母性を否定すると反動論者は謂ふ。けれども徹底的な解放論者は決して母性を否定せぬ。どころか大抵のブルジョア的母性論者の考へも及ばぬほど、女性のこの

任務を尊重してゐる。その結果、解放論者は、凡ての婦人に健全な、賢い母となるに必要な條件を具備させることを要求する。これには心身の十分な發達と訓練と、健全にして正常な生活及び勞働の狀態が缺くべからざる要件である。

その次には母となる時機の選擇を、各々の婦人に許すこと卽ち任意的、若くは自主的母性の容認といふことが來る。これは今日のやうに哺育に關する一切の義務と責任とが一に個個の親達に係つてゐる場合の無產階級の婦人にとつて特に重要な問題ではあるが、將來、經濟上の顧慮が一掃された後に於ても猶、自然の生殖力が個々の婦人の其時々の利害——卽ち母となるに適當な心的及び生理的狀態——と完全に一致せぬ限りは、多かれ少かれ人工的に生殖力を調節する必要が殘るに相異ない。萬一子を生むことが婦人の本能でないとしたならば、產兒調節の一般化によりて人類が衰微し滅亡することも已むを得ない。然しもしその本能が婦人固有のものだとすれば、母性に對する時機の選擇を許す結果は、單に種族衰亡の恐れを伴はぬのみならず、却て母子双方の健康と幸福とを增進することによつて種族の向上を齎らすことを期待することが出來る。

更に考慮に加へねばならぬのは、今日不自然に母となる機會を奪はれてゐる無數の未婚婦人の問題である。主としては經濟關係、次には因襲のために、母となる十分の資格をもち、自らそれを望みながらも、終生その機會を得ずに終る獨身婦人は、總ての文明國を通じて年々增加してゆく。更に過激な不自然な勞働狀態は、幾百萬の勞働婦人から母となる資格を奪つてしまふ。更にまた、賣淫制度と花柳病とは、既婚未婚を問はず、無數の婦人に母性の望みを絕たせる。全てこれらの不自然な狀態が除かれた時は、自ら望まぬ限り、何人も母となる義務を强ひられぬ代り、自ら望む限りは、何人も母性を樂しむ機會を與へられるに相異ない。

この母性に對する自由な選擇は、未來の婦人の最も大いなる幸福の一つに算へられねばならぬ。

□

母親となる時機の選擇と共に、姙娠及び哺育の任務に對する特殊の保護もまた、未來の婦人をして、安んじて母たらしめるに相異ない。ブルジョアの社會では、姙娠哺育は婦人にとつては、單なる報いられぬ犧牲であることが多い。この自然の尊い社會的職分のために、婦人は經濟的獨立を失ひ、忍び難い屈辱をも多く忍ばねばならぬ。この女性特殊の職分は、屢々女性の心的肉體的發達を阻害する口實に供せられ、女性を劣等視してその人權承認を拒否する材料に利用せられ

る。婦人に男子と異る特殊の職分があることを認める以上、その發言權は一層重要の度を增し、その人權は一層尊重せられねばならぬに拘らず、事實は正しくその反對に出でてゐる。曾てブルジョア女權運動に母性否定の傾向が現れたとすればそれは正しく斯の如き母性を口實とする婦人の人權否定說の生んだ反動に外ならない。

現在の母は、その天職のために人間として享受すべき當然の權利をすら拒否さるゝに留まらず、母たる任務を盡す上に必要な何等の社會的保護を受けて居らぬ。この特殊の任務に對する特殊の保護施設なき限り、母子の幸不幸は、父たる夫たる人々の能力や心掛の如何によりて決せられる。實に現在の社會に於ける母の地位は不安極まり不快極るものである。

將來に於ては此不安は全く除かれる。のみならず、兒童に對する扶養及び敎育の義務は社會の負ふ所となるが故に、母親は自己の選擇した業務に盡瘁しながら、同時に母としての情愛を樂しむことが出來る。今日の母は、子供が傍にゐる限りは、他の一切の用事を放擲し、一切の要求を犧牲にして子供の相手をせねばならぬ。これがいかに愛情の豐かな母にも時にはうるさく煩らはしく、不用意な癇癪の破裂となることは不思議でない。然も一方、子供が傍に見えぬ限りは、不安と心配とに苦しまねばならぬ。然し子供に對する十分な保護監督の設備の備はつてゐる將來の社會では、母親はかうした矛盾を全く感ぜずに——子供をもつ苦痛なしに——樂しみだけを味はふことが出來る。未來の社會が母親の懷から子供を奪うて、母子の間を疎隔するといふが如き所謂「子供國有論」が、例の反動論者の幻想にすぎぬことは、今更斷るまでもあるまい。未來の社會は母親から子供を奪ふものでなく、たゞ育兒の負擔を輕減し、その辛勞を頒つことによつて、母親をして一層十分に、完全に、安んじて、人として同時に母としての任務を盡させようとするにすぎない。合法的夫の有無が問題となり得ぬと同時に、私生兒、庶子の制度は絕滅する。そして全ての母はたゞ母なるが故に尊重し愛護され、全ての子供は、たゞ子供なるが故に愛護し尊重されるに相異ない。

婦人や子供の國有といふが如き概念は、婦人や子供をものとしてのみ考へ慣れてゐるブルジョアにして始めて形成し得るものである。人間と財產との區別を知らぬブルジョア、婦人も子供も各々特殊の個性と天禀とを惠まれた獨立の人格者であるといふことを理解し得ぬブルジョアのみ、よく婦人及び子供の國有といふが如き虛僞を製造もすれば、信ずることも出來るのである。

自由にして自主的な母性の外に、今一つ未來の母親の絕大

な幸福は、幼兒の死といふ、不自然な、悼ましい經驗を免れることである。姙産婦及び幼兒に對する保護の普及と、一般衞生狀態の改善の結果、將來の社會は夭死といふ、悲慘な、そして損失の多い現象を除去し得るに相異ない。これは人類にとつて特に母親にとつてどれほど大きな惠みであらう。

□

要するに將來の婦人は心身ともに十分に發達した、健全な、優れた人間であり母であることを吾々は豫想する。彼等の自由な幸福な生活は、今日の吾々の想像を絕した程度のものであらうと思はれる。

母親としての幸福は、婦人の生涯の幸不幸の岐路であるが、同時に母として以外の生活に於ても、婦人は十分に個性を發展させる機會をもたねばならぬ。多くの反動論者は、この婦人の智的生活に對する欲求を、單なる男性の生活の模倣、又は男子に對する不利益にして僭越な競爭といふ意味にのみ解してゐる。然し人類の知識上及び產業上の富は、それが男女何れによりて生產されるに論なく、豐富なほど結構なことはない筈である。完全な職業選擇の自由を與へられた後――然も經濟的壓迫がもはや存在せぬ社會に於て――婦人は何を苦しんで自己の天稟に適せぬ生活を選ばう。婦人が一方では社會の行屆いた保護の下に母たる生活を樂しみながら、他方、その天賦に應じて智的若くは產業的活動のどの分野かに從事することは、男性にとつて何等の脅威をも意味せずに、人類の幸福を增進する結果を伴ふのである。

然しどの道、現在の婦人としては、遠い未來の婦人の幸福を單に夢み、徒らに空想することは無意義である。吾々に取て意義あることは、さうした幸福な狀態を一日も早く招來するために、反動的勢力と必死の鬪ひを遂行することである。徒らに遠き將來の夢にあこがれ、現實の狀態に絕望して悲觀するのは、眞に不甲斐ないことであり、さうした場合、樂しい理想は却て有害の結果を來す。幸福な未來の畫は、それと對照した現在の悲慘を痛感し、現狀を打破し、現狀と戰ふために百倍の勇氣を鼓舞するために役立つ時、始めて描かれるだけの意味がある。要するに戰ひである。婦人の未來、人類の未來のための戰ひこそは、現在の生活をして意義あらしむべき唯一のものである。

大戰爭後の婦人論の傾向

神近市子

凡ての時代の凡ゆる民衆の運動に、その運動の主動體とも云ふべき民衆の外に、知識階級と云ふ分子が加はつてゐることは、これは必ずある現象であります。知識階級の人々は、大抵その書齋が研究室に這入つてゐて社會の各方面の現象に決定的な批評と理論とを與へ、進んでその將來の進路を暗示することを自分の職分として居るのであります。この人々は人生の問題に就いてある解答をうるとその書齋を立ち出でてこれを社會に發表し、その條理整然とした理論と奇拔な解釋とで民衆を驚かし眩惑して了ひます。

けれど、知識階級の人々は、それと同時に自分達は生きた人世の埒外に生活してゐると云ふことを全く忘れて居ります。それ故にかれ等によつて與へられる解答は往々それが書かれた部屋の空氣をその儘に反映してゐることがあります。それはキチンとよく辻褄があつてゐて理論が整然として居ります。が、それと同時にどこかに大變冷たいところがあり、更にいけないことはそれに有機的な生命を缺いてゐることです。生命がないのですからその解答は民衆にとつて自分達の生活の資料となることが出來ないのです。

婦人運動の過去と現在の有樣を考へて見ても、矢張り同じやうな現象があることを私共は見出すのである。この運動もその當初にあつては專ら知識階級の人々の暗示と指導とに依て動いてゐたものでありました。然し今日多くの婦人はそれらの婦人達に聽いたことを、後悔してゐると云ふ迄はないにしても、甚しく幻滅を感じてゐることは事實であります。

大戰爭前には、著名な婦人論者として擧げられてゐたのは、何時でもエレン・ケイ、ギルマン夫人、オリーブ・シユライネル等の婦人でありました。これらは凡て知識階級出の婦人でありましたが、特にこの中のギルマン夫人とシユライネルとは、共に同じやうに婦人が男性に隷屬するやうになつた原因を婦人の經濟的に無能力な點に歸し、婦人が現在の男子に

比して甚しく無力な境遇を脫する爲めには、どうしても、經濟的に獨立して了はなくてはならないと力說したものでありました

私は、前に知識階級の人々が人世の問題を批評する時に、その書齋の中に入つて凡ての窓を閉ぢカーテンを下ろして靜思してゐるうちに、往々その思想にとつて最も大切な生命を失つてゐると云ふことを述べました。然し乍ら、私はそれによつて知識階級の人々の所說は架空的な事實の上に築かれてゐると云つたのではありませんでした。前述の二人の婦人論者の說にしても、今日では既に時代後れの感がありますが、それでも彼等の著書は決して空想による產物ではなく、寧ろ目前に起つてゐる婦人界の現象を仔細に觀察し、それに理論を與へようとして書かれたものでありました。——卽ち、ギルマン夫人とシュライネルとが最も活動した時代には、歐米に於いて資本主義の發展がまさに酣であつた時代で、婦人は始めてこの怖るべき近代文明に呼び起され、學校に、官廳に、會社に、工場に、職業を求めて雪崩を打つて入り込んで行く時代でありました。

この現象を見、この現象に對してハッキリとした時代に關する知識を持たないで、只だ單純な保守的の論據から漫然と婦人の職業化を阻止しようとした反動思想家がありました。そしてこの二人の婦人が一番はげしく挑戰したのは、この種の反動思想家に對してでありました。今になつてこれを見れば、この二人の經濟的婦人論とも云ふべきものは、當時の保守的な反動に對して婦人をかばひ、職業と婦人との間をともすれば隔てようとする邪魔な思想を一掃する使命を帶びてゐたものであつたかとも思はれます。

然るに、過般の歐洲戰爭後次々に發表される婦人論を見て居りますと、婦人運動もこの戰爭を分岐點として全く新しい局面を展開しようとしてゐると云ふことが、何人にも直ぐに想像ができるのであります。

大戰爭中、世界の婦人、特に歐羅巴各國の婦人は、世界の歷史に無いほど多くの勞働に從ひました。多種多樣の勞働に男子に代つて、晝夜の別なくはたらいたものでありました。その結果として戰爭後は殆ど凡ての文明國に於いて婦人の位置は甚しく高められ、戰爭前はあれほど賛否の論が騷がしかつた婦人參政の問題なども今日では世界の常識となるほどになりました。婦人の勞働と婦人の努力とはかうして表面的に酬はれたのでありますが、これと同時に一方內面的に婦人に酬はれたのは、實に婦人にとつて痛ましい幻滅の苦味でありました。多くの勞働婦人達は、彼等が熱情をもつて漸くに得た經濟上の獨立と云ふことも、決して彼等が夢みてゐた幸福

を與へるものではないと云ふことを知るやうになりました。

婦人の勞働は、それが中流階級又は知識階級の心的勞働である時は、比較的に忍び得られるもの丶やうですが、それが勞働階級の特に近代の極度に分業化された單調無味の勞働である時に、婦人の心身を極度に疲勞させるものであるやうです。このことは散見する多くの記事で報告されてゐるのですが、私は今は只だ手當りにその二三をこゝに擧げて見ようとして居ります。

「プロレタリア婦人は、その經濟的獨立を獲得しました。然し彼女は一個の人類としても一個の婦人としても一個の妻としても、その個性を實現することは出來ません。」……クララ・チエトキン

「今日生産の事業に從ふ婦人の群に與へられた經濟的自由は決して祝福ではなく、反對に過てる社會組織の犧牲であります。彼等の生活は決して一層充實した生活に進まうとしてゐる前哨ではなく、却つて人類の進歩の上に加へられる損害であります。そして私の信ずるところによれば、未來はそれを人類が負はねばならなかつた過渡期の現象として見るでありませう。」……ウオータア・リツプマン

「婦人が今男子と最もはげしく競爭してゐる、單調な不健康な種類の工場勞働は、婦人にとつては特に有害な勞働であります。彼等は男子と競爭をすればするほど、自分達は勞働市場を押し擴げ、その爲め賃銀を低廉にする丈けでなく、遂には彼等の最後の目標である結婚の機會を一層少くしてゐることを悟るのです。婦人達は(ミセス・ギルマン等によつて說かれたる)自分等が工場で働いてゐる間に各個人の家庭の仕事は全部綺麗に濟されてゐると云ふ、所謂家庭の社會化の樂しい夢は、一の神話に過ぎなかつたと云ふことに氣つき始めてゐます。彼等がうける賃銀は、實にとるに足りません。彼等は一日八時間から十時間、十二時間働かなくてはならない丈けでなく、その上に餘分にその家庭の仕事を負うてゐることを知りつゝあります。ある新聞の云うところによれば、シカゴのある會社に働いてゐる婦人の中には、月、火、水等の一般の家庭で洗濯、アイロンなどをやる日には、母親達は一日三時間か多くて四時間しか眠ることは出來ないと云ふことであります。」……マブロン・バアネット

私はこゝで餘り長くこんな記錄をくり返してゐることが出來ません。只だこれら二三の記事によつて、私の所謂「婦人

の幻滅」が何を意味してゐるかと云ふことが明かになつたことゝ思ひます。

實際に近代の婦人運動の主潮を形づくつてゐた婦人達は、人としての婦人解放の第一歩は、男子の解放運動と全く同じく、その經濟的方面でなくてはならないと云ふことを見てゐたものでありました。そしてこの經濟的方面が成功とすると同時に、今彼等は性としての婦人の問題に多くの解決すべきものを見始めてゐるのであると思はれます。

エレン・ケイは、一種の國家社會主義に似た樣式の未來國家を畫き、その未來の黄金時代にあつては婦人は國家によつて生活の保證を與へられ、その清く健康な家庭にあつてその子供等を愛撫し教育する有樣を、一種の絵畫を見るやうに描いたものでありました。

恐らく、ケイは正しくありました。少くも輝しい物質文明の人を盲目にする魅力を排し、その背後にある闇黑の性質を知つてその方向にそのユウトピアを築いた點は、多くの人が認めてもつて偉大とするところであります。然し彼女が尚ほ一種の『ドリーマア』として見られる點は、そのユウトピアが現實の物質文明にぶつかつてこれを濾過して行つた姿でなく、それが只管彼女の觀念の上で築かれた點にあるかと思はれます。

婦人が生產事實に從事したことは、その心身によい影響を與へなかつたのは事實のやうであります。然し、それは一時は婦人に惡い影響を與へはしましたが、尚ほ婦人が生產事業に入つたことは又婦人にとつては最も必要な教育の一部を成就したのでありました。これによつて婦人はこれ迄知らなかつた人生の他の部分を知つた筈であり、特に複雜な近代文明の各種の勢力に婦人は直接に關渉したのです。その結果として婦人自身の智能がどれほど啓發されたかと云ふことは、私共の想像の外であらうと思ひます。

經濟的獨立または勞働の生活による幻滅を味つた婦人は、再び家庭生活を指して居るやうです。そして近い將來に科學的な器械の完成と相俟つて、尚ほ一層人類の勞働力が僅かで濟むと云ふことになるとすればその場合には、婦人がその家庭と子供とに歸ると云ふことは、一層望ましく且つ容易である筈であります。

然しこゝで注意すべきことは、新しく家庭に歸る婦人は、決して昔の屈從と隷屬との古巣に歸ることを意味するのではありません。婦人が今度家庭に歸るのは、彼女の位置と力とが充分に認められた爲めで、新しい彼女の家は凡ゆる點で非常に相違した、より輝しいものであると考へられます。

婦人運動の將來

富士川游

一

現在の婦人運動は發育史的の過程の一で、人類がこの世界に棲息せしより以來、常に存するところの男女問題にその根據を有するものである。原始人類よりして漸次に男女兩性の差別が著しくなつてから、男子と女子との間の關係が動搖して、この問題をば人類の意識の中に現はすやうになり、その根本を尋ぬれば單純なる生物學的の問題であつたものが遂に社會的現象となるに至り、今日の婦人運動は實に男女問題の政治化であると言つても差支ないほどになつた。古代希臘及び羅馬にありても已に婦人運動は行はれ、哲學者プラトン及びアリストテレスも女子の自然に於ける地位と社會に於ける地位とに就て論述して居る。プラトンは婦人解放論者であり、アリストテレスは女子をば男子に反對して物質とした。プラトンは女子の職業の自由を唱へ、男子と女子とは、すべての公吏に任ずること同樣なるべしと說いた。アリストファーネスも亦女子の社會に於ける地位に就て論議し、オイリピデスは女子の高等敎育を禁制することの不都合なることを主張した。古羅馬にあつては女子の地位は希臘に於けるよりも尊重せられ、婦人解放の問題も屢ゝ論述せられた。フエルレロスが說く所に據ると、羅馬に於ける女子は社會的に男子と同等の地位を占め、經濟的にも獨立して居つた。殊に「ユスチニアヌス法典」によりて女子の法律上の地位は大に高められた。しかるに、一方にありて、アリストテレスの學說は大に女子を輕視し、基督敎も亦これを承けて、女子をば惡魔が好みて棲む所であるとして居つた。トーマス・フオン・アクイノの如きはアリストテレスに嗣ぎて、女子を以て男子の畸形であるとして、その門人のコロムナは女子を以て速に生長する惡草であると言つて居る。それに加ふるに、十三世紀から十五世紀にかけては、獨逸にありては、女子の數が著しく

過剩となり、結婚の出來ぬものが多くなつた。それがために女子も男子と同じやうにすべての職業に從事せねばならぬやうな狀態になつた。それに尙ほ結婚と職業とによりて救濟せられざる女子も澤山にありて、それ等は隨分悲慘の境遇に沈淪したのである。

二

女子の敎育は更に一層悲慘の狀況を示して居る。カール大王の息女は高等の科學的敎育を受けたと傳へられて居るが、しかしながら王侯の生活によりて國民全體の生活を見ることは出來ぬ。この頃の女子は總體に高等の敎育を受けたことは無い。女僧といふものが出來てから始めて女子が高等の敎育を受るやうになり、それがために女子が男子と同等の科學的敎育を受る機會を得た。バイエルン侯の息女ハドヴィヒ及びゲルベルガ、幷にその門人ピロスウィタ・フオン・ガンデルスハイムなどは當時女流學者として名聲を天下に馳せた。十二世紀の頃になりて、此の如き宗敎的敎育に代りて世界的敎育が女子の間にも始まり、十四世紀の頃に至りては佛國の女流記者クリスチン・フオン・ピサンの如きは口を究めて高等の敎育を女子に施すことの必要を唱へ、十五世紀の頃には獨逸には多數の女醫が現はれ、學問と技術とを以て世に著はれた。しかしながら、獨逸にありて、女子の地位が著しく昂がり、敎育が進められるやうになつたのは十七世紀乃至十八世紀から以來のことで、實に近代の現象である。この頃よりして女子の敎育は世間の問題となり、女流學者も現はれたのであるが、しかも十七世紀の頃には、女子が高等の學術を修めむとするには外國に赴きてその大學に入らざるを得ざる狀況であつた。伊太利では婦人解放につきての議論も行はれたやうであるが、獨逸では一向にこの事なく、人文學が興つても、それは大學の學者達の間に行はれたのみで、王侯や國民の間には進入することなく、多數の人々が考ふる所では女子は自然界の缺陷及び錯誤であると做して居つた。女流の學者も無いではなかつたが、すべてこれ學者の夫人か又はその息女であつて、二三の都府に女學校が設立せられて居つたにも拘らず、女子敎育の上には何等の革命もなかつた。當時の人々の理想とする所は女子を以て家庭の母とすることにあつた。佛國ではルーソーが出て、婦人運動につきて先鞭をなしたが、しかしながら、當時の狀勢は何れの國でも略ほ同樣で、兎も角も、女子は男子に比して著しく下等のものと視られ、從つて女子の敎育は男子のに比較して遙かに劣つたものであつた。

三

近時の趨勢は全くこれに相違して居る。英國及び米國では、佛國の思想に導かれて男子に對して政治的同權を求むるために婦人運動が起り、十八世紀の末、マリー・ウォルストンクラフトはこの佛國流の婦人解放論を唱道した。佛國では革命以後、婦人の解放は盛に主張せられ、又一部は實施せられた。獨逸では一千八百七十年代の頃よりして婦人運動が起りて、隨分雜多の主張もあつたが、心理學、社會學及び生物學上の種々の事由のために、遂に他の方面に進むやうになつた。始めは獨逸にありても、他の諸國に於けるが如く、婦人運動は男子に對して政治上同權を爭ふのであつた。さうしてこの議論の根據とするところは常に哲學及び心理學の方面にあつた。ところが、近時になつてから、婦人運動の議論が社會學及び生物學の事實に基づくやうになつて、女子の個人の利益を、國家全體の利益との權衡といふことが考へられるやうになり、婦人運動の議論は一新して、過激極端の主張は已みて、女子の人格の發展の上に、權利の制限せられざることを要求し、その能力、傾向及び力量を職業の上に應用するを得ることを要求し、又その作業に相應して權利及び習俗に於て獨立の位置を保つことを要求するやうになつた。輓近の生物學は男子と女子との差異が現はれるのは人類の發達の徴候であり、それが自然の現象として、決して破壞せらるべきものでないといふことを示した。男子と女子とがその身體及び精神の上に、各々別々の特徴を有して互に相差別して進むといふことは人類の發達の基本であり、又必要のものであるといふことが明になつてから、今日の獨逸の婦人運動は以前の如くに、男女兩性の差別を破壞しようとするが如き盲目的の議論を已め、その生物學的の事實の上に立ちて、女子は男子と共同して、その固有の身體と精神とを以て、文化的發展に資せむことを勉むることになつた。それ故に、今日の獨逸の婦人運動は、女子が國民全體に對する個人的及び社會的關係を整ふることを得ることを要求し、又その能力と傾向とを養成することを制遏せざることを希望するにある。傾向と、能力と、必要とが女子をして何れの職業にか就かしむる場合には、その條件が男子に於けると同じければ、それをして自由に爲さしむべきである。女子の職業がそれに適當であるか否か、若しくは女子の精神が果してそれに適當であるか否かといふごときは、特に女子の場合に限りて檢査するの必要はない。獨逸の近代の婦人運動は實に此の如き方面に進みつつあるのである。

四

此の如くにして、近代の婦人運動は單純なる經濟的發展の產物として見るべきものでは無く、人類の發育の過程として男子と女子との特性が、益々著しく發現したる結果として現はれたる問題であると考へねばならぬ。言葉を換へて言へば、人類の社會にありて女子は妻たり母たるの天職を有して居るものであるが、この天職を十分に盡さむがためには、理性、義務感情、勢力緊張及び生活經驗の修養を完全にせねばならぬのであるから、この意味に於て、女子の教育を進めて男子と同等にするといふことが近代の婦人運動の眞實なる唱道であるといふべきである。近代の女子が盛に職業を求め、又盛に學術の研究に從事するといふことも、各個の女子が、女子としての自己の特性を知り、妻として又母としての天職に自覺してこそ、始めてその眞正の價値が認めらるべきものである。この點よりして見れば、婦人解放とは女子が眞正の母たることを自覺することを意味するものであるといはねばならぬ。それに對して女子が職業を執り、殊に學術の研究に從事するといふことは女子をして男性化せしむるものであると非難するは男子が自己の利益のために主張するに過ぎぬことで女子が職業を執るといふことは歴史上古代より已に行はれて居る事實である、さうしてその職業の種類も男子と女子との間にありて著しき區劃は無かつた。女子が學術の研究に從事することはそれをして男性化せしむるものであるといふ非難も理由の無いことである。全體、女らしいといふことは文藝の上に於て、久しき間に、女子の薄弱を讃嘆し又は嘲笑したるために現はれたる概念であるから、此の如く女らしいといふことは女子が職業を執り、殊に學術の研究に從事することにより消失することは言ふまでもないことである。此の如く文藝的につくられたる女らしいといふ概念は消失するにしても、生物學的に女子の特性として擧ぐべきものは、そのために些も變化を致すことは無い、すなはち、女子が如何なる職業を執り、又如何に熱心に學術の研究に從事するにしても、母性感情、母たることを喜ぶこと、小兒を愛するの情等はその力を減ずることはない。通常の場合にありて、この母性的本能はその他の衝動よりも强烈のもので、職業と學問とのために、それが消滅するやうなことは決して無い。

五

生物學的及び社會學的の事由に基づくところの婦人運動は女子をして、自己の本態を自覺せしめ、各自一定の職業を執り、殊に學術の研究に向ひて進むとして、ここに更に生物

學的の障碍が現はれる。それは職業と學術とのために女子の中に結婚せぬものの數が多くなることと、結婚の年齡の遲くなることと、又小兒を産出することの數の尠くなることとである。ヒルシユ氏が獨逸の大學に入れる女子七百二十九名に就て調査せる所に據ると、六六、三%は未婚のもので、三三、七%は既婚のものであつた。又試驗を卒へて修學を了りたるものでは六五、五%が未婚で、三四、五%が結婚した。又職業を執れるものでは、七五%が未婚で、二五%が結婚した。又結婚したものでは五九、三%が職業及び修學を中止し、四〇、七%は尙ほ職業を持續した。ヒルシユ氏は又、女子がその職業及び修學を中止したる事由を調査した所が五三、二%は修學中結婚のために、修學を廢し、三六、七%は結婚のために職業を中止し、八、二%は修學中、疾病、その他の事故によりて學修を中止したものであつた。女子が職業及び學術研究のために結婚することを避けるといふことは事實であるが、目下の所では結婚を欲せざるものが職業及び學術に從事することも又事實である。職業及び學術に向ふために結婚の年齡の遲くなるによつて小兒を産出することの尠なくなるといふことも爭はれぬ事實である。學術研究のために生物學的に小兒を産生することの數の尠なくなるか否かといふことにつきてはヒルシユ氏等はこれを否定して居る。しかしながら事實の上に於て、學術に從事するもの、及び高等の地位にあるものが、小兒を産生することの尠ないのを認める。これは小兒を産生する意思の減弱に基づくもので全く隨意的のものであると說明せられて居る。固より小兒を産生する意思（生殖意思）が減弱するによつて小兒の産生を減却することは事實疑のないことであるが、而かも女子が職業及び學術に向ふの結果、生物學的にその生殖能力を減弱するの傾向あることは、これを認めねばならぬ。これ實に婦人運動の將來の問題として、識者の注目を要すべきものであらう。



アインシュタイン博士を迎へて

稲垣守克

北野丸上海入港

十一月十四日午前十一時偉人アインシュタイン博士を乘せた船、北野丸は靜かに波止場に近づいた。上海に來てから十日間私は今日を待つてゐた、今日の日を待つてゐた。何だか大きな事件が身に迫るやうな緊張を以て船が岸に近づくのをながめてゐた。一町、二十間、十間。私は確かに見た。あれだ、あれがアインシュタインだ！　あの左に立つてゐるのが奧さんだ。私は急いで自動車の中にゐた妻を呼び出して來て岸に立つた。私の妻は花をかゝへてゐた。博士夫妻もすぐそれに氣がついたらしい。私は帽子を取つて挨拶した。博士と奧さんは同時に滿面に笑を浮べて續け樣におじぎをしてゐた。私は博士の船へ向つて、コロンボにも、ホンコンにも電報を打つて置いたし、コロンボ迄は長い手紙を上海から出して置いた。博士は私どもが上海まで出迎へてゐることを御承知であつた。だからすぐ岸邊に立つてゐる澤山の出迎の中で私どもを見つけて下さツたのだが、何しろ世界の偉人と早くも船の着かない中に挨拶を交換したことが私を無上に感激さしてゐた。

甲板の面會

船がついた。橋が渡された。人々は爭つて船の中に流れ込んだ。獨逸領事に一足おくれて私が博士に握手する、奧さんも百年の知己の如く喜んでくれる。私の妻が花を奧さんにあげる。其後方に新聞記者の一團が取りまいてゐる。獨逸領事は早速晝食に博士を招待してゐたが、博士は改造社からの出

迎への稻垣氏と相談の上でなければ招待を受けられないと答へられてゐた。私も領事には氣の毒だつたが領事は全部私のプログラムに委せてくれた。

新聞記者とは私の上海滯在十二日間に毎日のやうに面會して打ち合せをして置いた。博士と一通りのお話を濟せて私はプログラムの通り新聞記者諸君を船のサローンに集めて博士に簡單のお話を願ふことゝした。時間も除けるし、後々時間をつぶす恐れがない爲めに私は此方法を選んだ。博士は

『よろしうございますとも、これが矢張り一通りの義務でせうから。』

と快く承諾されてサローンに來られた。私は博士に旅行中の印象又は日本へ行く感想を話されるやうお願ひした。

旅行中博士の印象

博士は

『旅の印象としては、話盡されない程澤山ある。スエズの運河を通る時、あの砂漠の景色を見、そこの大氣に接した時、セイロンの島、シンガポール、香港。殊に印度洋の星の美しさ。又至るところ異る人種、民族、すべてが新しい、意味ある印象である。――日本人とは以前から一緒に研究もしてゐたから非常の喜びを以てお國を訪れる積りである……』

英人の新聞記者は『世界に十二人きりお說を解する人が無いと云ふが本當ですか。』なんて云ふ變な質問をしてゐた。博士は『そんなことはありますまい、少し物理に通ずる人ならば了解出來ることとでせうが、勿論數學の知識は必要でありますから。』と謙遜に答へられてゐた。又『ノーベル賞金を得られたと昨日の新聞電報にありましたが、正式の通知を得られましたか、それに對してどうお考へですか。』などと隨分不遠慮な質問をしてゐた。博士には『その通知は只今船に着いた時に領事から電報を受けていましたが……』と溫顏に當惑の色を浮べて『そんなことには別に興味を感じません……』と非常に謙遜に答へられてゐた。

奥さんの旅行談

私は新聞記者の求めに應じて奥さんに一寸お話を願つた。

『何しろ今度の旅行は何よりの靜養でした。私は十分にからだを保養することが出來ました。めづらしい熱帶の土地を見たことが何よりの印象です。主人には印度洋のすんだ空の星が一番興を與へたやうでした。私どもは多く考へ、多く讀書する時間を十分得ました、これが何よりの樂しみでした。但し一寸でも暇ある時は皆樣から寫眞をとられてゐました。』

上海見物

博士は上海の町を表面的に急いで見るよりも、ゆる／＼と可成に見たい、殊に國民の生活を見たいとの希望であつたから、數日かゝつて作つておいたプログラムを變更して、主として城内のきたない支那町を見物することゝした。城内程は私は前日下見聞に出かけたが、それは／＼臭くつて、きたなくつてお話にならない。此所博士を案内すべからずと思ひ定めて歸ッたのに、博士はそれがいゝとおッしやる。そして私ども四人は一つの自動車に乘り、前の自動車には記者其他の有志の方々が乘つて道案内と云ふ形。

晝食は支那の料理屋

南京路と云ふ一番立派な道路を通つて競馬場のそばの支那料理屋一品香に這入つた。こゝで晝食をすることにした。博士は這入るや否や建物を見てゐる。私には純洋式のやうに見える此建物が博士には建築上どこかに興味があるらしい。

私ども（全部で六人）は丸いテーブルを圍んだ。先づお箸が博士には始めてである。私はお箸の先生、博士は私の弟子となつた。天下の偉人は忽ちにして其術を覺えて見事に使はれるやうになつた。然るに奥さんは一寸やつて見たが六づかしいのですぐやめて、フォークとナイフとを使つてゐる。

博士とお箸

博士『エリザ、お箸をお使ひ、なーに、六づかしいことはないよ。』

奥さんは依然として改めない。

博士『女はどうも反動的で困りますね』と云つて笑つてゐられる。その中料理が後から／＼と出て來る　お二人とも驚嘆措く能はずと云ふ態。

奥さん『これは驚きました、此國には獨逸と違つて食糧が非常に豊富でありますね。アルベルト、御覽なさい。此鳥肉のうまさうなこと、この竹の子のうまいこと。』

博士『でも、エリザ、食物に有りつけない澤山の人々もゐるだらうよ。』

奥さん『アルベルト、お氣を付けなさい、それは餘り油すぎますよ。』

博士は食事を強硬に奥さんから監視されてゐる。來る皿、來る皿を注意して研究されて、稱賛やまず。

博士『古い文化のあるところには發達した料理がある。支那はそれだ。ところがアメリカの如きは丁度石炭をストーブにくべるやうに、只胃の中にカロリーを打ち込むことゝ心得てゐる。』と、盛に面白いことを連發される。

支那の葬式

その中にやかましい音樂が道路の方に聞えたので博士を眞先きに一同立つてバルコニーに出た。チャン、ガランく と云ふ音樂隊が先頭で、中頃にブーカ、ドンく と云ふ西洋式のものが來た。一つの行列である。その行列が葬式か結婚か中々見當が付かぬ。支那にゐる記者諸君にも判斷し難かつたが遂に棺が來たので葬式ときまつた。

其音樂に關して博士夫妻の間に議論が起つた。如何にも快活な音樂なので奥さんは葬式には似合はぬと云はれるが、博士は決してさうではない、歐洲にもあのやうな例はあるぢやないかと反駁につとめられた。

純支那街——城内見物

支那料理屋を出て城内に向つた。上海の城内は支那人の町で、租界外である。道路が狹くて自動車は通らない。私どもは自動車から下りてゐる〳〵と歩いた。これは又殊の外博士にお氣に入りで『未だ嘗て自分の一生の間想像もしたことのないことである。』『云ひ表はしやうもなく珍しい。』と云つて興味に滿ち〳〵た顏をして歩かれた。奥さん非常の近眼なので柄のついた眼鏡を一々目の前に持つて來てのぞいて見る。支那の燒物、象牙細工等見るもの皆めづらしいので顏をこする樣にそばに持つてゐつて見なさる。特にあのきたない家の中で間のぬけた顏をしてゐる支那人をつく〴〵とながめて感心してゐなさる。『アルベルト、あれを御覽よ。』と博士に見せる。『本當に丈夫さうな、樂しさうな顏をしてゐるぢやないかとお二人は無闇に感心なさる。町が益々臭いので、私が『隨分きたないでせう。』と云ふと博士は『なーに大したことはありませんよ。伊太利の町もこんな石がしいてありましたよ。』平氣でゐる。城内の入口の『小世界』と云ふ花屋敷式のところに這入つた。博士の最もおすきな支那の音樂を聞く積りだつたが今日は音樂はなく。京劇芝居ばかりだつた。お客は吾々一行の方を面白がつて見るので、博士は『私達も芝居ですよ。』と云つて笑はれてゐた。『小世界』の中の玩具屋で大正琴をひいてゐた人があつた。博士は三四分間立ち止まつて靜かに眼を閉ぢて聞き込んでゐた。

そこを出て又狹い臭い町を、きたない人にすれあひ、もみ合ひして歩いた。博士にはすべてが異樣のもの、珍しいもの驚くべきもののみであつた、特に澤山の乞食がついて來て、私は一錢銅貨をやつて追ひ拂ふのに骨を折つた、支那人の中にはアインシュタイン博士であることを知るものは殆んどないやうだつた。只時々、日本人に會うて彼等はすぐそれを見付けて、寫眞機がパチ〳〵音をし出す。

城内を出た時、博士は考へに沈んで歩かれた。私は『定め

し一種の悲しい感じ」を得られたらう。とたづねた。博士は「悲しいとは云へない、どうも悲しいやうな顔は見えなかつた。只無自覺と云へやうか。」と云はれた。

王一亭氏宅の晩餐

自動車は王一亭の家へ向つた。城内ではあるが其方面はともかく自動車が通る。但し道路がうねりくねつてゐるので東西が全く不明、六時頃大きな入口の前に止る、これが支那現代最も有名な畫〻王一亭氏の邸宅。

門を入りて開けた庭園、そこに大勢の人が待つて迎へてゐる。忽ち獨逸語で話しかける人がある。女も獨逸語、子供も獨逸語。其邊に喜んで待つてゐる老人が四五人。二三分の間に要領が分つた。卽ち此家は王一亭氏のもの、客として民黨の進歩的思想の持主于氏、法學博士應氏、別にシャン氏夫妻と子供。此シャン氏夫妻は永らく歐洲にゐて、獨逸にも二年位居たとかで子供まで獨逸語を話す。よく聞いてゐると十歳位の此女の子の方が兩親よりも上手に話す。應氏はフランスに學んだ人、フランス語を巧に話す。アインシュタイン博士もフランス語を話す。そこで自動車から門の中に流れ込んだ吾々一行は此王氏の一行と庭の中で紹介され合つて、にぎやかな空氣となつて家の方に進んだ。女の子は私の妻にもうぺチャ〳〵しやべッてゐる。博士も喜んで此子の手をひいてやつてゐる。そして大きな室に這入ると王氏の畫が一面に壁にかけてある。博士は大喜び。

十四人の人間が二ッの大きなテーブルを圍んで支那の大御馳走、今晩こそは博士夫妻は腰をぬかして驚かれた。奥さんには特にスープがお氣に入り只感心するばかり。奥さん「これだけの食糧あれば、私の一年間ぶり十分です。」飢餓の伯林から來た奥さんには何から何まで勿體なく見えて仕方がない。

食事中于氏の歡迎の辭に次いで博士は答辭を述べられた。始めて支那の家庭に來て、すべてが新しく珍しい感動を博士に與へた。

日本人クラブの學士會招待會

限りなく出て來る料理に時間が移り行くので止むを得ず最後の料理までは食べ盡さずに此家を去ることにした。自動車は暗い城内を出て明るい南京路を過ぎ日本人倶樂部についた學士會の歡迎である。吾々の到着がおくれたので一同待ちきれぬ思ひをして、少々飲んでゐた、七八十人の一同が博士の來會を拍手を以て迎へた。快活な感じであつた。幹事君が挨拶を朗讀すると、博士はすぐ答へられた。

『日本人とは永い間共に研究をしてゐて以前からの友人でした。今回改造社から招聘が來た時、すぐ自分の頭に浮んだこ

とは『お前、コヽに行け。』と云ふ感じでした。大なる喜びを以て出かけて來ました。日本についてから日本の美しい天地に接するのが樂しみですが、それよりも相對性理論とはどんなに易しい簡單なものかと云ふことを日本の皆さんにお傳へして、私が日本を去る時は皆さんが『なんだ、あんな易しいものかと云はれるやうになることを深く希望してゐます。』

と博士はいつもの通りやさしい、謙遜の態度で靜かに話された。色々學士會の連中が質問すればよいが、言葉の關係上默つてゐた。或人が

『博士がお説をお考へになつた動機は、人が家根から落ちたのを見て思ひついたのだと申しますが、さうですか。』と質問した。

博士は『私が家根から落ちた人を見たのではない。家根から人が落ちるところを想像したまでです。その時に其人は引力を感じないと云ふ例にすぎません。』と答へられた。

奥さんが非常に疲れてゐたので別に質問する人がなければ歸らうと云ふことになつて、吾々は再び拍手に送られて出た。快活はよいが少し禮を失して博士の肩をたゝいて握手を求めた人もゐた。但し博士はいつもやさしく少しも氣にかける樣子はなく凡ての人々に叮嚀に挨拶されてゐた。

歸船

自動車は船のところに來た。夜は十時すぎてゐた。あたりは暗く、誰も見てゐないところで、博士は帽を取つて自動車の運轉手に禮を述べてゐた。博士は人力車にどうしても乘れないと云ふ。車夫に氣の毒で如何にも忍び得ないのである。

船に這入つた。やれこれでもとの靜かさに歸りましたねと云つて博士は喜んでゐる。奥さんと私の妻とはもう大の仲よしの友達のやうになつてゐる。香港より以來吾々の爲めに最もよい室をとつておけとボーイ長に命じておいたが、此室は一番よくないと云つて盛にボーイ長を困らしてゐられた。そして私どもに向つて『どうか私を悪い宿屋の主婦と思つて下さいますな、ボーイ長はあんなに承知しておきながらこんな手ぬかりをしてゐるのですから……』

第一日も終へて私どもはお互におやすみなさいを繰り返して室に歸つた。

謙遜なる温和なる自然なる博士

博士は想像したより以上の偉人である。普通の人以上にやさしく、自然で、僞りがない。

『博士は自分が天才となつたことは偶然の幸であつて、云はば不公平の天の惠である。出來るだけへり下つて此恩を人々に返さねばならぬ。』と心得てゐる。これは奥さんから私の妻が聞いたことである。此一日私は何だか大なるものに接して

ゐるやうな莊嚴の心地であつた。而も少しも窮屈でなく、何だか自分の親のやうな氣がしてゐた。私どものやうな小さいものにさへ少しのへだたりを見せず、いつも側にゐて下さること、それが少しも不自然でなく心の中の親切が眼に見えるそこに眞の偉人の價値があるらしい。例へば戸の入口などで博士にどうかお先きにと云ふと『なんであなたとの間に遠慮が必要でせう、どうかお先きへ、誰れも見てはゐませんから。』と私をいつも先きに出して下さる。

十一月十四日

上海の第二日——午後出帆

朝八時に第一のガンが鳴ると、それが用意のガンで八時半に朝食がある。八時を少し過ぎた頃、もう奥さんが私どもの室をたゝいてゐる。『まだですか、おやすみなされましたか。』と云つてゐる。

博士と奥さんは上海より特別に四つの席ある一つの食卓を用意しておいて下された。そこに私ども四人がお話をしながら食事をする。朝食の食卓についた。山のやうに手紙と電報が博士のところに來た。それを整理するのが奥さんの役目、奥さんは例の極度の近眼で、電報と手紙とを眼の前五分位の距離につけて讀んでゐる。一方食事の献立を又五分位のところに持つて來て讀む中々お忙しい。博士は私をつかまへて話しつゞけである。其中に朝食がすんだので上陸することゝする。出帆は午後三時。

龍華寺見物

——博士と建築——

自動車は上海の町を通りぬけて市外約二哩のところに在る龍華の寺に向つた。

博士は昨日から今日にかけて支那人が外國人にやられてゐる狀態を觀察して『もう五十年の間に支那人はきつと外國人を追ひのけて見るだらうよ。』と云はれてゐた。

龍華の寺は目下は兵營になつてゐる。門に番兵がゐる。門に近づいたら番兵が銃劍つけて何だか威張つて云つた。多分『何人だ、こゝは通行ならぬ！』と云つたのだらう。世界の學者ア博士と間がぬけづらの督軍手兵との對照が面白かつた。

要するに他の入口から一圓拂つて這入ることが出來た、博士は『大丈夫ですかね。』と云つて兵隊どもの方に行くのを氣味惡がつてゐた。建築が一番すきな博士には何よりの喜びであつた。私などが感じ得られぬ感じを博士は感じられるらしい。『エリザよ。こゝへ來て兩側の建物をながめて御覽。』と云つて寺の中庭の中央に立つて研究されてゐる。こんなにも建

篆が博士に氣に入るとは想像しなかつた。五百羅漢を見て一一其顔を研究されてゐた。

支那の田舍

それから門を出て、田舍のきたない家の間を通り貫けた。これが又天下の別天地で、きたなさ、臭さゝ想像の外である。博士の喜び一通りでない。『生れて始めての經驗である。よくもこゝへつれて來て下さつた。』と繰り返して喜ばれた。奥さんは田舍のきたない子供に最も興味を感じて例の眼鏡で顔をのぞき込む。子供は急いで逃げてしまふ。中には母親が子供の手をひいて奥さんから逃げさせるのもある。私は早く早くと云つて私に寫眞を取らせる。私は十二枚寫眞をとつたが、これは殘念にも他人の機械であつたもので、機械の使用を間違へた爲め全部寫らなかつた、實に口惜しい。その事は今船の中でわかつた。それが寫つてゐれば何よりのお土産であつたのに。

買物

雨が時々ポツ〳〵と來て、又止むやうな天氣だつた。私は時計をこはしたし、博士は時計を忘れたので時間が不明。ともかく歸路についた。途中十二時十分前と云ふことがわかつたので、一寸永安公司と云ふ三越式の商店に這入つた。奥さんは支那の絹が買ひたいので喜んで見てゐる。ところが何れもマルクに換算すると高價なのでとても良心がとがめて買へない。それでも三分の二ヤールの絹を二圓二十五錢で買つた。これを獨貨マルクにすると七千マルクになるかも知れないと云つて驚いてゐられた。それから繪はがき四五枚買つた。博士には物品は大した興味を惹かない。『私は物よりも人の方が面白うございます。』と云つて、仕方がなしについて歩いてゐた。子供の『アブラヤ』があつたのを見て『之をお前に買つてやらう。』と云つて奥さんをからかつた。奥さんは笑つて博士の頬をなでた。

上海出帆

船に歸つて晝食をたべた。花を持つて見送りに來て、サインを求めるやうの人もあつたが概して大勢ではなかつた。昨日から親切に世話をして下された人々と心からの別れをして船は靜に岸を離れた。博士は私のそばに立つてゐて、一人でも遠くから私に挨拶する人があると一緒に手をあげて挨拶して陸の人が見えなくなるまで私と共に甲板に立つてゐた。

船が出た。楊子江の濁流の中央に出た。風が強い。太陽は出ない。さむい甲板の比較的風のないところに立つて私は博

と色々話した。世界平和の問題や、獨佛の融和の問題、さては人種問題に至るまで、私は時間のたつのを忘れてゐた。

博士とピヤノ

博士は少し仕事をするからとて室に行かれた。私も日記を書かうと思つてサローンに來たら博士もペンをとつてゐる。私に日記帳を見せて『これが私の日記帳です。あとになつて忘れない爲めに、そして後日讀んで見ると今回の旅行がありありと記憶されるでせうから。中にはほんにつまらないことも書いてあります。』『いやお邪魔をしてはすみませんから……』と云つてサローンの一隅にあるピアノの前に行つて、靜かに蓋を開けて靜かにひき出した。博士は音樂がすきで、自分が御上手だときいてゐた。如何にも樂しいやうな、親しいやうな態度で、サローンにゐた二三の人々の邪魔にならぬやうに、ほんのそうッとピヤノをひかれた。私は靜かにペンを置いて聞き入ッた。その深い考への中から湧いて來るやうな音を。

奥さんの料理

夕食後私ども四人は上甲板に籐椅子を並べて色々の世間ばなしに興じた。其の中で奥さんが私どもを笑はせて、御自身もおなかをかゝへてお笑ひになつたことは、

奥さん『アルベルトはいつも云ッてゐます。私が死んだらお墓の上にセリーの種子をまいて一面綠にしてやると云つてゐます。なぜかと云ふと、此頃獨逸では食物が高いので、私がついどの料理にも少しづつセリーを入れてごまかす。アルベルトは會ふ人ごとに自分の妻はセリーばかり食はせると云つてゐるさうです。』

博士の落語

博士は落しばなしが非常にすきで、今晩は色々の話をして下さッた。

『外交官と女との相違は何！ 答へて曰く、外交官が『はい』と云ッたら『多分』と云ふ意味で、外交官が『多分』と云ッたら『否』の意味、『否』と云ッたら、もう外交官ではない。然るに御婦人は『否』と云ッたら『多分』で『多分』と云ッたら『はい』で『はい』と云ッたらもう御婦人ではない。』

『或人が外交官の試驗を受けに行つた。法律や外交史や語學の試驗が濟んで外交官としての特別試驗になつた。試驗官は其人に向ッて『あなたにどれだけの頓智があるか話して御覽なさい』と云つた。其人は『先日旅行をしまして宿屋につきました、すぐ風呂を命じて風呂場の戸をあけたら御婦人が中

でお湯をつかッてゐるぢやありませんか」私は驚いて『これはだんなさま失禮をしました。」と云つておわてゝ飛び出しました。」と答へた。

私は日本にも之に類した落し話が澤山あると思ッたが、一寸思ひ出せなかッた。日本には『其日暮し』と云ふ言葉がある。獨逸語では『手から口へ』と云ふ。然るに此頃は生活難の爲めすべての人が家財道具を賣り飛ばさなければ食へなくなッた。然るに西洋の家には價のあるものが多く壁にかゝッてゐたり、壁の近くにある。であるから『壁から口へ』と云ふ言葉が流行してゐると博士は話された。

又博士のやうになると手紙、電報、招待、サイン、講演で八方から攻められる。『餘り多くの名譽は恥なり』と云ふ言葉がある、如何にも尤だと博士は云はれた。博士は此言葉から『餘りの親切は不幸だ。』と云ッて笑はれた。

太陽と地球との衝突

王一亭さんの家の晩食の時に、王さんは質問された。

『太陽と地球とが衝突することがあり得るや否や』

博士は答へられた。『それは無いとは云へない。詳細なる計算によると地球と太陽と近づきつゝあると思はれるが、それは極く僅少なもので先づ心配することは必要あるまい。』

船の一日

十一月十五日

昨晩から波高く、朝起きるのは中々の決心だッた。博士は早くから起きて甲板を散歩してゐられる。中々強い。『波の影響は魚ほども感じません』と博士は平氣でゐる。朝食濟んで其食卓に座したまゝ私は博士と約二時間話してゐた。話が矢張り平和とか人類の性質とかと云ふ問題になッたのでつい時間の移るのを知らなかッた。

波を好む博士

食後私は博士と甲板を散歩してゐたが博士の勇敢なる申出に應じて船の最も尖頭に行ッて見る事にした。船の中央は船體の動搖やゝ少ないが、尖頭と後尾とは三四米も上下してゐるやうだ。あるくのさへあぶないのに、ザブ〳〵と來る潮をあびて博士と私は船の眞先きまで行ッた。一番先きの鐵の棒につかまッて下を見てゐた。風が強いので、眼は涙で一ぱいになり口からもよだれが出るやうで話も出來ない。先頭には小さい鐵板があるので話をする爲めに博士と私は小さくし

やがんで鐵板の蔭にかくれて話をして又くだける波を見る。ながく止まるべくもあらずとて約十五分で歸ッて來た。歸りに二人はびッしよりになつた。

博士の樂しみは日本の風光

『日本も近くなりましたね。』とて博士は私に日本の色々のことをたづねる。博士が最も趣味のあるものは建築物、それから音樂、それから繪畫である。院展の話をしたら非常に喜んでゐられた。京都にまだあればいゝが？ それから奈良の話京都の寺の話、日光、箱根、一として博士の心を誘はぬものはない。そこで博士と二人は日本の講演の日を數へて見て、十一月十七日について十二月十二三日頃までには全部がすめば、一週間や二週間は方々見物出來ると云ッて喜んでゐられた。（奥さんは但し日本の絹がお買ひになりたいさうです。）

波は高いが無線電信はどし〳〵來る。獨文でも來る、日本文でも來る。改造社ともプログラムの交渉がある。又通信社から日本に對する感想をくれと打電して來る。中々忙しい。

博士と新聞記者

——巴里の思出——新聞の責任

話が新聞記者のことに移つた。神戸についても新聞記者が澤山來るだらうが、私はやッぱり上海のやうな方法をとッて記者諸君をかためて面會させる積りだと話した。博士も『それがいゝ。年中つきまとはれてはたまらない。あの人だちは何か變ッた事を書かうとする連中だから、特に私が獨逸のことに少しでも反對のことを云ふとそれをいゝ種子にする、それで少なからぬ迷惑を受けたこともある。米國の記者は一番猛烈でしたよ。遠慮がないことを聞くし、どこまでも追ッかけて來ますから。又巴里に行ッた時は夜の十二時でした、多くの記者や出迎へが停車場に待ッてゐたのでつかまッてはたまらぬと思ひ、幸にして車が後方に止ッたので、プラットホームの方でない反對の方に飛び下りて、レールの間を走ッて反對側から逃げ出した。それから友人の案内で屋根裏のやうなところに住んでゐて誰にも見付からなかッたが、とう〳〵發見されてしまッた。』博士は新聞の責任に關して『新聞は成長した人々を教育するものだから餘程の責任がある』と云はれた。私は日本の新聞は外國の新聞では見られぬやうな人の噂に滿ちてゐることを述べた。博士は『それは又初耳だ、勿論西洋にも惡口新聞はないことはないが大新聞が人の私事を書くなんて面白くない現象ぢやありませんか。そんな私事は第三者には、少しも面白いものではないでせう。特に男女の關係に新聞が立ち入るとは不愉快です、或男が廿四人の女に關係したッて、それが何で社會的に持ち出す問題になりませう。』新聞政策としては賣る爲めに必要かも知れないが、健

全なる社會がそんな記事を排斥すればいゝでせう。」

話題は婦人問題にも及んだ。

「私は凡ての女が男子と同じ職業が出來るとは思ひません、女子は弱いところがあるから彼等の爲めに道を開いてやらねばなりません。職業にも女子に適當なものを、やり易くしてやる必要があります。」

人類愛に滿ちた博士

波が高く奥さんは元氣がない。私の妻は三四回もやッてゐる。それでも奥さんと妻とは甲板の籐椅子にねころんで話しつゞけてゐる。博士と私とは風の當らぬ方に行ッて話しつゞけた。

私は「人類が動物を食はねばならぬと云ふのは悲しい運命ではありますまいか。」

博士「悲しいけれども、止むを得ますまい。人類の存在の爲め必要でせう。正義と云ふものは人類と動物との間にはありますまい。正義は或團體の中に定義されて來たものでせう。

私は「其正義をせめて人類全體だけにでも擴げたいと思ひます、今までは國の中には正義ありと云はれましたが、國と國との間には正義はありませんでした。又一國內の社會の階級の間にも正義が忘れられた事が多くございました。」

博士「勿論さうですとも、今のやうに國と國とが自分の利益だけを主張して益々敵愾心をあふるやうな狀態は永續し得るものではありますまい。」

それから二人は平和或は社會運動の話に進んだ。博士は實際運動家では少しもない。然しながらすべてに眞實を見出さんとする人である。其穩和にして眞面目なる態度に私は敬服の外なかッた。

風は續いてゐた。甲板は中々寒い。知らない間に夕方が來て私の風呂の時間だと風呂ボーイが知らせに來た。「あなたどうかお風呂にいらッしやい。」と博士は私を促したので、つきぬ話を殘念にきりあげて私は入浴した。

話だけて日本が氣に入る

晩食後四人は甲板の籐椅子にねて話し合ッた。日本の學生生活、音樂、其他日本人の家庭の有樣など非常な興味を以て聞かれてゐた。學生が特に粗末な風をすること、日本人の謙遜の事など、すべてが博士には自然で、ゆかしく見えるのである。但し女の地位をひくゝしておく事は矢張り不思議に思はれたらしい。私の妻が奥さんにあんまり日本をほめて話したもので、奥さんは伯林から日本に移轉しようなどと云ひ出した。私の家には是非何度も遊びに來たいと云ッてゐる。あのきたない横丁を通ッて、あの貧弱なマッチ箱の家にお連れし

たら何と思ひなさるか。定めし想像と現實との相違に驚かれるであらう。

又、船の女ボーイがいつも奥さんに東京に來たらお遊びにいらッしやいと云ッてゐる。奥さんは『遊びに來いと云ふが住所がよくわかりやしませんし、それに宅と一緒に是非來いと云ふのですよ。疊の上に坐れませうか。』と云ッて、笑ッてゐる。博士は眞面目になッて『エルザ、一度は行ッてやらなきやなるまいよ。』と博士は飽くまでも人の好意を無にしない。日本人なら問題にもしないだらうに。

新聞記事と博士

博士は自分に關する記事の掲げてある新聞は決して讀まない。

博士『自分に關する記事をよむと、自分が拘束されることになる。飽くまでも自分は自分の天地を守り十分に自由でありたい』と云はれた。又『私は少しも政治家ではないのに、記者は往々にして私を政治家とする。右黨の方にかゝッてはくそみそにけなされるし、進歩派の方になると私を天井まで持ちあげる、――要するにくだらないことですね。』奥さんが事務的方面は萬事處理してゐる。新聞なども奥さんが見る。巴里に行かれた時は博士は手紙を多く書かなかッたけれど、奥さんは新聞によッて博士の行動の一から十まで知ッてゐた。

博士はジャバ、スペインにも行かれる

博士は日本の講演を終へてジャバに行かれる。其前に一寸北京によるかも知れぬが、それは未定である。ジャバが濟んで、パレスチナに渡る。そこにはまだ大學がないが博士の往訪と同時に大學が設立されるかも知れぬ。それからスペインに渡り伯林に歸るのは大正十二年の四月頃である。「博士は『隨分長い旅です、早く子供に會ひたいと思ひます』と云はれてゐる。其間際に奥さんは病氣であつたが、幸にして全快されて博士と旅を共にされることゝなつた。『お子さんもお連れになればよかつたに』と私が云ッたら、博士の顏は喜びに輝いて『でもあまり大勢のお客になるので』と云つた。出來さへすればお息子さんは連れて來られたかつたやうだ。

獨逸國粹派博士を迫害

獨逸の學界は戰爭以來世界からボーイコットされてゐる。博士は『隨分馬鹿な事ですね。』と云はれてゐる。日本の學士院は博士を招待するが一には日獨學界融和の爲めの意もある旨を話したら、博士は『自分は今じや國籍はスイス人だし、又ユダヤ系であるから獨逸の學者連は大して感じないかも知れ

ない。』と云はれた。他人の想像し得ない程の精神的壓迫又は迫害を受けてゐられる。

今年獨逸でラテナウが殺された時分は博士はミユンヘンにゐた。ミユンヘンは元來反動的のところであるから平和主義者としての博士をきらつた。特に學生などは中々危險であつて博士はあまり講演をしないやうにしてゐる。當時博士が襲撃されたやうな噂もあつたが、博士に親しくおたづねして見たら『さうではない、何かの計畫はあつたかも知れぬ、あぶないとは感じたが別にどうされたのでもなかつた。』さうである。今回も旅行中船の中に若い獨逸人がゐた。平生から威張ッて見えてゐた。或日博士は其獨逸人がマッチ箱を落したのを見た。マッチは箱から出てバラ〳〵にこぼさた。博士はすぐそれを拾ひ集めて其若者に與へた。彼は謝禮も云はずに受け取ッた。博士は不思議とは思ッたが別に氣にも止めない。博士のうるはしい氣分は毎日の一擧手一投足に表れてゐる。すべての人に叮寧に挨拶し、總ての人に態度を變へない。誰が署名をたのんで來ても應じてゐる。私はそばで見てゐてお氣の毒でたまらない。立派な方でさへもずゐ分遠慮のない註文をしてゐたやうだ。博士は決して拒絶しないで其註文を滿たしてあげてゐた。

十一月十六日は神戸につく豫定の日であつたが香港で一日おくれたのと、上海を出てから海がしけたのとで十七日夕方入港となッた。十六日は朝から時々太陽も出てゐたが、波は昨日の餘波をうけて中々あつた。奥さんも私の妻も昨夜はねむられなかつたさうだ。博士も私も十分ねて、そんなひどい波があつたとは少しも知らなかッた。朝の食卓で博士は『男子に強い神經を持つてゐる。』と云ッて得意だつた。

明日神戸につくので奥さんは荷造りで忙しい。細い荷造りは奥さんの仕事、博士はトランクを動かす役目であるから時時室をのぞけばい〻。其間は私に甲板で風をよけて色々の話をしてゐられた。

博士は凡ての風習を公平に判斷

日本人は往來や電車の中で唾を吐く。然し支那人はなほはげしい。それのみならずどんな支那人でも多くは手鼻を平氣でやる。博士は十分それを上海で見られた。私は友人から聞いた話だが、上海の支那人の學校に日本人の教師が居た。此日本人中々ハイカラと見えてハンケチを出して鼻をかんださうだ。或時生徒に向ひ『お前達は手鼻をかむが、あれはきたないからやめろ。』と云つたら生徒の一人立つて答へて曰く、『然し先生はハンケチで鼻をかんで又それをポケットに入れるぢやないか、あの方がまだきたない。』といつたさうだ。此話を博士にしたら博士は支那の生徒の云ふ事が尤だとて感心された。

それと同じ例がある。私は日本人の風習が西洋と異るので西洋人には『好奇心』と思はれるところが澤山ある。例へば往來で知人に會ふと『今日は、どこへお出でになる？』と問ふ。又『何しに』『あなたおいくつ』或は、家庭の事など、すべて私事に關することを遠慮なくきく風習がある。これは決して惡氣ではないと云ふことを說明した。博士は『それは好奇心ではない、他人のことに無關係或は無同情でなく、他人のことを了解せんとする善意である。』とて非常に興味がつてゐた。すべてを自然味を以て觀察せられる。支那の田舍町のきたないのを見て生活の簡單化を羨んでゐた日本の家のマッチ箱の樣なのも話したがそれも喜んでゐる。

博士は生活の簡單を喜ぶ

博士は時々色々の便利な機械を發明される。一つの發明に取りかゝると非常な熱心を以て始めて成功しなければ止まない。然しながら一度立派な機械を發明されると『再び自分は進步したる機械を此世の中に出したことを後悔する。』例へばよい冷藏庫を發明した時には、博士が人間を益々贅澤な生活に導き、生活の簡單化を妨害するに至つたことを殘念がるのである。

日本に於ける講演に對する眞劍なる期待

博士は京都を非常に見たがッてゐられる。然し無線電信によると十九日に講演があるので京都見物は出來ない。講演のプログラムに關して改造社と私との間に無線電信が何度も往復して、私は博士と相談する。其際にも博士の熟考は中々眞面目だ。例へば各地方では一回づつの講演としてあつたが博士はどんなことをしても一回では說明出來ない。少くとも二回やらねばだめだと云はれる。決して只顏を見ようとして來る人々の考とはちがふ。博士は眞劍である。但し會場其他の都合もあらうからプログラムの變更は困難だらうとて心配してゐられた。

博士の米國に於ける思出——米人の廣告

博士が米國に行つた時の思ひ出として中々面白いのがある。例の新聞記者の襲擊である。米人は遠慮のない連中である。博士の室にずんずん這入ッて來る。一々面會してゐては生命が危險なので或時博士は室の浴室の中に逃げ込んで中から鍵をかつてゐたさうだ。奥さんも氣がつかないで博士を一生懸命で探してゐた。

又ニユーヨークのホテルについたら人が來て『何でもおのぞみのことを云つて下さい、何が一番おすきですか。』とたづねた。博士はピヤノが一番すきと答へた。翌朝大きなピヤノが屆いた。それと同時にピヤノ屋の雇人が來て博士の署名を願つた。博士はお禮をかいて署名した。するとそのピヤノ屋は博士の署名をウント擴大して更に『アインシユタイン此ピヤノをひく。』と大きく書いて店に出した。人々は山のやうにたかつてそれを見てゐる。

米國では往來で人々が急に前に立つて『博士署名を願ふ。』と云つて筆と紙とをつきつける。書かなければ通れない。博士は米人の無作法にあきれた。『どうもデモクラシーですからね。』と云つて米國にやさしいところのないのに不滿の感を懷かれてゐた。停車場のプラトホームでもどし／＼來て握手する。ずゐ分くたびれたさうだ。

又ナイヤガラの瀑布に行つた時、こゝなら靜かにゐられると思つたら、停車場下りて馬車に乗らうとした時、馬車の馭者がもう博士を知つてゐた。全米に亙つてすでに活動寫眞がひろがつてゐたから。

博士のボート遊び

貧學生の扶助

博士は宴會がきらひ、招待がきらひ、さわぎがきらひ。靜かにひとりでピヤノをひく事と散歩がすきだ。博士は今一隻の小さな帆かけ舟を持つてゐる。ベルリンの近くの湖水に浮べてある。博士は日曜毎に行つて一人で帆かけ舟をあやつッてゐる。航海中ジヤンクを見る毎に私に自分の舟の話をする。

博士は色々の方面に於て多くの貧書生を扶助してゐる。多くの賞金は殆んで此方面に向けられてゐる。

最近博士の友人は博士の爲めにキール港の岸邊に小さい家を建てゝゐる。博士が大正十二年の四月に歸國する頃は完成してゐる筈だ。そこで博士は時々帆かけ舟で遊ぶのを何よりの樂しみとしてゐる。

博士の靴下

獨逸は物價が高く、靴下一つが何百マルク何千マルクする、とても買へない。奥さんはいつも靴下のつくろひをする。博士はそれを見てゐて氣の毒でならない。博士はよく森林に散歩する。或日友人と散歩してゐたら博士はちんばをひいてゐる。友人はなぜそんな歩き方をするのですかと尋ねた。博士は靴下をはいてゐない。『いつも妻に靴下のつくろひをさせて

ゐるから氣の毒だから今日ははいて來なかつた」と云つた。博士はまめをこしらへてちんばをひいてゐたのだッた。

スイスにゐた時きたない服に、粗末な帽子とステッキで旅行して、バーゼルのホテルに泊らうとした。女中があやしんで先きに宿料を拂へと云ふので、博士は先づ宿料を拂つて泊めてもらつたさうである。

そんな例は數へきれない。船の中でも朝から晩まで毎日同一の洋服である。私がお迎へした初めの日から三日までボタンが一つとれてゐる服をきてゐられた『エリザや、見ッともないからこれを一つ付けておくれよ。』と云つて奥さんに示してゐた。

晩食後關門海峽にさしかゝつた。兩側の電光が見え町がきれいに展開されてゐる。博士は深く感動されていよ〳〵日本に來たとて甲板を離れない。『如何にも力ある國の感がする。』と云はれた。町の様子は少しもわからない。只電光だけだから決して日本は見えない筈だが、博士はすべての想像を通して日本を美化し、堂々化して感動されてゐた。私はそばにゐて、明朝太陽が出て、岸に雀の巣位の日本の家の見えた時、又東京の道路と人と電車とを見た時の博士の感想を想像した。そして而も博士が必ず日本の美しいところのみを觀察されるだらうと云ふ考に基く安心を捨てなかつた。

博士は明朝六時に起る覺悟で床につかれた。

（大正十一年十一月十六日午後十二時記）

十一月十七日

今日は船が神戸につく、瀬戸内海を靜かに走つてゐる。博士夫妻は此天下の絕景に見とれてゐる。奥さんは荷造りで忙しい。私はこれから博士夫妻を寫眞にとつて此稿と共に社に送る。（十一月十七日正午記）

神戸上陸

瀬戸内海は大當り、博士は六時から起きて景色を見てゐた。メルヘンで讀んでゐた以上の美しさに見とれてゐた。神戸の港外で船が一寸止つた。身體檢閲の爲めである。其時に三隻の小蒸汽船が來た。近づいた。私は博士と二人で甲板に立つて見てゐた。博士は、山本氏は見えるかとしきりに聞かれる。私は遂に見付けた。帽を振つて挨拶する。博士も帽を振られた。山本氏の顔は非常に感激してゐるやうに見えた。

甲板は急に人で埋つた。こゝでは私は新聞社の諸君をおたすけすることも博士を保護することも出來なかつた。どやどやと押し來る中を分けて、山本社長を最初として學士院より出迎への諸博士と博士との間に挨拶が交換され、山本氏の奥さんより大きな花たばが博士夫人に送られた。同時に學士院からの招待狀も送られる。其間に寫眞隊の攻撃になる。いつの間にか博士はサローンに引つ張つて來られて大勢の人に攻められてゐる。出て來たかと思ふと無理やりにサインを請求されてゐる。誠にお氣の毒であるが如何ともなし難い。

押し出されて、岸に下り私どもは自動車に押し込まれて、オリエンタルホテルへ向つた。

ホテルでは靜かに一時間を休んで、京都に向ふ計畫である。

博士と奥さんはホテルの窓から始めて道行く日本婦人を見て興ぜられてゐた。



小石川植物園に於ける帝國學士院主催の招待に出席せる
ア氏夫妻並に日本學界の權威（十一月廿日撮影）

こゝに一つの面白い話がある。北野丸で同船の英國のバーさん、七十位だらう。私どもはいやなバヽーと思つてゐた。いやに勿體ぶつてゐるが、上陸間際の料理が悪いと云つてボーイに茶代をやらなかつたやうだ。その位のやつと思つてゐた。ところが船がついて、ア博士の奥さんが山のやうな人に圍まれ花を送られてゐるのを見て癪にさわつたと見え、花たばをかゝへて人を押しわけて奥さんのところにやつて來た。奥さんは近眼だからつい其花を自分に誰かゞ手渡ししてゐるのだと思つて手を出した。するとバーサン

『おッと、待つて下さいよ、あなたの他の人でも花を貰ふと云ふことを一寸知らせに來ました』と云つて去つて行つた。

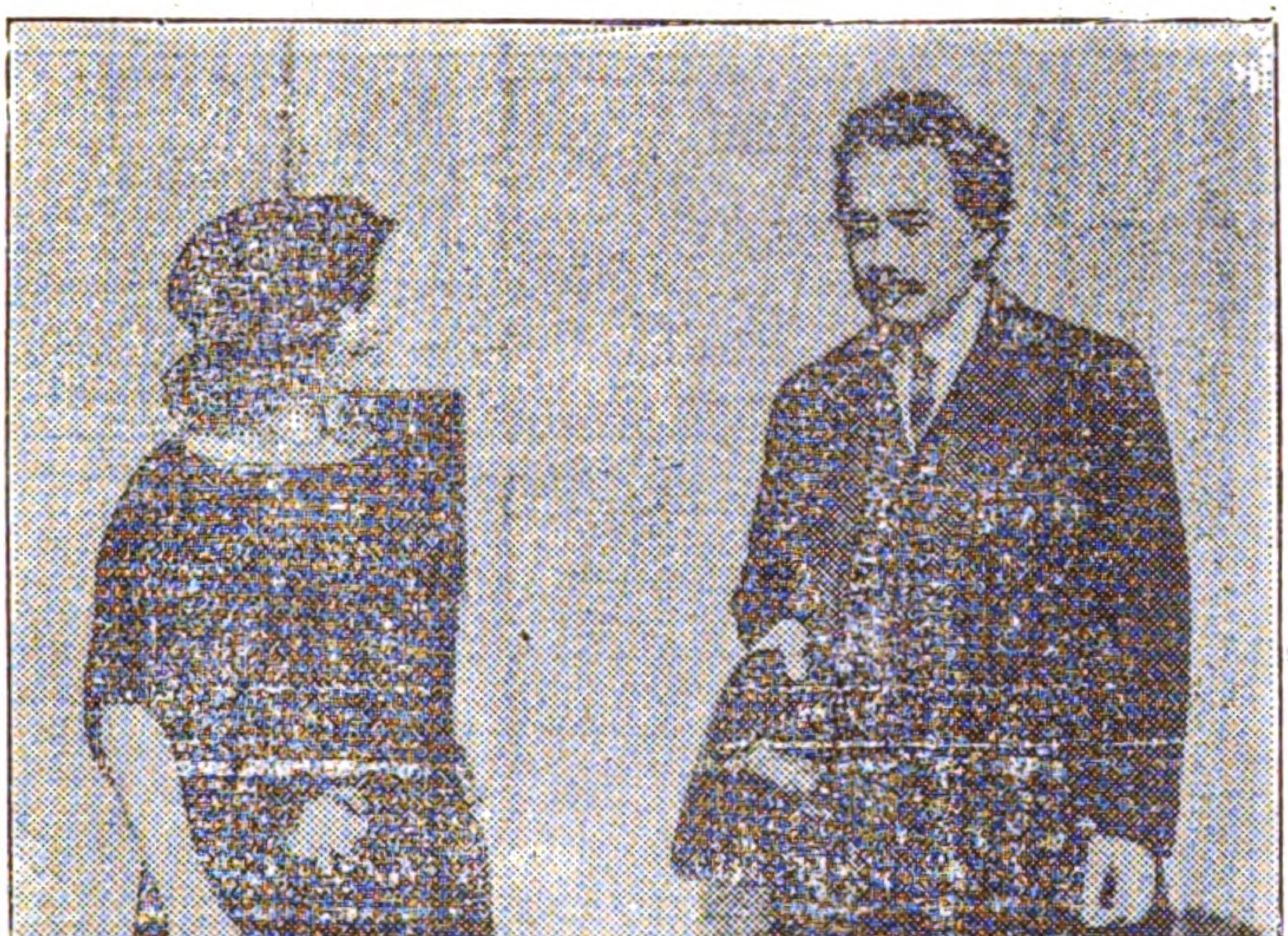
どこの國でもバー様はよくない。

京都へ

日暮れ頃、神戸を辭して京都へ向つた。窓から見える日本の家を物珍しげに見てゐられたが、忽ちにして闇となつたので一行は車中で快談に更つた。奥さんと私の妻との間に山本社長の奥さんが坐る。博士の奥さんは日本服を例の眼鏡で一生懸命にのぞき込む。みんな絹ですと云ふと中々本當にしない。絹はそれほど向ふでは高い。

京都に下車して自動車は都ホテルへと向つた。それが始めての日本の町の博士に與へた印象である。南側をキョロ／＼見廻して『驚嘆』を連續してゐた博士の顔が有り／＼と浮ぶ。

一、小さい家、二、やさしい建築、三、提灯、四、人間、五、電燈の多いこと、が博士夫妻の第一印象である。



赤阪離宮に於ける觀菊御會に臨まんとして帝國ホテルの玄關を立出でたア氏夫妻（十一月廿一日撮影）

都ホテルの三階の角のいゝ室に案内したら非常に喜ばれたが同時に心苦しがれてゐた。それから出迎への諸博士等約十人で日本最初の晩餐をした。

食後博士は出迎への諸博士と共に専門のお話をせられてゐた。

京都の朝

上りの特急は九時十五分に出るので其前に約一時間京都見物をしようと云ふ事にした。七時にねむいところを起されて朝食も早々、霧に蓋はれた京都の町をもう一度窓からながめて急いで自動車に乘る。

今日は十一月十八日、可成り空氣はつめたいが、太陽がからりと出て氣もちがいゝ。博士は始めてあかるい日本の町を

見るのである。吾々が住ひなれてゐると何等美しくも見えない日本の小い家が博士の眼には美である。盛にほめられる、蓋し本當にいゝと思はれるのだらう。

白い大きな大根、菜がめづらしい。子供がめづらしい。特にお寺の門、神社の屋根には驚嘆やまず。自動車は時間を急ぐので、市中をぐる／＼廻り時々、止つては又走る。博士と奥さんとは『もつとおそく／＼』と連發するが、時間がないので殘念ながら自動車は走る。

京都の朝の町を通つてゐて、私が一つ説明出來なかつた事がある。桶が澤山乘つてゐた。博士にたづねられて困つた。



十一月廿二日ア氏夫婦は芝の増上寺を見物に出掛けた。御靈廟前で撮影

京都より東京

博士は中々忙しい。もう私とばかり話をするのではない。大勢の人がゐる。さぞお疲れの事だらう。景色も見ねばならず、博士連と話さねばならず、大きい停車場では出迎への人もある。

其日は丁度又となない日本晴れ。松の山、湖水、川舟、紅葉、村、が何度となく繰り返され、而も容趣を異にして車窓の左右に展開する。富士が來た。三分の一ばかりは眞白の富士。博士も奥さんも只見とれる許

箱根山の前から新聞記者も乘り込み、國府津に於ては記者諸君隊をなす。東京驛の襲撃もさてこそと思はれた。横濱に來る前に博士はお腹は十分はッてゐると云ッてゐたが無理に夕食の爲めに食堂に御案内した。食堂にいッたら博士はいつもの通りに召し上つた。但し、博士は此頃は少食をしてゐる。歐洲に饑餓の國あるのに大食するのは犯罪だと常に云はれるが、主として胃を大切にする努めである。

横濱から東京までの間、博士の免れ得ざる義務として新聞記者との會話が濟んだ。私は博士から旅行及日本の印象をきいて通譯する。博士はいつも親切にすべての質問を待つて居られる。

奥さんはいつもかう云つてゐられる『私は只の女、それでアインシュタインと結婚したのは私の偶然の運命であるから決してえらい理由はない。』と。であるから記者諸君の求めに應じて奥さんをお連れして來たら、奥さんはどし／＼博士の印象をお話しし出す。私は『一寸待つて下さい、奥さん、あなたの御感想を』と云つたら、奥さんは『私に？　私に何で特別の感想がありませう。』と云つて笑はれた。記者諸君も其自然さを稱贊する意味に於て盛んに笑はれた。

東　京　驛

東京驛ではつぶされる思ひをした。奥さんは眼がお近いのでおど／＼してゐられた。エレベーターに押し込まれて東京ホテルの一室に流れ出た時は、博士のネクタイも奥さんの着物も右や左にねぢけてゐた。

花たば、花輪、萬歳、えらい人々、群集。――そのさわぎがすんでやつと自動車の中の人となつた時、私は博士の眞の喜びを見た。博士の顔は輝いてゐた。

自動車は凹凸のはげしい東京の道路を走り出したので博士はバネでピョン／＼飛び上る。飛び上りながら例の大切なパイプを左の手にして大きな聲で喜んで話してゐた。話すよりもどなつてゐた。

『私の生涯にまだこんなことはありませんでしたよ。米國に行つた時も騷ぎでしたが、とてもこんな赤誠はありませんでしたよ。これは日本人が科學を尊ぶ爲めでせう。あゝ愉快だ、心からうれしい。私が相對性理論を考へた時には今日のやうなことがあらうとは思ひもよりませんでした。不思議です』と博士は自分を世界がどんなに尊んで大切にしてゐるかを少しも知らないやうな態度で喜んでゐられた。

帝國ホテルについた。博士は建築に驚かれなかつた。それよりも吾々の選んでおいた室が餘りに贅澤すぎる、是非もつとよくない室に移りたいと云はれてゐた。

花が持ち込まれた時は奥さんの眼には涙があつた。博士の心は喜びにふるへてゐた。

日本に於けるプログラム

博士第一回の講演は今日(十一月十九日)午後一時半から慶應大學で開かれた。石原博士の通譯で一時半から四時半まで打續き一時休み、又五時半から開かれて七時半に終つた。世界一の學者の説を聽衆は感激を以て熱心にきいてゐた。

東京では廿四日に青年會館で公會講演、其他二十五日より六日間帝大で專門學者のみに對して特別講演をなし。名古屋京都、大阪、神戸、仙臺、福岡の各市にて一回づつ試みて博士はジャバ、パレスチナ、スペインを經て伯林に歸られる豫定である。

日本では、日光、奈良、箱根、京都等を見物させてあげる積りである。其他お芝居、日本音樂、日本料理、其他日本を知り日本を味ふ爲めに必要なるすべてのものに御案内したいと思つてゐる。(十一月十九日記)

アインシタイン夫妻に會つた時の思出

室伏高信

アインシタインのやうな大學者、誰れかの言葉でいふと五百年に一人しかないと云ふほどの素晴らしい學者が日本に來ようとは誰れしも想像しえられなかつたところと思ひます。實際アインシタインは今日の科學の基礎に革命的な貢献をした人として、世界各國の政府や大學やらからしつきりなしに講演に招かれてゐるのですが、勿論そのごく僅かの一部分の希望を容れてゐるだけであるのです。で日本のやうな遠方のそして西洋人から見ると尚ほ文明の程度の低いとされてゐる此日本に彼の様な世界的な、歴史的な大學者を招くことができやうとは一寸思はれないのです。それが去年の九月には、この大學者は、日本のそれも政府でもない大學でもない、一雜誌社――改造社――からちやんと招かれてゐたのです。去年の九月二十七日附の手紙で彼は既に改造社からの招待に承諾をしてゐたのです。今まで世界の各國から日本にいろ〳〵の人がきました。しかしアインシタイン教授の來朝ほど文化的に意義の深くもあり、影響の大きくもあるものは一つの例もなかつたでせう。またありえないことでもありませう。

私がアインシタインに會つたのは去年の秋でした。私は去年一年を世界旅行に費しました。そして夏から秋へかけて伯林に滯在してゐました。アインシタインに會つたのはこの時のことでした。最後に會つてから分れる時に、アインシタインとその夫人とは私と堅く握手をしながら、來年の秋は日本で會ひませうと云ひました。その日が來ました。そして日本の凡ての人がこの大學者を迎へることのできる大きな喜びの日がきたのです。

アインシタインは日本をどう考へてゐるでせう。彼は政治のことにも立派な知識をもつてゐます。で日本に政治上にいろ〳〵專制や惡政の行はれてゐることは知らないではゐないのです。しかしそれにもかゝはらず、彼は日本を美しい詩の國として讃美してゐるのです。日本だけではない。一帶に東洋の文明と風物とに深い〳〵憬れをもつてゐるのです。日本への途中に、彼の眼は先づエヂプトに殘されてゐる素朴な文明や昔のまゝの藝術品を見て大きな喜びを感じたことでせう。セイロン島で裸足裸體の印度人、壁畫、菩提樹、椰子の樹なぞを見てまたどんなにか彼の詩思を滿たしたことでせう。

アインシタインは實に一個の詩人です。

無論アインシタインが今日世界的の大學者として知られるやうになつたのは彼の相對性理論です。それは想像の世界でなくて經驗的證明の世界でせう。それは詩ではなくて數學の式でせう。私たちのやうに全く違つた專門の方面に沒頭してゐるものには容易に彼の理論に近づけないことも事實です。無論大體のことは誰れにだつて分ります。特にアインシタイン自身の說明は一番に分りやすいのです。彼は世界の各地でこれまでに幾度か講演をやつてゐます。それが非常に分りがいゝと云ふ評判です。アインシタイン自身もまたある時私に向つて「私の講演は非常に分り易いと云ふ評判だ」と云つてをりました。アインシタイン教授を迎へて、彼の口から彼の相對性理論の講演を聽くものは、無論殆んど誰れもが彼の說の大體だけを摑むことができるでせう。また相對性理論そのものが分らないにしても、彼の深い學問と、彼の美しい言葉とをとほして、人々はどんなにか宇宙の玄妙なのに醉はされることでせう。彼が昨年ロンドンで五千人の人の前で一時間ばかりの講演をした時に、ロンドンのある新聞は、アインシタインは、實に世界一の講演上手だと云つて稱讚してをりました。

アインシタインは實に一個の天成の詩人です。詩を書かない詩人です。彼の一切が詩のやうに見えてゐます。彼の美しい額、彼の優しい口元、彼の子供らしい光りの眼、この生れながらの詩人からどうして相對性理論のやうな六かしい理論が生れるであらうかと、誰れしも不思議に思はないではゐられないのです。しかしその不思議なことが實は不思議ではないのです。ニュウトンが、子供の時に林檎の落ちるのを見て驚きを感じたやうに、アインシタインは、五歲の時に父から羅針盤を見せられて非常な驚異を感じたと云ふことであるのです。この驚きの心からニュウトンの引力說は生れ、アインシタインの相對性理論が生れたのです。アインシタインはこの五つの時の驚きの心を今もなほ同じやうにもちつゞけてゐます。まあ！ 彼はよくかうした感嘆詞を使ひます。まあ、素晴らしい！ まあ美しい！ 彼はよくかうした言葉を使ひます。そしてそれが如何にも自然に見えるのです。如何にも驚いてゐるやうに見えるのです。その對象が、普通の人の眼には、どんなに平凡なことであらうとも、彼が驚きを感じてゐる時には、凡ての對象が美と眞理とに滿ちてゐるのです。異常なる感覺、異常なる直觀の力は、瓦石のうちにも美を、平凡なもののうちにも眞理を見ることができるのです。美と眞理とは彼の前に與へられた神であるのです。この神に仕へることが彼の使命であるのです。彼は一個の科學者である。この世界が生み出した至高の科學者の一人である。しかし彼は決して單なる科學者ではない。彼は科學の世界が決して萬能の世界であると思つてゐるやうな科學者であるのではないのです。彼はガリレオやマツハの科學よりもドストエフスキーやストリンドベルヒの藝術により、多くの喜びを感じてゐる科學者であるのです。經驗的證明の世界においてよりは、直觀的創造の世界においてより深き眞理の道を見拔いてゐ

る科學者であるのです。科學的證明の至高能力と直觀的創造の力の多量とが彼の人格的統一を築きあげてゐたのです。相對性理論もまた彼のこの人格的統一の產物であるにほかならないことを思ひます。

　創造的才能の人、詩人的想像の人としての彼は、彼の容貌によつても知られるとほり、全く小兒らしい無邪氣さに滿ちてゐます。この子供らしさは、アインシタインをして純眞なる家庭生活の享樂者にもちきたさなくては止まないのです。彼の家庭生活は實に羨やましいほどに喜びと輝きとに滿たされてゐます。彼は決して贅澤な生活をしてゐるのではない。しかしその一つの家具、一つの机、一つの椅子も、彼の家にある限り一個の藝術品のやうに見えてゐます。壁にかけてある畫、素朴な燒物、その色彩、その形、その調和、みな一個の藝術品であるのです。あらゆるものが彼の人格を反映してゐるやうな、藝術的諧調を示してゐるのです。この諧調の美のうちに、アインシタインとその家族とは、このうへもない幸福な日を送つてゐます。アインシタインの書齋の机のうへには、天體觀測器が置かれてゐます。それと並んで彼の愛孃の寫眞が置いてあります。彼は机に向ふたびに、數學の式を並べながらも、尚ほその兒へのしたゝるやうな愛を想はずにはゐられないのです。子供とともにあること、子供とともに戯れてゐること、彼にとつてそれほど樂しい時はないと云ふことです。彼は一日のうちの可成りの時間を、この子供愛のために割かなくてはゐられないのです。彼の心が子供の心であり、子供の心が彼の心であるのです。こゝに彼の思想の世界が成りたつとともに、こゝに彼の家庭生活の中心があるのです。愛！　彼の心の海にあふれつゝある愛は凡てのものを美化しなくては止まないのです。憎しみの心は彼の人格の何れにも、そして彼にかゝはる何れのところにも見えないやうに思はれるのです。凡ての憎しみも彼の前には愛の情熱によつてとろかされるかに見えるのです。六尺ゆたかの彼の身體は如何にもゆつたりとして、猶太人でありながら猶太人らしい何ものも殘されてはゐない。近代人でありながら近代人的なせかく／＼しさは彼の態度の何れにも見出すことはできない。愛の暖かい抱擁のうちに、常に眞理と美とを見詰めてゐる一個の人格――こゝにアインシタインの凡てがあると思ひます。否、彼と彼の家庭とは切り離すことはできないのです。彼と彼の家庭生活とを別々に想像して見ることさへもできないのです。世界人である彼、世界人として國境を超てゐる彼、世界人として平和人として立つてゐる彼は、また一個の家庭人である。純眞なる家庭人である。私は彼のことを心に想ふたびに、相對性理論の彼としてではなしに、家庭人としての彼を思ひます。机に倚りながら、物靜かに考へ、そして物やさしく語る彼を思ひます。

　アインシタイン夫人はルイゼ・アインシタインと云ひます。アインシタインにとつては二度目の夫人です、最初の夫人は彼の學友でした。同じやうに物理學を學んでゐる一人の學者でした。ルイゼ夫人はまた一個の學者です。しかし彼女は專

門の學者と云ふのではなくて高等の教養ある女と云ふに過ぎません。それだけに彼女は彼女として社會の表面に立つてゐるのではない。彼女はアインシタイン夫人として、家庭生活のうちに彼女の生命と職分とをもつてゐます。そして彼女の家庭の溫室のうちからアインシタインのやうな大學者を出したことを最大の誇りとしつゝある家庭生活の彼女です。彼女は非常な良夫思ひです。彼等は子供の時から親しみある親族でもあり、友達でもありました。今日でもまた親しい友でもあり、夫婦でもあるのです。アインシタインが日本へ來られることに決心した時に、彼女には大きな惱みが起つたのです。假令、二三ケ月にしろ、その良夫と別々に住んでゐることは彼女には堪へられないことであるのです。しかしまた日本へその良夫とともに來るためには、彼女はその最愛の子供と別れなければならないのです。アルバアト――ルイゼ夫人は彼女の良夫をアルバアトと呼んでゐます。――を一人で日本のやうな遠い國へやることがどうしてできませう！そこは氣候も違ふでせう。食物も違ふでせう。西洋式な食物がありますか？　西洋式なホテルが東京にはありますか？　彼女はかう云つて私に語つたのです。しかしまた私が日本へ行つたら子供のことはどうなる？　どうして弱々しい子供を置き殘して私たちだけが遠い國に行くことが出來ませう？　彼女はまたかう云つて彼女の胸を傷めてゐたのです。良夫とともに世界旅行にあるべきか、子供等とともに家庭に殘されて居るべきか？　彼女にはこれほど解きがたい謎はなかつたのです。これほど惱ましい矛盾はなかつたのです。

　私と最後に會つて別れる時に、私もまた來年日本であなたに會へるかも知れないと云うた彼女は、彼女の良夫とともにいよ〳〵日本へ來ると云ふことです。私は一年あまり前のことを思ひ出し、何とも云はれない懷かしみを感んじます。伯林の夏は東京なぞのやうに暑さに苦しむ夏ではなかつた。大抵の人は眞夏の盛りでも相着の服を着て、冬帽子を被つて往來を歩るいてゐた。リンデの樹の黑い影を地上に投げてゐるウンタア・デン・リンデンの大路、靜寂なチイア・ガアテンの森の繁み、それからシエーネベルクのアインシタイン邸の附近の町の平和さ。私の世界旅行を通じて伯林ほど深い印象を與へてくれたものはないのです。

　私が伯林を立つた十月の半ばでした。その時アインシタインは伊太利の旅に出てゐました。伯林の秋は寒かつた。十月の半ばだと云ふのに伯林はもう冬枯れの寒さでした。クルヒユルステンダムの往來に樹の葉がもうばら〳〵と落ちてゐました。私は寂しくて堪らなかつた。私は世界旅行の寂しさをしみじみと味はなくてはゐられなかつた。しかしその寂しみは私をして伯林を去らしめようと誘ふ寂しさではなかつた。私は伯林のこの寂しさがまた何とも云へない樂しさであつた。その樂しさの回想のうちに、私にとつては、またアインシタインと、そしてカウツキー夫妻の家根裏生活の素朴さが思ひ出されます。

繪入通俗相對性原理

——「女性改造」の爲に——

理學士　竹内時男

アインシュタインの相對性原理は、私達が嘗て造り上げました處の絕對時間の概念絕對空間の概念を訂正し、時空の新定義を下し、新しい力學、新しい物理學を建設した偉大なる原理で御座います。此の原理は物理學的認識の根本義に觸れ哲學と重要なる關係を有するものであります。此の原理の發見は、彼のコペルニクスが地動說を提唱して一世を驚倒した以上に、現世紀に於いて地軸をも搖がさん許に驚異を以て迎へられたのであります。此の新理論の創建者アルベルト・アインシュタインは今や地球上に於ける第一人者としての名聲を博して居ります。到る處の食卓の談話にもアインシュタインやリラチヴィチィ（相對性原理）の名を聞かない事は無いのであります。何事も常識的なイギリスでは少し難しい議論をする人を『彼の人はアインシュタインに入り込んだ。』と申すさうです。何しろ大人氣のある學者である。彼が嘗てアメリカへ渡つた時五千五百の聽講者を集めたと申します。近く紅葉榮ゆる我が日本に其の筇を寄せんとするのであります此の時に當り此の原理に就いて一言を述ぶる事を得ますのは私の大いに光榮とする處であります。

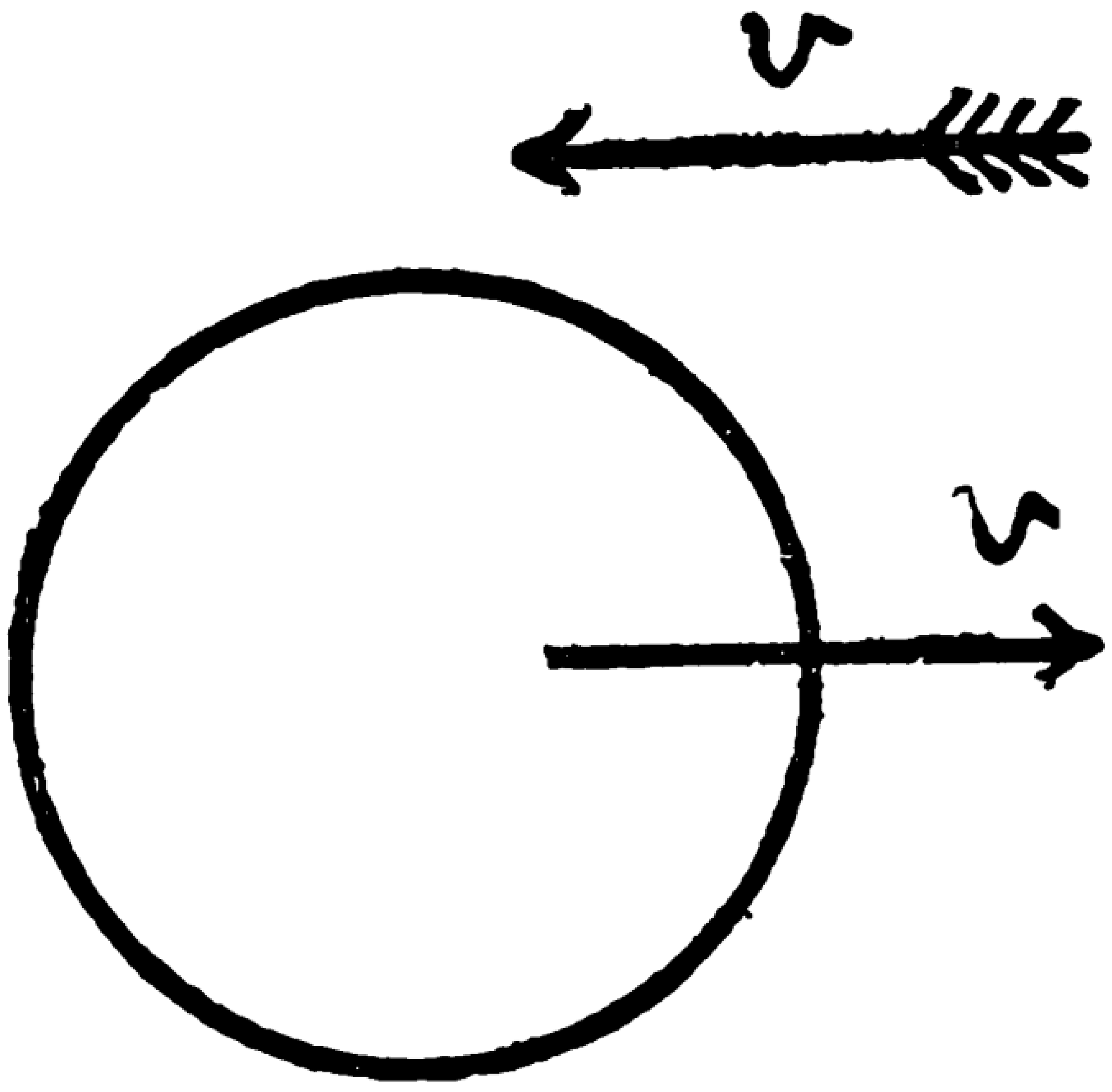
私達は是迄空間は絕對的に儼存し、時間は永遠の過去の闇から無窮の未來の闇へと流れる流れと考へて居ました。然るに此の相對性理論は絕對の時空觀を否定し、時空の相對的なる事を敎へて吳れるのであります。

アインシュタインの相對性原理の發見を促した直接の動機はエーテル存否の問題に關します。

御存知のやうに光はエーテルと名附ける媒質中の電磁波動であると考へられました。エーテルは眼に視えず手に觸られない微粒で、而も宇宙全體に擴つて居ると考へられました。其は、地球其の他の天體が空間を運動します時にエーテルに

依つて少しの抵抗をも感じないからであります。又非常に遠方に在る星からの光が地上へも達するからであります。此のエーテルは宇宙間に絶對に固定しなければなりません。夫々の天體と共にエーテルが動くとすれば說明の附かない現象があるのであります。エーテルが宇宙間に固定し、地球が其の中を運動しますと地球上の觀察者に對してはエーテルの河が流れて居る事に成ります。第一圖を御覽なさい地球がエーテルに對して左から右へ v の速さで動けば、地球上の觀察者に對してはエーテルが右から左へ流れる譯です。此のエーテル河の速さを地球上での實驗で決定する事が出來ないか。此の目的でアメリカのマイケルソンと云ふ人が實驗に取り掛かりました。此の實驗の原理は、次のありふれた例で御了解になられませう。

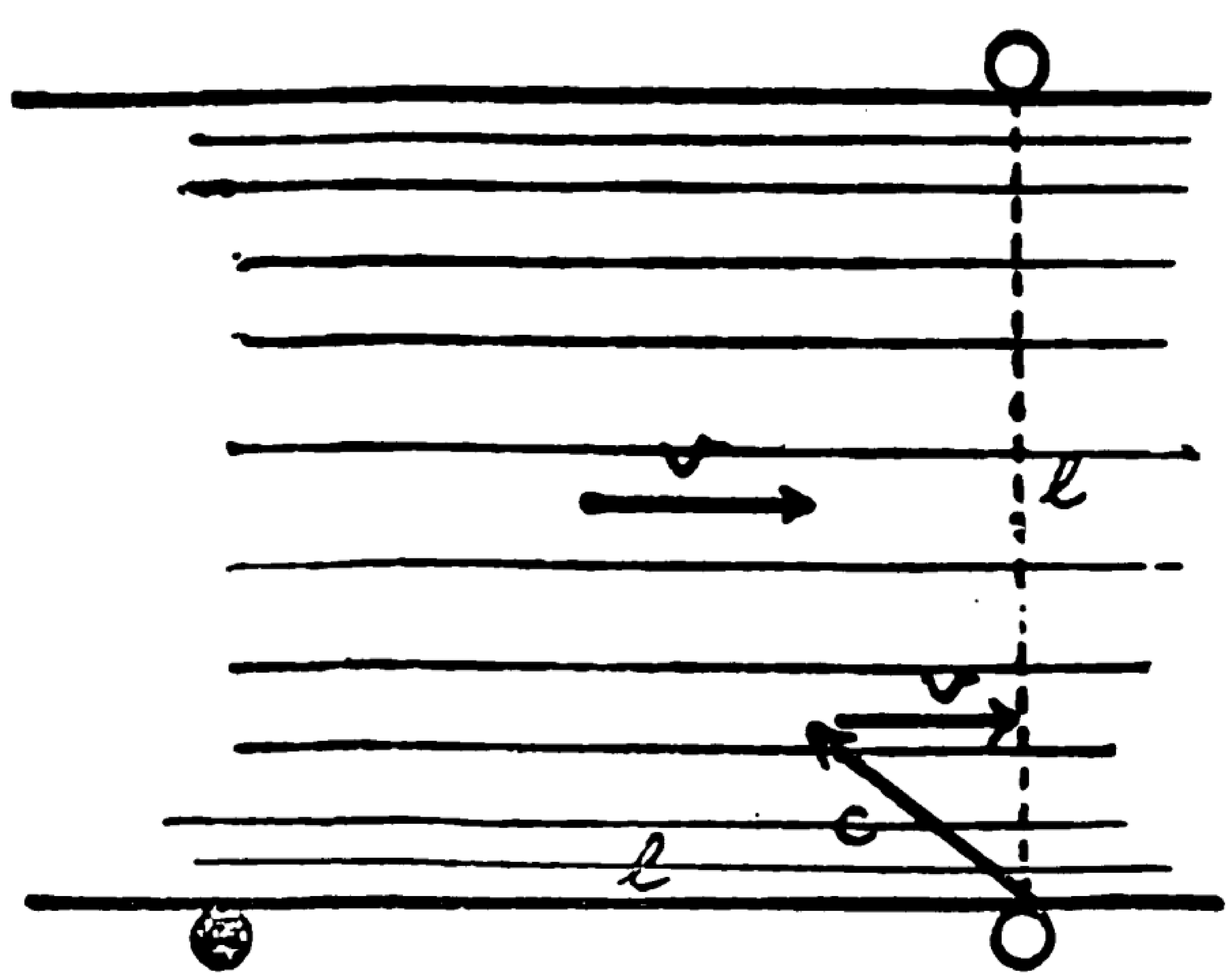
第一圖



第二圖を御覽なさい。此處に河が左から右へ v の速さで流れて居ます。河の一岸の一點から舟を漕ぎまして對岸の眞向

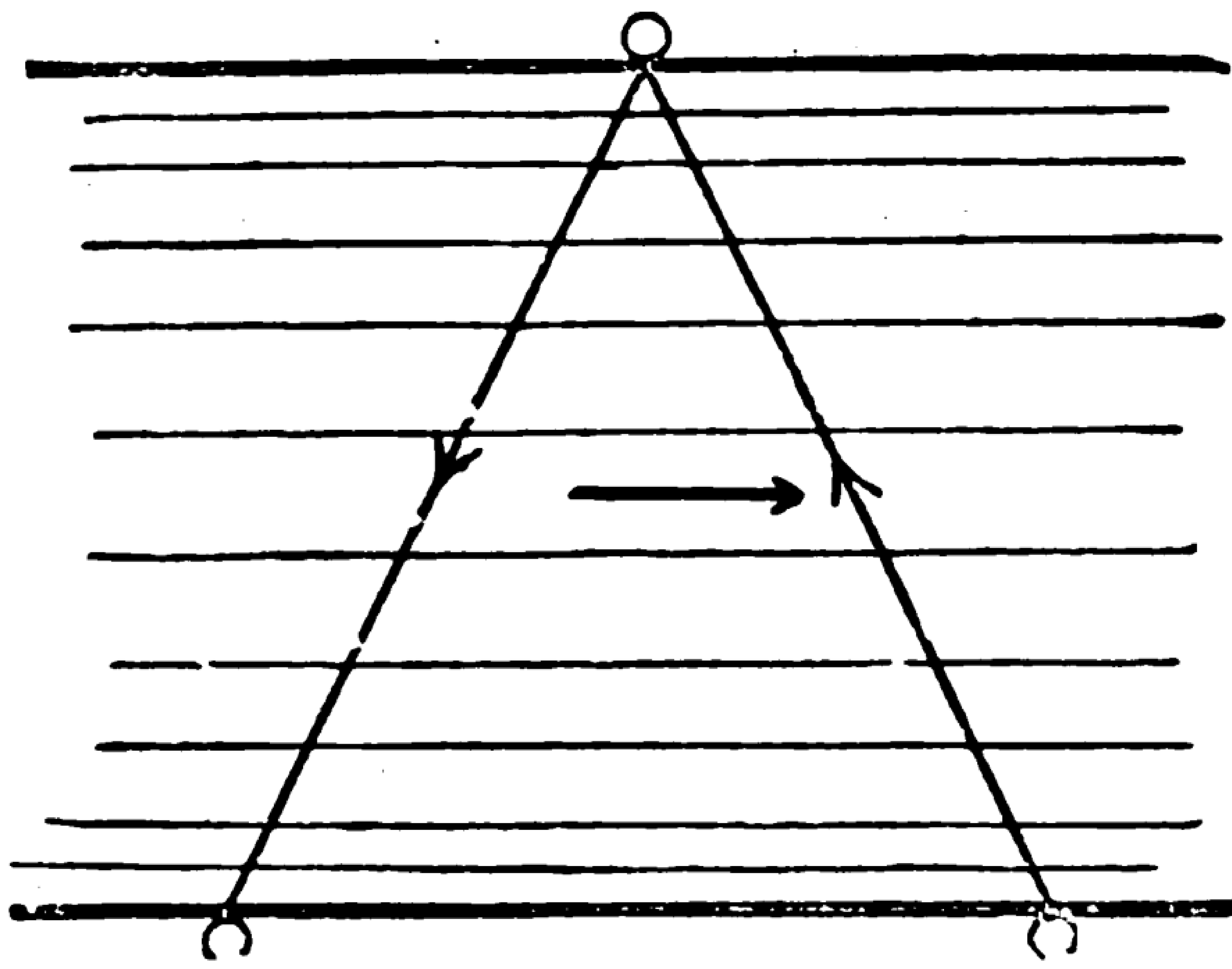
ふの點に參ります。此の場合舟を漕ぐ力は靜かな池の上を漕ぐのと同じとします。即ち水に對して c の速さで漕ぐとします。岸に靜止する私達に對しては此の舟は $\sqrt{c^2-v^2}$ の速さで川を横ぎつて進みます。河幅を l とします。對岸の目標に到着すると直ぐ舟を返して出發點へ戻します。此の時も先と同じ力で漕ぎます。舟は $\sqrt{c^2-v^2}$ の速さで河を横ぎつて進みます。此の往復に要する時間がいくら〱と直ぐ計算出來ます。今度河を溯つて舟を河幅 l だけ上流に進めます。此の時も先と同じ力で漕ぎます。岸に靜止して居る私達に對しては此の舟の速さは $c-v$ であります。目的點（黒點の位置）に達すると直ぐ舟を返し先と同じ力で復舟を漕ぎます。此の場合、舟の速さは私達には $c+v$ であります。此の往復

第二圖



に要する時間も直ぐ計算出來ます。其の結果後の往復時間は前者のよりも長く成ります。即ち後の場合流れに溯つて速さを減ぜられる損の方が流れに沿うて下つて速さを增される益よりも大なのです。後の場合、出發點より先づ河幅だけ下流に下り、然る後流れを溯つて出發點に歸つて來ても往復時間は同じ事です。

　此の兩往復時間に差ある事は、私達が水に靜止して居ると考へ、此の見地から判斷しますと極めて明瞭です。舟は水に對して一定の速さｃで漕ぐのです。第一の往復は岸に固定して居る人が見れば同一直線上を往來するやうですが、水に固定し水と共に流れる人から見れば、對岸の點で出會ふ二つの折れた等しい長さの直線の上を速さｃで運動する事に成ります。第三圖を御覽なさい。又此の視點からは、第二の往復の際に通過する距離は此の兩折線の長さの和よりも大に成ります。水に固定して居る人から見ると舟の速さはいつもｃで、後の場合には舟の動く距離が大なのですから、往復時間が長く成るのです。

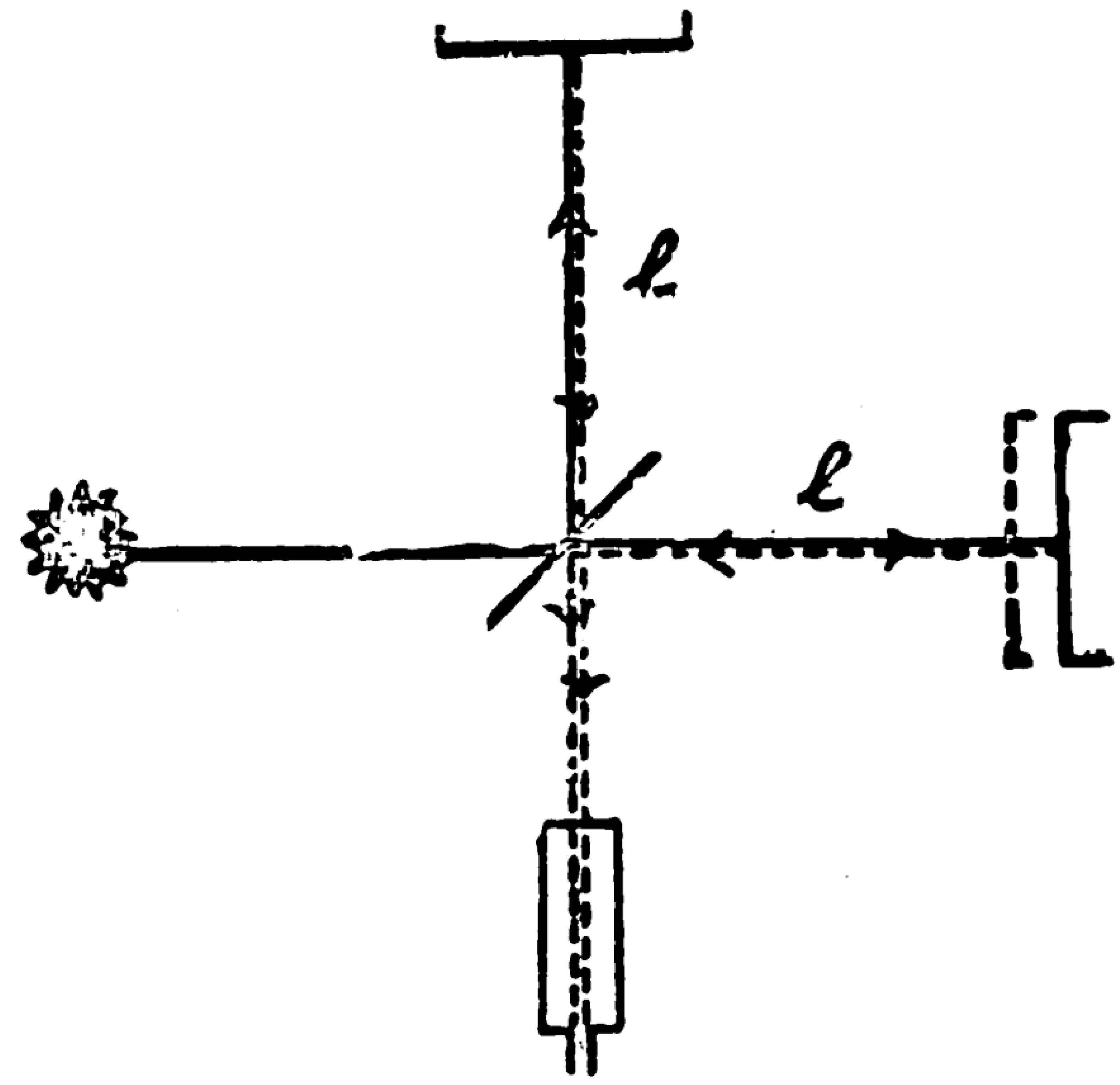


第三圖

　マイケルソンは此の考へを應用して水の河ではなく、エーテルの河に就いて實驗を行はうとしました。今の場合舟を漕ぐ事が出來ませんから、一定の力で漕ぐ舟の代りに、エーテルに對していつも一定の速さで漕ぐ（進む）性質のある光を用ゐました。光はエーテル内の波動であるが故に發光體がエーテルの中をどんな速さで動かうが、いつも波を起された瞬時の點を中心にして球形に擴がります。光の速さはエーテルに對して一秒に付き卅萬粁であります。

　實驗裝置は光源と、地球の軌道（太陽の周の）運動方向に四五度の傾きをなした二面の竝行な硝子板と、硝子板の中心から軌道運動方向及び之に垂直な方向に等しい距離だけの處に平面鏡とを置いたものです。第四圖を御覽なさい。二つの平面鏡は夫々軌道運動方向に垂直及び竝行に置いてあります全裝置は地球上に固定せられてあります。光源から軌道運動方向に出た光は一部硝子板の第一面より直ちに反射して軌道運動方向に垂直に進み平面鏡に反射して硝子板の處へ歸り、

他の殘部は硝子板を通過し軌道運動方向に進み平面鏡に反射して硝子板の處へ歸ります。前者は硝子板を通過し、後者は硝子板の第二面より反射して共に望遠鏡の中に入ります。エーテルが恒星天に對して靜止して居るとしますと、河の例から明かに兩光線が硝子板の處へ到着するには時刻の差がある筈です。然るに實驗の結果意外にも兩光線は同時に歸つて來たのです。勿論光の速さは速いから時刻の差を決定するには普通の時計では駄目です。光の干涉と云ふ現象を應用したのです。若し到着時刻に差があるならば、其よりエーテルに對する地球の運動の速さが解る筈だつたのです。實驗の結果はエーテルに對する地球の運動を知る事が出來ないと云ふ事に成りました。



第四圖

先にはエーテルは宇宙間に絶對に固定しなければならぬと云ふ結果を得、今はエーテルと天體との相對運動が無いと云ふ事に成りました。此の結果は實驗者マイケルソン其自身も此の實驗を諸方から興味を以て監視して居る人達に對しても非常な驚きを齎したのです。此の實驗は大規模の實驗でアメリカのやうな金に飽く國でなければ出來ない實驗です。日本のやうな貧乏國では到底も難しいのです。マイケルソンは後更にモーレーと共同して行ひ、又ミラーも行ひました。實驗の結果は依然として同じかつたのです。

當時世界一の物理學者と謂はれたオランダのローレンツは奇妙な假説を出して此の結果を説明しようとしました。其は物體がエーテルに對して動くとエーテルに對して物體が運動方向に於いてのみ縮まると云ふのです。そして長さの縮まる割合はエーテルに對する物體の速さのみに依り、物體の彈性的性質には依らないのです。木でも金でも速さへ同じければ同じ割合に縮むのです。地球がマイケルソンの裝置を載せてエーテルの中を左右に動きますと、左右の方向には地球も裝置もエーテルに對して同じ割合に長さが縮むと云ふのです但し其に垂直な方向(上下の方向)では縮まらぬと云ふのです硝子板の中心と右の平面鏡との距離がエーテルに對して縮み

其の距離がエーテルに固定して居る者から見て、丁度硝子板の中心と上の平面鏡との距離に等しく成ると云ふのです。第四圖を御覽なさい。それで同時に硝子板を出發した兩光線はエーテルに對して等しい速さで進みますから、同時に硝子板の處へ歸つて來ると云ふのです。地球上の觀測者は此の短縮が解りません。左右の距離も上下の距離も等しいと見ます。何故かならば、地球上の凡ゆる物體が左右の方向には同じ割合に縮み、尺度迄も同樣に縮みますから、縮んだ尺度で縮んだ物體の長さを測る事に成り、結局地球上からは長さの短縮が解らないのです。それでは眼で見て此の短縮が解らないかと云ふと、眼の網膜迄も其の方向に縮むのです。やつぱり短縮が見えません。地球上から觀測したのでは彼の兩鏡の硝子板からの距離が等しく現れるのです。又彼の實驗裝置の臺材を取り換へて實驗しましたが、ローレンツの云ふやうな、短縮は全く彈性的なものではなかつたのです。

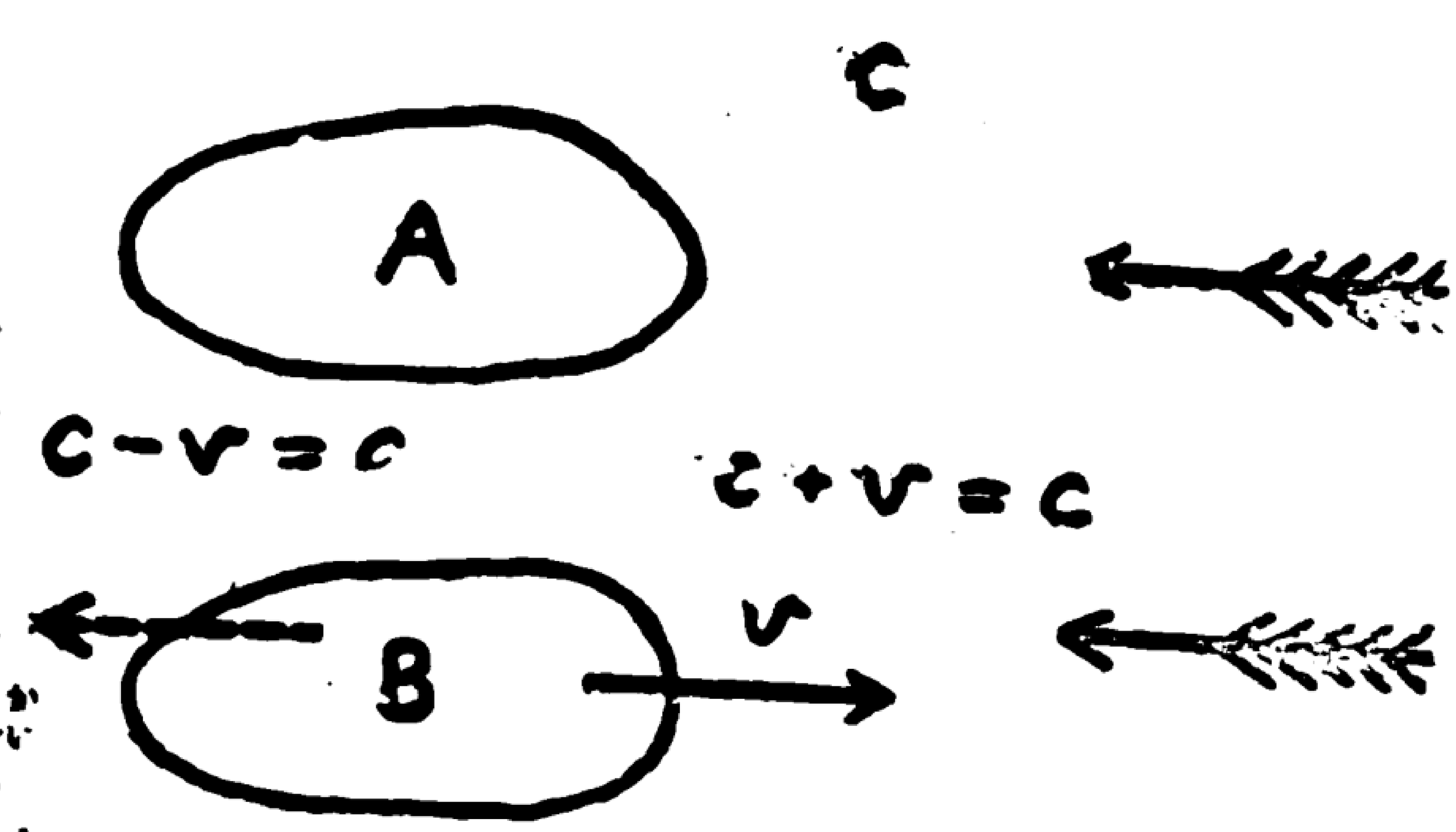
ローレンツの短縮說は然し他の現象を說明するに困難を感じます。此のローレンツの議論に於いてはエーテルはもう運動の標準體としてのみ僅かに餘命を保つて居て、是迄のやうに之に物質的性質などは與へられては居ませんでしたが、未た此の議論も一時の假說たるを免れませんでした。舊い物理學ははしなくも此處に破綻を暴露したのです。誰か天才が出て來て、此の場合を拾收する事を渴望されて居ました。

一九〇五年でした。當時スウイスのベルンの特許局の技師をやつて居た廿七才のアルベルト・アインシュタインが新しい時空の概念を導來しまして新しい世界を私達の眼の前に展開して呉れました。其の論文の題目は「運動せる物體の電氣力學に就いて」と云ふのでした。其の中に相對性原理と云ふ辭が用ゐられて居ります。實に相對性理論の第一の論文です。

アインシュタインは先づほんとうにエーテルを否定しました。エーテルの存在を無用としました。然らば光は如何にして眞空中を傳はるかと尋ねますと、彼は斯う答へます。眞空其自身が光を傳へる性質を持つた物理學的空間であると。(但し光はやはり波動ではあるのですが)眞空は幾何學で云ふやうな抽象的な無内容な空間ではないと云ふのです。私達はどうも先入主があつてさう考へ難いのですが、先づ空間は斯樣な性質の賦與せられたものとしなければならぬのです。さうしますと更に亦疑問が起ります。それでは光の速さとは如何して定まるか。エーテルが在つてこそ、其に對して一秒間に卅萬粁と云ふ速さを持つと云ふ事が出來るのに、速さの規準に成るエーテルを抹殺すれば、光の速さは何に對する速さかと云ふ問ひが起ります。アインシュタインは之に對して單に

斯う答へます。其は觀測者に對する速さであると。光の速さは斯くの如く新しく定義せられたのです。

第五圖



第五圖を御覽なさいAの世界に對してBの世界が左から右へｖの速さで動いて居ます。Aの世界の觀測者が右から來る光の速さをｃとするならば、Bの世界の觀測者は、私達の是迄の考へからは、此の光の速さｃ＋ｖなりと申すでせう。丁度地上に立つて居る人が汽車の速さをｖなりと測ります時、汽車の進む方向と逆に自轉車に乘つてｖの速さで進む人は汽車の速さは其よりも速く、ｃ＋ｖなりと測る筈です。然るにアインシュタインは光の場合に限つて（汽車の場合ではない）光の速さはBの世界に對してもｃなりと申すのです。又Bの世界がAの世界に對して右から左へｖの速さで動きますと彼の光の速さは、私達の是迄の考へからはｃ－ｖとするでせう。然しアインシュタインはやはりｃなりと申すのです。卽ち光の速さは觀測者の運動狀態に依らぬのです。其はエーテルを抹殺し、光の速さを觀測者に對する速さとしたからです。A及びBの兩世界は此の際互に對等的の立場に在るからです此の原理を光速度不變の原理と申します。アインシュタインは之を第一の原理的假定としたのです。

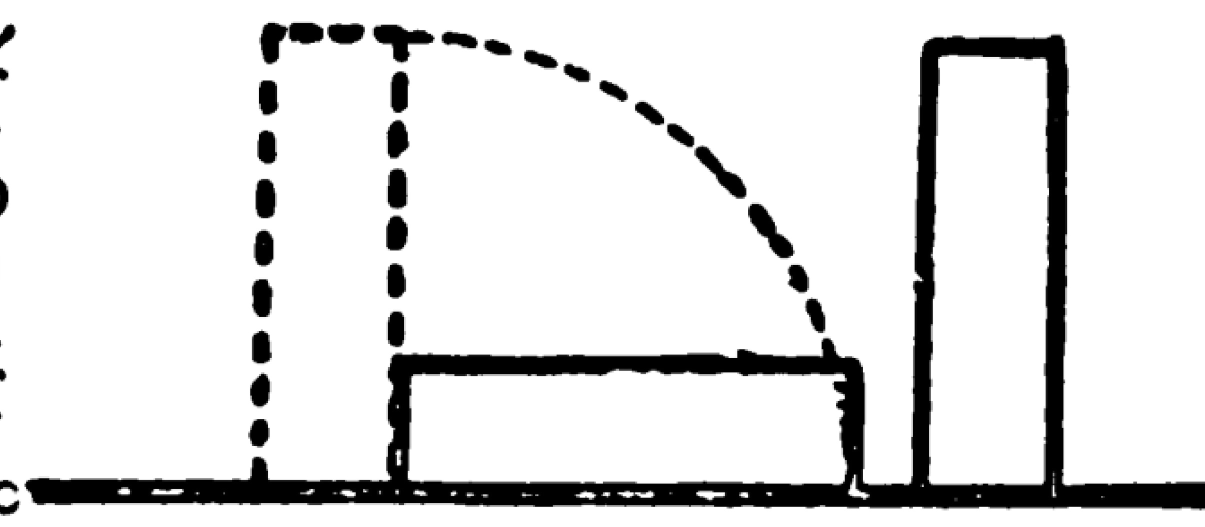
上に申した事から光の進む方向にいくら速く走つても追ひつけない譯です。いくら速く走つても光はいつも自分の前方に在る事に成ります。夢を見て居る時、よく之に似た事件に出會します。此の意味で光の速度は物理學的無限速度なのです。數學的には有限の速度です。どんなに物體に大きな力を加へても之以上の速度を物體に與へる事が出來ないのです。力を加へると物體の速度が次第に增すと同時に物體の質量がだん〳〵大きく成り、決して光の速度以上の速度に成る事は出來ないのです。物體が光の速度で運動するやうに成ると質量が無限に大と成るのです。一斤の砂糖でも非常に速く飛ぶ程質量が何千斤にも何萬斤にも成り、光の速度で飛ぶと無限に大きな斤數と成ります。

光の速度が物理學的無限速度なりとするのは、因果の關係を成立せしめる爲なのです。原因の後に結果が生ず可きもの

で、其が反轉する事は許されぬからです。若し假に或事件が光の速さ以上の速さで進行し得るとしますならば、原因の先に結果を見る事に成りませう。火薬が爆發するのを先に見て、口火を附けるのを後に見ると云ふ事に成ります。其は不都合です。

然し因果關係の無い現象ならば光の速度以上の速さで傳播し得るのです。

第六圖を御覽なさい。此處に机上に一列に木片が竝んで居ります。其の各々の長さが各片間の間隔よりも小なりとします。各片には時計仕掛が装置してありまして夫々の時刻に獨立的に次々が倒れるやうにしてあります。此の場合一つの木片が倒れる事と次の木片が倒れる事とは何等因果的の關係がありませんで今相次いで倒れる時刻の差を非常に小さくしますと、木片の倒れると云ふ事の次第に傳はり行く速さは光の速度以上に成り得るでせう。



第六圖

然し此處に一列の人が竝んで居ます。話が難しいので第一の人が欠伸をします。欠伸が傳染して次の人が欠伸をします。次第〳〵に欠伸が傳つて行きます。此の場合欠伸の傳はり行く速さは光の速度以上には成り得ないのです。此は先の木片の例と一寸似ては居ますが、然し根本は全く違つて居ます。其は第一の人が欠伸すると己は退屈になつたと云ふ事を隣の人に示す事に成ります。隣の人は其を見て己も退屈に成つたと感じ、其の爲に欠伸が出て來るのです。第一の人が欠伸したのが原因と成つて第二の人が欠伸が出るのです。

又非常に長い棒の一端を持ち之を振りますと他端の速さは光の速度以上に成るやうに思はれますが、棒の分子の凝集力に依つて力が瞬時に他の端へは參りません。從つて此の端は其の瞬時に未だ動き出さぬ譯です。因果關係のある現象の傳る速さは凡べて光速度以下に成るやう凡べての改修を要するのです。

さて話が側路へ入りましたが、之より本論に戻ります。アインシュタインは光速度不變の原理を第一の原理的假定としましたが、更に第二の原理的假定として、自然法則の絕對性を取り入れました。之を狹義の相對性原理と申します。自然法則と云ふものは互ひに如何なる相對運動をして居る二つの世界ＡＢの觀測者に對しても數學的には同一の形式で表されなければならぬ。さう云ふ事を假定したのです。Ａから見ればＡは空間に固定しＢは左より右へｖの速さで動いて居ると

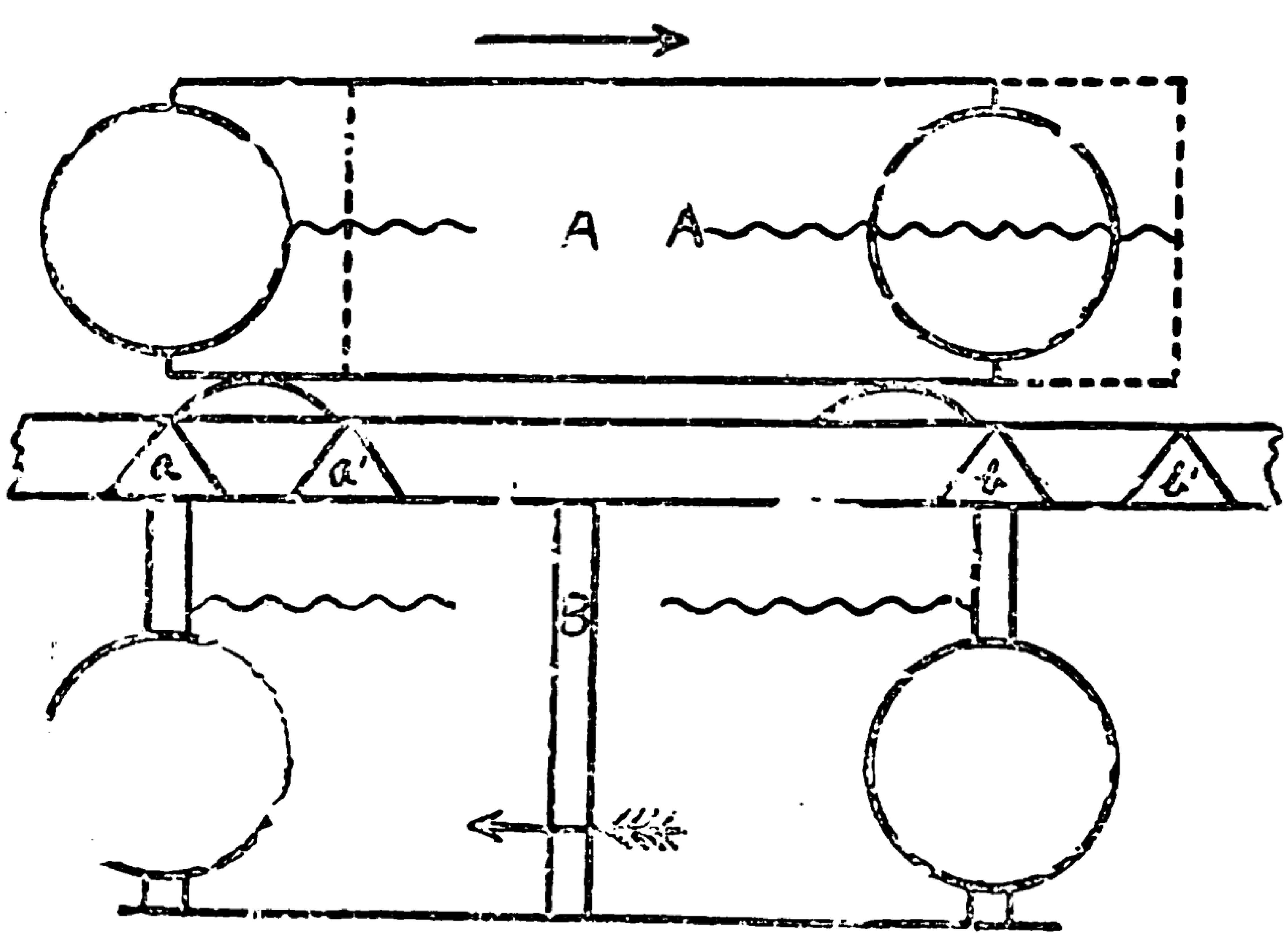
考へますが、Bから見れば己の世界は空間に固定し他が右から左へ動くと考へるでせう。唯々其丈です。(第五圖參照)一の觀測者に對して法則の形が簡單に他の觀測者に對して複雜な形に現れると云ふ事は、自然が第一の世界を偏愛した事に成る。第一の觀測者が第二の觀測者よりも特出的な位置を占める事に成る。其は不自然である。それでどの觀測者も互ひに對等的の立場に在る爲には自然法則は同一の形式を以て二人の觀測者に現れなければならぬと云ふのであります。寔に論理は明白であります。自然法則は本來斯くある可きものでせう。然し是迄の物理學上の法則はさうではなかつたのです。絕對的運動の規準たるエーテルの存在を假定して居たので、エーテルに固定した世界は光や電磁現象に對して特出的な立場に在つたのです。今ではエーテルは抹殺せられましたから光の傳達の法則も同一に成つて來ました。

光源が自分に近づくのも、自分が光源に近づくのも關係は同じいのです。又導體が靜止して磁力線が動かうが、磁力線が靜止して導體が動かうが結果は同じく成つたのです。運動は凡べて相對的と成つたのです。

光速度不變の原理からして絕對同時刻と稱するものは意味を失ひました。一つの世界に於ける同時刻は之に對して運動して居る世界から見ると同時刻ではないのです。

此處に汽車が鐵橋の上を左から右へ走つて居ます。丁度汽車の兩端が二橋柱の眞上に來た時に、汽車の兩端及び二橋柱からして光信號を左右に送ります。光が進みつゝある中に汽車が前進しますから、汽車の中の中央に居る人には、右から

第七圖



來た光が左から來た光よりも早く到着します。第七圖を御覽なさい。圖は汽車の中央に居る人がAの處に來た時に右から

の光を受け取つた時の有樣を示します。然し中央柱Bへは左右からの光が同時に達します。今汽車の窓にはすつかりカーテンが懸つて居るとしますと、汽車の中の人は汽車が動いて居るかどうか少しも解りません。其故右から來た光は時刻的に早く出發したものと考へるでせう。左から來る光は時刻的に遲く出たものと考へるでせう。其は汽車の兩端から自分迄の距離が等しく、而も光の速さは左右に等しいからです。其故地上の人の同時刻は動いて居る汽車内の人の同時刻ではないのです。逆に先の光信號が汽車の中から見て同時刻に發せられたとしますと、中央柱へは左からの信號の方が早く着く譯です。汽車内から見れば橋は右から左へ動いて居るからです。

で先の場合橋に固定して居る人が見て兩橋柱に懸つて居る時計が同時刻を指して居ましても、汽車内の人は圖右の橋柱の時計は進んで居り、圖左の橋柱の時計は遲れて居ると考へるでせう。此の逆も亦成り立ちます。そして汽車の速さが速い程益々時刻の差は大と成ります。（運動の相對性から地上から見た汽車の速さも、車内から見た地の速さも同じです。）

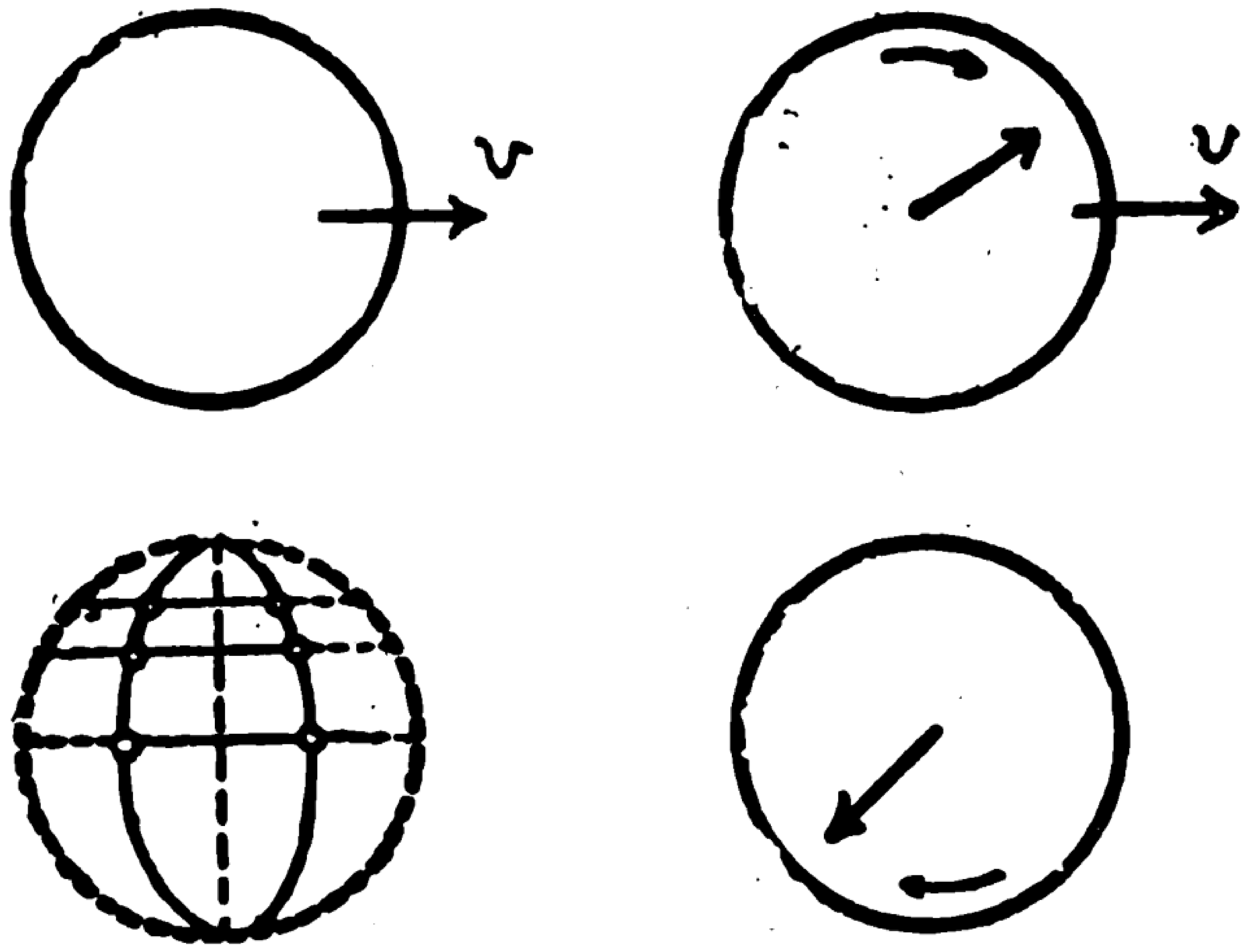
例へば東京と京都とに於て二つの事件が今日の正午に起つたとします。此は地球上に靜止して居る人に對してのみ妥當なのです。地球の上を速く走つて居る急行列車や地球に對して運動して居る星の世界から見ますと、此の兩事件は或時刻の差を置いて起る譯です。地球上の同時刻は之に對して運動して居る他の世界に適用出來ません。又逆に此の世界に於ける同時刻は地球から見て同時刻ではないのです。絶對同時刻と云ふものは無いのです。

話が變りまして、物體の長さを測るには如何すれば宜しいでせうか。物體が地に對して靜止して居ます時は、其の兩端に當る點を地に記し、後に其の二點の距離を測ります。此の場合兩端の位置を同時に記しても或は時刻の差を置いて記しても同じ長さを得ます。然し物體が地に對して動いて居る場合に物體の長さを測るには、兩端の位置を同時に地に記し、後に其の距離を測らなければなりません（第七圖abの如く）。今若し前端に當る點を先に記し後端に當る點を後に記しますと、（例へばbaの如く）、汽車が動きますから、長さが短か過ぎ、後端の點を先に前端の點を後に記しますと（例へばb′aの如く）、長さが長過ぎて出て來ます。其故物體の長さとは其の兩端が同時に存在する點の距離としなければ一義的に成りません。さて先の汽車の例に於いて地上の同時刻は汽車内の同時刻ではないのです。地上から見て汽車の兩端を同時に記す事は、汽車内から見て圖の右に當る端を早く、圖の左に當る端を遲く記す事に思はれます。其故汽車の長さが靜止して居る場合よりは短く成つて地上の人に現れます。即ち物

體が動くと長さが縮まると云ふ事に成ります。物體の運動の速さが速い程物體は運動の方向に益々縮まります。然し運動の方向に垂直な二つの方向（厚さ幅の）に於いては長さは變りありません。此の方向に於いては地上の人が測つた長さも汽車内の人が測つた長さも同じです。

第八圖の左端の圖を御覽なさい。急行車内に固定し、車内の人が球だと思つて居るものを地上から見ますと、汽車の運動方向に短軸を有する回轉楕圓體に見える譯です。運動方向には長さが凡べて同じ割合に縮むのです。汽車内の人が運動方向にlの長さありと思ふ物體は地上の人には$l\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}$の長さしかありません$v$は地に對する汽車の速さで、

第八圖



cは眞空中に於ける光の速さです。vがだん／＼増すに從つて楕圓體は益々扁平に成ります。遂にvがcに等しく成りますと厚さが無く成ります。其故cは速度の最大限である事が譯りませう。汽車内の人は球だと申します。地上の人は楕圓體だと申します。同様に地上の人が球だと思つて居る地上に固定せられたものを、急行車内から見れば楕圓體に見えます。迅く走つて居る飛行機の上から地上の人を見ますと、皆運動の方向に縮んで居る譯です。（然し速さは現在のよりずつと迅く成らなければこんな事は起りませぬ。）此は水掛論です。然し何れの申す事も正しいのです。觀測者の立場に依つて實に球とも楕圓體とも見えるのです。物體には絕對的形狀と云ふものは無いのです。唯々此處に御注意申し度いのは、圓を斜に見ますと楕圓に見える、何も新しい議論を俟たなくてもと仰有る方があるかも知れません。然し此は透視的に見たからなので圓が運動したからさう見えるのではないのです。今の場合實際に長さを測りますとやはり其は圓形をなして居ませう。運動して居るものは實測して短縮した事が譯るのです。

是は物體の形狀や大小の問題でしたが、次には時間の間隔に就いて御話しませう。結果を先づ申し上げますと、或世界に於けるt秒間は之に對して運動して居る世界から考へます

と $\frac{t}{\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}}$ 秒間に成ります。即ち此の兩世界の觀測者は互ひに先方の世界の時計は遲れて居ると判斷せられます。(第八圖右圖參照) v が c に近づくと先方の一秒は此方の無限大時間と成ります。先方の時計の針が全く停止して居ると思はれるのです。

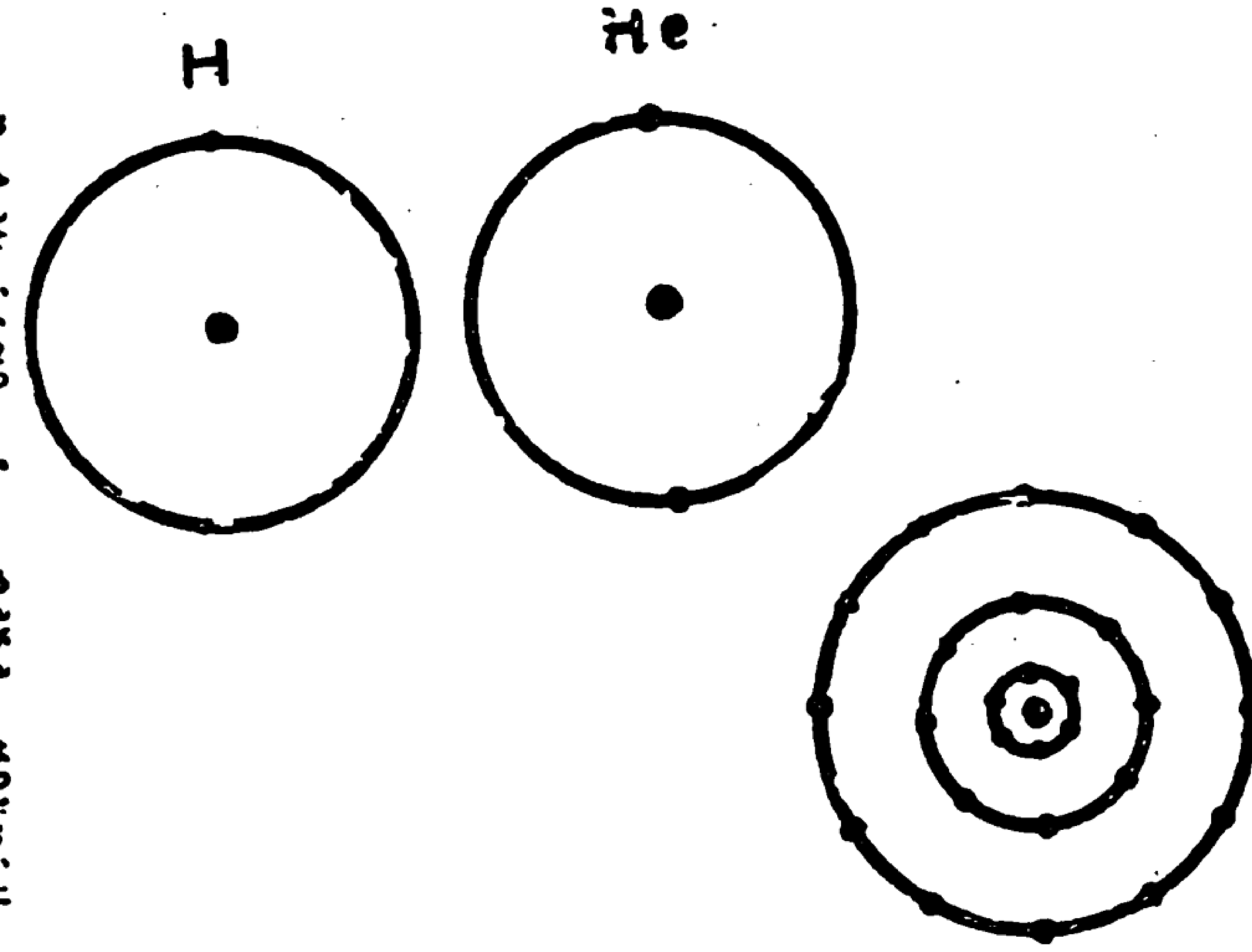
是は一體どうしてさう成るかと申しますと、運動物體の長さがあのやうに短縮したので、時刻が緩く成るとしなければ光の速度が不變に成らぬからです。

次に御話致し度いのは先に一寸申し上げましたやうに質量が速度に依つて變ると云ふ事です。是は相對性原理より質量と勢力とが同じものであると云ふ結論より來るのです。勢力と質量とは同一の宇宙實體で、其の半面を見れば勢力であり他の半面を見れば質量であるのです。結局は一なるものである事を唱へるのです。物體が運動すれば運動の勢力が之に加はり從つて其の質量が大と成るのです。物體に熱(勢力の一態)を加へて溫度を增せば質量はいくらか增大し、冷して溫度を下げれば質量はいくらか減少するのです。太陽も熱を輻射して居ますので次第に質量が減じつゝある譯です。然し計算の結果 9×10^{20} エルグの勢力がやつと一瓦にしか當らないのですから、此の增減は著しくないのです。然し舊來の儘の質量保存の法則は破れたとしなければなりません。昔は勢力保存の法則と質量保存の法則とを對立せしめましたが、今や後者は前者に包含せられたとも謂へます。物理學的世界觀の統一への大いなる歩みであります。實に化學反應の際に起る熱の移動に相應する質量の變化を考へに入れなければ、正確には反應前後の質量は保存せられないのです。ラヂウムからは澤山の熱が出ますから、長年月に亙つて待ちますと、質量の減少が解るに違ひありません。

電子と云ふものは物質を組成する最終の微粒子であります一般に原子は陽核と名附ける正電氣を帶びた中心の周を電子と稱する負電氣を帶びた微粒子が幾卷かの輪に排列し、各輪上を電子が速い速度で運動して居るものであります。水素(H)の原子は第九圖の最左側に示してある通り、電子一箇を含み、ヘリウム(He)原子(圖中)は電子二箇を含みます。原子量が大と成るに從つて電子の數も多く成り、輪の數も多く成ります(圖右)。此等の電子は凡べて同じもので、靜止して居る時水素原子の質量の一千八百分の一の質量を持つて居ります。放射性物質の原子が壞散する時、電子が逸出し、其の速さが非常に大なるのであります。此の場合質量は大いに增す事が實驗上證明せられました。一般に靜止の時 m の

の質量を持て居たものはvの速さで運動すると

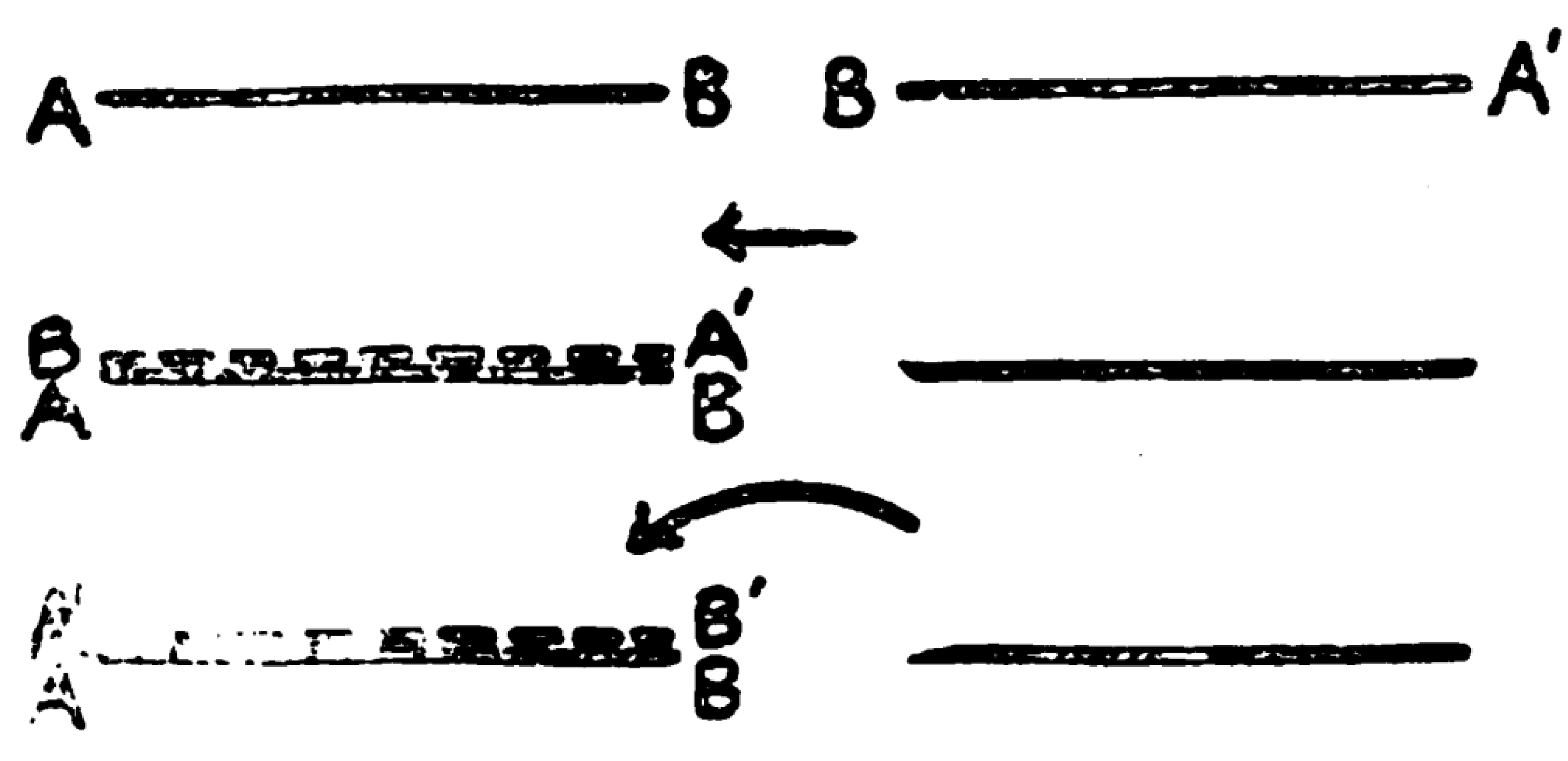
第九圖



$$m=\frac{m_0}{\sqrt{1-\frac{v^2}{c^2}}}$$

の質量を持ちます一九〇八年の秋の事でした。ケルンに開かれた科學者大會の席上に於いてミンコフスキーは時空四次元世界說と云ふ論文を發表致しました。大會には種々な論文が發表せられましたが、此のミンコフスキーの論文程讃嘆の語を受けたものは無かつたと申します。ミンコフスキーは、アインシュタインが嘗てチューリッヒの工科大學で數學と物理學とを學んだ時、其處に數學の教鞭を執つて居たのでした。當時アインシュタインは餘り振はなかつたやうで、少しも彼の名がミンコフスキーの頭に殘つて居なかつたと申す事です。偉大なる天才は學校時代に成績は振はないのが多いやうです。此のミンコフスキーが後年アインシュタインの議論を發展し、遂に此の時空世界說を唱へたのです。此の論文の中に「今日以後時間其自身空間其自身と云ふものは陰影の裡に沒し去り、獨り兩者の結合せるもののみが獨自性を保つ。」と申しました。

第十圖



時間と空間とは現象を論ずる場合に不可離のものである。而して時間と空間とは自然法則を叙述する事に於いて全く同等の役割を演ずると申しました。實際斯う云ふ例を考へても其の然る事が解ります。相對性理論に依りますと、或世界の違つた二點に於いて因果關係の無い二つの事件が時を隔てゝ起る時、之を此の世界に對して運動して居る世界から見ますと、事件の先後の順序が反對に成つて現れる事があるのです。丁度地球面に立つ私達が今上と呼ぶ方向は、地球の向ふ側に立つ人の下と呼ぶ方向であるのと同じです。

誠に時空は類似した性質を持つて居るのです。ミンコフスキーは長さ厚さ幅の三つの方向に更に時間の方向を加へて四次元の世界に就いて論じました處、アインシュタインの相對性理論は此の「世界」に於いて深くして限り無き至純の美を發揮して來たのでした。

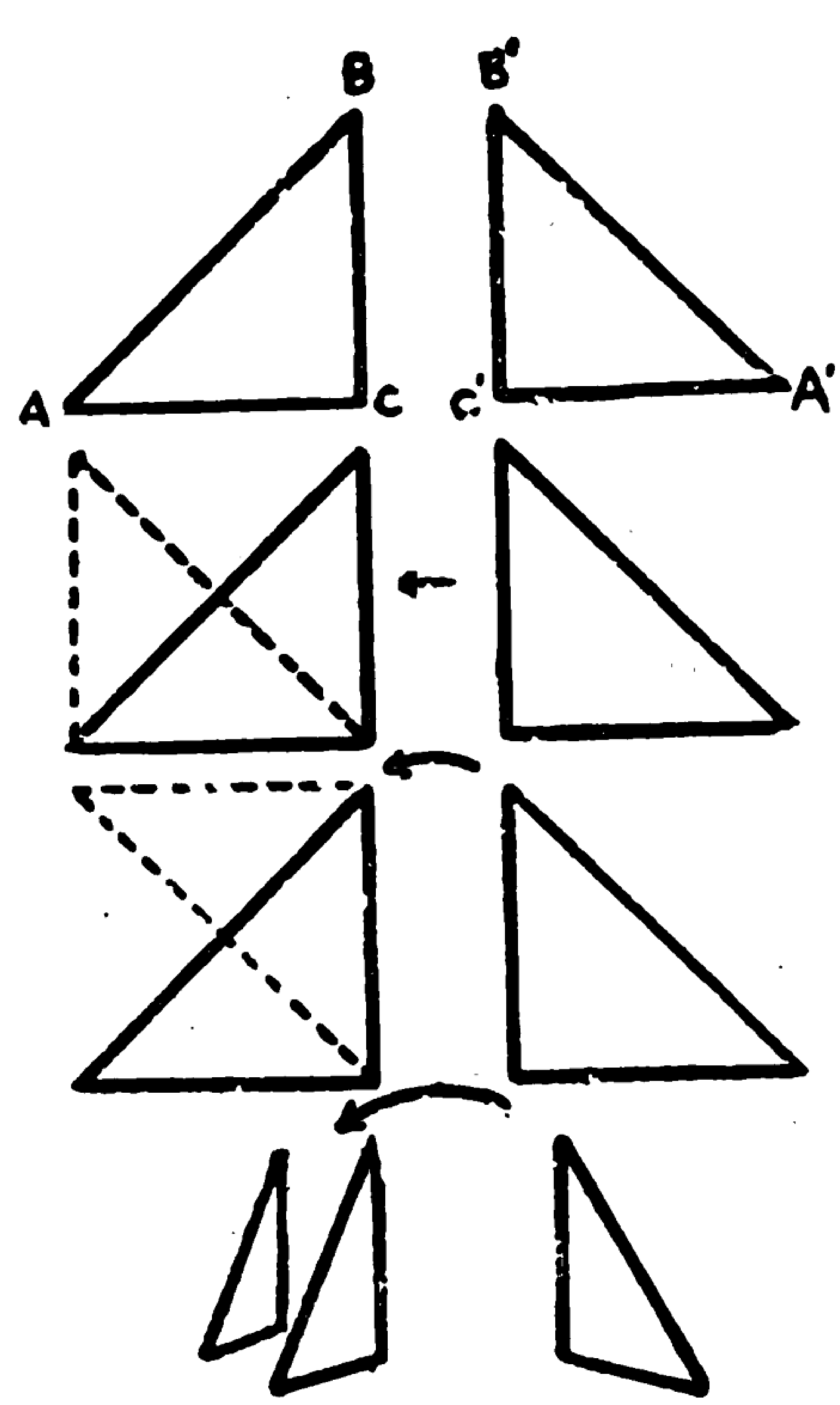
次元と云ふ事に就いて少し御話致します。點と云ふものは長さも幅も厚さもありません。彼云ふものは零次元であります。直線や曲線は長さのみあります。此は一次元のものであります。平面や曲面は長さと幅とあり、二次元のものであります。私達の經驗する空間は長さ幅厚さの三つの方向があり、三次元であります。

曲線の中に其の經驗世界が限られて居るものには已の住む線が曲つて居る事は解り兼ねるでせう。曲線である事は其よりも高い次元の世界から見て直ちに解るのです。同様に平面か曲線かは三次元以上の世界から觀下して直ちに解るのです

第十圖を御覽なさい。直線ＡＢと其の鏡像Ａ′Ｂ′とは一方向に移動したのでは重ねられません。左右にのみ動かし得るだけですとＡ′の上にＢ′、Ｂの上にＡ′が參ります。然し二方向に動かし得れば重ねられます。即ちＢ′を軸にしてＡ′Ｂ′を廻轉し得るからです。

第十一圖三角形ＡＢＣと其の鏡像Ａ′ＢＣとは一方向に移動しても二方向に移動しても重ねられません。然し三方向の自由度があれば先づＡ′Ｂ′Ｃ′を紙面から脱け出させ、重ね合す事が出來ます。同様に私達の左右の兩掌の形狀は

第十一圖



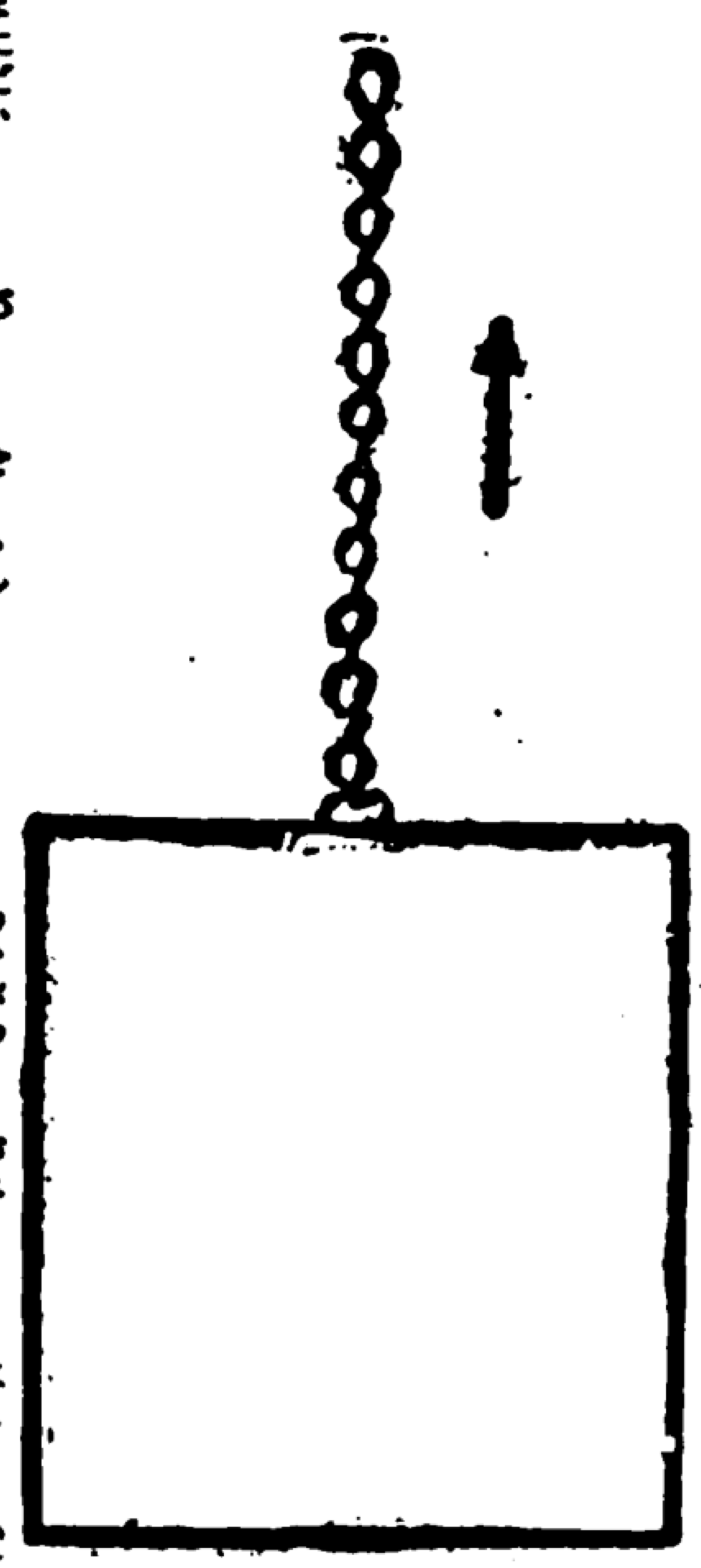
物體と其の鏡像との關係に在りますが、四方向の自由のきく世界では重ね合す事が出來るのです。一方の掌を破る事無く裏返して他の掌に重ね得るのです。

今迄の相對性理論は二つの世界が互ひに等速並行運動をやつて居る場合に限られて居るのです。一般の相對運動の場合は一九一五年頃に彼が完結した議論に於いて論ぜられるのです。前者を特殊相對性理論と申し、後者を一般相對性理論と申します。重力の問題やら廻轉體の問題やらが此處に於いて始めて論ぜられるのです。一九〇五年の論文を出してから

の名聲は次第に揚り遂にベルリンのプロシア理學學士院に聘せられ此處で專念研究する事が出來たのです。

皆さんがエレヴェーターに乘つて急に下降する場合は身體の重さが減じたかのやうに感ぜられるでせう。又エレヴェーターに乘つて急に上昇する場合は體重が增したかのやうに感ぜられませう。いやうではなくて實際增減するのだとアインシュタインは申します。若し不幸にしてエレヴェーターの綱が截斷せられたとするならばエレヴェーターは自由に落下し中に居る人に對しては重力が無く成るのです。此のエレヴェーターの中では時計の振子も振らないでせう。帽子は頭を押しません。足は靴の底を押しません。物を手から放しても自分と離れません。アインシュタインは觀測者の立場に依つて重力が無く成り得るのだと申します。

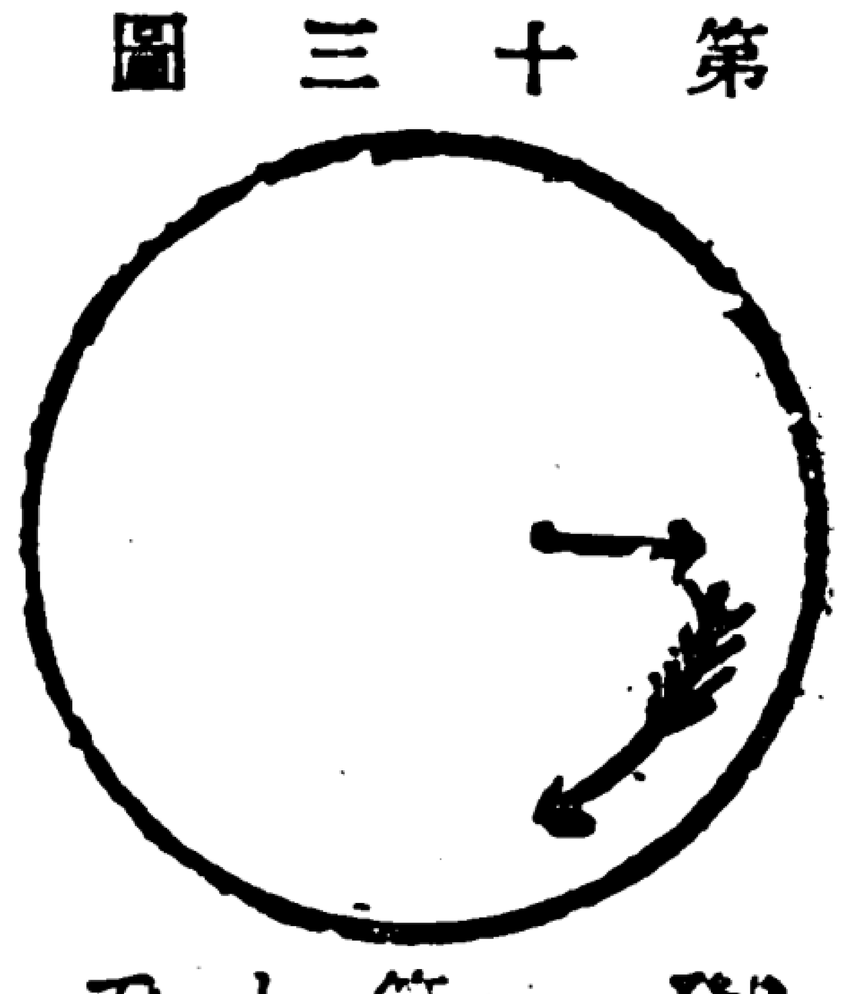
第十二圖



又第十二圖を御覽なさい。怪物が大きな箱の蓋に鎖を附けて重力の加速度で上に引き上げて居ます箱の周圍の空間には何も之に引力を及ぼすやうな大きな物質が無いとします。箱は全く閉されて箱の中の人は外が見えないと致します。箱の中の人が手から或速度で球を下方へ投げますに外の空間に對しては球は等速下方運動をやりますが、箱が重力の加速度で引き上られますから、中の人から見れば重力の加速度で落下するやうに見えます。中の人は箱が地上に靜止し、球の運動は地球の重力に基づくものと考へても宜しい。誤りではないのです。箱の中の空間は重力場なのです。斯やうに見方に依つて重力場が存するとも考へられるのです。斯やうな思考をアインシュタインは「等值原理」と申しました一般相對性理論は此の考へから出發するのです。

此處に圓板が廻轉して居ます（第十三圖）。昔は廻轉は絕對的なりと申しました。直線運動は相對的であるが、廻轉は絕對的なりとしました。其は廻轉が起れば遠心力が生ずるからだと申します。然しアインシュタインの議論に依りますと、圓板が廻轉するのでなく、周圍の空間が廻轉するのだとしても宜しいのです。遠心力は此の相對運動に依つて現れるのだと申します。

第十三圖



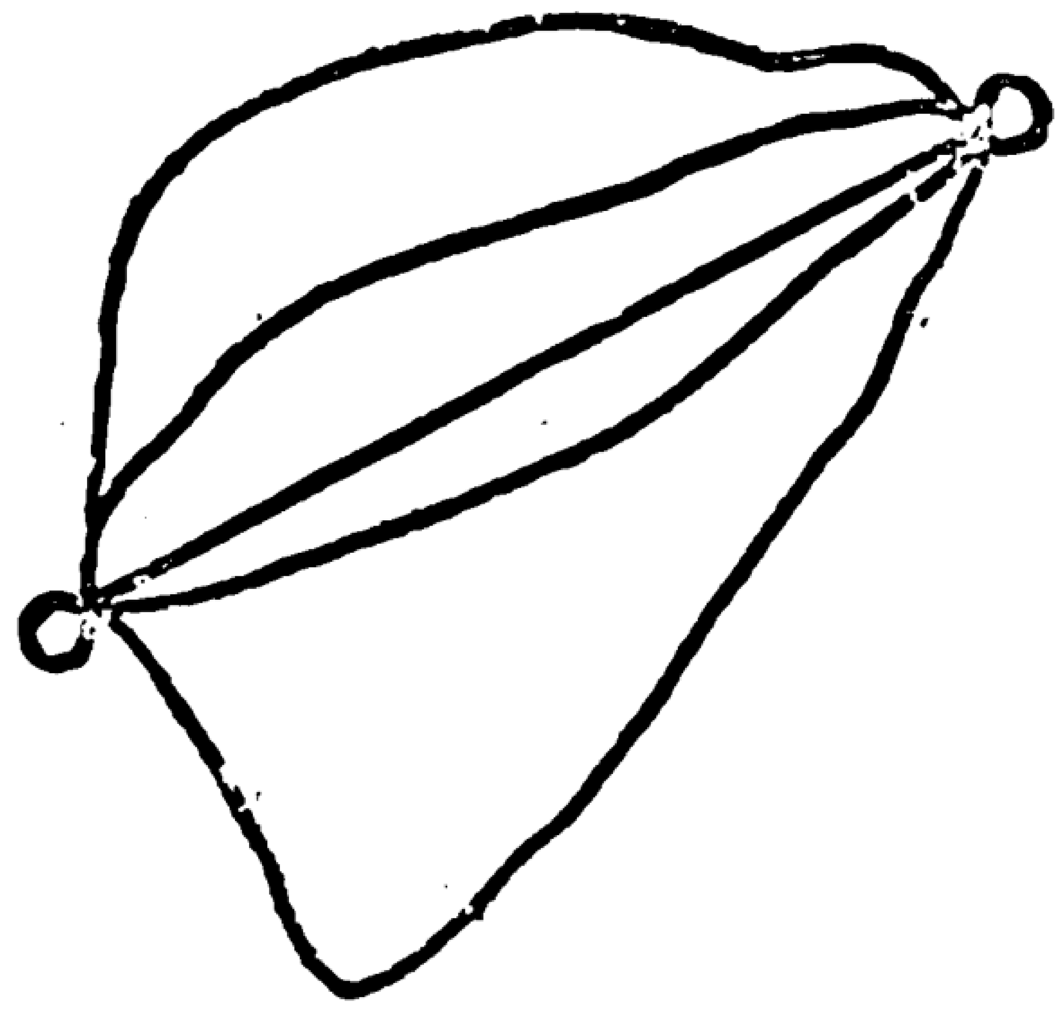
又遠心力も一種の重力場と考へられます。閉された圓筒

が其の軸の周に廻轉して居ます時、筒内中心以外に在る人は遠心力を受けます。此の力は其の位置の中心よりの距離に比例し且つ中心より外に向ひます。遠心力は質量にのみ關し、物質の種類に依りません。其故此の力は斯かる法則に從ふ一種の重力と考へても少しも差支へありません。

皆さんはニウトンの運動の第一則として、物體に力が働かなければ物體はいつも等速直線運動をする事を御學びに成つたでせう。

今此の法則を斯う言ひ換へても内容には少しも變りがありません。

「物體に力が働かなければ物體は一點より他點に到るに最も距離の短き方向の徑路を選ぶ。」と。二點間の最短距離を表す方向は直線である—(第十四圖)皆さんはさう仰有いませう。其故此の言ひ換へは少しも法則の内容を變化しません。然し二點間の最短距離の方向が直線だと云ふのは空間が扁平な時に限ります。若し空間が球の表面の如く曲つて居るならば球面上の二點の最短距離の方向は此等を結ぶ大圓であります。アインシュタインは此の言ひ換へられた法則が如何なる力の場に於いても行はれる事を申します。物體に重力が働けば物體が直線からはづれた曲線の運動をすると云ふ事は、其の邊の空間が歪んで居り、物體は歪んだ空間(時空四次元の空間)に於ける最短の距離を選んで運動するのだと申す事が出來ます。重力に基づく運動は歪んだ空間に於ける慣性運動なのです。斯やうに考へて行きますと事柄は愈々明確に議論出來るのです。星から來る光でも太陽のやうな大きな物質の附近を通る時やはり徑路が曲ります。其は光が歪んだ空間の最短距離の方向に進むからです。此の曲つた星の光を地球上で望遠鏡に受けますと星の方向が點線の方向に見えます。(第十五圖)實際の位置よりは太陽から遠ざかつて見えるのです。(拙著「書換へられたる物理學」の表紙の繪は一見光線の彎曲が反對に見えますが、場面の都合上透視的に描いたから左樣に見えるので、誤つて居るのではないのです)。

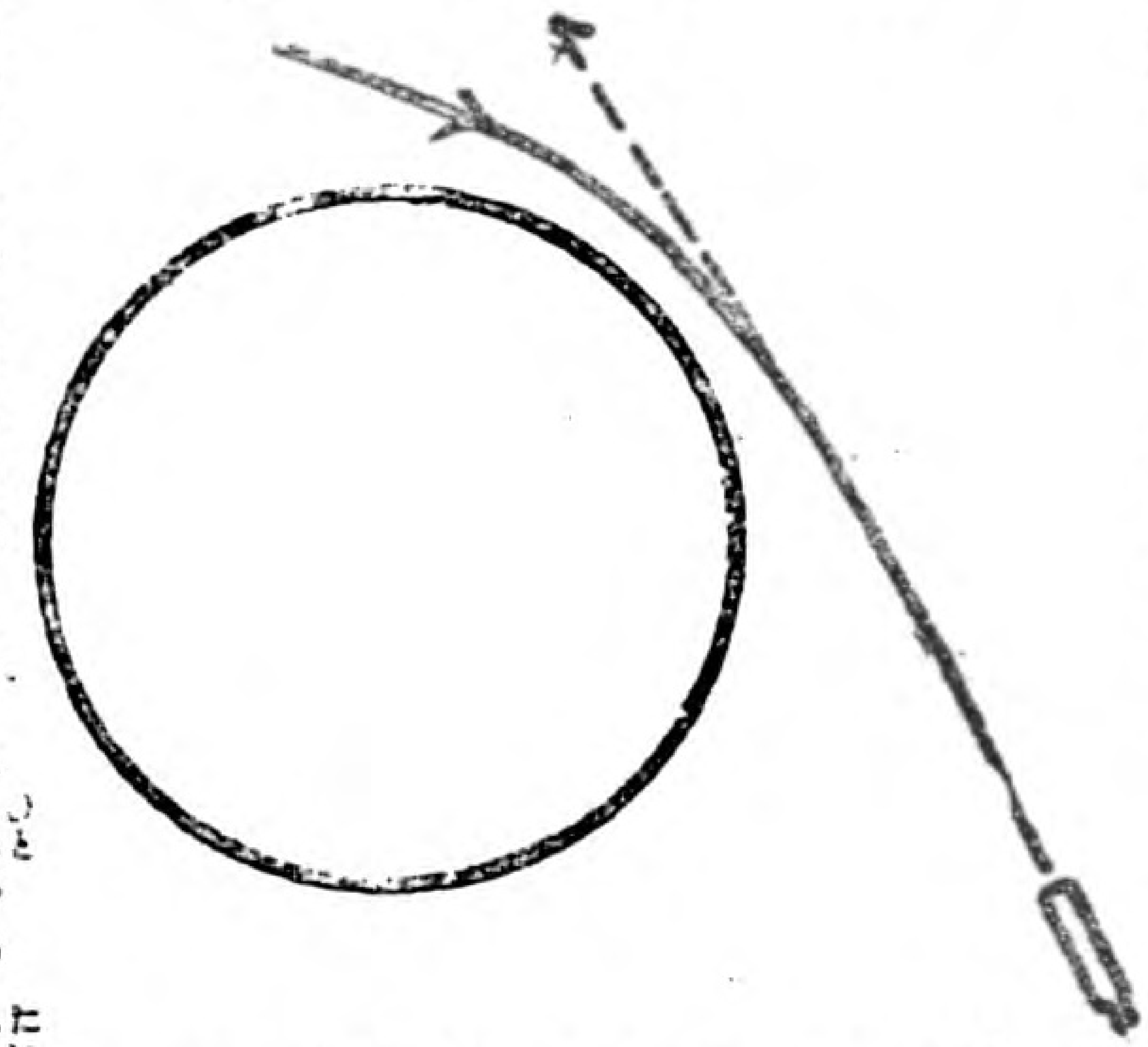


第十四圖

皆既日蝕の時は太陽の面が月に蔽はれるので其の附近の星の光が日中でも見えます。此の時之を寫眞に取り、後日夜間に再び此の邊の星を撮影し二つの寫眞を比較して見ます。前者に於いてはどれだけ星の位置がずれて居るか解るのです。

一九一九年五月廿九日にはブラジルとアフリカとで皆既日蝕が起りました。アインシュタインの議論を驗さうとイギリスから二隊の天文學者が觀測に出張しました。結果は正にアインシタインの豫言する丈のフレ(星の位置の)を示しました。此は寫眞の乾板上では一粍の百分の二位の僅かのフレです。ゼラチンが歪んだからではないかと言ふ人や、太陽のコロナを通る時屈折を起したのだらうと云ふ人がありますが、其等は凡べて無價値な議論なのです。

第十五圖



光線が重力に依つて曲るとは私達の是迄教はらなかつた事なのです。幾何光學では光線は眞空中を直進すると教へますが、其は空間が扁平な時だけです。

斯う云ふ歪んだ空間では非ユークリッド幾何學と云ふものが行はれます。私達が學校で教はつた幾何學は名が冠してなかつたのですが、彼はユークリッド幾何學と云ふのです。彼許りが唯一の幾何學ではないのです。ロシアのロバチェフスキーやハンガリーのボリアイ父子の建設した此の非ユークリッド幾何學も亦可能な幾何學の體系なのです。「非」と書くと何だか危險性を帶びて居るやうで面白くありませんが、外に名がありませんで仕方がありません。此の非ユークリッド幾何學では三角形の內角の和は二直角でなく、圓周率も3.1416ではありません。扁平な空間ではユークリッドの幾何學が行はれますが、歪んだ空間では此の非ユークリッド幾何學が行はれるのです。非ユークリッド幾何學は認識論に依つて解放はせられて居たが、尙實在の空間に適用せられないと考へられて居たのですが、アインシュタインの萬有引力論に依つて實在の空間に行はれる事が解つたのです。イギリスなどでは中等程度の學校でもいま非ユークリッド幾何學を兼修せしめなければならんと唱へられて居ます。

大きな引力の場では時計の進みが緩く成ります。原子の振動を一つの時計と考へられますから同一の元素でも太陽のやうな強大な引力の場に在ります時は地球上のやうな弱い重力の場に在ります時に比して振動が緩く、從つて其の出すスペクトルが地球上のに比して少し赤の方に變位するのです。是もアインシュタインの萬有引力論から論結せられる處です。

尙太陽系の遊星中最も太陽に近い水星は實際閉ぢた楕圓を描かなくて、其の平面內に於いて軌道が次第に回轉し、近日

點も次第に廻轉し、開いた曲線を描く事に成ります。此の近日點の移動は水星の位置のやうな太陽の引力の強大なる場所で著しいのです。是もアインシュタイン論から、ちあんと計算せられて居ます。

アインシュタインは更に宇宙論にも論及して居ます。宇宙は有限で而も境界が無いと。私達は是迄宇宙は無限で境界が無いと考へて居ました。新宇宙論は物質の爲に空間が歪み、其の爲に宇宙が有限の擴りを持つと申します。有限無際涯の空間とは例へば球面の上の世界が其です。球面の面積は一定であり、然も何處にも境界がありません。此の表面上を蟻が匐つて居るとしますと、蟻に比べては此の球面は無限に廣いかも知れません。然し蟻が段々舊の出發點から遠ざかる程亦却つて舊の位置に近づく事に成ります。際涯が無いのです。アインシュタインの宇宙もやはりさうなのです。アインシュタインに依りますと、宇宙は其の包藏する物質の量が增すと擴りが大と成り、物質が無く成ると一點に縮むと申します。即ち物質あつての宇宙だと申します。宇宙が先づ存して然る後物質が在るのでなく、物質の方が第一次的なのです。内容あつての容器だと申します。此はウィーンの批判物理學者故マッハも申した處であります。アインシュタインは彼の流を汲んで居るのです。カントも斯かる事を申した事があります。哲學者の中には斯く宇宙と物質との連結を說いた人もあり ませう。然し其等は天井を仰いで思ひ附いた瞑想に過ぎません。アインシュタインは實驗的な基礎の上に成育した物理學上の理論から斯の如き偉大なる宇宙觀に到達したのです。

要するに相對性理論は自然法則の絕對性を保持せんが爲め觀測者の立場の相對性、從つて觀測者の依據する時空の概念の相對的なる事を叫ぶのであります。其處に此の理論の絕對の力があります。

相對性理論を唱道したアインシュタインは今四十四歲である。私達は彼と共に同じく地球の上に呼吸する事すら過去の世紀に對し未來の世紀に對し誇らなければならぬのに、近く親しく溫容を見、其の人間性に接する事を得るのは畢生の喜びとせねばならぬのであります。

(十一、十、二九)

竹內仁氏の慘劇に就て

友枝高彦

噫竹內仁君

一

去る十日の夕一學生に會見の約を果す爲に自宅に歸りついたのは五時二十分であつた。それから一時間に亙つて學問研究の方法論について應答し、續て一友人の來訪に接して道德教育論から始めてその目的はリップスの所謂美しき道德的心情にあることなど談論したのであつた。然るに八時半になつてけたたましい電鈴は某新聞社からの電話であると告げられて何事かと怪訝の念に驅られながら受話器を耳にすれば『先生の方の學生竹內仁といふものが人殺をしまして自分も死んで終ひましたが……。』と聞くに至つて自分の耳を疑ひながら再三問返して矢張間違でないことが分ると共に身震を感ずる程驚いて『あの竹內がどうしてそんな兇行を敢てするに至つたであらうか。』との疑問といふにいはれぬ悲痛の感は殆んど私をして夫を考へるだに堪へざらしめる程であつた。後で思ひ合すれば私が家に歸つて來た時は君が、その日の外出を引留めようとした母君をふりすてゝ成增驛を出發した時刻であり、私が安樂に椅子に倚つて道德的心情の問題を論議して居た折には君は魔の手を借つて現實の一切を否定すべく狂ひ廻つて居たのであつた。

　どうして竹內はかやうな兇行を敢てしたであらう。あの眞面目な、人と話しても顏をあからめるやうなおとなしい竹內がどうして恐るべき殺人をなしたであらうか、思へば不思議のやうである。併しまたよく考へれば、あの眞面目な、人と話しても顏をあからめるやうな、おとなしい竹內だからあの行爲をもなし遂げたのではあるまいかと、思ひ當るふしもある。今改造社から竹內君を追悼する爲に私にも一文を求められたのであるが、竹內君が如何なる動機を持つて居たに拘ら

ず發行は依然として發行であるから私はそれを贊成しないことはいふまでもなく、餘り批評することさへ控へたいと思ひながら竹内君を悼惜する情は遂に私をして筆を執らしめるに至つたのである。

二

私が竹内君を知つたのは大正九年の新學年からであつた。それは倫理學演習の時間であつた、私はカントの「道德哲學の基礎付」を學生に輪讀せしめながらカントの倫理學說を研究したのであつた。その時に竹内君が獨逸語に堪能であることを知つた計りでなく、一年生としてかくもよくカントを理解して居るかと驚かしめた程であつて、私は竹内君が將來有望の青年であることを認め、その學才を伸すことに十分力を盡してやりたいと希つたのである。二年の時にはカントの「實踐理性の批判」を讀んだ。この時も竹内君は出席して時々適切な質問を試みて私に益を與へてくれたこともあつた。一年の修業試驗のペーパーとしてカントを讀んだ感想を書いたが、二年生としてはワイニンガーの思想に對して極めて興味ある批判を試みたのであつた。ワイニンガーは君に多大の興味を起させて耽讀せしめたやうで、昨年の暮の倫理談話會に於てワイニンガーに關する研究發表をしたことがあつた。

今年の四月からも、君は三年生として更に私の演習に出席して居た。今年の演習問題は社會倫理といふのであつたが君は最初に社會の改革に關する二三學者の所說を紹介批評して呉れたのである。そして卒業論文としてはフイヒテーの道德論の研究をかくことになつた。

カントに於て人間味の足らぬことも訴へた君が更にフイヒテーを研究して見ようといふのは、最も自然の順序といつてもよく、フイヒテーに關して未だ研究したものゝ少い我が國の學界にもし君の研究を出すことが出來たならば必ず有益な貢獻をなすであらうと信じた。殊に明後年はカントの誕生二百年である、それまでには出來るだけこの研究を完成させたいと思つて、種々の勸告と注意とを與へた。私はこれが氣にかゝるから屢々君の研究の進度に就いて尋ねて見たことがあつたが、この九月迄には既にフイヒテーの道德論二篇と學問論とを終つて、更にメヂクスのフイヒテー評傳その他の參考書を讀了したと聞いたから、早く筆を起すべきことを勸めた。併しその答は餘りハッキリして居なかつた、書物は讀んだが考が尚ほ十分纏まらぬことを訴へて居た。私は此の間に於て色々に君を激勵して、將來の方向についても屢々相談して見たこともあつた。然るにある時君からのハガキの終りに『周圍の事情と戰ひつゝ』云々の言葉のあるのを見て、聊か怪訝の念をも起したのであつたが、餘り深く氣にもとめずに平素の通りに話して居たのは今から思へば甚だ心なき業であつた。

三

今から二週間前のことである。私は研究室の廊下で君に對

して將來雜誌評論家などになることを望むか、或は學者として教壇に立つ積りであるかと聞いた時に、君は種々考慮の末、とにかく教壇の人として立つて見たいとのことであつたが、後で日記を見ればこの問題に就ては色々考へ煩つたこともあるやうで生活の保證を求むる如きは新功利主義であるなどいつて居る所を見れば君はむしろ評論家として、飽くまで生活にも思想にも戰爭の勇者として進みたいといふ抑ゆることの出來ぬ衝動を持つてゐたやうである。私は君の將來の方向位置にて相談して居つたがそれは當座の問題を解決するに過ぎないぐらゐであるかも知れぬと思ひながらとにかく、當分の間は落付いて靜かに研究の歩を進めて貰ひたいのが一心であつた。併し今から考へれば私は甚だ心ないことをしたのである。君が戰ひつゝあつたといふ周圍の事情と私の考へた所とは全く異つた方向にあつたのである。

君は昨年八月に於て既に自殺の決心をして十七八の頃から書き溜めた日記や感想の類を最近のものに至るまで悉く燒き捨てたとのことである。君の戰ひつゝあつた周圍の事情は一朝一夕のことではなかつた。竹内夫人の御話によれば、昨年以來幾度か人生をはかなみ『私は到底駄目です。』とさへ口に洩したことがあつたとのことである。私は教室に於て君にカントを讀んで貰つた。倫理學科の學生とも一緒に遠足もしたことがあつたが、一度も君の心の惱に就いて知ることを許されなかつた。教師としての私が預り知らぬのは固よりのことである、君の親友である留岡氏にさへも洩さなかつたとのことである。君は一人で考へ、一人で惱み、一人で苦しんで居た。君の養父母の方々はその問題について兩親としての懇切な忠言訓誡を加へられたことも度々であつたとのことであるが、君は自ら自らを抑ゆることの出來ぬ程強い心の惱を持つて居るのであるから、容易に他の容喙を許さなかつたのも尤もである。

四

君は昨年八月二十八日の日記に書いて居る、「人間には永遠不變のものを追ひ求める憧憬の心がある。寧ろ著しくいへば人間の一切の活動は、究極はこの永遠不變のものに對する追求憧憬の心に基いて居るのである……。併し金、女、(享樂慾の對象としての)名、愛、これ等のものはそれ自身としては結局人間の永遠なものに對する追求憧憬の要求に滿足を與へることが出來ない。」と、君は深い心の底に強い〲永遠不變のものに對する追求憧憬をもつて居た。そして君はその實現を地上のものに求めたこともあつた。君は現實の人に對する愛に依つて無限の内に生きようと希つた。而もその希望も裏切られた。君は云つて居る「確かだと思つて居たものが次から次へと打壞されて行く幻滅の悲哀は憧憬の心を知ること多いもの程、屢々味はなければならぬことであつた。最も確かだと思はれる愛さへも、それ自身だけでは決して永遠性の名に値することは出來ない。それを知ることは憧憬の心厚き者に取つて何といふ淋しさ、やるせ無さ、悲しさ、賴り無さであ

らう。而もそれは求むることを知るもの、憧憬の心を持てる者の必ず嘗めなければならぬ苦く痛ましき體驗である。この苦く痛ましき體驗を通じて人は「人間的なるもの」の「はかなさ」を沁み沁みと味ふ。習慣的の表現を用ゐれば「人生の無常」を味ふのである。』と。何と悲痛の言ではないか。君は次第に心の淋しさを感じて來た、此の世界の内に頼るべきものはないかのやうに思ふやうになつて來た。君は「人間の憎み」を感じて來た。併し君の哲學的衝動はかやうな場合に君を獨り無常」の荒野に殘すことを許さなかつた。君は書きつゞけて居る。『「人間的なるもの」一切の「はかなさ」を沁み沁みと味ふ所、「人生の無常」を體驗する所、そこから認識論とそして形而上學とが生れて來る。「人間的なるもの」の「はかなさ」に愛想を盡かし懷疑の眼で一切を凝視する所、そこに眞正な認識論の搖籃がある。「はかなさ」「人間的なるもの」の底に、奥に、確かなもの、永遠なるもの、認識論によつて淨化されたる思索と直觀とによつて把握せむと憧憬する所、そこに純眞なる形而上學の母胎がある。』と。

五

君はかやうにして懷疑の闇をすてて認識の光に向ひ、憎の地獄を去つて、愛の天國に上らうとした。君は幾度かこの道を往きつ戻りつしたのである。君はなほ進んで「永遠なるもの」の何であるかを考へた。それは生命であると云つて居る。「生命」のみが永遠である。唯實在である。絶對無限である。それは勿論個人の生命ではない……………。宇宙――自然及び人生――の一切の事象は恐く「生命」の象徴である。從つてその限りに於て、「生命」に參與する。「生命」に參與すること最も厚きは生物、殊に人類であり、最も薄きは無機物である。これらのもの、參與し分有する「生命」をこれらのもの、「生命力」と呼ぶ。「生命力」に厚きものほど、永遠性に富む。「生命力」厚き者程認識力に富む……。』かくて『吾等の「生命力」は有限であり、無常である。而も「生命」の本流に合することによつて「生命」そのものを直觀し、洞察し、その方向と性質とに從つて生きることによつて、吾等もまた、吾等の内に永遠性を把住することが出來はしないか。』これが爲には『「この「生命」の流れの方向とその本質とを洞察する爲には、自然及び人生の觀察と理解とを必要とする。自然及び人生の縮圖としての、小宇宙としての人間、就中自分自身の反省と批判とから出發することを必要とする。自分自身を理解することによつて人間を理解し、人間を理解することによつて自然及び人生を理解する。』

六

かやうに竹内君は生命を根本としてその現れる所に生命力があると考へて居るが、生命力の無常であることを認むる點に於て現實の生命の否定をも是認することゝ爲る。併し同時に個々の生命力は人生の觀察と理解とによつて生命の本流に合することが出來るといふ。こゝにまた生命の否定から逃れ

ろ可能がある。又竹内君は決して厭世主義ではなかつた。君は人生の觀察と理解とに就いて私達の觀る所の事象の内を貫通する生命を觀ようとした。何となれば生命はカントのいふ物自體のやうに事象の背後にあるのではなく、その中を貫いたものとなすのである。併しかく論じて居るなかにベルグソンの純粹持續やゼームスの純粹經驗などとの關係に就いては十分明らかになし得ないことを承認して居るのである。この點は竹内君の研究が尙僅かにその緒に就いた所であるといはねばならぬ。されど君も多少なりと生命力の動きかたに就いては現實世界に於て考へる所があつた。卽ち人間通（Menschenkenner）といふことが最も重要な準備と考へたのである。人間通!!その意味は甚だ廣く且深い。併しどんな人々が人間通であるか、私にいはしむればゲーテがそれである、シエーキスピアがそれである。なほその人は多い。要するに人生をそのあらゆる樣相に於て觀得る人である。その點に於て道德の哲學と關聯して考へたならば、リップスのいふ經驗の十全がそれであらう。竹内君は人間道の意義を知つて居た。經驗の十全も了解して居たのである。而も君自身は眞の人間通として尙缺けた所があり、經驗の十全に於て明らかでない點のあつたといはねばならぬ。併しそれは君に責むることは無理であるかも知れぬ。君は實に感激の人であつた。

七

私の處世觀の第一として人生には凡ての事が起り得るといふことであり、第二には一歩退いて考へるの餘裕をもたねばならぬ。次には經驗の十全である。もし竹内君にして人間通であり、經驗の十全を持つて居たならば這般の行動を敢てする前に更に考ゆべき點もあり、取るべき道もあつたかと思はれる。これは君が秀才であり學力が優つて居るといふことからばかりではない。固より君も十分に考へる所あつたことは想像せられる。君は時には、凡てを思切らうと決心したこともあり、他の方向に動かうと努力したこともあつたやうである。然るに十一月八日に失はれた愛人等との邂逅は一層事件を暗黑の方面に急轉せしめるやうになつたやうである。「時」は心の創痍を癒すことも出來るのであるが、君に於ては却て一層それを强からしめるものであつた。年餘の懊惱と强烈な衝動とは人間通をも經驗の十全をも捨てしめて、君をして無際の廣野をたゞ一人突進せしめるやうなことになつて終つた。君は實に淋しき人であつた。君自身が取除くことの出來ない心の淋しさを周圍の人が取り去らうとしても畢竟徒勞に終つたであらう。かくては君は行く所まで行かねばならなかつたか。思へば痛ましい極みである。きけば君の死顏は實に

靜かな平和な氣持を現して居たとのことである。一切の矛盾衝突は死によつて最後の解決を得たのであらうか。私達が認めて兇行となすべき所を敢てして心の安定を求めた君はたゞ痛ましさの至極である。私達は水を求めた君に石を與へたのではあるまいか。

君は私達へ考へかへすべき多くの問題を殘した。その內に於ても我が國の結婚制度と女子敎育に關する問題は甚だ重大である。君は自己の最も了解ある人生の伴侶としての婦人の敎育を自らの手によつてなさうと主張したやうである。そこに從來の制度の支持者に對して君を非難する動機を與へたものといはねばならぬ。君は最も眞面目に人生を觀 童貞」（君は自らかういつて居る）として眞劍に愛を考へたのである。君は高い理念をこの低い現實の世界に、その原型のまゝに實現せしめようと求めた。そこに君の餘りに性急なところが見える。併しとにかく君の思想は現在の女子敎育に對する抗議であり、まさに價値のつけかへをなすべき動議を提出したものといふべきではなからうか。

過を見てその仁を知るといふ、君は恐るべき兇行を遂げて自決してしまつた。併し君のあの純な、正しい、美しき心情は私の心から愛した——愛したといふよりは寧ろ心から尊敬したところであつて、何とか他にとるべき道はなかつたであらうか、たゞ悼惜と痛恨とに堪へないのである、併しそれも君の喜ばぬ一箇の愚痴に過ぎないかも知れぬ。噫。

（大正拾壹年拾壹月拾五日葬儀當日の夜千葉縣成東町客舍に於て）

秀才の悲劇

吉江喬松

私一個の經驗としても、近來、優れた素質をもつた人々が、或はそれがために自滅を急ぎ、或はそれがために却つて思はぬ悲劇をかもし出して、人々に衝動を與へるやうな機會に接することが次第に多くなつた。これは確に深く考ふべき社會

現象である。

今、假りに、アンディヴィデュアリスムの價値を、個人自覺、個性の伸展、個人權の確立となし、その覺醒を各自に持たしめんとする場合に、人生を數的に觀て、一人一人が徐々に、時間的に、それを體得するが如く考ふるのは危險である。同時に、他方に、共通性、集合性、社交力の喚起せられざる限りは、卽ち精神上のコレクティヴィスムの伴はない限りは、その所謂覺醒したる個人は、見知らぬ人々の中に突然置かれたる人の如く、全く異つたミリウの中にだしぬけに自己を見出した者の如く、愕きもし、恐れもし、苦惱、焦燥、不快のみがその者の意識を領ずるであらう。そしてまたその周圍の人々から見れば、不可解な人物が闖入して來たものの如く思はれ、これもまた愕きと恐れとに襲はるゝであらう。或者はそれがために自己を消磨して滅び、或者はそれがために周圍と衝突して悲劇を引起すでもあらう。目醒めはしても氣の弱きものは、周圍の壓迫强要に堪へずして早忙として此世から身を隱し、正直に、眞正面に自分の信じた方面に向ふものは、當つて碎けるか、然らずば、外れた途に入つて冷眼の人となるのである。これは個人自覺を持つことの罪ではなくして、その自覺したるものを適當に生かし得ざる時代の缺陷、社會の悲みである。生命をして適當に伸長せしむるためには、それにふさはしい環境がなければならない。環境の缺亡は空氣の缺亡である。空氣なくしては生命は保たれない。アンディヴィデュアリスムが正當に發生し生ひ立つためには、それに必然的な條件、系統歷史があつた。卽ち必然の環境があつた。その環境に多くの考慮を拂はずして移殖すれば、その當然移殖すべき大切なるものが、不自然な發展をなすことはまた自然のことである。この個人生命に大切な環境の培殖といふ事が從來及び現在の日本の生活には甚しく缺けてゐる。

事實について見るに、現代の若き人々の間には、個々人の意識は可成り明瞭ではあるが、その個々人をつなぐ融合性、が甚だしく缺けてゐるやうである。集合の中に於ては個々人の意識が沒せられ、攪亂せらるゝことを非常に恐れてゐる如き傾向が見られる。理解ある友誼の結合といふことが少からず缺けてゐるやうに思はれる。個人のことは個人でせよといふことのみがあまり强く人々を支配してゐるやうである。

友誼とは生命の交叉を意味し生命の相互に根を張る姿を指す。この生命が根を張ることが出來ない場合には倒れないわけにはゆかない。命の滋食は命のみ、その滋食を他より攝取出來ない場合には枯れるか、倒れるか、絕望狂轉かをしないわけにはゐられない。

若し人が五六の眞友を持ち得たらばその人の生命はゆるや

かに伸びるに異ひない。さらにその人が十餘人の眞友を持ち得れば非常な幸ひである。その人の意識内の生命を直ちに他に動波を及ぼすに異ひない。他の生命の動波もまたその人に強くとも快き衝動を與へるに異ひない。少くもその人は自己の行動思考の内容をそれ等の友人に打開けずには居られないに異ひない。『近頃不愉快でたまらない。』と言ひながら、その不愉快の原因を打開け得なかつたことは、その人として悲しい事實である。その人の生命の根は交友の間にすら十分伸びてゐなかつたのだ。まして、それよりは一層接近してゐた日常生活の周邊にはその根は少しも伸展しはゐなかつた。そして、その周邊の人々より見れば自分等とはまた生命の交渉なき人を自分等の中へ入れて團體生活を營まねばならなかつた。この團體生活がよし連續しようが、破裂しようが、慘劇となつて飛散しようが、いづれにもせよ人生の悲劇である。寧ろ、いかに多く、この飛散せざる、破裂せざる連續的悲劇が現代日本の社會相を構成してゐることであらう。

若し理想的にものを言へば、總ての人が眞の同胞感を抱き得る筈である。卽ち友情を持ち得るはずである。が、それは出來得ない事にもせよ、現在の日本に於ては、眞の友誼的集合生活が甚だ乏しいやうである。互に生かし合ふ結合の生活が甚だ少いやうである。當然人が自己の生命を伸はす可き環境を持ち得る場合が非常に缺けてゐるやうである。それ故、或者が個人自覺を强めれば强めるほど、その人と周圍とは隔離し、その者は周圍から見れば全く無理解と思はるゝ行動をして、平地に波亂を起し、自他に對して取りかへしのつかない悲劇を醸成するやうな歸因となるのである。この眞の友誼的結合がないが故に、世の中には却つて表面的空虛な形式の結合、排他的結合、閥によつて異を樹て、黨派によつて結び、軍主的團結すら生ずるのである。

これをその自覺したる個人の側から見れば、その個人が更に强く、更に深き覺醒と覺悟とを思つて、徐々に周邊を喚び醒まし、共に率ゐて光明の境に到達するやうに圖るべきであるはいふまでもないことであるけれど、風の寒い、大氣の荒い早曉に目醒めたる者は、徐々に他を呼醒まし光をまつ餘裕も持たずして、我と身の置き處なき姿に狂はしくなるでもあらう。眠れる周圍の人々のいぎたなき姿に腹立たしくもなるであらう。

目を醒ますと直に光明の中に身を見出す如く用意せられたる世界へ生れる人々は幸福である、けれど現時の日本の社會の狀態の如き、不秩序、混亂、焦悴、疲勞の中で、個人自覺を、徹的に、一人一人に强ゆることは、寧ろ不幸と慘劇とを齎すごときものである。一時に多數者の上へ閃き渡る共通の

覺醒、暗黒を破る光明の投射、これを我々の各自が胸に持つてゐる宗敎心の同時の喚起とよんでもよい、この精神的な共通歷史の一大回轉がない限りは、一人また一人と個人の自覺を持つて行くのでは、今後とても、少くも暫くの間は、同様の悲劇がくり返されて行くに異ひなからう。

これまで日本に於ては、高壓的な、鼓吹的な、無理強ひせられた空虛な共通觀念が一般を支配してゐた。その空虛を破つて、その反動の如くに、個人觀念が強くなつて來つゝある、小學校の兒童が現在、よくも惡くも、直ちに口にすることは『自分のことは自分でせよ』といふことである。この個人の獨立はまことに結構なことである。またさうでなければならない事であるけれど、これに眞の共有觀念、集合意識、眞の友義的結合が加はらない限りは危險である。その人自身、及びその周圍の生活を不幸にする。新らしき眞の意味の共通意識、集合感相互扶助的生活、これが現代に缺けてゐる異常な現象である。

私は秀才の悲劇に接するごとに、その悲劇の中心人物及びその周圍の人々をして正當に安穩に生かしめ得なかつた現代社會の缺陷を痛切に感ずる。そして多數的、同時的自覺の來ない限りは、この同じ經驗が更に屢々くり返されるであらうことが思はれる。かくいへば、宛ら奇蹟でもまち受けてゐるものゝ如きであるといふ人があるかも知れない。併しこの奇蹟は早晩來なければならない。全的喚起、集合的覺醒、それが我々の生活を救ふ所以である。これが我々の苦しき生存に適當な、自由な空氣と環境とを與へることであり、舊き空虛なる統一觀を破つて、新らしき眞の共存觀を徹せしむることである。

竹内仁君の憶ひ出

堀　眞　琴

竹内君の今度の事件に就いては、更に切實に云へば、竹内君自身の性格に就いては、世間の人々からはかなりに誤解さ

れてゐるやうである。竹内君は一寸逢つたばかりでは打ち解けにくい取り澄ました所のある人に思はれ易い。けれどもよく逢つて話して見ると、非常に頭の明晰なそれでゐて大變暖みのある人であつて、決して高ぶつたり取り澄ましたりする人でないことは、竹内君を知つてゐる誰でもが感ずる所である。私は茲に竹内君を知つてゐる友人の一人として同君についての卒直な感じを——今度の事件の當否に就いては暫らく措くことゝする——斷片的に述べて見たい。

併し私が竹内君と個人的に知合になつたのは極く最近のことで——、尤も竹内君は私と同じ獨法科の一年上級にゐたのであつたが、逢へば互に挨拶を交はす程の親しさを持つてゐたのであつたが、眞に友人として竹内君を知つたのはこの二年以來のことである。隨つて私が竹内君の憶ひ出などに就いて云々することは、或は僭越のことであるかも知れぬ。併し私は衷心から同君の死を悼むのあまり、この僭越をも顧みず、改造社の乞ふがまゝにこの文を草した。幸にして讀者に竹内君の面影を幾分でも寫し出すことが出來れば、筆者はそれで滿足である。

二高時代の竹内君は理解と感激とを有つた秀才として——一般に秀才と云へば何の理解も感激もなく學校の成績になどばかり没頭してゐる者が多いのであるが——生徒達から尊敬されてゐたことは勿論、教授達からもかなりに囑望されてゐた。竹内君が尙志會の總務委員に推薦された時、生徒達は竹内君に對して在來の委員に對するとは異つた期待を持つた。竹内君も大會の席上かで感激に充ちた言葉を以て、二高の更に内面的に發展すべきことを説いた。當時二高の氣風は柔道に野球に——外面的に張つてゐた時代であつたので、この竹内君の抱負は非常な歡迎を受けたのであつた。

併し竹内君は結局理想家であり、主義に忠實な人であつた。理想實現の要求こそ理想をして理想たらしむる最も決定的なるその特質であると考へてゐた。隨つて自らの所信を行ふにはあまりに周圍の無智と傳統とが強くその道を阻止してゐることを知つた竹内君が、僅か二學期にしてその職を去つたのは、如何にも當然のことである。

大學に入學した當初、竹内君は自分の行くべき途についてかなり迷つてゐたらしかつた。「はじめ法學部の政治科に席を**置いて見たが、講義が何れも無味空疎なものばかりで厚みの**ある切實なものとては一つもないので僕は到頭文科に轉ずることにした。倫理を專攻しようと思つてゐる。」私は竹内君が**友人のSに宛てたこんな意味の手紙を讀んだことがあつた。**

其後大學構内の銀杏並木の下を、空を仰ぎ加減にして、しかも頭をば幾分左の方へ曲げた姿勢を取りながら歩いてゆく竹内君に屢々逢つた。そして「此頃やうやく自分の勉强がやれてそれが何よりもうれしい。」などと云ふ話も聞いたことがあつた。

私は去年の冬から身體を惡くして房州に一冬を過した。或る時醫師の診察を受るために上京した時に、私は本郷通りで偶然竹内君に逢つた。竹内君は大變憔悴してゐるやうに思はれた。二人は靜かに話しながら本郷三丁目の四辻まで歩いた。私は自分の症狀と房州での生活を話した。竹内君は新進批評家T氏の無智なことについて駁論を加へたりした。私は竹内君の有つてゐる人間らしい暖みを沁々と感じて別れた。

それから竹内君とは暫らく逢ふ機會がなかつた。私は身體も恢復したので新に居を郊外に移した。そして靜かに書見に耽る日がつゞいた。竹内君が書いた「パリサイ人の復活」や、阿部次郎氏との論爭をその頃かなり面白く讀んだ。

最後に竹内君に逢つたのはこの十月の初旬であつた。私は或る夜友人兩三名と雜司ヶ谷に新進作家のI氏を訪ねたことがあつた。星もない暗い夜であつた。私達は初めての道なのでI氏の家を尋ねあぐんでとある本屋に立ち寄つてゐた時「やあ、君達だつたね、」といふ聲に驚かされた。その聲の主が偶然にも竹内君であつたのである。

「これからI氏を訪ねようと思ふんだが。」

「先刻僕はI氏に道で逢つたが、その時I氏から君達の來ることを聞いてゐた。I氏の所へはかう行くんだよ――否僕が案内してやらう。」

私達ちは竹内君の後から默つて暗い道を辿つて行つた。

其の夜I氏を中心にして私達ちは心から寛いだ。竹内君も戲談などを云つては皆を笑はせたりした。

「僕の所はかうです。夜は大抵居ますからどうぞ訪ねて下さい。」かう云つて、竹内君は紙に地圖を描いて私に渡した。私も自分の新らしい住所を竹内君に知らした。

十二時近くになつて私達ちはI氏の家を辭した。外には冷い程の風があつた。私は安易なそれでゐて何となくもの寂しい心で皆の後からついて行つた。

「卒業後のことを考へると僕は寂しくなるね。」

竹内君はかう云つて私の方を振り返つた。

「僕は君のめざましい最近の活動振りが羨しいね。」

私と同行してゐるM氏は答へた。

私は默つてそれを聞いてゐた。

「でも僕は無精だから結局あれだけの關係に過ぎないのだ。

竹内君は寂しさうに笑つた。

私は竹内君と別れてからも默つてＭ氏とＫ氏との會話を聞いてゐた。竹内君の寂しげに笑つた顔を胸に描きながら。

私は今友人Ｍ氏の病床に侍して之を書いてゐる。氏も竹内君と親交のあつた若い篤學の數理哲學者である。

外には雨が降つてゐる。ジメジメした空氣が、いやに重苦しい。

私は玆一週間計り殆ど不眠でゐるので、頭はもうすつかり疲れ切つてゐる。けれども改造社のＹ氏との約束からばかり、纏りのないこんなものを書いた。竹内君のことについては書きたいことが澤山ある。阿部次郎氏との論爭についても書きたい。けれどもそれは現在の疲れ切つた自分には勝ち過ぎた重荷であるやうに思はれる。兎に角私は今唯友人Ｍ氏の病の一日も速かに恢復することを希ふより外何も出來はしない。もう讀み返すだけの元氣もない。偏へに讀者の御諒察を乞うて擱筆することゝする。（十五日夜武藏野病院十一號室にて）

竹内秀才の心事を悲む

（間貫一、源頼朝、自分の經驗）

近松秋江

去る十一月十日の初夜小石川區高田老松町で行はれた秀才の慘劇は、思つてみるだけでも被害者加害者共に慘鼻の極みであるが、個々の場合を深く窮めてみたならば、如何なる類似の事柄といへども、全然同一の事といふものは此の天地間にないのであるから、一概にいつてしまふことは出來ないけれど、あの樣な慘劇及びそれに類する動機より生じた怨恨といふやうなことは、これまで世間に甚だ類似の多いことであらう。今回の慘劇が特に世人にショックを與へたのは、申すま

でもなく、そんな兇暴なる慘劇が、最高學府の、しかも、人間の行狀品性について是非善惡を究理する倫理學專攻の秀才によつて行はれたからである。自分はそれこれを思ひ合はせ、斯の如き慘劇が決して善であるとは聊かも考へないが、殆ど、それは普通の場合の批評を超越したことで、遂行者がさうと最後の覺悟をしてしまへば何とも致方のない事である。

娘を某に嫁せしめた。某は怠惰漢で末の見込みがないから本人の娘もつく〴〵御亭主に愛想が盡き、娘の兩親は尙ほ更のこと某に見切りを付けて娘を離緣して取戾してしまふ。ところが某の方では何處までも女房に未練があるので幾十度となく兩親に哀願し、後には脅かしたりなどして元の鞘に收まるやうに賴むが、兩親は頑として應じない。さういふ場合に、某の心事は倍々荒寥として胸の傷は何としても癒やすことが出來ない。さういふ心の狀態でゐる時に双方ぎしみ合ひ、昂奮の結果は極度の憎らしい賣言葉、買ひ言葉が一層劇しく胸に喰ひ入り怨恨骨髓に徹して、「畜生どうしてくれよう。」と、こゝに漸く殺意の萠芽を兆す。こんな場合もし、兩親は某と仇の仲であつても、本人の娘が一點……眞に一掬の濕味たりとも某に對して抱いてゐたら、彼の心は大に救はれるのであるが、本人の心が全く某から遠く去つてゐたとしたら、到底行き着く處まで押していつて最後の慘劇に終らざるを得ない。知識階級ならざる階級には比々として此の種の出來事がある。個々の場合は仔細に見たならいろ〳〵異つてゐても、大體そんなものである。

竹内秀才の場合といへども恐らくそんなものであつたにちがひない。無論あの場合には、金錢や財產のことは少しも混つてゐなかつたと想像せられる。竹内秀才は窮極するところ唯單にはる子の心を自分の物にしたかつたのであつたといふことは疑ひを容れない。自分は三四の新聞に散見するところによつて想像するに過ぎないが、たしかにその通りであらうと思ふ。娘の父母を慘殺したといふので、感じがいかにも兇暴で、荒寥としてゐて色彩に乏しいけれども、これも畢竟するに灼熱せる戀愛悲劇である。戀愛悲劇であるが故に自分は竹内秀才の心事に同情の淚なき能はぬのである。直接行動の暴擧は對個人的であつても對社會的の場合であつても、自分の最も反對する所であるが、個人的の憎惡怨恨の感情は――殊にそれが戀愛に關係した場合、異性の問題である場合くらゐ深刻なものはないので、直接行動暴擧は絕對に反對しつゝも、自分は、その當事者の心事を嚙み分けて、一點「無理もない」と思ふことがある。

社會的感情に發した直接行動といふのは、申すまでもなく、大鹽平八郎の爲た事などが最も好い實例であつて、一般世人

の常識から云つたならば、個人的感情によつて暴擧を敢てした者に比較して、前者の方に倫理的價値を餘計に置かうとするのが常である。そしてそれが戀愛の悲劇であつた場合などには、殊に嘲笑的に一婦人の爲に堂々たる男子が自他を害して貴重の生命を果たし醜名を世人に歌はれるなぞといつて、殆ど一と口にケナしてしまふ。

無教養の者の場合と高等知識ある者の場合とは、こんな時に、娘の父母の肉を喰つても尚ほ飽き足りないと思ふ心は同じやうであるけれど、その心の内容が多少相違することは有り得べきことである。殊に高等教育を受け、倫理學を修め、人間の行狀の是非善惡を攻究してゐる者などは反省や洞察が人一倍深刻で緻密である筈だから、同じ兇暴手段に出るにしても、そこに倫理的批判が一層嚴正に明確に自他の言動に對して加へられたらうと思ふ。しかしさうは思ふけれど、何度もいふとほり無教養の者の上にも暫々起る戀愛に絡まる慘劇であつたことは何としても否定する譯にはいかないやうだ。又さう見るのが、竹内秀才に同情するに一番同情し易いことにもなるのである。單に倫理的意味から、嚴正なる批判、つづいてその膺懲のつもりで橋本夫婦を殺害したとか、社會改進の爲めに頑迷なる舊思想の徒を滅ぼさうとしたなどといふのは、あまりにおこの沙汰といはねばならぬ。さて戀愛の感情が變にこじれ、極度の憤激から遂に堪へんとして堪へ切れず、遂に兇行に及んだものであるとして、それまでになるまで竹内と娘春子との感情の交渉はどんなものであつたか、それも吾々直接關係のない者には、いさゝかも知る由もないが、貴重な一命を棄てゝあれほどの慘劇を敢行するくらゐだから、二人の關係は相當深かつたものであつたと想像される。

一體許嫁（いひなづけ）といふことが、そも〳〵可くないことで、尤も竹内と春子との場合は、竹内の方で深く春子を思つたものとすれば、竹内にとつては初めのうちだけは許嫁が不都合を招來しなかつたかも知れぬが、最後があんなことになつてしまつたのでは、やつぱり許嫁といふことが不可であつたといはざるを得ぬ。無論その相談が双方の親達の間に成立した時分には少くとも一方の竹内の方は相當思慮の熟した青年であつたから、當人の意思をも篤と訊いてみての上で爲[illegible]相談であつたらうが、片方の娘春子はまだほんの子供であつた。そこにもう一つの最も大なる破綻の原因が伏在してゐた。前にもいつた如く、あんな場合たとひ兩親の意向はどうであらうとも、當の本人同志さへ感情が一致和合してゐたなら、そして意思が堅かつたならば、いかなる他からの障害をも斥けることが出來るのである。然るに最初からもう娘春子の意思は親達によつて左右されてゐた。そして竹内が、段々橋本夫婦の期待に

反し、その氣持ちと相容れぬやうになるに連れて春子は又兩親の氣持ちに同化されてしまつたやうである。それとも彼女は父母と反し最初から竹内を好まなかつたのか。まさか、さうではなかつたらう。否な此の少女が追々物心が付くに從ひ、きつと一度は春子自から竹内を愛する心になつてゐたに相違ない。それ故にこそ、竹内の心では、たとひ兩親と自分とが氷炭相容れぬ仲となり、感情の確執があつても當の春子は自分の方に心を寄せるに違ひないと思つてゐたかも知れぬ。

生活上の狀態や、その他の境遇にいろ〳〵の違つた處は多いが、やゝ竹内と春子との場合に似た、著名な、文學上の事件としては例の「金色夜叉」の間貫一とお宮とがある。又日本歷史上に有名なる人物の逸事として源賴朝の若い時にそれに類例した事があつたのは人の熟知せる所である。

貫一も賴朝も遺恨骨髓に徹したが女の兩親を殺害しはしなかつた。こんな場合怨む者を殺害したからといつて、殺害を敢てした今回の竹内の方が貫一や賴朝の無念憤怒よりもその深度が高いとは必ずしも云へない。否な或はその反對に直接行動の復讎を敢てしない者の方に或は一層怨恨憤怒の感情が深く内訌する場合もあらう。しかし貫一は幾度びか自殺を思つたか知れなかつたが、その自殺をすることも出來ず、却つて自殺を断行する勇氣があれば、此の懊惱はせずとも濟むであらうにとさへ思つて慨き悔んでゐる。お宮の兩親は、春子の兩親橋本夫婦と異り、初から眞綿で首を締めるやうな、飽くまでも婉曲なる態度で貫一の手から、一旦與へたお宮を奪ひ返さうとしたのであつた。けれどもいくら婉曲なる態度であるにしてもお宮は遂に貫一から取り返されてしまつた。貫一の恨み知るべしである。彼は遂に一婦人の爲にその前途多い一生を棒に振つてしまつた。竹内の如く殺人は敢てしなかつたが、その爲に高利貸しとまでなつてしまつた。實に金が敵の世の中であると骨に徹して知つたのである。

よく貫一とお宮とは許嫁の仲であり一旦は相思の仲であつたが、貫一とお宮とはもう肉體上の關係があつたらうか、どうであらうなどといふ物好の讀者があつたものだが、今度の竹内と春子とはその點はどうであつたか。それは外部から知るよしもないが、もしそんな關係でもあつたとしたら、いよいよ以つて春子はあまり賢い女性とはいへない譯である。けれども、そんなことはなかつたやうにも思へる。しかし、そんなことはまあ何うでもよいたゞ世上には竹内と春子以上にもう深い情交がありながら終ひには之に類する慘劇を見る例が頗る多いのであるから、竹内が、果して若しそんな關係もなく、只管橋本夫婦の剛情、冷酷、食言を怨み憤つた一時の感情に驅られて爲たものとすれば、（これは竹内の眼に映つた

ものとしての）何としても、あまりに兇暴であり、又餘りに思慮が無さ過ぎ、あまりに意志の制止力が足り無さ過ぎ、あまりに陰忍といふものに缺けてゐた。

陰忍！。自分はかういふ場合は陰忍といふことが最も大切であると思ふ。その陰忍の最も好い實例は卽ち源賴朝の場合であつた、賴朝が伊豆國に流罪せられてゐる時分その國の豪族伊東祐親に賴つて居つた。祐親には四人の娘があり、その三人めの娘と兵衛佐と人を忍ぶ仲となつた。すると娘はいつしか兵衛佐の胤を宿し、生まれたのは玉のやうな男の子であつた。兵衛佐は殊に悦んで寵愛してゐた。字を千鶴と呼んでゐた。それがやう〳〵三歳になつた春の頃、乳母に懷かれ、多勢の幼いお供などを具して前栽の花を折つて遊んでゐると、祖父に當たる祐親が丁度京都の大番が果てゝ東國に歸つて來て、ふとその幼い子供を見付けて、『その子供はどうした子だ、たれぞ。』と訊ねた。傍に付いてゐた乳母は、卽座に答ふる術を知らないで、自分はその場を向ふに逃げてしまつた。祐親は家に入つて、妻女にそれを訊ねた。妻は隱さんよしもなく『あれぞ、入道殿が京洛に上つておはす留守の間に三女がさるやむごとなさ殿との仲に設けたる幼き者にておはす。』と、實を明かした。祐親入道は怒つて、『誰れぞ、そのやむごとなき殿とは。』と責め問うた。『兵衛佐殿。』といふを聞いて祐親はます〳〵立腹し、今平氏全盛の折柄、商人修行者(しようにんしゆぎやうしや)など名もなき者を男にしたといふならば却つてそのまゝにさし置いてもよいが、源氏の流人を此の祐親が婿にとつたと知れては平氏の咎めのほどが恐ろしい。といつて、雜色三人、郞黨二人に嚴命して、やう〳〵三歳になつた可愛さかりの千鶴をば縛して水底に沈めて殺してしまつた。そしてその母親なる娘を同じ國の住人江間小次郞なる者に嫁せしめた。兵衛佐の憤りと悲しみと思ひ知るべしである。愛兒は慘殺され愛人は奪はれて他の男に與へられた。萬事が專制主義抑壓主義のその時代のことであるが、賴朝はつく〴〵と流人の身の甲斐なきを悲み歎いたことであらう。彼は激怒の情止み難く、祐親入道を討たんと思ふ心、千度百度も逸つたけれど、そのたび毎にぢつと煮え立つ胸を撫でて、無念の頭を振り、『いや〳〵自分は大事を思ひ立つ身である。その事を成さずして、今一婦人の事を以て私の仇を報じ、身を亡ぼし命を失ふ事愚かの至りである。大なる志ある者は、少しの怨みを堪へねばならぬ。』と、吾れとわれを制止し、無念の齒を噛んで時節の來るのを待つてゐた。

賴朝の如き男性的の英雄偉人とて、やつぱり凡夫と同じ煩惱はあつたに相違ない。それを賴朝は陰忍した——。賴朝の如き意思の人間を例に引いて來て何故その通りに出來な

かつたかといふのは少しく比喩を失してゐるやうであるが――頼朝の憤恨は、祐親入道を討ち果たして當座の無念を晴らさなかつたからと云つて、必ずしも、橋本夫婦を慘害して無念を晴した竹内秀才の場合の方が、その憤恨が一層深刻であつたとは斷言出來ない。成程祐親は頼朝に娘を嫁せようと約束したものではないから食言といふことはなかつた。橋本には食言といふ背德（といへば、いはれるやうなもの）があつた。けれどもそれが爲に祐親入道の場合より一層怨み強く、彼れ討つ可しといふ理由は加はらない。寧ろ祐親の取つた爲方の方が遙に殘忍であつた。少しく主題を離れるやうであるが、興味あるまゝ、もう少し源頼朝の事をいはう。「源平盛衰記」に尙ほ次のやうなことがある。

入道が子息伊東十郎祐兼に兵衛佐に申しけるは、

『父入道老狂の餘り、便なき事をのみ振舞ひ候ひし上、猶ほも惡行を企てんと仕る。心の及ぶ處制止仕れども、若し思ひの外の事もこそ出でき侍れ。立ち忍ばせたまへ。』と申しければ、兵衛佐は、

『嬉しくも申したり。是れ年來の芳心也。入道に思ひ懸けられては、いづくにか遁るべき。身に誤なければ、自害をすべきにも非ず、只命に任せてこそはあらめ。』とぞ答へける。

大鹿毛といふ馬に乗り、鬼武といふ舍人ばかりを具して夜半にぞ遁れ出でける。道すがらも『南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽ちに捨て給はず、征夷將軍に至つて朝家を守り、神祇を崇め奉るべし。それ猶ほ叶ふべからず、伊豆一國が主として、祐親法師を召捕つて、其の仇を報い侍るべし、いづれも宿運拙うして神恩に預るべからずば、本地は彌陀如來に御座します。速に命を召して、後世を助け給へ。』とぞ祈誓し申しける。

そして頼朝の戀の憤怒は此の一度ばかりではなかつた。伊東祐親を遁れて北條時政に投じ、又時政の娘と通じた。時政も祐親と同じく平氏の咎めを恐れてその娘を奪つて他の男に與へた。けれどもその娘は、先の祐親の娘と異り佐殿を想ふ心が殊に深かつたので輿入れのその晚新夫平兼隆の館を夜にまぎれて脫出し頼朝の許に身を寄せた。兵衛佐は此處に始めて戀の勝利者となつた。彼は政治家として又武將として七轉八起の波瀾を凌いで來たが、戀のローマンスに於ても亦たさういふ數々の憂き目を見てゐるのだ。事情は多少の相異はあるが、竹内の春子、貫一のお宮、頼朝の祐親の娘、此の三人の女性は一人の北條政子と異つてゐた。政子は凛然として自分の意思を持つた婦人であつた。お宮は後になつてあの通り後悔してゐる。祐親の娘についてはそれ以上に多く知る所がない。當面の橋本春子についても多く知らぬが、彼女の今度

の惨劇に際しての役廻はりは外見如何にも意思のない、泥工の坊のやうな、食ひ足りない女性と見えるが、彼女もきつと後には竹内の性情を忌み嫌つたのではあるまいか。必ずしも父母のいふがまゝになつて竹内を避けたのではない、自分からも竹内を嫌つたのであると思ふ。それは、どうも竹内の性癖が招いた自業自得といはざるを得ぬ。新聞紙の記事のみでは當てにならぬが、竹内の性癖に、天才肌の人間に、得て有り勝ちな偏執な處や、剛情な處や、又女からいつて何となく面白くもない、好かない男といふやうな處が多くあつたのではないか、果してさうであつたとすれば、それは何うも仕方のないことで、女に嫌はれたのは男彼れ自身の不覺、砕いていへば色修養が足りないのだ。況して素人娘の、世間を知らない普通良家の児女であつてみれば、たゞ優しい深切な温情の籠つた、その上美男子を好くのが通り相場である。北條政子の如き巾幗者流に稀れに見る、目先きの利いた意思の女にして並はづれた男を選定するのだ。時は平氏の天下、祐親や時政の如き武人ですら危險視する流人の頼朝に何處までも心中を立て通したといふのは、どうして何うして大變な大賭博を打つたものだ。そんなことはお宮や春子には望めない。

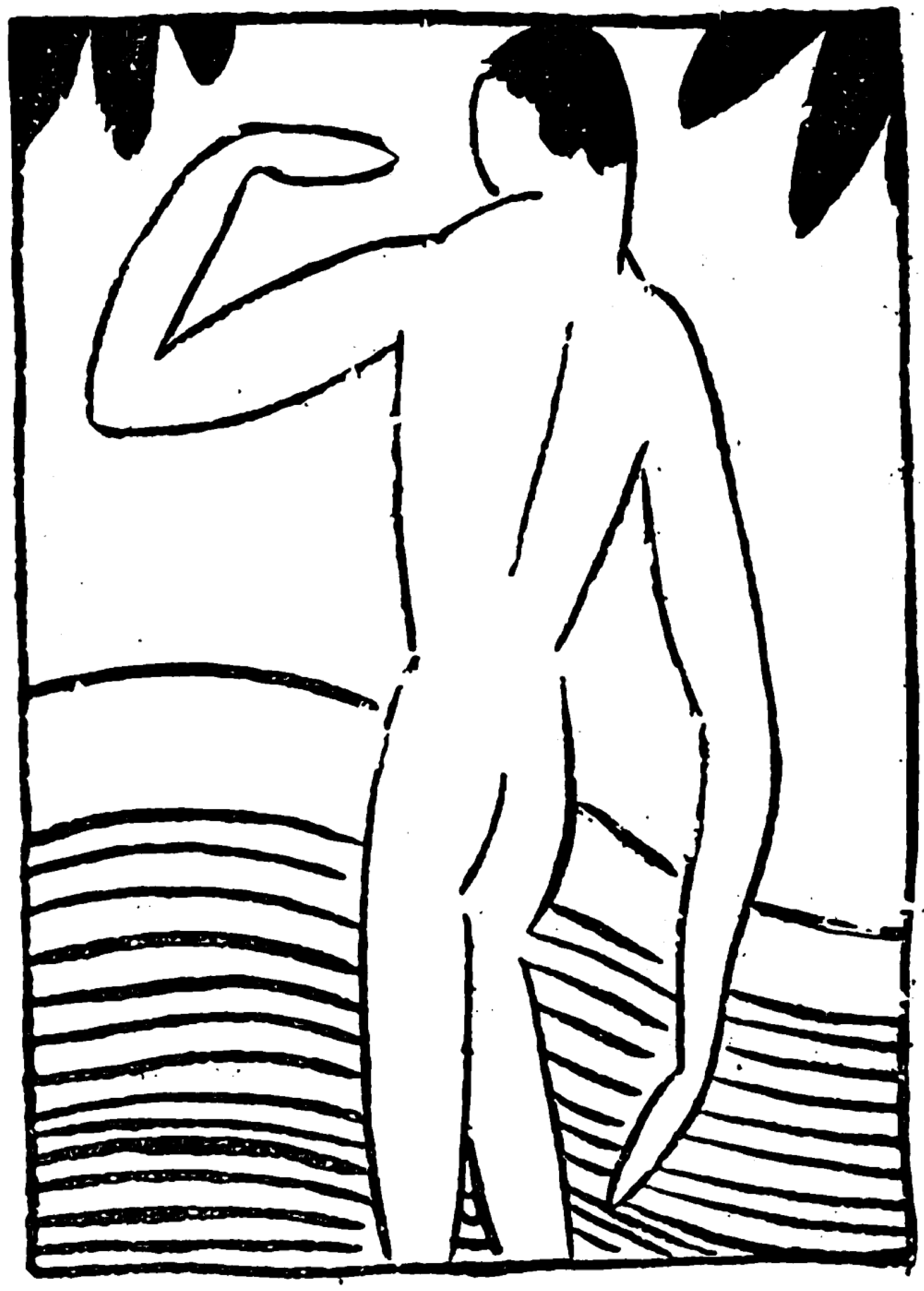
それから又斯ういふこともいへる。竹内は眞個に春子を心から愛したであらうか、それは凡ての物を犧牲にすることを厭はない、唯一人の春子さへ得れば吾が生涯の望みは足るといふまでに春子を自分の物にしたかつたであらうか。若しその通りであつたならば、如何なる陰忍をしても屈辱に甘んじても他の凡ての自我を殺して、春子を自分の物にする爲めで彼女の兩親の前に從順であるべきだ。しかし竹内にはそんなことをする氣は少しも無かつたらう。女の兩親に對して動ともすれば高壓的な態度で臨みながら尙ほ且つその娘を得ようとしたのであらう。それでは若し春子に少しの蟲でもあるなら、自分の親を粗末に思ふやうな男は頼母しくない、厭だといふ氣にもなるであらう。

竹内と春子との場合は、度々云ふ如く、自分は何等の委しい内情に通ぜぬのであるが、何としても竹内は餘りに若氣の至りであつた。世間に傳ふるところによれば、彼は思想界の新人であつたといふが、書籍と人間の實生活とは又別物である。空想の世界ばかりに住み馴れたハムレットが一度現實世界の幻滅に面して爲す所を知らなかつたのにも類してゐる。ハムレットが身を滅したとほりに竹内も遂に現實に打つかつて身を滅ぼした。けれどもハムレットの運命は十重二十重に彼の身を纏うてゐて、あれ以外に爲すべき術はなかつたのだ。竹内秀才の事情は遙に簡單である。それくらゐの憤りや艱難を陰忍し踏み越して進むほどの意思や耐忍力が無くして何う

する。

喧嘩をしつゝ人の娘を貰はうなどと思ふのは餘りに人を馬鹿にしてゐる。いくら舊式の頭の持主であつても人間には皆な蟲がある。眞實に女を愛する心が深いものならば、その兩親の爲に履物を揃へるくらゐの忍辱がなければならぬ。一人の婦人の爲に人を殺し自分も死ぬほどならば餘程一本氣に思ひ詰めてその女に愛着してゐたものと見なければならぬのだが、それほどまでに強い愛着があるならば、自分の他の自我を抑制してその女を得ることに努めねばならぬ。それはせず、毎時も驕傲な顏をしてゐて人の親の手からその愛兒を獲得しようとする、昔の暴君と雖もしなかつた、極めて愚かな方法である。新思想、自由思想の先驅たらうとする者の行爲としてこれくらゐ矛盾したことはない。

竹内の殺人及び自殺の原因が、私の贔屓目に見る通り專ら戀愛にあつたかどうか知らぬが――、私は強ひても戀愛であつたと解釋するのが一番同情のし易い事のやうに思ふのである――。そして果して戀愛であつたとすれば、彼の戀愛に對する修業や實に齒痒いほど幼稚なものであつたといはねばならぬ。そも〱戀愛といふものは實に神變不可思議なもので、生きた人間の心理を捉むのである。そして戀愛の場合くらゐ人間の心理が、男女に係らず、機微に活潑に動くものはない。高が一婦人を對手にするなど何でもないことのやうであるが、その實兩性の關係がうまく調子が合はなかつたら、高等學校の入學試驗や大學の卒業論文などに比べて其の難易到底一日の談でない。昔時は前述の如く源頼朝の如き大政治家の武將でさへ悲戀の苦味を認か嘗めてゐる。失戀は必ずしも恥辱ではない。自分など餘程女の親を殺さうと思つたことが幾度もあつた。而してそれを爲ずに過ぎたからといつて、その悲憤の程度が低かつたとは斷じて思へない。何處を突いても自分の體は戀愛で鍛へ上げた體のやうな氣がしてゐる。竹内秀才などはまだ〱戀のイロハだ。



婦人生理學講座

（三）

内分泌と生殖腺（上）

醫學博士

永井潛

昔の哲學者や生物學者の中には至靈至妙の人間の體を、至靈至妙の宇宙になぞらへて、後者を大宇宙と云ふに對して、前者を小宇宙と唱へた者もある。今、六尺の小宇宙を取つて之を大宇宙に比較すると、五臓・六腑は、某の州某の國である。各種の臓器を構成せる組織・細胞は、某の市某の町某の村である。そして斯等の各臓器に普ねく分布せる大小の血管・淋巴管は、海洋・河川・溝渠である。そして又、其の中を循環しつゝある血液・淋巴液は、實に水に比すべきものである。而してナイルの氾濫が埃及の文物を培ひ、黄河と揚子江の波が支那の典章を發揚した樣に、世界文明の潮は、皆な水から湧

き出でる。然り、小宇宙の水である血液によつて、あらゆる靈妙なる生活機能の源泉が與へられて居るのである。

試みに地球儀を取つて廻轉して見よ、五大洲を結び附けて居るものは水ではないか。日本橋下の水は直に倫敦橋下の水に通じて居る。さうして幾萬條の黒煙、幾億片の白帆か、西に、東に、南に、北に、其の間を往き來して、有無相通じ、長短互に補ひ、彼是共に利して居る。夫れと同樣に、生活體の細胞・組織・器官の間に瀰蔓循環して夫れを結び附けて居る血液・淋巴液の中にも亦、幾多の聯絡機關が浮べられて居る就中其の主なる物は、特殊の化學的成分である。斯の化學的成分は、體の一定の器官に於て造られて、夫れが血液中に賦與せられ、循環して他の組織器官に到達すると、特殊の化學作用によつて、當該組織・器官の働に著く影響するものである。恰も、甲なる港を出帆した船が、乙なる港に到着して其の市場を賑はすと同樣である。斯くて甲なる器官と、乙なる器官との間に、密接なる聯絡が保たれて、全身の生活機能の統一調和の基を成すのである。此の特殊の任務を帶ぶる化學成分を「ホルモン」若くは內分泌物と云ひ、內分泌物が特殊の腺で造らるゝ場合、斯の腺を內分泌腺と唱へるのである。

「ホルモン」とは蓋し希臘語の『喚び醒ます』と云ふ語原から取つた名稱で、一定の臟器に於て造られた化學成分が、他の一定臟器に到達して、其の機能を覺醒亢進せしむることを意味するのである。次に內分泌物てふ名稱は、多くの腺に於て汗腺や乳腺が、其の分泌物たる汗や乳汁を、體の外表に送り出し、又た消化に關係せる諸腺が、其の分泌物を腸胃の內面をなせる粘膜に注ぎ込む樣に、其の分泌物を、導管によつて體の內外の表面に送り出すもので、卽ち所謂外分泌を行ふものであるに反して、內分泌腺にあつては、導管を具へず、隨て已れが造つた分泌物を、體の表面に送り出すことの代りに、直接之を內方卽ち血液若くは淋巴液內に賦與するから起つた名稱である。

抑々生活體に於て見らるゝ美妙なる生活現象は、其の統一調和あるに因つて始めて喚び起さるゝものである。斯くて生活體は、各自獨特の性狀を有せる無數の細胞から出來て居りながら、其の間にしつくりと相關・聯繫が保たれて、よく自己生存及び種屬保續と云ふ通有の二大任務を果たすべく協心戮力して居る。而して斯の完全なる統一調和を期する爲には、何等かの手段がなくてはならぬ。恰も多數の民衆が相集

つて一國を形成し、相倚り、相扶け、安寧を保ち秩序を亂さぬ樣にする爲には政府があつて法政を運用し、有形無形の交通機關を整へ、意志の疏通を圖り、物資の配給を圓滑にし、人々をして各其の生を樂ましむると等しく、生活體に於ても亦、其の全身を主宰し、統括し、體の各部をして緊密なる聯關を保たしめ、其の一部に變動あれば、直ちに之に應じて他部にも亦必要なる變動を喚び起して、よく之れに順應せしむる樣な手段がなくてはならぬ。其の手段として、吾等は二を擧けることが出來る。即ち其の一は神經系であり、他の一は内分泌腺によつて送らるゝ「ホルモン」である。

神經系を見るに、神經中樞、(腦髓脊髓)及び末梢神經から成つて居り、末梢神經には、知覺性及び運動性の二樣の神經纖維があつて、普ねく全身に行き亙つて居て、或は末梢部に於て受けた刺戟により知覺神經が興奮して、之を神經中樞に向ひて傳達し、或は又た中樞部に於て起つた衝發を、運動神經により筋肉に傳へて運動を起さしめる。其の關係たるや、恰も國家に中央政府があり、其の下に種々なる官署があつて密接の關聯を保ち、或は上申し來る報告を受け取り、其の狀況に應じて適切なる訓令を下達し、政治に遺算なきを期すると同樣である。斯くて神經系が、全身の統一調和の上に、多大の貢獻をなしつゝあることは、一點疑ふの餘地がないが、併し神經系のみが、其の唯一の手段ではない。蓋し神經系は高等動物に於て始めて十分に發達するもので、下等動物や植物には、全然見られないか、或は其の發達程度は極めて幼稚である。夫れにも關らず、茲にも亦生活機能の十分なる統一調和が保たれて居るのを見ても、神經系以外に、更に第二の手段の存在することは明かである。

斯の第二の手段たる物は、即ち内分泌物である。今「ホルモン」と神經系とを比較して見ると、神經系は、其の機能が敏感活潑であつて、臨時的に感應を行はねばならぬ樣な場合には、是非之を必要とするが、併し敏活である丈け夫れ丈け疲勞し易いから、持續的に絕えず感應せねばならぬ樣な場合には、不適當である。之に反して「ホルモン」の場合には、血液中に賦與せられたる特殊の化學成分が、其の特殊の化學作用によつて、一定の器官の機能を喚び醒ますのであるから持續的耐久的である。從つて外來の刺戟を五感器に受けて、之を認知し、適當なる反應を起すが如き敏活なる行動は、どうしても神經系に賴らねばならぬが、之に反して、食物の消

化に際し、引き續いて消化液の分泌を行ふが如き場合は、神經系によるよりも、寧ろ「ホルモン」による方がよい。空中を飛翔する飛行機の輕快迅速は、卽ち神經系の働に比すべくんば、悠々大洋を濶步する船舶は、卽ち「ホルモン」である。斯く此の兩者には互に一長一短はあるが、調和統一の手段として、共に必要缺くべからざるものである。

內分泌を行ふ內分泌腺は、乳を出す乳腺や、唾液を出す唾腺等の樣に、腺の構造を具へて居るが、但し乳腺や唾腺と違うて、分泌物を表面に導き出す爲の導管を具へて居ない。そこで之を「導管なき腺」とも呼んで居る。今、內分泌腺が、如何に重要なる影響を生活機能に及ぼしつゝあるかを、一つの例に就て述べて見たい。喉の甲狀軟骨卽ち俗に喉佛と稱するもの〻兩側に、甲狀腺と云ふ內分泌腺がある。此の甲狀腺が、先天的に發達不十分であるか、或は後天的に病に罹つて、其の機能を廢すると、身體にも精神にも甚だしい病的症狀が現はれて來る。就中、皮下の組織が變性して、粘液狀に陷り、爲に浮腫を呈することが目立つて見えるから、之を粘性浮腫と唱へる。其の他一般新陳代謝は減退し、皮膚は榮養が惡しき爲甚しく乾燥し、且毛髮は光澤がなく、脫け落ちる。生殖腺は萎縮し、血管は硬變し、隨つて一般に榮養物の配給が不都合となる。殊に神經系の作用が衰へ、運動は不活潑となり、精神は鈍麻する。又た傳染病に對する抵抗力が弱い。若し又先天的に甲狀腺の發達しない子供では、赤ン坊の時、已に鼻が如何にも普通より扁平であることに心附く。又た一般に赤ン坊はよく眠るものではあるが、併し普通以上に甚だしく嗜眠性を呈し、空腹になつても醒めることをせぬ。生後數ケ月を經過する中に、普通の子供に較らべて、生長及び智慧の進み方が大に遲れることに氣附く。又舌が馬鹿に大きく、いつも口の外に食み出て居る。斯くて年月を重ねても身長が延びないで、侏儒の狀を呈し、精神の働も進まないし白痴に陷る。斯る病狀を呈する者に「クレチニスムス」と云ふ病名が附けられて居る。「クレチニスムス」は、屢々地方的に多數に來る場合が多い。歐羅巴では瑞西が夫れである。吾が邦でも臺灣の一部落に於て其のことが見附かつた。

人間に於て見られたこの自然的の病症は、動物に於て、實驗的に甲狀腺を手術によつて取り除く場合、確かに喚び起される。卽ち同一の母犬から生れた二匹の幼犬に就て、一匹の方には甲狀腺を切り除き、他の一匹は其の儘にして、食物其

の他の狀態を同一にして育てゝ見ると、甲狀腺を切り取つた方の犬は、甲狀腺のある方の者に比らべて、心身の發達が著しく遲れ、倭少となり、遲鈍となり、一般に榮養が衰へ、凡て人間の「クレチニスムス」に見らるゝ樣な症狀が現はれて來る。人間でも、甲狀腺が病的に大きくなり、空氣の通ふ氣道を壓迫して呼吸困難を起す樣な場合には、止むなく外科手術によつて悉く之を切り除かねばならぬが、斯る際手術後は粘性浮腫を起すものである

而かも斯樣な甚しい病的症狀も、其の人なり動物なりに甲狀腺を喰べさすなり、或は甲狀腺を磨り潰ぶして食鹽水等に溶かして得たる液汁（甲狀腺エキス）を、繰り返して注射して居ると、奏效神の如く、美事に退散して、身長も延び浮腫も消え、智慧も進んで來る。是れ誠に驚くべき事であつて、各種の臟器を使用して疾病を治すと云ふ臟器療法なるものは、玆に最初の又た最良の成績を以て、實行せらるゝに至つたのである。

由是觀之、上記の著しい甲狀腺の缺損する時起る症狀は、甲狀腺がないことが直接の原因をなすのではなくて、甲狀腺內に造られて居る或る特殊の化學成分が缺乏することが其の直接の原因をなすものであると云はなければならぬ。即ち生理的常態に在つては、甲狀腺から、一定の內分泌物が造られ、是れが絕えず血中に送り出されて、發育榮養等の機能を行ふ上に、大切な役目をなしつゝあるものであるが、一朝甲狀腺が病に罹るか、或は切除されて、此の大切な內分泌物が缺如すると、發育や榮養に病的狀態が現はれるのである。隨つて敢て甲狀腺其の物でなくとも、單に此の內分泌を人爲的に補給しさへすれば、其の病症を治することが出來るのである。

そこで、斯く心身の機能に深甚なる影響を及ぼす甲狀腺の內分泌物が、不足若くは缺乏する場合、烈しき病症を起すものとせば、其の內分泌物が過多なる時も亦、生活機能の變調を起し、而して其の病症は、上述せし甲狀腺內分泌物缺乏の症狀とは、正に相反すべきである。果然、此の推定は事實に的中した。其の發見者の名譽の爲に、グレーブ氏病若くはバゼドウ氏病と稱する病氣がある。此病は、甲狀腺が肥大して、其の內分泌作用が普通以上に高まる爲に起る病氣である。其の症狀を見ると、上記粘性浮腫や「クレチニスムス」の症狀とは正反對であつて、後者が運動知覺や精神が甚だしく遲

鈍となり、嗜眠に傾くに反して、前者は之れが著しく過敏となり、往々不眠を示し、其の極精神病者となることがある。又た後者は、脈搏が小さく遲く、皮膚が乾燥し、體溫低く、新陳代謝は衰へ、食慾少なきに反して、前者は、脈搏大にして早く、皮膚は濕潤して發汗に傾き、體溫は動もすれば上昇し、新陳代謝は過度に高まり、多食しつゝ而かも削瘦する。是に由つて觀るも、內分泌物は其の有無の關係のみならず、其の量的關係が大切な意味を有するもので、過少なる時も、過多なる時も、共に病を惹き起すもので、適當の分量が血中に賦與せらるゝ時、始めて健康を維持するものたることを窺ひ知ることが出來る。

以上は甲狀腺なるものゝ內分泌に關する事實の概要であるが、是に由つて見るも、如何に內分泌腺の機能が、生活現象の上に頗る重要であるかが分かる。其の他副甲狀腺・腦下垂體・松菓腺・胸腺・副腎・膵臓等は、何れも皆內分泌腺に屬するものであり、而して又、生殖腺も此の一に數ふべきものである。是れ等內分泌腺は、夫れぞれ特殊の働をなすべき內分泌物を迸り出して、何れも大切なる任務を遂行しつゝあるのであるが、而かも其の際各內分泌腺が、單獨に作用するのでなく、甲なる腺の內分泌物は、乙なる腺の內分泌物とは互に協力し、之に反して、丙なる內分泌腺の內分泌物とは、互に相反對せる働をなすと云ふ風に、互に、密接なる關聯を保ちつゝあることは、最も注目に値する。殊に生殖腺の內分泌に於て、夫れ等の關係は最も興味を唆るものがある。以下筆を改めて之を述べて見たい。(以下次號)

結婚の幻滅

北川千代

私が鵠沼の家を離れてから、もう恰度一年半經つた。あの當座こそ、好い加減な新聞記事や、何にも知らない人達の憶測や、又は世間的の見得の爲にする男の僞やに、可成腹を立ててゐた私も、もう何にも氣にならなくなつた。何と云はれても平氣で居られるだけの幸福の中に、いまの私が浸つてゐるからである。從つて書く興味も殆んど無くなつてしまつた。もう過ぎた事なんぞ何にも云ひたくないやうな氣持がする。江口氏も幸福になつた、私も幸福になつた、それで好い……………さう思ふと、ただでさへかうしたものを書き慣れない私は、もう書くのが面倒になつて來るのだ。

しかし、慣れない私だと云ふ事を知つて特に江口氏以上の頁數を與へようと云つて下すつた女性改造の編輯者に對して私は今更違約は出來ないのである。その濟まなさと、これに依つて得る原稿料のこととが、進まない私の筆を漸く運んでゆくのである。

江口氏と私とが別れなければならなくなつた原因は何か。かう考へると、私にさへこれが原因だと云つて摑み出すものはないやうな氣がするのだ。判つてゐるやうでその實判つてゐないやうな氣がするのだ。しかしかうなつた一番の原因は矢張性慾の不一致といふ點にあるのだらう。それから二人が共通のある種の病氣に犯されてゐたこと、私が江口氏の生活に對して不滿を感じて來、段々氏に對する尊敬を失つて來たこと等であらう。その他のことはそれらの原因から發した、枝であり花であるやうに思はれるのである。

二人の結婚前のことから話さう。そこにもかうなる何かの種がまかれてゐるやうな氣がするから……

二人はとにかく愛し合つて結婚したのだ。初めて顏を見合せてから一ヶ年半（私にとつてこの最初の印象があまり好くなかつた。第一印象の好くなかつたといふことも何かの原因をしてゐると云つた人があるから一寸記す）手紙の往復をし初めてから十ヶ月經つてゐた。その間には無論往き來もし、

話も充分取り交した筈である。しかし、結婚に對する二人の態度と知識とは、可成違がつてゐた。私にはその頃、何故か二人の結婚に對して、將來の不吉な豫感があつた（是はその時は江口氏に笑ひ捨てられ、又自分でも何の理由のない事なので打ち消してしまつたが、別れる前に江口氏がこのことを思ひ出して、お前の豫感が當つたねと云つて笑つた）それと結婚生活と云ふ未知の世界への小さな恐怖から、二人が夫婦になると云ふことには、可なりためらひ勝ちであつた。私は妻とするよりも妹のやうな友達にしておく方が適當な人間だと江口氏に幾度と云つたことがある。しかし江口氏は聞いてくれなかつた。戀愛と云ふものは結婚に到達するのがほんとうで、さうでなければ遊戲になるのだと云はれて……それは實際さうに違ひないのだ……その頃は何もわからなかつたけれど、江口氏の云ふことはみんなほんとうだと信じてゐた時分だから、さうしなければいけないのかと思つてゐた。

　しかし、そんな餘裕のあつたのも、私にまだ結婚に達するほど心が燃え上つてゐなかつたと云へば云へよう。江口氏の炎の反射を自分自身が燃えてゐるやうに思つてゐたのかもしれない。

　それに私は、結婚と云ふもの、夫婦と云ふものの生活をほんとうに知らないでゐたのだ（何といふ馬鹿だらう、これは私がわるいのだ）たゞ不安だけを感じてゐたのだ。私は江口氏のやうな人の傍で、本を讀んだり勉強をしたりすることが嬉しかつたのだ。兄さんの壓迫の下で（私の長兄は非常に横暴な非常識な人だつた）戰爭をしつづけてゐるのが堪らなかつたのだ。二人きりの靜かで自由な生活がしたかつたのだ。それで不安を感じながらも、何も彼も俺を信じて俺に縋つてゐれば好いと云つた江口氏の言葉に總てを賴んでゐたのだ。妻としての準備、結婚に對する準備を一つも持たずにただ綺麗な空想をして結婚生活に入つた私が、その第一日で幻滅を感じないわけがない。私の最初のつまづきはここにあつた。

　二人は結婚すると間もなく江口氏の國へ行つた。そこで私は、今まで江口氏のうしろに隱されてゐた世界の人々と親しく接觸しなければならなくなつた。ほんとうにその世界の人達は、今までの私の生活には且つて見ない人達であつた。すべて官僚的でそして階級的だつた。江口氏だけを知つてゐた私はその家庭に入つて少し慌てた。（しかし今では江口氏もかう云ふ家庭に育つた人だけあると思つてゐる）私は純然たるお嫁さんであつた。それも行き屆かない實家を持つた（事實私の生家では行屆かなかつた、長兄が結婚に反對だつたので、あらゆる妨害を加へたのだ）支度の乏しい嫁に過ぎなかつた。私はこの時初めて生家の母が、着物や何か支度のことを氣に

してゐた心掛が分つた。結婚の成り立が成りたちだつたのと期日が急に早くなつたのとで私は殆んど式服だけで行つたのであつた。しかし子供の時から着物のことなどには無關心でゐられるやうに父から育てられてゐた私は、殊に兄の壓迫の下から逃れたかつた私は、そんな事は少しも氣にしないでゐたのであつた、氣にしないことが『あたりまへ』のことだつたのだ。しかし江口家では、それは『あたりまへ』では通らなかつた、江口家にゐて着物のことを無視すれば、それは『負け惜しみ』を云つてゐることになるのである。殊に、私のやうに何にも持つてゐないものは、尚更さうなるのである。

『千代子は初め物質上の慾のさらにない人間だつたが、中頃からだんだん變つて來た』と江口氏はTに語つたさうである。それは幾分變りもしよう、江口家ではそれは『つきあひ』の必要品だつたのだ、そしてそれが如何につまらない事だと云ふことを、江口氏は誰にも云はうとしなかつたではないか。『あの着物を着ろ』『あの帶をしめろ』江口氏は一々世話をやいて、よく私を五月蠅がらせたではないか。私は江口氏が、着物のことにあんまり細かいので、意外に思つたほどだつた。私は今になつて、江口氏からさう云ふことを云はれることを可笑しく思ふ。

話が少し横に反れた。

私は四月になつて、江口氏の迎ひを受けて上京した。そこには二人きりの小さい家があつた。二人の生活はここから新しく開けてゆく筈であつた。しかし二人の知らない間に、いつか怖ろしい病毒は二人を犯してゐたのであつた。樂しかつたのはほんの僅かの間で、二人はお互ひに何ともしれぬ物憂さと焦立しさの爲に、好く小さな喧嘩をした。

病氣だと云ふことが判つたのはその年の秋でもう可なり酷くなつてからだつた。私は醫者にその事を聞された時倒れさうになつた。私は俥に乘せられて家に歸つて來たが、その時の私の顏は死んだ人のやうに眞青だつたさうである。

私はこの病氣について江口氏を咎めようとは思はない。どんな心持の綺麗な人であつても、運がわるければ病氣になるのだし、江口氏はもう治つてゐると思つて結婚したのだから……そしてその病氣を私にうつしたことに依つて、どんなに苦しんだか知れないのだから……しかし幼い私の心が、それに依つて碎かれたのは止むを得ない。私は江口氏の人間を信じ、理性でそのことをゆるしながら、感情ではゆるすことが出來ないでゐたらしい。時々思ひ出して寂しい氣がしたから。

すべての禍はその病氣から根ざしてゐる樣にも思はれる。

私は江口氏に對し、結婚に對して、幻滅を感じたばかりでな

く。その病氣の爲に健康をすつかり害してしまつた。私はその病氣が少し好くなりかけると、注射の間を婦人科の病院へ通つた。私は結婚してゐる資格はもう無いのかしらと一時は思つた位だつた、結婚してゐるのも苦痛だつた。その病院へは二三ケ月通つたが、そのうち私の母が死んだごたごたに紛れてしまつたのと、お金がつゞかなかつたのとで、大したこともないのでやめてしまつた。

江口氏の永年の神經衰弱も、この病氣の爲と、病氣の爲にするサルバルサンの注射と、水銀の注射の爲だつたのだ。

性慾の點で不調和だつたことは、二人に取つて最も不幸なことであつた。二人は第一肉體の調和がとれてゐなかつた。これも私の健康を害した一つになつてゐる。こんなことのあることを、結婚しない前に誰が知り得やう。

別れる前に江口氏は『俺はもう普通の女と結婚しないで、藝妓か何かと結婚しなければならないかと思つてゐる、さうでないと女一人を又不幸にするやうな事があるかもしれないと云つてゐた。

しかし單に肉體の調和がとれないだけでなく、江口氏は體質の弱いのに似合はず、さういふ方面の要求の可なり強い方だつた。(江口氏自身では多少病的だと云つてゐる）それに私は、女學校教育の缺陷(と江口氏は云ふ)からか、さういふことを卑しく思ふやうな心持がなかなか抜け切れなかつた。その心持の抜け切れないうちに、健康を害してしまつたのだから、私にとつて性的生活は苦痛である場合が多かつた。

他の場合に於て私は女王だつたかもしれない。しかしかうした方面には、江口氏は私にとつてある一種の暴君だつた。小說が書けなくなつても好いのかと云はれるのが辛かつた。しかし、もともと體の弱い氏は、その爲に決して仕事の能率は上らないのだ。江口氏も好くその翌日をぼんやり暮すことが多かつた。

けれども何と云つても江口氏には全く氣の毒だつた。江口氏は滿七年の間、そのことについて素直に私に應じられたことは殆んど一度もないと云つて好い位だつたらう。それでゐながら氏は他の女を求めて行かなかつたのだ。私は何と云つて好いかわからない。

しかし、私にとつても、七年は苦しいものであつた。自分からさうした心持を動かすいとまのないほどあの人には惱されてゐたのだ、私が病氣ばかりしてゐたのも、ヒステリーを起すやうになつたのも、みんな二人の體質の合はないことから起つて來たのだ、性質の合はないのなら又思想の合はないのなら、又何かの方法があつたらう。しかし肉體の相違は逃

に人の力ではどうすることも出來なかつたのだ。

　私が理由もなく江口氏を嫌つたり、江口氏の顏を見ると焦焦したりすることのあつたのは或はかうした厭はしさの、知らないまに心の底に沈み込んでしまつたものではないかと考へる。さうでなければどうして江口氏の顏を見ると怒りたくなるのか、どうして何をされても氣に入らないのか、自分にもそのわけがわからなくなる。

　私は隨分前から一人になることを欲してゐた。暫くの間の別居でも好いと思つた。しかし江口氏は許してくれなかつた。で私はだんだん江口氏の許を飛び出すことを考へるやうになつた。その爲に夜更けてまで一人で片づけ物をしてゐたこともあつた。しかし好く考へてゆくと何も家を出るほどの理由は一つもなくなるのだ。癇癪は起すけれど優しい親切な夫、それに私も決して嫌ひではないのにこんなことを考へるのはみんな自分の我儘かしらと思ふのだ。何かの機會なしには飛び出してゆくことは出來なかつた。

　私が江口氏に、通りさうもない無理を云つたり、つまらない喧嘩を一番多くしたのはこの時代である。私は江口氏に『出てゆけ』と云はれたかつたのだ、しかし江口氏は『さう云つたらお前はすぐに何處へか行つてしまふ人だ』と云つてゐたせるか……一度さういふことがあつたから……どんなに怒つて私を叱つた場合でもその言葉だけは云はなかつた。私は尙焦々した。

　出來さうもない事を云つて、それが通らなければ自分は家を出たいと云つたこともあつた。しかし、どんな事でもみんな通つた。通つたあとの寂しさ……私は前よりずつと悲しい氣持になつて、その癖江口氏の爲に泣きたくなるのだ。

　福岡日日のことなども、通るまいと思つた無理の一つだつたのだ、云ふ方の無理だつたことも知つてゐる。怒るほどのものでないことも知つてゐる。しかしあゝ云ひたかつたのだ。私はあれを江口氏がやめると云つた時隨分驚いた。『好いから書いて下さい』と今度は賴んだ。しかし『家庭を破るより好い』と江口氏は云つた。知つてした我儘の通るのは寂しい。私は前よりももつともつと悲しい暗い氣持になるのだ。自分のした我儘の重荷を脊負つてそれを自分で數へるから、尙江口氏から離れられなくなるのだ。

　愛情は移動する。私の極端な我儘が、江口氏の心持を變らせないことは無かつたらう。その時分から溝が出來たと云ふのならそれももつともだと思ふけれど、何故それならば、その時に、一時でも私を手離して別居してくれなかつたらう。私の苦しい心持をあの人は知つてゐた筈だのに……私は江口氏の言葉を信じて江口氏に濟ないとばかり思つてゐたのだ。

革命前後

島田清次郎著

定價壹圓六拾錢

◇送料十七錢◇

◇四六版布裝◇

「革命」の後ろには女がある、「大化維新」の背後には遠智姫がある、若い遠智姫を囲む鎌足と中大兄皇子とがある、遠智姫の殉情のいぢらしさ、鎌足の「革命」への悲しき想の犠牲、それは情熱の若き天才思想家島田氏の筆を以つて悲壮に、深刻に、大膽に描かれた、敢えて若き人々に本書の一讀をお薦めする。

八版發賣

◇革命に殉ぜし彼女の犠牲的苦惱を見よ◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

文學博士 米田庄太郎著

(拾四版)

現代人の心理

定價貳圓七拾錢
送料十九錢◇四六判

文化主義、文化生活等凡そ文化なる語は今や思想界の流行語となつた。其百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解説した快著。つまり現代文化を研究する人の第一に手にすべき文化哲學の手引の樣な著書。

文學博士 米田庄太郎著

リッケルトの歴史哲學

九版

定價四圓七拾錢
送料廿三錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

理學博士 石原純編著

（第七版）

相對性理論の諸斷面

相對性理論の奥ぶかい内容を解り易く說明することは至難の事がらです。たくさんの世に行はれてゐる書物のなかには或は誤りて說き或はその眞髓に觸れないものもないではありません私は現時の諸大家の書いたものゝなかから、適當なる言葉を抽き出して之を隨處に綴り、一の相對性理論に對するいろ〳〵な解き方を照させて、その諸斷面を讀者のまへに擴げて見やうと思ひます。之れ等が最も信據すべきものであるばかりでなく又之を詳細に味ふときはそれぞれの諸家の面目特質をもその言葉に聞くことが出來る點に於て興味多いことであります。（著者）

（第壹輯）
定價八十錢
送料書留十一錢

（第五版）

空間及時間概念

相對性理論の諸斷面
（第貳輯）
定價九十錢
送料書留十一錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

二人の生活が單調だつたことも、それから江口氏が外出嫌ひで始終家にばかり居たことも、二人の間を面白くさせなかつた理由の一つだつたらうと思ふ。家にゐるのはああした職業の人として仕方がないとも云へるが、江口氏は少し家に居過ぎた。それにどんな場合でも所謂『旦那樣』であつて、何一つ自分で手を下さうとしない。その爲に他の者がどんなに忙しからうと、それは當然のことなのだ（一體日本の男の人はさうだけれど）それに始終家にゐるから、訪ねて來る人もきまりなく來る。小さな用が絕えず次から次へ起つてくる、殆んど落ち付くひまのない時があるのだ。私は朝早く夫を送り出して夕方歸りを待つ妻の樂しさを羨しく思ひ思ひした。一日留守の夫だつたら、喧嘩をすることも無からうと思つた事もあつた。

生活が單調で變化のないくせに、樣式の複雜な家庭のわづらはしさから、私は家をもつと云ふことが可なりおつくうになつて來た。家も何にも捨てゝ何處かへ行つてしまひたくなつて來た。私は山が戀しく野が戀しかつた。どこへゆくと云ふ當もなかつたが、ただ、信州といふ昔の乳母の國が、その行先として度々胸に浮んだ。

『わかれるのでなく、一遍私を手離して下さい。そして何處へでもやつて下さい。一度一人になつてみたいのですから……又すぐ歸つて來ますから……』さう云つたことも度々あつた。けれども『そんなことを考へるのはお前に放浪性があるからだ。放浪性と云ふものは牧草を追つて生活した時代の名殘りで人間の持つ一番野蠻な性質なのだ』江口氏はかう云つてとり合はなかつた。

しかし、放浪性があると云はれてからは、尙更旅がしたくなつた。放浪してあるくのが自分のほんとの生活のやうな氣がされて來た。家にぢつとしてゐるのでつまらなくなつて來た、何をしても物足りなく寂しかつた。

『俺が傍にゐるのにどうして寂しいのだ』と江口氏は好く云つた。『お前は俺が好きなのか嫌ひなのか』こんなことも度々訊かれた。『わかりません』と私は答へた、實際好く考へると自分にもどつちだか判らなくなるのだ。ほんとに嫌ひならば一緖にゐられる筈がない、ほんとに好きならばどこかへ行きたくなる筈がない、しかし江口氏に取り替へるほどの人のゐないことだけは云へた。

實際もしさう云ふものが、お互ひのどつちかに居たならば二人の生活はその時にもう分離してしまつたかもしれない。しかし幸か不幸か二人ともそれが無かつた。それに二人にとつてこれが最初の結婚生活であつたこともさう容易く破り得なかつた原因を爲してゐることとおもふ。

今年の始め頃から私はもう生きてゐるのが面倒になつた、何をするのも厭だつた、家なんぞ持つてゐたくないとつくづく思つた。何處かへ行きたくて堪らなくなつた。その頃友達のK氏が××に行つてゐた、私はそこへ江口氏に默つて行かうと思つて旅費を計算したり後始末をしたりしてゐた。しかしそんなことから何にも知らないK氏に迷惑をかけてはいけないと思つてやめてしまつた。實際その人は私の好きなお友達だつた。江口氏より好きだつた時が少なくも三ヶ月はあつた。しかし夫としての好きさではないその頃の私には、夫と云ふものは重荷のやうに思へたのだから……ただ綺麗な氣持でその人が懸しかつたのだ。寂しい時には好く思ひ出した。遠くにゐて逢へなかつたから餘計に美しいものに思へたのかもしれない。私は戀人を待つやうな氣持で歸りを待つ歌を手帳に幾つも書いた。そのくせ手紙などは一本も出しはしなかつた。

この九月の末、Tが、私との同棲のことについて江口氏の諒解を得に行つた時、氏は『千代子はKに惚れてゐた、Kならやつても好かつたのだ』と何の爲か知らないが云つたさうだ。惚れてゐたと思ひ、やつても好いと思つたのなら、何故あの晩私の話を聞いて、床の中から飛び起きたのだと云ひたくなる。

私は江口氏の最後の言葉を聞くまで、江口氏は私を離してはくれないものだと思つてゐた。それに私にも幾分の愛惜があつた。逃られもせず親しめもしない苦しさは、江口氏が生きてゐるうちはつづくのだらうと思つた。『私はあなたが死んだら、どんなに樂になるかと思ふと不用意に云つて、江口氏に『酷い奴だ』と怒られたことがある。私はほんとに惡い妻だ、夫のゐることが重荷だつたのだ。その頃からの私の空想はすべて自分が未亡人になつてからの生活ばかりだつた。私は二三年この方、溜息をつく癖がいつかついてしまつてゐたが、それがだんだん酷くなつて好く江口氏に咎められた。

江口渙氏の夫人であると云ふことも私には矢張重荷であつたのだ。私はほんとうにどんな場合にでも江口氏夫人としてよりも、ただの千代子として扱つて貰ひたかつたのだ。それは單に『夫の陰に隱されるのが厭だ』と云ふのではない『夫に依つて價うちづけられる』ことの方が厭だつたのだ。

私は結婚するずつと前には少女小説を書いた事もあつたが結婚する時分は脚本家になるつもりで岡本氏のところへ見て貰ひに行つてゐた。結婚してからお金の必要があつたので、頼まれたのを幸ひ又少女小説を書き初めたのだ。その原稿料は多くその頃江口氏等の出してゐた『星座』と云ふ同人雑誌の費用につかはれ、さうでない場合は私の着物の代になつた。

そのうちに赤い鳥が出た、私は江口氏の紹介で、その雑誌にも書かせて貰ふことになつた。

時事新報に私の寫眞が出たのは多分その頃の事だつたらう私は怒つたことは怒つた、しかしあんなことは云はなかつた。私は一體新聞などに寫眞を出されることは嫌ひだつたので、『人に斷りもなしにこんな事をして』と云つて怒つたのだ。『今までだつて書いてゐたのに、それが匿名で誰だかわからないうちは、何とも云はないでゐて、赤い鳥に書くやうになつて江口の妻君だと云ふことが知れたものだから、まだ二つ三つしか書きもしないのに、もうこんな寫眞を出す、世の中つて變なものですね、實力ではないのですね』と云つて憤慨したのだ。

スパルタカス團の宣言の時も、私は『江口渙氏の夫人だからこんな大きな活字で出したんでせう、ただの千代子ならこんな活字をつかふ必要はなかつたのだから』と云つたのだ、さうしたら江口氏も『俺にも何か關係があると思はせるやうにしたんだらう』と云つた。その大みだしの傍には『意外の方面に飛火』といふやうな小みだしが、たしか附いてゐたと思ふ。

事實私は、千代子であれば何でもないことも江口渙氏の夫人である爲に有名になる場合が多かつた。『夫の陰に隱される厭さ』よりも『夫の爲に有名にされるわづらはしさ』の方が多かつたのだ。第一今度の夫婦別れでも、江口渙氏の夫人でなかつたならば勿論問題にはされなかつたらう。その代り女性改造から原稿も頼みに來てはくれなかつたらうが……。

私が江口氏夫人であることを苦しく思つたのはそればかりではない。たしか去年の春頃のことだつたらうが、二人とも水銀注射のつかれの爲め、氣分は大して惡くないのに頭がぼんやりして原稿も何も書けないことがあつた。二人は毎日ただ顔を見合せてくらしてゐた。收入は少なくなるのに藥代が出るので經濟的に隨分困つてゐた。私は『二人してかうして書けない原稿を當にして手を束ねてゐても仕方がない、少しでも定つた收入がないと困るから、私がどこかへ働きにゆきませうと云つたことがあつた。しかし江口氏は『友達の手前もあるから止してくれ、みつともない』と云つてきかなかつた。『江口は妻君を働きに出すと云はれては、いかにも俺が能なしのやうで厭だ』とも云つた。お終ひには『お前は俺を何にも出來ないと思つて輕蔑してゐるのか』云つて怒つた。私はこんなに生活が苦しいのに働くことの出來ないのは辛いと思つた。江口渙の妻君である爲にどんなに困つてもぢつとしてゐなければならない、行けば夫の顔に關はると云ふのだ。私は世間的に名のある人の妻であることの苦しさと不自由さ

つくづく感じた。

　經濟は隨分苦しいのに、江口氏は生活費を切りつめる事を嫌つた。私達は食物で可なり贅澤だつたので、それを切りつめようかと云つたこともあつた、しかし江口氏は『俺は食べる事が一番樂しみなのだからよしてくれ』と云つた、私は私の手料理を喜んでくれて、外へ出て物を食べることをしない江口氏としては、無理もないことだと思つてそれは見合せた。その代り家を小さくして女中をやめようと云つて見た。しかし『大きい家に入るのなら好いけれど、小さい家に引つ越すのは落ぶれたやうで厭だ』と云つてきかなかつた。そして又女中がゐないとお前が困るだらうと云つた。體の弱い私は、女中がゐないと可なり困ることもあつた。しかし、小さい家に入つて、生活樣式をもつと簡單にして、生活の冗をはぶいたなら、女中の必要はなくなると思つたのだ。しかし江口氏は『俺はそんな暮はしたくない』と云つた。そしてその時も『お前は俺を見くびつて經濟をつめる事ばかり考へてゐる。今に見てゐろ、うんと金をとつてお前の前に投り出してやるから』と云つて機嫌をわるくした。私の云つたのはさう云ふ意味ではなかつたのだ。『あなたは私を知つてゐて下さらない』と云つて私も怒つた。

　江口氏はいまだに屹度私の心持を知つてゐてくれないだらう、江口氏は今の私達……Tと私との生活さへも、いつか破れるやうに思つてゐるらしい。これも結婚の報告にTが行つた時『千代子は君のところで滿足してゐられる女ではない、經濟的の破綻がきつと來る。もしさういふ徵が少しでも見え出したら、すぐに別れた方が好い』と云つたさうだ。私はそれを聞いた時、あの人は遂に私を知つてくれなかつたと思つた。私が何の不滿で江口氏を離れようとし、何の爲に焦々してゐたか江口氏には判らないのだ。否、わかつてゐるかも知れないが云ひたくないのだ。

　私は七年の間の江口氏との結婚生活で、夫の選擇方をすべて更へたのだ。いまの私に江口氏の持つてゐたものはすべて魅力を失つてゐるのだ。私は江口氏の持つてゐた以外のものが欲しいのだ。私の夫とするものは學歷でもなく、世間的の位置でもなく名聲でもない、さう云ふものは今の私にとつてすべて生活の重荷に過ぎない。ただ愛情のあるところにすべての幸福と滿足とが生れる。

　人間と云ふものはみんな同じ位のもので　さうえらい人といふものはゐないものだ、あんまり期待をしてゆくと、いつか幻滅を感じてくる。

　ほんとうに私も江口氏に幻滅を感じたのだ。それは私も惡い。私は結婚する時に江口氏を自分より大分えらい者のやう

に思つて、あの人に依つて教育され、あの人に依つて啓發されてゆけるやうに思つたからだ。始めのうちの私は、江口氏の云ふことを金科玉條のやうに守れる私だつた。しかし、近づいてゐていつまでも尊敬してゆける人は少ない。私は段々江口氏の言葉と行ひとの矛盾を感じ、江口氏のすべてを批評的な眼で見るやうになつた。それに他の人なら默つて聞き流してゐられるやうな事も、江口氏だと一々突込まないではゐられなかつた。江口氏にはそれが厭だつたに違ひない。

　江口氏は私を子供扱ひしてゐたのだ。『お前は默つて俺の云ふことを聞いてゐれば好いのだ』これが江口氏の昔から云ふ言葉だつた。二人の生活をどうかしなければならないと云つた時なども『俺がお前を惡くすると思ふか』と云つて默らせてしまつた。しかしどんな場合でも、默つてついてゆけた時代は好かつた。いつかそれが出來なくなつた時そして何も判らせてもらへない時、私が江口氏に物足りなさを感じるのは當然のことだ。

『千代子の傍にゐると壓迫を感じて苦しい』と江口氏は私の弟に云つたさうだ、そして『僕には何でも自分の云ふことをはいはいと云つて呉れる女でないと暮せさうもありません、反對をちつとでもされたくないんです』と云つたさうだ。江口氏はすべての女に、人としての獨立をのぞみながら、妻にだけは何事も夫の意の儘に從ふことを欲したのだ。ここにも江口氏の矛盾はある。

　すべて江口氏は、自分が一つ高いところにゐて、他の者を引き上げたり、感化したりしなければすまないのだ。私は江口氏に學問の點でこそずつと劣つてゐるけれど、何も感化されるやうな事は初めから一つも持つてゐなかつたつもりだ……それはあなただつて御存じでせう、私に下すつた手紙の中に何と書いたか思ひ出してごらんなさいまし……そして今ではその學問さへ人間としての價値に何の關りもないばかりか、却つてその爲にある殼から拔けられないでゐるやうにさへ思へてならない。

　私は江口氏が社會主義運動をすることについて、又小説を書くことについて、反對したことは一度もない……しかし女として、夫から全生命を捧げられることは、何より滿足で又光榮であることに違ひないから、それは私としても望むところだ……けれど、小説を書かなければ食べられないのだから書くことに反對したことはない。それに江口氏はいつも夜床の中で書くのだから、小説に沒頭してゐてくれる時は、私の最も安心な時なのだ。聲をかけるどころの騷ぎではない。ただ小説家と云ふやうな職業はしまりが無くて家の者は扱ひ憎

いと云つた事はある。鵠沼の家の近くに若い軍人の夫婦がゐた、主人は平生横須賀にゐて、土曜日になると歸つてくるのだ、私はそれを見て、あんな生活をしたら樂しいだらうと思つたこともある。それから又、私が小說家といふ職業のあるのは不自然だと云つたこともあつた。私は小說などと云ふものは職業にすべきものではなくつて、もつと實生活に必要な職業にたづさはつてゐて、ほんとに書きたくなつた時に書く事が、藝術を尊重する意味から云つても、生活を尊重する意味から云つても正しいことではないかと思つたから、それは云つた。江口氏は『ぢや何をしたら好い』と笑談のやうに訊いた。『小學校の先生が好いでせうね』と私は答へた。『俺はまだそんなことはしたくないよ』江口氏は云つて苦笑した。そのことかもしれない。

　社會主義運動をすることについてもさうだ。殊に私が、江口氏が何かの運動に出かけようとする時、暴力を以て妨けようとした事があると云つてゐるのは意外である。成程それは江口氏一流に、結果だけを見て、それを惡意に、そして大袈裟に解釋すれば、或はさうなるかもしれない。しかし私としては少しく云ひたいことがあるのだ。

　それは何でも淺草邊で、自由人か何かの講演會のあつた時のことである。江口氏は無論そこへ行くことになつてゐた。

　それは私も知つてゐたのだ。當日加藤一夫氏が江口氏を呼びに來た。何でも五反田で松本氏が刺された後だつたので、大分みんながビクビクしてゐたらしく、加藤氏も今夜は危險だから是非早く來てくれと、オドオドしながら飛び込んで來たのだ。しかしその時江口氏が、ただいつものやうに平氣で出て行つてくれたなら、私は何も云ひはしなかつたらう。けれども氏は今夜行つたら何をされるかしれないと云つて、堅い表紙の本を胸や腹や脊中や方々にしまひ込んで（短刀で刺れても刃が通らないやうにだ）それから外套のポケットや何かにもいろいろ入れて出かける支度をしはじめた。私はその樣子を見て何だか心配になつて來たのだ。私はその日恰度病氣で寢てゐた。先刻から加藤氏が二度も飛び込んで來て、危いから早く來てくれと云ひ（私は加藤氏の立派な髯を見て臆病な人だとはしらなかつたのだ）又江口氏のこの物々しい武裝を見て、私はほんとに不安になつたのだ。私は江口氏にそんな危い處なら止めて下さい。そしてどうしても行かなければならないのなら、私も一緒につれて行つて下さい。私は家でお留守番をして、心配をしてゐるのは堪りません。危いところなら一緒にゆきます』と云つて賴んだのだ。江口氏は『お前が行つたつて仕樣がない、お前は病氣ぢやないか、病人が行つたつて何になるものか』と云つて笑つた。私は『病氣

はどうなつたつて好い、あなたを危いところにやつて家に寢てゐられない、私は病人でもあなたの傍にゐて、あなたを打つ者があつたら命がけででも毆り返してやります」と云つて泣いた。私は二階の床から下りて來て、出てゆかうとする氏に縋つて泣いたのだ。私の弟の英夫が『姉さんが行くよりも心配なら僕が一緒に行きます』と云つてくれた。私は私より英夫の方が力の強いことも、元氣な事も知つてゐた、けれど私は自分でなければならないやうに思つたのだ。誰が行つても自分が留守番をしてゐる以上、心配は同じことだと思つたのだ。出る處の邪魔をしたのは惡かつたかもしれないけれど私の心持を汲んでくれたら、暴力で妨げたなどとは云はない筈なのだ。私はあの時の妻らしい心づかひを思つて、自分でさへ涙ぐましくなる。ああした心持さへも今になれば、暴力で妨げたことにしかならないのだ。私はかう云ふ人に、何を云つても仕方がないやうな心地さへする。

ほんとに江口氏は、心もちなどと云ふものを汲んでくれない人ではあつた。私は一體ぼんやりしたたちで、よく自分の仕樣とした事と全く反射な、惡い結果をもたらすことがあつた、そんな時惡るかつたけれどかう云ふ心持でしたのだと云ひわけをするのだ。すると江口氏は『お前は惡い惡いと云ひながらそれに理窟をつけてゐる、お前の云ふことを聞いてゐると、お前はちつとも惡くないことになつてしまふぢやないか』と云ふのだ。私は好いと思つてしたことだから、たとへ結果がわるくつても、その心持だけは汲んで欲しい思ふのだ。けれど江口氏は結果だけで判斷して原因を少しも見てくれない。さう云ふことは度々あつた。それが私の心を可なり寂しがらせた。

私達兄弟の仲の好かつた事は、江口氏の心を可なり傷つけた事らしかつた。江口氏は好く『お前達の兄弟は團結してゐる』と云ひ云ひした。私達の兄弟は、長兄が非常に橫暴な沒常識な人であつた爲に、その兄に對していつしらず他の者が結束してゐたと見えて兄一人を除いては可成みんな仲が好かつた。『お前は俺よりも兄弟の方が大事なのだ』こんなことも度々云つた。私は夫よりも兄弟の方が大事なとは思はなかつたけれど、兄弟達の中に入ると、氣持ののびのびするやうなことはあつた。それに私は長女であつた爲に、父と母との亡くなつた後の兄弟達に、可なり氣をつけてやらなければならなかつた。『お前はお父さんと母さんとが死んでから人が變つた』とも云はれた。ほんとに父と母との生きてゐるうちは、私は弟や妹達に心づかひをする必要はなかつたのだ、けれど二人が、僅か五十日ほどの日を距てて死んでからは、兩親のない

小さい弟達のことが氣になつて堪らなかつた。私は弟達が病氣だと云ふやうな話をきくと、もうぢつとしてはゐらないほどだつた。それが江口氏には不滿だつたに違ひない。最後の破裂をする二三日前も私の弟のことで喧嘩をした。……　私はこの事は江口氏にお氣の毒だつたと思つてゐる。

江口氏の所謂『敍情詩』なるもの、隣りの部屋で私が聞いて怒つたと云ふ『脊の低い女云々』の話、あれは江口氏の云ふのは全然僞だ。私はその敍情詩を、その晩聞きもしなければ、又『顏の長い脊の高い女が好きなので、顏の丸い脊の低い女はどうも厭だ』などと云ふ事も聞かない、從つて『實際身を切られるやうな思ひ』もしたことがない。あれは江口氏の體裁の好い作り話だ。もし江口氏が作り話でないと云ふならば『それではあなたは、どうも厭な女に戀をしたのかそれともその戀は僞だつたのか』と聞き返したい。『貰ひたかつた女を止して、どうも厭な女を妻にするほど不見識なのか』と云はれても仕方があるまい。あの晩のことはそんな話ではなく、もつと露骨なこと、閨中の話だつたのではないか。

その人は私のことを好い奥さんだと云つたのだ、すると江口氏は『いや脊が低いよ』と云ふやうな事を云つた、それから繰り返して云ふ時に『脊の低い女は困る』と云ふやうなことを云つた。だから私は怒つたのだ。『私は何にも結婚についての知識がなかつたのだ、けれど、あなたは何もかも知つてゐて、今になつてそんなことを云ふのは酷い、脊のことなんぞは判つてゐるくせに』と云つて怒つたのだ。『歸らせて下さい』とは云つた。そんな事を云はれて一緒にゐる必要はないと思つたからだ。江口氏は『Aがあんまりお前を賞めるから一寸くさしたのだ、堪忍してくれ』と云つた。私はそれから性に關する話、殊に猥談一切を門の中に入れることを堅く拒んだ。その友達はさう云ふ話の好きな人だつたので、よくさうした話をし出した。その度に江口氏は困つたやうな顏をした。かう云ふ話を封じたのも江口氏には可なり窮屈だつたに違ひない。私はさういふことには少し嚴格すぎたやうだ。

江口氏の所謂敍情詩を（但し江口氏の書いてゐるやうではなく）結婚前に聞いてゐたやうに、展覽會の話も矢張結婚前の話である。大正四年十月十七日とその頃の日記に書いてあるからこれは慥かだ。結婚後と云ふのは江口氏のお間違ひであるばかりでなく、その心持も江口氏の仰有るのと大分違ふやうだから、その日の日記の一節を其儘次に寫して見よう。

繪には好いのも惡いのもあつた。しかし人(江口氏のことだ)が好いと云ふと自分も不自然でなしに好いと思はれる。惡いと云ふと

やつぱり不自然でなく惡い氣がされる。好いと云はれたのにはどうしてか好い點が浮み上り、惡いと云はれたのは乾度どこか惡い點が發見されるのだ。好い中から惡い點が、惡い中から好い點を取り上げようと苦心したけれどなかなか出來なかつた。人と自分と趣味が一致してゐるのなら好いけれど、盲目になつてしまつたのでは二人の爲に惡いことだと考へた。けれど今の私には、人の云ふことは不思議なほど力强い引力を感じる。人がさうだと云ふとさうのやうな氣がしさうでないと云ふとさうでないやうな信仰が出來る。人に、二人の將來について力强いことを聞されると、私の心の不安もいつか消されてゆく、疑ふなと云はれると疑つてはならないと思はれる、思はれると云ふより、ほんとになつてくるのだ……。

私はこの日記を掲げただけで何も云ふまい。ただ私の心が『自己回復』と云ふやうな强いものでなかつたことだけを知らせて置けば好いのだ。間違つた記憶をもとにして好い加減な理窟をつけられるのは全く堪らない。

私の父が工場長であつて工場主ではなかつた事……恰度江口氏の父君が山田の赤十字病院の院長であつても病院の持主でなかつたやうに持主ではなく技術家であつたこと。私が村の小學校なるものに通はず又工場の爲に存在してゐる同樣な小學校は一つもなかつたこと……それからまだ二三、江口氏が知つてゐてわざとなすつたやうな間違ひはあるが、もう紙數がなくなるからよして置かう。そして最後の一節を記して筆を擱くことにしよう。

三月になつて、私は又江口氏に、二人の生活についての提議をした。江口氏は『俺はこの儘で好いのだ』と云つた『この儘でゐては私が苦しくて堪りません。いつも中途半端にして置くから、いつまでも同じことを繰り返すやうになるんです私は今度こそ決算がしたいと思ひます』と云つた。江口氏は『まあ待て俺もそのうちに考へて置くから』と云つた。江口氏は緣側に寢ころんでゐた、私は花壇の傍で砂利を弄つてゐた私の眼には涙が溜つてゐた。その日はそれで濟んで四月になつた。江口氏からそれについて何の返事もなかつた。

何でも五月のはじめの頃であつたかしら、私の昔の友達が突然大阪から手紙を寄して、自分の居る女學校の生徒達を伴れて江の島へ行くから逢ひに來てくれないかと云つて來た。しかしそのしらせは、その友達が恰度江の島を去つた頃に漸く私の手許に屆いたので、とうとう逢ふことは出來なかつた。私はその友達に何だか逢ひたくなつたのだ。この人は最初の結婚生活を、自分からきつぱり破つた人なので、私はこの人に訊いたら、自分の場合はどうして好いか相談にのつてくれ

さうな氣がしたのだ。それに一つは遠くへ行きたくもあつた。で私はそれとなくその人に手紙を出して、行つても好いかといふこと、永くとめて貰へさうかどうか、もし宿めて貰へるなら汽車の乘り方を數へてくれと云つて、江口氏に內緒で聞き合せた。そしてその一方今度こそ家出を決行するつもりでその支度をそつとし初めた。

しかしその支度は、そつとしなくも好くなつた。それは六月の十七日、まだ大阪の友達から委しい返事の來ないうちに江口氏から「お前の云つたやうにしよう」と云ふ、最後の言葉を聞いたからだ。

江口氏は云つた『俺はお前の心持を引きとめようとして、隨分いろいろ骨を折つて見た、しかしお前は振り向かずにずんずん行つてしまふ。で俺も、もう呼びとめるのをやめて、反對の方角へ步き出したのだ』又云つた『お前は俺より兄弟の方が大事だつたのだ、お前達兄弟は團結してゐて、俺がそこへ入ると水の中の油のやうなものだ、俺は自分の兄弟と離れてしまつたが、お前にはどうしても離れられないのだ』それから『お前は他の人には好い人だが俺にだけはいけない。他の人には優しく出來て、俺にだと無暗に强くなるのだ、俺はお前と一緒にゐるのが苦しくなつたのだ』とも云つた。

私は江口氏の言葉を一つ一つ聞いてゐると、ほんとに江口氏に濟まなくなつた。江口氏の心を傷つけたのは私であり、江口氏を失望させたのも私である。あの人がどんな希望を以て初めての結婚生活に臨んでゐたか、それを思ふと私は何と詫びて好いかわからなくなつた。江口氏が怒つてくれないだけ、私は自分の身が責められたのだ、自分ばかりが惡く思はれて來たのだ、こんな惡い人間は死んでしまつても足りないやうな氣がされた『私が惡かつたのです、死んで堪忍して貰へるのなら私は死にます』と云つて泣いた。ほんとうに江口氏に濟まなくて堪らなかつたのだ。私は自分の全力を擧げて江口氏を幸福にして上げなければと思つたのだ『私に今までの埋め合せをさせて下さい。私は命がけで、自分の傷つけたあなたの心を治します』と幾度も云つた。しかし江口氏は『それはお前が俺の云ふことをきいて氣の毒になつて來たからださう云ふのはお前の一時の興奮で、すぐに消えてしまふものなのだ、もう少し落ちつくとお前は又別れたくなるのだ』と云つてきかなかつた。二人は暫く別居してゐようと云ふことになつて、私は大阪の友達の處へ返事の來次第行くことになつた。行李や毛布や空氣枕などを江口氏から買つて貰つた。私は藤澤まで江口氏に送られて大阪へ立つた。

しかし、立つ前に、私の今後の生活の保證や弟の學資などの相談をして、その後になつて綺麗に斷つたやうに、江口氏は云つてゐるが、私は初めから自分の生活の保證や弟の學資のことなどを賴んだ覺えはない。自分の方が先に動き出したのだから貰ふ理由はないと斷つてあつたのだ。その後上の弟が行つた時に、弟の學資と自分のこととするのは大變だらうから學資の方だけ手傳つても好いと云ふやうな事を傳へて來た。（それ位だから初めから保證をして貰はなかつたことがわ

からう」私は今まで自分がして來たのだからと云つて斷らせた。事實私は、江口氏に補助をして貰つた事もない。休暇で歸つて來た時食べさせては貰つて居たが、補助はして貰つてゐなかつた、ただ、私の方に入つたお金を、家の經濟につかつて終つて、弟の方に送る時私の方に無かつた場合、前のお金を返して貰つたことはあつた。立て替へておいて貰つたこともあつた。こんなことと間違つ　のであらう。それに江口氏は分離後の經濟經濟と好く云つてゐるが、別れるについて私の方でつかつたお金は、大阪行きの支度と旅費と、それから東京へ歸る旅費と私の荷物の運賃……それだけである。

大阪へ行つてからの私は、ただ江口氏の心の傷を治したいと思ふばかりの私だつた。自分のしたことを責めるばかりの私だつた。その爲、家を出る相談をするつもりの人に逢ひながら、何にも云ふことが出來なかつた。私は、三週間ほど友達夫婦の親切なもてなしの仲にゐて鵠沼へ歸つた、お金が無くなりかけたのと、話をせずに永くゐることが苦しかつたのとで……。

歸つた時には、ほんとに優しい心持で歸つて來たのに、江口氏の顏を見るともう直ぐに焦々した。私は自分で自分をどうして好いかわからなかつた。私は一と晩を鵠沼で過して翌日弟のところへ行つた。

何にも知らないでゐた弟は可なり吃驚したやうだつた、弟は私の話をきいて『姉さんの愛には理性がありすぎる。今までの取り返しをしたいと云ふのでなく何故好きだから歸りたいと思はないんでせう、江口さんの氣持なんぞどうでも、姉さん自身が傍にゐたくて堪らないといふやうな氣持にはなれないんですか』と云つた。しかし私には『好きだから歸りたい』と云ふやうなことは自分に對して僞になるから云へなかつた。好きだから歸りたいといふよりも、私はあの人の心を傷つけた事が辛かつたのだ。……さう思ふと、自分ながら勝手すぎたやうな氣もされた。『取り返しをしたい』と云ふことも結局自分自身への云ひわけに過ぎないやうな氣がしたからだ。私は今までの自分の心持を靜かに考へて見た、そして矢張別れるのが本當だと思へて來た。愛情のあつた時さへ、あんなに飛び出したがつてゐた私が、愛情の無くなつた今歸つて行つていつまで眼をつぶつてゐられるかとも思つた。結局出來ない事をしようとするだけだと思つた。

江口氏が旅行に出たことも、亦その旅行が永くなると云ふことも留守居の從弟の手紙で知つたので、久しく明けてゐた家の中の整理と、原稿を少し書きたい爲と、それから又留守に人が來ることになつてゐたので、一日に鵠沼へ歸つて來た。そして自分の手廻りのものを一通り整理すると職業を探しに東京へ出た。私は職業を人にたのんで置いて、江口氏と別れたらその口が見つかるまで、暫く滿洲の中の兄のところへ行つて來よう。久しく逢はない妹や弟にも逢つたり、かういふ折に知らない土地も見て來ようと思つたのだ。しかし、職業

を頼む爲、又滿洲行きの旅費を造る爲には、江口氏と別れる話を勢ひしなければならなかつた、笑談だと思つて取り合つてくれない人もあつた。私にもう一度考へ直せと云つてくれた人もあつた。又別れることを非常に贊成してくれた人もあつた。しかし私は職業は賴めたが、旅費は造れずに、一週間ばかりして又鵠沼へ歸つた。

私は翁島へ手紙を出すことは知つてゐたが江口氏に逢ひたくなかつたので、小說を書いてしまつたらいづれ歸つて來るだらうから、その時までにすつかり家の中の用事を片づけて置かうと思つて、それからは蒲團の洗濯や縫ひ直しや、そんな事に夏中を費して終つた。

江口氏が東京へ歸つたしらせが來たので、從弟をやつて、道具や何かの心配についての相談の爲に歸つて貰ふことにした。それは十日の夕方だつた。その夜二人は最後の話を終へたのである。私は荷物をまとめて、十五日に鵠沼を去つた。

十五日の晝、私は江口氏と最後の食事を濟ませた後で、

『私はあなたの好い奧さんにならうとして、今まで幾度氣をつけたのかしれなかつたのですけれど、どうにもならなかつたのです。私があなたの顏を見ると癇癪の起るのは、もう理窟でなく神經なのですから堪忍して下さい』と云つてあやまつた。あやまりながら少し涙ぐんだ。

汽車に乘つてからも私は窓ガラスに頰をおしつけて涙を隱してゐた。滿七年の結婚生活、それも戀愛に初まつた最初の結婚生活が、自分が望んでゐたこととは云ひながら、かうして脆くも破れてしまつたことを思ふと、涙ぐまずにはゐられなかつたのだ。

江口氏と私との結婚生活は、かうして最後の幕を閉ぢた。いま、私はこの新しい靜かな生活に浸りながら過去七年の苦しさを振り返ると、二人の別れることの遲すぎたことを悔む位だ。二人は矢張別れたことがお互ひの幸福であつたのだ。江口氏も自由な暢び暢びした生活をしてゐると云つてゐる。私も今までにない高い空の下に、胸を擴げて立つてゐるやうな明るさを感じる。あんなに一人になることを欲しながら、今私は二人の生活をしてゐるけれど、もう家庭生活も結婚生活も、私には昔の重荷ではない。それは世間的の何に捕はれることもなく、何のわづらひもないからだ。私は以前より物質上には乏しい生活をしてゐながら、ちつとも貧しいやうな氣がしない。私は何だか以前よりもずつと豐かな暮しをしてゐるやうなのである。私の心は滿ち足りて何の欲するものもない。私はこの言葉を江口氏に捧げて、私達の爲にして下すつた江口氏の心配を取り除いて戴かうと思ふ。そして二人の行末に靜かな瞳を注いで戴かう。すべてはこれからの二人の生活にあるのだから。

江口氏が私の幸福を祈つて下さるやうに、私もこの喜びの中から、江口氏の幸福を只管に祈つてゐる。



長篇小説 炎の路（三）

——エセル・デル原作——

三上於菟吉

七　親友

シムラの松林の閑寂を破つて、突然陽氣なピアノが喜歌劇のひと節を奏で出した。ヴエランダには土人のボーイがいかにも禮儀張つて高慢ちきな顏をして突立つてゐた。そして子供部屋では赤んぼをあやす女の聲が聽えてゐた。しかし喧ましいピアノがまだ一節と彈奏で切られないうちに、その子供部屋から今迄コロ〳〵しい快活な聲を聽かせてゐた夫人が駈け出して來た。そして土人の召使を通りながら性急に言ひかけた。

『まア、サムミイ、お前どうしてラトクリッフ大尉がいらしつたのを知らせてくれなかつたの？』

彼女は答も待たずにヴエランダを横切つて音樂が聽える一間にはひつた。

『ニック、あなたがおいでになるとは思ひもかけなかつたわ！』と彼女は叫んだ。

音樂は自棄に彈き捨てられた。ニック・ラトクリッフは黄色い顏に華やかな微笑を浮べて立ち上つた。

『お久し振りでした。』と彼は相手が差し伸べた兩手を交みがはり接吻して、『それにしてもあなたは此のシムラにどうして來ておいでなのです？』

『赤んぼのためなのよ。赤んぼのためにいいだらうとみんなが言ふものですから——私ほんとに赤んぼがあなたに見せたいの。六月かそこらでそりやあ可愛くなりましたわ。でもニック、あなたの事も話して頂戴な。もうお體はすつかりいいんでせう？　お顏いろも大變よくなつたわ。』

『有難う。おくさんも大そうお美しくつていらつしやいますよ。』とニックは笑つた。『だがマスグレーブのおくさん、あなたがどんなにお美しくつても私には問題外です。』

　マスグレーブ夫人は顔をしかめた。彼女は何とも言へない愛嬌に充ちた美しい女だつた。

『つまらないことはどうでもいいとして、ほんたうに此頃どうなの？　私だつて隨分軀が惡かつたの。もう大抵癒つたけれど、それでも病院へお見舞に行くことも出來なかつたんですのよ。』

『いや、それには及ばなかつたのです。僕は三週間睡りつづけました。そして今日目が醒めたばかりなんです。』

　マスグレーブ夫人はニックを笑ましげに眺めた。

『可哀さうだつたわね――でもよくあの砦が救はれたものね。』

『生き殘つてゐたのはグランジユ君だけだつたのですが、それでもまる三日間食ものを口に入れなかつたのです。もしムリエル・ロスコエ孃が殘つてゐたらバセツト將軍が着くまでにはもう死んでゐたでせう。』と言ひかけてニックは思ひ付いたやうに、『しかしおくさんは嘸お從兄弟御さんを御心配なすつたでせうね？』

『ブレーク・グランジユのことは勿論案じてゐましたわ。だけど私はそれよりもあなたのことが一そう氣にかゝつてゐましたのよ。』

　さう言つた夫人の聲には深い感情を秘めた聲の震ひがあつた。

『有難う。』と彼は骸骨のやうに細つた指を夫人の手に觸れて、『定めし御心配なすつてゐたらうと思つてお禮ごころで伺つたのです。』

　マスグレーブ夫人は微笑んだ。

『あなた、私に深切でない時があつたのを見て？』

『いゝえ、それなればこそ今日もお目にかかりに出たのですよ。ね、おくさん、僕はあなたにロスコエ孃にお氣を注け下さるやうに願ひたいのです。あの女は今是非どなたかの力を借りないではゐられない身の上なんです。』

　夫人は眼を大きく睜いた。が、ニックが突然飛び上るやうに、席を立つて部屋の中を行つたり來たりしはじめたのですぐには答へられなかつた。

『まあお坐んなさいな。』と彼女はとうとう言つた。『そしてロスコエ孃のことを話して頂戴。私はお目に懸つたことがないんですの。それにしてもバセツトのおく樣があのお孃さんの面倒を見てゐるといふのに、どうして私に氣を注けて上げるやうにと仰有るのです？』

『バセット夫人ですつて！』とニックは言つた。そしてひどく顔をしかめただけで何とも言ひ嗣がなかつた。

　マスグレーブ夫人は答へた。

『あなたのそのお口は何です？　あの方を憎んでゐらつしやるの？　私はまた男の方は一人のこらずあの女をお宮のやうに崇めてゐると思つてゐましたわ。』

　ニックは座に返つた。

『僕はあの女を打ち殺さうと思つたことさへあるんです。』

『まあ、ひどい事を――』と夫人は笑つた。『私だつてあの方は何だか蟲が好かないとでもいふのかお親くしてゐはしませんの。でもあの方は手紙をおよこしになるたびに『いとしきダイジイよ』と呼びかけて下さるのよ。あの方は赤んぼが出來たら私が醜くくなるかと思つて樂しんでいらしつたの。でも私そんなに醜くくはならないでせう。あの方は人を惹きつけることの出來ないやうな女でなくつてはお氣に召さないんです。』

『やれ、やれ。』とニックは言つた。

『お笑ひなさるでしよ。』とダイジイ・マスグレーブは生眞面目につゞけた。『あの方は私より年が上でゐらつしやるから――あなた、あの方がダンスをなさるのを御覧になつたことがあつて？　あの方が全身でぐるりとお廻りになる容と言つたら！　おや、私、氣が注かないでいろんなことを言つたわ。あなたがあんまり驚くといけないからあの方の話はもう止めませうわ。』

『お構なく。』とニックは笑つた。『あの女のことなら僕の方がよく知り拔いてゐるかも知れませんよ。あの女は今ではコブラが猫鼬を憎むやうに憎んでゐるんです。』

『まあ、どうしてでせう？』とマスグレーブ夫人は興味を引き起したらしく言つた。

　ニックは肩を搖つた。

『それに就いてはバセット夫人にお訊きになつた方が早手廻しです。多分僕が何かの張合であの女に火を放けてしまつたことがあつたのでせう。が、すぐに僕は氣がついたからその火を消してしまつたのです。あの女は幾らか着物をよごしたと言つて憤つてゐるんでせうよ。』

『でも、あの方はいつもあなたに深切さうに見えますわ。』

『蜜の如しです。だから僕はあの女にコブラを見出すのですよ。そこで、またムリエル孃の問題に歸りますが、どうぞあの女のことはお願ひしますよ。』

　ダイジイ・マスグレーブは急に銳どい目で相手を見た。そして打つけに言つた。

『あの方と結婚なさる積なの？』

ニックは艶の褪めた眉毛を揚げるやうにした。

「ダイジイさん、あなたは天才ですよ。僕は勿論その望みです。」

ダイジイは立ち上つて窓を閉めた。

「定めしお年若でゐらつしやるんでせう。で、その方もあなたを愛してゐるの？」

ニックは高らかに笑つたが彼女は笑はなかつた。

「世間に僕と戀に落ちる娘があるとお思ひですか？」と彼は言つた。

「ありませうとも、それは。」と夫人は言つた。「別にそれ程特別な方でもなし、宇宙にはどんな女でも戀さないといふやうな男はまあゐない筈ですから――どんな男にだつてどんな馬鹿女かが思ひ付くものですわ。」

「有難う、有難う。」とニックは言つた。「じやあ、僕はあなたの御援助を勘定に入れて置きたいですが――いいですか？　僕はバセット夫人が僕の問題に口を入れたがつてゐるのを知つてゐます。しかし僕はレギナルド・バセット將軍――ロスコエ孃の御後見の承諾を得てゐるのですから。それにあの女のお父さまもとうにあの女を僕に任せてゐらつしやるのです。しかし現在のあの女はみじめですよ。もう少しでバセット夫人のためにあの人は滅茶滅茶にされてしまひます。」

ダイジイは窓の前に彼に背を見せたままで立つて鎧戸の紐をいぢつてゐたが顔には眞面目さがありありと浮んでゐた。

「私にあなたを助ける程の力があるかどうか解りませんわ。」と彼女はしづかに言つた。「でも出來る限りのことはして見ませう――私たちは親友なんですものね。でも、その方はまだお若いんでせう？　で、若しその方があなたを愛してゐないのなら、愛して上げるやうにと說きすゝめる役だけは免して頂戴。」

「詰らんことを仰有る。」とニックは言つた。「あの女は僕と一緒になれば必ず幸福なんです。僕はあの女には此の上ない男だと信じてゐるんです。」

彼女は急に後を振返つて、微かな震ひを聲に見せて言つた。

「勿論それは私も知つてゐますわ。あなたはお愛しになる女を幸福にすることが十分出來る方です。しかし双方に愛のない場合の結婚が行末どんなことになるか解つてゐますものね――」

この言葉にはある熱情的なものが含まれてゐた。しかし彼女はすぐに落付いた微笑みになつてつづけた。

「さあ、それはそれとしてこつちへいらつしやいな。赤んぼをほつたらかして來てしまつたのよ。でも、どんなに泣いて

ゐる時でも私の顔見さへればすぐに笑ふの。」
「さうせずにゐられるものはありませんよ。」
　ニックは伊達者らしくさう言つて、彼女の導びくまゝに子供室の方へと去つた。

八　孤獨

　シムラの松林の芳ばしい匂ひはバセット家のバンガローの部屋の隅々にまで流れ漂つた。お客がこの香りのことを口に上せるとバセット夫人は「え？　全く心を迷はせるやうな匂ひですわ」なぞと言ふのだつた。彼女の別莊はシムラでも極く良い場所を占めてゐるので、誰れかが嫉ましさうに讃めるのを聽くと、自分の選みに自分で感心して心私かにほゝゑまずにはゐられなかつた。しかしこんな快よい棲居に彼女は特別な約束でもしないかぎり殆んどゐなかつた。彼女の社交生活といふものは、曾つて自ら「孤獨の贅澤」を味はふこともたまにはして見たいものだと言つた程忙しかつた。女主人公としての彼女は全く素晴しいもので、上手な彈手でもあれば一流のダンサアでもあるといふ評判があつた。そんなわけで當然彼女が自分で選んだ周圍では女王らしい位地を保つことも出來るのだつた。見かけたところ卅五ばかりだが、美しい撓髮や、やさしい聲や、かすかに靨のはひるほゝゑみなぞのおかげで少くも十二三は若く見えるのであらう。いつも大さう結構な着物を着て、冷靜で物柔しく、どんな時でもせかせかしげにたち振舞ふことなぞはなかつた。だが一度御意に逆らふと何とも言はれず上手な皮肉な言葉でちくりとやる。けれどそのちくりが相手には致命的な傷を背負せるのだつた。そんな時にはこの夫人に口答へが出來るのは、特別にこの女を怖れない性のものの外駄目だつた。
　この夫人とむき合つてゐて氣づつなさを感じないものはさう澤山はなかつた。ムリエル孃はその中でも一ばんひどく壓迫されたひとりだつた。彼女の父親はレギナルド・バセット將軍を後見に賴んだので、將軍は遺意を承諾してシムラの妻の許に送つたのである。が、その當時ムリエルは自分の四圍の狀態に氣がくばれる程の力もなくひどく病つてゐた。だから自分として承知不承知を言ふことも出來なかつた。實はと言へば彼女は夫人の前へ出た時恥しさをすら感じない程此の女が嫌ひだつた。若し相談を受けたら寧ろすぐに英吉利本國へ歸してくれるやうにと賴んだであらう。しかしその時バセット將軍は死んだ友達の遺娘の身の上なぞをとつくりと考へてゐるひまはとてもなかつた。彼の前には職務上の任務が山のやうに堆積してゐた。それで同時にニック・ラトクリッフに對してはロスコエ將軍が與へたと同じい特權を與へてし

まつたのである。こんな工合でムリエルはバセット夫人の監督の下に身を置くことになつて、意識がいつもの通りになつて氣が注いて見ると、彼女といふ人間は夫人の承諾がなければ手も足もだせない境涯となつてしまつてゐた。軀が快くなると、いつの間にか脈管に悲しみが蘇へつて來た。そしてどのやうに孤獨な自分かと思ひ出した時には枕が熱い涙で濕れてしまつた。けれども折よくそれはシムラの社交期節のことで、バセット夫人が羽根を伸して飛び廻つて、ムリエルのことになぞは構つてゐられないのがせめてもの歡びだつた。とはいふものの無聊をきはめた豫後の軀はひとりぼつちに遣り切れずなつてはゐた。

　彼女はもう肉體的には病氣ではなくなつてゐたが、しかし何とも言はれない不愉快な輕熱が分離し切らなかつた。軀中がぐつたりしてしまつて、その倦怠い氣持と爭ふとはとても出來なかつた。彼女は時々自分がどうして今も生き存へてゐるのか、あの怖しい山中逃走を無事に生きのがれたのか、かうして此の部屋に寢てゐるのか、それを考へて見ては激しい驚きに打たれずにはゐられなかつた。そして世の中の歡びといふやうなものはあの巖の上をかぎりとして掃き去られてしまつたやうな氣持がするのだつた。そんな時彼女の胸に漲る寂寞は言ひ難かつた。その寂寞は死の怖れよりもつと酷いものを彼女に感じさせた。未來は夜のやうに黑く、果しなき砂漠よりも一そう空漠としたもののやうに思はれるのであつた。

　ときぐ彼女の夢に、さまぐな幻が現はれた――それはある時は都でのあの華々しい世界のそれで、ある時は父親と一緒に曩日まで暮した樂しい世界のそれであつた。彼女は幻の中で快活な笑ひごゑや、音樂や舞踏の響を聽いて目を開けた。すると目の前には限りなき空虛が、果しなき寂寞が、荒寥が展がつてゐるのを見るのであつた。

　若し彼女の胸にあの當時のニック・ラトクリッフがなほ居たとするならそれは過去の夢魔の亡靈と言つてもよかつた。現在では彼はもう彼女に取つて何でもなくなつてゐた。未來に就いては彼女自身自分のことが見當もつかなかつた。が、ある日のことバセット夫人が部屋にはひつて來て、その人の名をムリエルの前で言つた時彼女の頰に幾らか血が上り目に輝やきがひらめいたのだつた。

　ヴァイス・レガル・ロッヂの園遊會へこれから出かけようとする夫人は言つた。

「ラトクリッフ大尉から手紙が來ましたのよ、ムリエルさん。で、お返事して置きましたの。あなたは現在のところどなたにもお目にかゝれる程快くなつてゐないからつて――それな

のにあの方はまたどうしても逢ひたいからつてまたくどく言つて來たのよ。だから今度はあなたが自分で返事を書いて上げて下さいな。私が言つて遣つたことをもつと意味を强めて書けばいいわ。』

『ラトクリツフ大尉ですつて！』とムリエルははじめて聽く名でもあるやうに聽き返した。が、やがて蒼ざめた頰に急に紅い血の色が上つた。『まあ、ニツクのことを仰有るんですのね――私、もう少しであの方の名字を忘れてしまふところでございましたわ。あの方が逢ひたいと仰有るんですの？じや、やはりこのシムラにゐらつしやるんでございませうか？』

彼女は意味ありげにぢつとこちらを凝視てゐるバセツト夫人の目を避けて顏を反けた。どうしてこの女はそんな目付で此方を瞶めるのであらう？

バセツト夫人はボタンの澤山ある手袋を嵌めはじめた。

『えゝ、シムラにゐますのよ。』と夫人はやがて柔しい聲で言つた。『だがあの方に逢はなければならないといふ程のことはちつともありませんわ。もしどうしようとあなたが相談なさるなら、逢はない方がいいと私は言ひますわ。あなたのやうなひどい經驗をなすつたあとではなるだけ記憶から離れてゐなければなりませんものね。それに世間の評判もうるさいから――だから、私からあの方に書いてあげるのは何でもないけど、あなた自身からきつぱり言つて遣つて置いた方がいいだらうと思ふのよ。』

『でも――』とムリエルは思ひもかけぬ熱心さで言つて、バセツト夫人に挑戰的な光を帶びた目で眺めた。『でもどうしてあの方にお目にかゝつてはいけないんでせう？私あの方にお禮を申さなければならないと思つてをりますの。私にはお目にかゝつて惡いとは思はれませんわ。』

彼女には自分でも突然どうしてこのやうな激しいことを言ひ出したのか解らなかつた。若しバセツト夫人が逢へと命じたなら屹度厭だとかぶりを振つたに違ひないであらう――そしてこんな問題に就いてはふた言と口を開きはしなかつたであらう。彼女は何となく夫人の態度に反感を感じたので、構はずこんな風に言つてしまつたのである。バセツト夫人といふ女にどうして自分の自由を束縛する權利があり得るだらう？

『いつあの方はいらつしやるんでせう？』と彼女は訊ねた。

『いらつしやれば歡んでお目に懸りますわ。』

バセツト夫人は微かに肩を搖すつた。

『お逢ひになりたければお逢ひなさい。でも、どうぞ氣を附けて下さいよ。今日午後來たいと言ふんですの。若し私が一緒にゐる時逢つた方がいいとお考へなら、ここに[illegible]紙を遣つてい

い時間を打合せたらどうでせうね」

「それにも及びませんわ。」とムリエルは無邪氣に言つた。

「そんならいいわ。」とバセット夫人は言つて、かすかに含笑つて娘の額に接吻して。「ぢや私外出て來てよ。私があなたならあの方が來てもすぐ歸つて貰ふやうにすると思ひますわ。そして名を呼ぶにもニックなんか言はずにちやんとラトクリッフ大尉とお呼びする方がいいと思ひますわ――あなたはまた文明社會へ歸つて來たのだから――」

ムリエルはもう辛抱が出來かねて來たやうに顔を外けた。彼女にはこんな風な婉曲な警戒がまるで無意味に思はれた。そして相手の意見は少しも身を入れて聽く氣にはならなかつた。父親が友人の レギナルド・バセットに自分の一身を頼んだのは知つてゐたが、この夫人を好く氣にはとてもなれなかつた。

バセット夫人が行つてしまふと彼女は冷たい唇が觸れた額を一生懸命こすつた。

「あの方に私がどんなに接吻されるのが嫌ひだか聽かして上げたいわ。」と彼女は呟いた。

ムリエルはまた横になつた。しかしもう睡れなかつた。このごろは不眠がつゞいた。自然的な休息を取るには自分の軀もあんまり疲れ果ててゐるやうに彼女には思はれた。一時間あまりが過ぎた。彼女は無意識に耳をすましてゐた。さうしてゐるうちに、ふと、前に一度聽いたことのある快活な足音と口笛が聽えて來た。

おゝ、これこそはあの夜のワラの砦で、父親と最後の抱擁を交した後で聽いたあの足音と口笛ではないか！ ムリエルの胸には悲しい想ひが潮のやうに溢れて來た。ムリエルは身を起してソフアにぢつと坐つた。あの人にほんたうに逢ふ力があるだらうか？ とても忍べないことではあるまいか？

彼女の心臓は重く脈搏つた。彼女はもう少しで此の部屋を逃げ出してバセット夫人が言つた通りにお目にかゝれないと申譯させようかと思つた。が、その刹那にもう遅いといふ感じが胸を過つた。土人の召使の影が窓を掠めた。ニックはもうヴエランダに立つてゐるであらう。彼女は泣き出したいやうな氣持で彼を迎へるために立ち上つた。

九　再會

彼はたつた昨日別れたばかりでもあるやうに、氣輕るに飾りけなくはひつて來た。黄色い顔には歡しげな微笑みが溢れ、聲音には親友らしい打とけた響があり〳〵と聽えるのだつた。

彼はすぐに彼女の手を把つて、ちよいと探るやうな目で眺

ゐた。

「おゝ、もう大分快いですね？　僕はバセット夫人が園遊會へいらしつたのは知つてゐるんです。しかしもうあの人へは今日お訪ねすると知らせてあります。それにしても君は僕に逢ひたいとあの人をうまく說きつけたと見えますね？」

ムリエルはこの問ひを受けて面喰つた。

「いゝえ、そんなことを說き付けなんかしませんでしたわ。」と彼女は冷たく言つた。「私あの方に申し上げたんですの――たゞ――」

彼女は顏が紅くなりはすまいかと思つて少し困つた。そしてさも疲れたやうな風を裝ほつて言葉を止めて腰を下した。お禮を言ひたかつたのであるが聲は咽喉で窒つてしまつた。それにそんなことを彼が豫期してゐないのも明らかだつた。

ニックは彼女と並んでソフアに腰を下した。

「もうお醫者の手から離れたさうですね。結構です。」と彼は言つた。

「えゝ、もうずつと前から――」と彼女は目を揚げずに答へた。「もうすつかり快いのですけれど、まだ疲れがなほりませんの。」

ニックはうなづいて見せた。彼は彼女の兩手を相手の膝の上で握つた。そして笑を含んだ聲で言ふのだつた。

「僕は君が早くなほつたのでほんたうに嬉しいんですよ。これで仕事がやり易くなつていくら氣樂になつたか知れはしません。僕はいつ君が僕と結婚して下さるか聽きに來たのです。今日ですか？　明日ですか？　來週ですか？　勿論さう急にせつつくわけではないけれど、別にぐづ〳〵してゐる必要はないと思ふのです。僕自身にすればもう待ち切れなくなつてゐます――君はどうです？」

さう言つて彼は彼女を眺めた。大變柔しい聲音であつたがどこか冗談らしい調が交つてゐた。

ムリエルは大きく目を瞬いた。彼女はひどくびつくりして彼を見た。頰は眞紅になつた。

「結婚ですつて？　あなたと？」と彼女はやがて呟やいた。

「私が？　どうしてそんなことを仰有るんでせう――どうしてあなたはそんな夢を御覽になつたんでせう？」

「說明しろと言ふのですか？」と彼はすぐに別に當惑した容子もなく答へた。「僕はひどく孤獨で、悲しみに充たされた一人の友達を持つてゐるのです。そしてその婦人には是非いろいろ世話をして上げる――つまり元氣をつけて上げたり、不愉快な境遇から連れ出して上げたりする人がなくてはならないのです。その婦人が失つた歡びや慰さめを提供する人が要なのです。ところが僕はその婦人を自分と同一體だと思ふ樣

利があるものですから——つまり僕はその婦人のお父さんから生かすとも殺すとも勝手だと任せられてゐるものですからもう默つて見てはゐられなくなりました。ね、ムリエル、君と僕との現在はこんな風な狀態なのです。だからもういつまでも愚圖愚圖してゐるのは下らない話だから遣つて來たのですよ。仕事として殘つてゐるのは何も義理で仕方がないからどんな手段でかバセツト夫人の同意を得ることゝ、敎會へ行くことゝ、それが濟んだならお互の友人に左樣ならを言つて旅行に出かけることと、これだけなんです。どうです？　僕を信じて下さい。僕は信じるに足る人間ですよ。」

　彼はムリエルの手を握りしめたままでこれだけのことをひどく早口で言つた。彼の瞳はまじろぎもせず彼女を瞶めてゐた。それは炎のやうに輝やかしく燃えてゐた。ムリエルは全く目眩めくやうな感じで耳を傾けてゐた。怖ろしくは思はなかつたが息も止るばかりに驚かされるばかりであつた。

「で、君はどう考へてゐるのです？　聽かして下さい。」と彼は柔しく言つた。

　しかしムリエルはどんな言葉で氣持を言ひ現はしてよいか分らなかつた。彼女は默つたまま頭を振つた。

　暫くして彼はまた靜かにつづけた。

「これを一時の氣まぐれだなぞと思つては困りますよ。お父さまはすつかり知つてゐらしつたのです。それを知つておいでなすつたからこそ君を僕の手に委して下すつたのです。僕はあの方からすつかり同意を得てゐるのです。」

　彼は言葉を止めた。なぜなら彼が今迄握り占めてゐた娘の手は引き退けられてしまつたのである。彼女はもう彼を見なかつた。彼女の追憶はあの怖しい夜に歸つた。

　彼女は息が詰るやうに感じながら手を振りほどいて立ち上つた。そして恐怖に充たされた過去の幻を見まいとするやうに兩手で目を押へた。

「私には解りませんわ？　私には解りませんわ。」と彼女は哭くやうに言つた。

　ニックは身動きもしなかつた。しかし彼女は何とも知れぬ磁石的の力が自分の身を彼の方へ吸ひ寄せようとするのを感じた。ニックは言ひ出した——聽くまいとしても聽かないわけにはいかない氣がした。

「何も怖がることはないんですよ。」と彼は相手を安心させようとしながら言ふのだつた。「僕はただ君のことを氣を注けて上げたいのです。君は寂しい賴りのない女だから——そしてまだ一人立が出來る程年を取つてもゐなければ世の中を知つてもゐないから——ね、さうぢやありませんか？　僕は君には全く適當な人間ですよ。どんな事でも君のためならする積

でするのです。」

ムリエルは耳を傾けずにはゐられなかつた。相手の言葉を無作法だと憤らうとしたが、しかしその言葉はすべて眞實だつた。彼女は孤獨だつた。みじめだつた。言ふべからず孤獨だつた。彼女のまはりを取巻いてゐるのは灰のやうに冷たいものばかりだつた。

しかし彼女はなほ何とも言へなかつた。そんな事が出來るだらうか？　たとへ此の人物があの怖しい朝あのやうな怖しい業をしたといふ記憶を取り退けてしまつたとしてもそんな事が出來るだらうか？　結局彼女はもう少し時日を伸べて置くのが一ばん安全な路だつた。けれども時日を伸べたところで、彼女には誰れに相談する方法もない。誰れも心から彼女を心配してくれるものはありはしない。この男の友達のやうに自分を一心に案じてくれるものが外にあるわけではない。此の男こそ自分の一大事をも相談すべきたつた一人であつた。生れてから父親を除いて自分に此の男程深切だつたものがあらうか？　急にニックに對する熱い感謝が彼女の胸を擾した。炎は灰とならうとしてゐる彼女の青春を火に甦へらせた。で、力ない聲で言つた。

『私今の自分の身の上をさう氣にかけてはゐませんの。でもあなたが結婚したいと仰有るなら、ほんたうにさうお考へならさうしてもいゝと思ひますわ。」

「有難う。それできまつた。」とニックはほほゑんで言つた。

「僕はもうとうからその積りで時節を待つてゐたんです。」

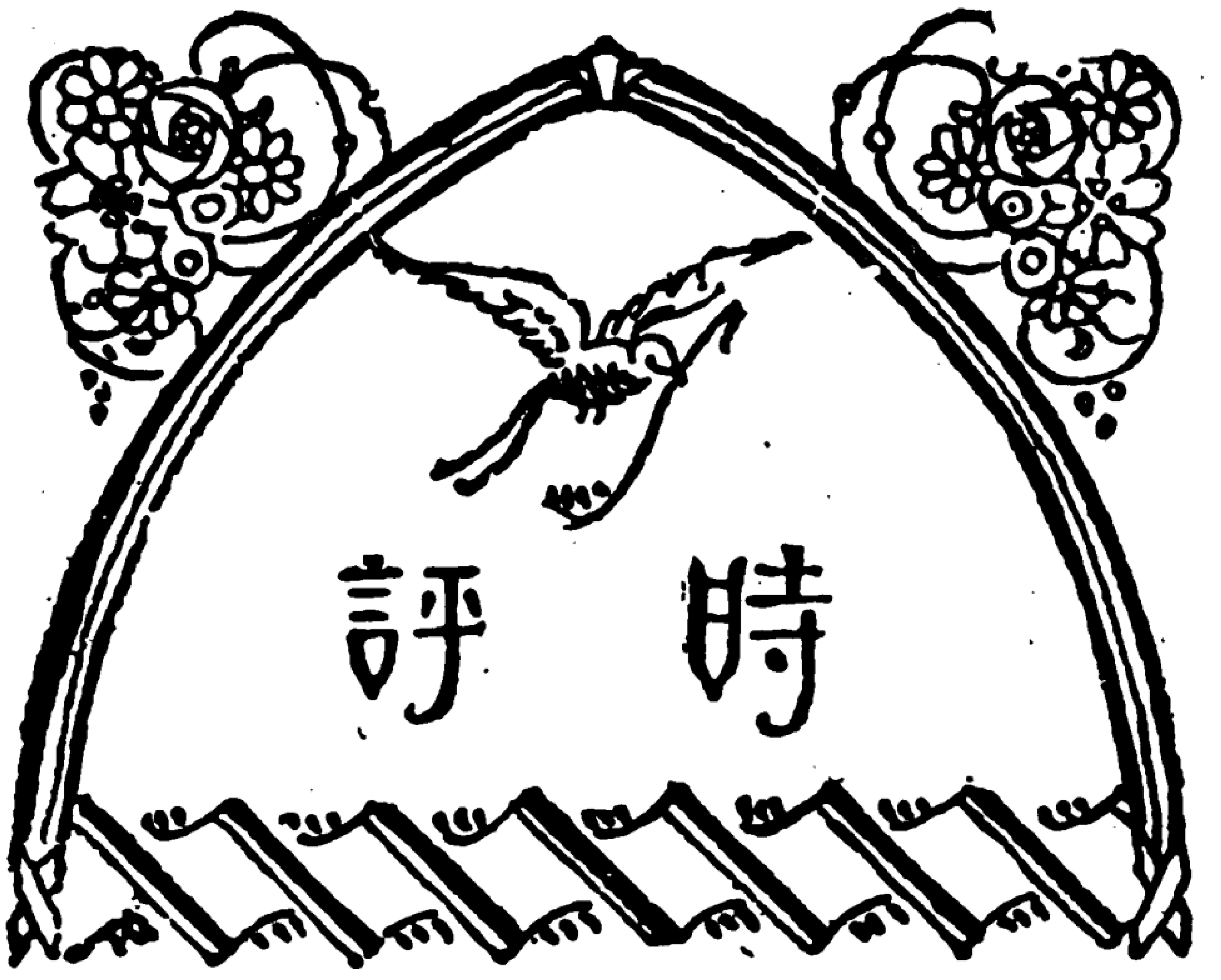
彼女は儚ないほゝゑみを笑み返して手を相手の膝にかけた。

「私に足らないところがあつても許して頂戴よ。」と彼女はいくらか戰きを帶びた聲で言つた。『私、もう何もかも失くしてしまつて殘つてゐるのはたゞあなた一人なのですから――』

彼は溫かく樂しく娘の手を握りしめた。

『僕は君の今の言葉をいつまでも覺えてゐますよ――いつまでもね。』

（つゞく）



女性の政治運動

室伏高信

政治季節の接近とともに、女性の政治運動がまた繰返されようとしてゐます。

私たちが女性運動と云ひなしてきたのは、必ずしも女性の、女性によつての運動であつたのではなかつたのです。過去の女性運動の特色は、たゞその目標の女性的であると云ふの點にありました。即ちそれが女性のための女性の解放のための運動であると云ふことであつたのです。そのためには、その女性運動に加はるものは誰れであつてもいゝ。女性だけでは無力である場合が多いので、それは屢々男子によつて、若しくは男子を加へての混合運動であつたのです。も一度いふと今日までの女性運動と云ふのはその目的の問題であつたのです。目的が女性の解放と云ふことにありさへしたら、それだけで、誰れがこの運動の組織者であらうとも關はるところではなかつたのです。

今の女性運動はこの根本を變へました。女性の解放と云ふ目的は、ヨオロッパやアメリカではある程度まで到達しました。特に女性の政治的解放の目的はほゞ世界の各國で片づいてしまひました。そこで今日までの樣な女性の解放を目的と

する女性運動は尙ほ必要のあるものであつても、その必要が一般の人の感激點以下に迄引下げられてしまつたのです。特に女性の解放を目的とする政治運動は全く意味のないものになつてしまつたのです。こゝに女性運動は世界の各國を通じて一つの根本的な轉化を見なくてはならないこととなつたのです。それはこゝに終りを告げるか、でなければ方向を轉換**しなければならないこととなつたのです。**

女性運動はその方向を轉じました。特に私のこゝに問題としようとする女性の政治運動は全くその目標を塗りかへてしまひました。それは女性解放と云ふ部分的解放運動から包括的な、全人類の解放を目標とする大運動の中に吸收されてしまつたのです。

女性の政治運動によつて、女性はその法律上の不平等から解放されました。女性は、今ではほゞ世界の各國で、代議士やその他の政治上の代表者を選むために、投票場では、みな男子と平等になつたのです。西洋ではどこの料理屋へ行つても、どこの酒場へ行つても、男と女とがともに卓子を並べて飲み、食つてゐるのを見ます。その酒場や料理屋で男女が全く平等に振舞つてゐるやうに、選擧の投票場でも、男性と女性とは、全く平等に振舞ふことのできるやうになりました。しかしそのために女性は解放されたでせうか。そのために女性解放の目的は一歩を進めたのでせうか？

今日までの女性解放の政治運動はたしかに一つのものを發見しました。それは女性解放の政治運動によつて女性の解放のうへには何ものも加へられなかつたと云ふことです。事務所に働く女は、昔のまゝの賃銀奴隷です。家に働く妻は、昔のまゝの家庭奴隷であることに何の變りもありもしないのです。それは世の中に、女性奴隷よりももつと根本的な奴隷制度が存在してゐたからであつたのです。私はこのことは前號で述べました。**そのことを私はこゝに繰返しはしない。たゞこゝに言はなくてはならない**ことは、この根本的な奴隷制度の存在に氣のついた女性の政治解放運動は、その目標を單なる女性解放といふことから全人類の解放と云ふことへと塗りかへなければならなかつたと云ふことであるのです。たしかに今日の女性運動はこの境にまで進んできました。嘗つてはブルヂョア階級の女性の玩弄物であつた女性解放運動が、今日では全くブルヂョア階級から離れてしまひました。そして一切の特權階級と鬪ふために、却つて昨日の友であつたブルヂョア階級の一切のものを敵とするやうになりました。こゝに女性運動が人間運動にまで進んだのです。で女性解放を目的とする女性運動と云ふものが事實上世界の――進歩した國では無くなつてしまつたのです。しかしこれがために女性運動がなくなつてしまつたのではない。女性運動が人間運動として存在することとなつたのです。言葉を新らしくしていふと、女性解放の目標のもとに組織されてきたものが、今では女性そのものによつて、人間解放の大きな目標のために鬪ふところの運動に進んできたのです。

過去の女性運動は、たゞその目標のうへに存在しました。

今日の女性運動は目標のうへには存在しない。目標は男性も女もともに一つになつた。今日の女性運動は、女性のためでなくて、女性によつての一運動となつたのです。

女性によつての政治運動はヨオロッパの諸國を通じて異常な進歩を見た。女性は男性と肩を並べて、到るところの政治運動に働いてゐます。私は英國勞働黨の總會にも行つて見ました。獨逸の社會民主黨の會合にも行つて見ました。若しくは多くの政治上の集會に行つて見ました。集まつてゐるものの半は、若しくは三分の一は女性であるのを見ます。演壇に立つもののある部分も常に女性であるのです。女性は、たゞ社會人として男性とともにあるばかりではなしに、政治人としても男性とともにあるやうになつたのです。またたゞに政治人としてばかりではなしに、政治家としても、政治的運動の指導者としても女性の才能が決して男性以下でないと云ふことが益々事實のうへに證明されつゝあるのを見ます。

日本ではまだ女性に參政權が許されてはゐない。從つて女性の政治運動は必然的に婦人參政權の運動となつてゐます。女性によつての政治運動ではなくて、女性のための政治運動となつてゐます。私たちはこの進化の階段をどうすることもできないものであると思つてゐる。そしてまたこの種の政治運動がやがて目的を達するであらうと云ふことをも信ずるものである。そしてそれが目的を達した時に、婦人參政權そのものは、女性の解放のために一物をも加へなかつたと云ふことを證據立てるために、試みられなければならない一つの階梯であると私には思はれます。

革新倶樂部に就て

この頃になつて、女性のあるものが、たゞの部分的な女性運動から一歩を進めて、一般的な政治運動に加はらうとする傾向があるかないかを私は知らない。しかし出來たての革新倶樂部に幾人かの若い女性が加はつたと云ふことを聞きました。今までの政黨に加はらなかつた女性が、縱令幾人にせよ革新倶樂部に加はつたのは如何なる理由があつてのことであらうか。新聞で見たところによると、これ等の女性の諸君は革新倶樂部そのものの立場に共鳴したためであるらしく見えます。革新倶樂部には、どこか新らしい女の共鳴を導くやうな何ものかゞあるのでせうか。或はまた汎く新らしい人の心に響く何ものかをもつて生れてきたのでせうか。

革新倶樂部は、既成政黨を打破することを標榜して生れました。既成政黨の打破この點に反對する人は、少くとも今の青年にはない筈であるのです　何故に既成政黨を打破しなく

てはならないでしよう。革新俱樂部の人たちは云ふ、それは階級閥の機關、資本閥の機關であるからであると。犬養老人の演說のうちにも、この俱樂部の宣言のうちにも明らかにかう述べられてゐます。この點についても今の青年に何の反對もあるべき筈はないことだと思ひます。

今の日本の政黨は明らかに一つの資本黨であるのです。片山潜君がこの頃ロシヤで發表したところによると、政友會は三井、憲政會は三菱、そして國民黨は勝田（神戶の成金）の一派を代表するブルヂョア黨であるとされてゐます。私は片山君の說のやうに、政友會は何々財閥憲政會は何々財閥と云つたやうに、明瞭に財閥分けにできるかどうかを知らない。しかしその政友會が、憲政會が、舊國民黨が、資本閥の機關であると云ふこと、若しくは汎くブルヂョア黨であつたと云ふことは天日の如く明らかな事實であるのです。この財閥黨を打破することが革新俱樂部の任務であるとしたら、私たちがこの運動に進んで加はらないまでも、反對すべき何の理由もないのです。しかし革新俱樂部そのものがかうした目的のためにできたものであるのでせうか。若しくはかうした目的に値ひする何ものかをもつてゐるのでせうか。

革新俱樂部は慥に一つの資本黨――舊國民黨を打破しました。舊國民黨は無論自壞したのですが、革新俱樂部の生れるために國民黨が自壞したのであるから、革新俱樂部がこれを打破したと云つてもいゝでしよう。しかし舊國民黨のやうな小政黨、そしてやがて遲かれ早かれ滅亡の運命にあつた小政黨がどうならうと私たちにとつては何の問題でもない。既成政黨打破の必要は、政友會と憲政會とを打破するにあるのです。その政友會と憲政會とを打破するために革新俱樂部によつて何ごとがなされるであらうか。しかも私たちが政友會または憲政會の打破と云ふことは凡ての資本黨の打破と云ふことであるが、この資本黨の打破と云ふことのために、革新俱樂部によつて何ごとがなされるのでせうか？

革新俱樂部は、資本閥を倒せと云ひました。階級閥を倒せと云ひました。しかし、未だ嘗つて資本家を倒せと云うたことはない。また嘗つてブルヂョア階級を倒せと云うたことはない。この階級鬪爭の嚴めしい事實を前にして、彼は嘗つて彼が何れの階級の側に立つとも云つたことはない。また何れの階級を倒せとも云つたことはない。こゝに革新俱樂部の手品の種子があるのです。彼自らが一個の資本黨でありながら資本黨を破壞するがごとくに見せかけたところにこの一團の淺薄ではあるが、狡猾な欺術があるのです。しかも若し彼が資本家階級の打破を口にしたとしたら、彼の背後に控へてゐる主人――資本家階級の破門をうけなければならないために、彼は勿論資本家階級の打破を叫ぶやうな愚かなことは絕對にないのです。資本家階級を打破しないで、その資本黨を打破する！　資本階級を倒さないで資本黨を打破する！　こ

の位ゐ滑稽なヂレンマがあるでせうか。

しかもよく考へて頂きたい。資本階級のほかに、資本閥なるものが存在するでしようか。否、資本閥なるものがあるでしようか。閥の存在は、封建時代とともに去つたのです。ブルヂョアジイは閥ではなくて社會階級であるのです。この一個の嚴然たる社會階級を、見て見ない振りで、門閥や藩閥の一つのやうに言ひなすところに、この一團の愚かさ、狡猾ではあるが、その狡猾の愚かさとがあるのです。

革新俱樂部はたゞ舊國民黨の復活であるに過ぎない。國民黨が滅亡の淵に瀕した時は、策士の眼が、革新俱樂部の建設によつて國民黨の復活を考へてゐたのです。それは純粹の犬養黨であるとともに、また一個の純然たる資本黨であるのです。政友會や憲政會と全く同一なる一個の資本黨であるのです。政友會や憲政會が正直に資本黨であることを隱さうとしないのに對し、革新俱樂部は、少くともその正體を、頭だけは隱さうとしてゐます。こゝに革新俱樂部の手品、矛盾、苦心、そしてこの一團に加はつて行かうとする一部の愚かしい人たちの心理とを見ることができるのです。

しかももう少し我慢してこの一團のなしてきたところを見ましよう。暫定綱領なるものが發表されました。既成政黨を打破することを使命とすると叫んで出てきた此一團の暫定綱領なるものがどの點にこの既成政黨の打破の道が示されてゐるのでしようか。たゞの一字さへ示されてはゐないのです。また示すことはできないのです。だから革新俱樂部はその暫定綱領の發表とともに、既成政黨の打破を目的とする團體としては、既に死滅したことを、證明してゐるのです。革新俱樂部は死骸です。その生れた時から死骸です。死産であるのです。無論この團體は普通選擧を標榜します。それも結構です。だが普通選擧に反對するもの、今の日本のブルヂョア階級とその政黨とのどこに存在するでせうか。政友會でさへ、原則としては賛成と云ふまでになつてきたではないか。また或は師團半減と云ふことも標榜してゐませう。しかしそれとてもたゞ國民黨の犬養案であるのではないか。然り、革新俱樂部は完全に犬養の從者になつたのである。それは再び木堂會と命名すべきの時がきたのです。

創作



小さな旅

有島生馬

子供をつれての短い海岸の散歩から歸つて玄關へ這入ると、帽子かけの鏡の前に、午後配達の郵便物が一かたまり載つてゐた。それを持つてヴランダに行き、四時の茶にしながら、一つ一つ徐かに讀んで行つた。そのうちに京都の近藤七郎君からの通信も混つてゐて、目下大阪で開催中の松方幸次郎氏所藏『泰西名畫展覽會』の批評がしてある。古畫を見ての物足らなさ、クウルベエの意外さ、セザンヌやルノワルを見ての歡喜、ゴオホやゴオガンを見ての驚愕、それ等が畫家らしい敏感さで書かれてゐた。

行つて見度い……と、戸外の微風すらない小春の上天氣を見ながら、京阪の風物を思つてみた。

會期は十月の十五日から二十日までゝある。今日はその五日目で、明日一日限りでもう閉會される譯だ。

大毎社から招待狀を受取つた時、これは恰度好都合だ、京都の二科會を兼ねて上洛しよう。京阪へは三年越し出かけないでゐる。久しぶりの旅でどんなに樂しいか知れない。で凡その日取などを青楓や山下君へ通じてやつたりした。

所がこの計畫を兄や妻が聞くと、非常に私の宿痾や盲腸の事を心配し出して、是非もう一年だけ辛棒しろ、明年になつたらきつといゝだらうと、たつて引止めたので、甚だ遺憾千萬ではあつたが、思ひ止ることに決心したのである。

近藤君はなほ手紙に添へて菊倍判十五頁許りの同展覽會圖錄をも一部送つて呉れたので、それを手紙と見比べながらひ

くり返して眺めた。表紙と表紙裏とにはゴブラン織の歴山大帝戰爭圖とテゥルネイ織の「キリスト敎がユダヤ敎に洗禮を施す」圖とが刷つてあり仲々立派相に見える。中には三十六の作品が寫眞版になつてゐて、會の內容がどの位のものであるか十分に窺はれた。

今から急いで支度をし、今夜の直行にのればどうかかうか間に合ふ、と云ひ出すと妻は苦い顏をして絕對それに反對した。子供はセザンヌの畫などまだ見たことがないから、一緖に連れて行つてくれろと、これは贊成で行くことにしきりに勸める。終ひには母と子の爭論になつて終つたので、自分はその場をぬけ出し、獨りでこそ〳〵旅の支度を初める。妻は自分の意見に反對して出かけるのだから一切支度は手傳はないと我ん張つてゐる。手廻りの支度は三十分もすれば出來上つた。それから洋服に着替へ、今年になつて初めての外套を出したりする。

そんな事してゐた間に大學生のK君が畫を一枚見せに持つて來た。暫時話してゐるともう時間になつて終つた。K君も一緖に行き度いと云つてゐたが、寂しいから泊つて行つて吳れろと頻りに妻が引とめるので、結局K君はやめることになつて、子供と一緖に藤澤停車場まで荷物をもつて見送つてくれた。

藤澤から國府津へ着くまでに秋の日はすつかり暮れて、外套の襟を合せてもうすら寒いほどになつた。病養を專らにするやうになつてから三年越し、旅らしい旅は今度が初めてなので樂しさと不安さが半分半分である。もしこの旅のために赤熱でも出る事になれば、あれほど心配してくれた兄や妻に對して全く濟まない事になるし、自分自身に對しても一旦決心した事を、たとへ好きな畫のためとは云へ急に變替してふら〳〵と出て來たのがいかにも輕薄にも思はれる。然し一方では又、初一念をとう〳〵貫いたやうな、我慢と冒險とを敢てするほどの地金が久しぶりで弱い肉體に打勝つたやうな感がするので嬉しくもあつた。

國府津で直行に乘替へたのは九時だつた。三年の間に列車內の設備が變つてゐたりしたのは一寸目についたが、旅客はいつも同一の人々が同一の旅裝でそこに坐つてゐるやうにしか見えなかつた。男は事務的な、女は疲勞した表情である。新婚旅行らしい人々すらさうである。誰れも西洋人などのやうに旅を遊山といふ顏や態度には見えない。皆な窮屈相にしてゐる。

食堂で、前の卓に後向に坐つてゐた肥つた西洋人をどこの紳士かと思つたら海濱院ホテルの支配人だつた。その先に黑い洋裝の日本婦人、これも向ふをむいてゐたが、どうも原信子女史らしかつた。直ぐかう見知り越しの人に逢ふのも内地の旅らしく思へた。

幸ひ違約になつた寢臺が二つ殘つてゐて、その一つを讓つてくれたので、身體を横にすることが出來た。然し珍らしい旅なので容易に睡つかれなかつた。色んなことが交々意想の面に表はれて來た。それが三年の間溜水のやうに動かなかつた考とは違つて、何んとなく光つてゐたり、動いてゐたりするので愉快に思つた。旅は矢張りいゝ、これからはちよい／＼旅へ出なければ駄目だ。明日見る畫のことを初め、それからそれへと色々思ふ。一番終ひには、かう列車の震動が烈しくつては吾々のやうな弱い身體のものは全く參るつて終ふ。どういふ姿勢をとつたら震動が一番強く來ないだらうと、工風してみても一向效果がない。そのうち盲腸部が痛むやうな心持さへして來る。一層無震動の列車を發明した方がどの位自他のためになるか知れないと、もうその發明にとりかゝつてゐる。その邊から先は早や現とも夢ともさつぱり譯が分らなくなつてゐた。でも夜中何遍となく目が覺めた。大津の手前で起床する。關西の山、關西の樹木、關西の瓦屋根と草屋根、どれもこれも懷かしく嬉しい心持がする。一夜はまだ明けきらないのに、その薄暗い光の裡にある自然はもう一新して終つてゐた。

相變らず古ぼけてゐるのは大阪驛である。朝着く旅客のために顏を洗ひ、一杯のカフエを飲む設備もないのは不便と云はねばならない。車夫の案内するまゝに驛から遠くない旅館に荷を下し、湯に入つたり、朝飯をしたりする。七時である。

私は又展覽會の圖錄を眺めて時間を喰ふ。開場時間が判然しないので宿の男に電話で聞いてくれとたのんだら、八時か九時からですと曖昧な事を云ふ。後で聞いたらその男は風呂番の三介で阿房だといふ事だつた。

社に行つてみると、開場は十時からで、まだ一時間半も間があつた。海岸へ出て、淀んだ水の色を眺めたり、電車や通行人の風俗を見る。多少異人種の間に立混つたといふ意識が明かになつて來る。偶然堂島の株屋町へ出る。不思議な光況が目の前に現はれる。大して福に緣があり相もない人達が澤山往來に集つてゐる、中には女もちらほらと混つてゐる、やがてぼろ／＼の喧雜の間から妙な聲が響くと隣の店でも同じことを同じやうに吹鳴る。次から次へとその響は餅のやう

京都……京都公會堂……十二月十日午後一時

大阪……大阪中央公會堂……十二月十一日午後六時

神戸……十二月十三日

福岡……十二月十七日

聽講券は各一ヶ所一人參圓　發賣所は名古屋は新愛知新聞社で發賣し、其の他は其の地の各書店で發賣致します。

主催　改造社

今日の女性運動は目標のうへには存在しない。目標は男性も女もともに一つになつた。今日の女性運動は、女性のためでなくて、女性によつての一運動となつたのです。

女性によつての政治運動はヨオロッパの諸國を通じて異常な進歩を見た。女性は男性と肩を並べて、到るところの政治運動に働いてゐます。私は英國勞働黨の總會にも行つて見ました。獨逸の社會民主黨の會合にも行つて見ました。若しくは多くの政治上の集會に行つて見ました。集まつてゐるものの半は、若しくは三分の一は女性であるのを見ます。演壇に立つもののある部分も常に女性であるのです。女性は、たゞ社會人として男性とともにあるばかりではなしに、政治人としても男性とともにあるやうになつたのです。またたゞに政治人としてばかりではなしに、政治家としても、政治的運動の指導者としても女性の才能が決して男性以下でないと云ふことが益々事實のうへに證明されつゝあるのを見ます。

日本ではまだ女性に參政權が許されてはゐない。從つて女性の政治運動は必然的に婦人參政權の運動となつてゐます。女性によつての政治運動ではなくて、女性のための政治運動となつてゐます。私たちはこの進化の階段をどうすることもできないものであると思つてゐる。そしてまたこの種の政治運動がやがて目的を達するであらうと云ふことをも信ずるものである。そしてそれが目的を達した時に、婦人參政權そのものは、女性の解放のために一物をも加へなかつたと云ふことを證據立てるために、試みられなければならない一つの階梯であると私には思はれます。

革新俱樂部に就て

この頃になつて、女性のあるものが、たゞの部分的な女性運動から一歩を進めて、一般的な政治運動に加はらうとする傾向があるかないかを私は知らない。しかし出來たての革新俱樂部に幾人かの若い女性が加はつたと云ふことを聞きました。今までの政黨に加はらなかつた女性が、縱令幾人にせよ革新俱樂部に加はつたのは如何なる理由があつてのことであらうか。新聞で見たところによると、これ等の女性の諸君は革新俱樂部そのものの立場に共鳴したためであるらしく見えます。革新俱樂部には、どこか新らしい女の共鳴を導くやうな何ものかゞあるのでせうか。或はまた汎く新らしい人の心に響く何ものかをもつて生れてきたのでせうか。

革新俱樂部は、既成政黨を打破することを標榜して生れました。既成政黨の打破この點に反對する人は、少くとも今の青年にはない筈であるのです 何故に既成政黨を打破しなく

てはならないでしよう。革新俱樂部の人たちは云ふ、それは階級閥の機關、資本閥の機關であるからであると。犬養老人の演說のうちにも、この俱樂部の宣言のうちにも明らかにかう述べられてゐます。この點についても今の青年に何の反對もあるべき筈はないことだと思ひます。

今の日本の政黨は明らかに一つの資本黨であるのです。片山濟君がこの頃ロシャで發表したところによると、政友會は三井、憲政會は三菱、そして國民黨は勝田（神戸の成金）の一派を代表するブルヂョア黨であるとされてゐます。私は片山君の說のやうに、政友會は何々財閥憲政會は何々財閥と云つたやうに、明瞭に財閥分けにできるかどうかを知らない。しかしその政友會が、憲政會が、舊國民黨が、資本閥の機關であると云ふこと、若しくは汎くブルヂョア黨であつたと云ふことは天日の如く明らかな事實であるのです。この財閥黨を打破することが革新俱樂部の任務であるとしたら、私たちがこの運動に進んで加はらないまでも、反對すべき何の理由もないのです。しかし革新俱樂部そのものがかうした目的のためにできたものであるのでせうか。若しくはかうした目的に値ひする何ものかをもつてゐるのでせうか。

革新俱樂部は慥に一つの資本黨――舊國民黨を打破しました。舊國民黨は無論自壞したのですが、革新俱樂部の生れるために國民黨が自壞したのであるから、革新俱樂部がこれを打破したと云つてもいゝでしよう。しかし舊國民黨のやうな小政黨、そしてやがて遲かれ早かれ滅亡の運命にあつた小政黨がどうならうと私たちにとつては何の問題でもない。既成政黨打破の必要は、政友會と憲政會とを打破するにあるのです。その政友會と憲政會とを打破するために革新俱樂部によつて何でとがなされるであらうか。しかも私たちが政友會または憲政會の打破と云ふことは凡ての資本黨の打破と云ふことであるが、この資本黨の打破と云ふことのために、革新俱樂部によつて何ごとがなされるのでせうか？

革新俱樂部は、資本閥を倒せと云ひました。階級閥を倒せと云ひました。しかし、未だ嘗つて資本家を倒せと云うたことはない。また嘗つてブルヂョア階級を倒せと云うたことはない。この階級鬪爭の厳めしい事實を前にして、彼は嘗つて彼が何れの階級の側に立つとも云つたことはない。また何れの階級を倒せとも云つたことはない。こゝに革新俱樂部の手品の種子があるのです。彼自らが一個の資本黨でありながら資本黨を破壞するがごとくに見せかけたところにこの一團の淺薄ではあるが、狡猾な欺術があるのです。しかも若し彼が資本家階級の打破を口にしたとしたら、彼の背後に控へてゐる主人――資本家階級の破門をうけなければならないために、彼は勿論資本家階級の打破を叫ぶやうな愚かなことは絕對にないのです。資本家階級を打破しないで、その資本黨を打破する！　資本階級を倒さないで資本黨を打破する！　こ

の位ゐ滑稽なヂレンマがあるでせうか。

しかもよく考へて頂きたい。資本階級のほかに、資本閥なるものが存在するでしようか。否、資本閥なるものがあるでしようか。閥の存在は、封建時代とともに去つたのです。ブルヂョアジィは閥ではなくて社會階級であるのです。この一個の厳然たる社會階級を、見て見ない振りで、門閥や藩閥の一つのやうに言ひなすところに、この一團の愚かさ、狡猾ではあるが、その狡猾の愚かさとがあるのです。

革新倶樂部はたゞ舊國民黨の復活であるに過ぎない。國民黨が滅亡の淵に瀕した時は、策士の眼が、革新倶樂部の建設によつて國民黨の復活を考へてゐたのです。それは純粋の犬養黨であるとともに、また一個の純然たる資本黨であるのです。政友會や憲政會と全く同一なる一個の資本黨であるのです。政友會や憲政會が正直に資本黨であることを隠さうとしないのに對し、革新倶樂部は、少くともその正體を、頭だけは隠さうとしてゐます。こゝに革新倶樂部の手品、矛盾、苦心、そしてこの一團に加はつて行かうとする一部の愚かしい人たちの心理とを見ることができるのです。

しかももう少し我慢してこの一團のなしてきたところを見ましよう。暫定綱領なるものが發表されました。既成政黨を打破するとを使命とすると叫んで出てきた此一團の暫定綱領なるものがどの點にこの既成政黨の打破の道が示されてゐるのでしようか。たゞの一字さへ示されてはゐないのです。また示すことはできないのです。だから革新倶樂部はその暫定綱領の發表とともに、既成政黨の打破を目的とする團體としては、既に死滅したことを、證明してゐるのです。革新倶樂部は死骸です。その生れた時から死骸です。死産であるのです。無論この團體は普通選擧を標榜します。それも結構です。だが普通選擧に反對するもの、今の日本のブルヂョア階級とその政黨とのどこに存在するでせうか。政友會でさへ、原則としては賛成と云ふまでになつてきたではないか。また或は師團半減と云ふことも標榜してゐませう。しかしそれとてもたゞ國民黨の犬養案であるのではないか。然り、革新倶樂部は完全に犬養の從者になつたのである。それは再び木堂會と命名すべきの時がきたのです。

創作



小さな旅

有島生馬

子供をつれての短い海岸の散歩から歸つて玄關へ這入ると、帽子かけの鏡の前に、午後配達の郵便物が一かたまり載つてゐた。それを持つてヴランダに行き、四時の茶にしながら、一つ一つ徐かに讀んで行つた。そのうちに京都の近藤七郎君からの通信も混つてゐて、目下大阪で開催中の松方幸次郎氏所藏『泰西名畫展覽會』の批評がしてある。古畫を見ての物足らなさ、クウルベエの意外さ、セザンヌやルノワルを見ての歡喜、ゴオホやゴオガンを見ての驚愕、それ等が畫家らしい敏感さで書かれてゐた。

行つて見度い……と、戸外の微風すらない小春の上天氣を見ながら、京阪の風物を思つてみた。會期は十月の十五日から二十日までゝある。今日はその五日目で、明日一日限りでもう閉會される譯だ。大每社から招待狀を受取つた時、これは恰度好都合だ、京都の二科會を兼ねて上洛しよう。京阪へは三年越し出かけないでゐる。久しぶりの旅でどんなに樂しいか知れない。で凡その日取などを青楓や山下君へ通じてやつたりした所がこの計畫を兄や妻が聞くと、非常に私の宿痾や盲腸の事を心配し出して、是非もう一年だけ辛棒しろ、明年になつたらきつといゝだらうと、たつて引止めたので、甚だ遺憾千萬ではあつたが、思ひ止ることに決心したのである。

近藤君はなほ手紙に添へて菊倍判十五頁許りの同展覽會圖錄をも一部送つて吳れたので、それを手紙と見比べながらひ

くり返して眺めた。表紙と表紙裏とにはゴブラン織の歴山大帝戰爭圖とテゥルネィ織の『キリスト敎がユダヤ敎に洗禮を施す』圖とが刷つてあり仲々立派相に見える。中には三十六の作品が寫眞版になつてゐて、會の内容がどの位のものであるか十分に窺はれた。

今から急いで支度をし、今夜の直行にのればどうかかうか間に合ふ、と云ひ出すと妻は苦い顏をして絕對それに反對した。子供はセザンヌの畫などまだ見たことがないから、一緒に連れて行つてくれろと、これは贊成で行くことにしきりに勸める。終ひには母と子の爭論になつて終つたので、自分はその場をぬけ出し、獨りでこそ〳〵旅の支度を初める。妻は自分の意見に反對して出かけるのだから一切支度は手傳はないと我ん張つてゐる。手廻りの支度は三十分もすれば出來上つた。それから洋服に着替へ、今年になつて初めての外套を出したりする。

そんな事してゐた間に大學生のK君が畫を一枚見せに持つて來た。暫時話してゐるともう時間になつて終つた。K君も一緒に行き度いと云つてゐたが、寂しいから泊つて行つて呉れろと頻りに妻が引とめるので、結局K君はやめることになつて、子供と一緒に藤澤停車場まで荷物をもつて見送つてくれた。

藤澤から國府津へ着くまでに秋の日はすつかり暮れて、外套の襟を合せてもうすら寒いほどになつた。病養を專らにするやうになつてから三年越し、旅らしい旅は今度が初めてなので樂しさと不安さが半分半分である。もしこの旅のために亦熱でも出る事になれば、あれほど心配してくれた兄や妻に對して全く濟まない事になるし、自分自身に對しても一旦決心した事を、たとへ好きな畫のためとは云へ急に變替してふら〳〵と出て來たのがいかにも輕微にも思はれる。然し一方では又、初一念をとう〳〵貫いたやうな、我慢と冒險とを敢てするほどの地金が久しぶりで弱い肉體に打勝つたやうな感がするので嬉しくもあつた。

國府津で直行に乘替へたのは九時だつた。三年の間に列車内の設備が變つてゐたりしたのは一寸目についたが、旅客はいつも同一の人々が同一の旅裝でそこに坐つてゐるやうにしか見えなかつた。男は事務的な、女は疲勞した表情である。新婚旅行らしい人々すらさうである。誰れも西洋人などのやうに旅を遊山といふ顏や態度には見えない。皆な窮屈相にしてゐる。

食堂で、前の卓に後向に坐つてゐた肥つた西洋人をどこの紳士だと思つたら海濱院ホテルの支配人だつた。その先に黒い洋裝の日本婦人、これも向ふをむいてゐたが、どうも原信子女史らしかつた。直ぐかう見知り越しの人に逢ふのも内地の旅らしく思へた。

幸ひ違約になつた寢臺が二つ殘つてゐて、その一つを讓つてくれたので、身體を横にすることが出來た。然し珍らしい旅なので容易に睡つかれなかつた。色んなことが交々意想の面に表はれて來た。それが三年の間溜水のやうに動かなかつた考とは違つて、何んとなく光つてゐたり、動いてゐたりするので愉快に思つた。旅は矢張りいゝ、これからはちよい〳〵旅へ出なければ駄目だ。明日見る會のことを初め、それからそれへと色々思ふ。一番終ひには、かう列車の震動が烈しくつては吾々のやうな弱い身體のものは全く參るつて終ふ。どういふ姿勢をとつたら震動が一番強く來ないだらうと、工風してみても一向效果がない。そのうち盲腸部が痛むやうな心持さへして來る。一層無震動の列車を發明した方がどの位自他のためになるか知れないと、もうその發明にとりかゝつてゐる。その邊から先は早や現とも夢ともさつぱり譯が分らなくなつてゐた。でも夜中何遍となく目が覺めた。大津の手前で起床する。關西の山、關西の樹木、關西の瓦屋根と草屋根、どれもこれも懷かしく嬉しい心持がする。一夜はまだ明けきらないのに、その薄暗い光の裡にある自然はもう一新して終つてゐた。

相變らず古ぼけてゐるのは大阪驛である。朝着く旅客のために顔を洗ひ、一杯のカフエを飲む設備もないのは不便と云はねばならない。車夫の案内するまゝに驛から遠くない旅館に荷を下し、湯に入つたり、朝飯をしたりする。七時である。

私は又展覽會の圖錄を眺めて時間を喰ふ。開場時間が判然しないので宿の男に電話で聞いてくれとたのんだら、八時か九時からですと曖昧な事を云ふ。後で聞いたらその男は風呂番の三介で阿房だといふ事だつた。

社に行つてみると、開場は十時からで、まだ一時間半も間があつた。海岸へ出て、淀んだ水の色を眺めたり、電車や通行人の風俗を見る。多少異人種の間に立混つたといふ意識が明かになつて來る。偶然堂島の株屋町へ出る。不思議な光況が目の前に現はれる。大して福に緣があり相もない人達が澤山往來に集つてゐる、中には女もちらほらと混つてゐる、やがてぼろ〳〵の暖簾の間から妙な聲が響くと隣の店でも同じことを同じやうに喚鳴る。次から次へとその響は餅のやう

京都……京都公會堂……十二月十日午後一時

大阪……大阪中央公會堂…十二月十一日午後六時

神戸……十二月十三日

福岡……十二月十七日

聽講券は各一ヶ所一人参圓　發賣所は名古屋は新愛知新聞社で發賣し、其の他は其の地の各書店で發賣致します。

主催　改造社

全集

性理論も自由に研究が出來また本書四卷によるの外、相對性理論の研究の道は全くありません。

（延期申込規定は內容見本にあり）

內容見本　ハガキ申込次第　**進呈**

略規（全四卷、分拂＝每月五圓（四回）一時拂＝十九圓、（各別に送本料を要す）官廳、學校、圖書館等の會計規則によるものはその旨附記せば前金不要

締切十一月卅日限り

刊行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　**改造社**

に傳ふ、往來の群衆はそれをきつかけに、四十錢ではあきまへん、などと呟きながら動き出す。一平さんにでも頼み度い圖があり、街上先づ看得たりドオミエーの感である。

興は盡きないが、足の疲れを恐れて社に戻り、待合室に這入ると、思ひがけなくも長谷川昇君に出逢つた。君も展覽會のため態々夜行して今朝着いた許りだといつた。

看衆は忽ち四室のどこにも一杯になつて終つて可成り見づらかつた。夫れに各室の光線も決してよくはなかつた。夫に優遇するつもりだつたらしいセザンヌ、シスレエ、ゴオガン、ルノワルのあるものは正面明りと柱のために大變見憎くなつてゐたのは殘念だつた。電報で知らせて置いた近藤君は恰度來る積りだからといつて來てゐた。大原研究所の八木澤君、二科の三井、大庭君等にも會つて群衆を押し分けながら、一緒に繰返し繰返し畫を見て廻つた。

セザンヌ翁に關しては或は著書を讀み、或はそれを飜譯し、絶間なく或は喋り、或は聽き、毎月のやうに內外の雜誌でその複寫を見たりしてゐたので、いつも翁は吾々から極く近しい或るものゝやうな氣しかしなかつたのである。然しよく考へてみると、いつからその作品に接しないのであらう？假りにサロンドオトンヌで一纏めになつたその懷顧展覽會を見た日から數へるなら、恰も十五年といふ恐ろしく長い歳月がもう經つて終つてゐる。（委しく云へば日本にも二三の作が將來されるにはされたが云ふに足るほどのものはまだなかつた。）それを今日かうして親しく目前に見得るとはどれ程の喜であつたか知れない。これこそ『眼の祭祀』と云つてみても差支ないやうである。

一番大きいのは三十號位の風景で、プロヴァンスらしい村落と岳陵、街道などが描かれてゐた。鼠色の畫布がまだ全部塗りつぶされてゐないで、全體が灰色の調子に止つてゐたり、かきかけの樹木があつたりする程度に筆をおいた作品ではあるが、既にその所謂レアリザション（實現）が備つてゐた。一體翁の畫布の多くは未成のまゝに殘されてゐる。なぜなら翁の作の結果については全然無關心だつたからである。ガスケエは屢々田園の間から翁のかきかけて投棄して行つた畫布を拾ひ得たことを記録してゐる。翁自身も九百六年九月二十六日附ベルナル宛の手束のうちに『私は自然での研究によつて見、且つ感ずる處を論理的に發展させればいゝので、作品の奈何には關與しない……云々』（拙著、回想のセザンヌ、より）と云つてゐる。然しバルッ氏がいみじくも道破したやうに『翁の畫布はたとへいかなる程度で筆をとめてあつても、必ず

全體の調子や均衡を備へてゐて、そのまゝ一つの立派な作品と稱することが出來る」のであつた。

白い卓布の上に四つの林檎(?)とナイフや皿を描いた八號の靜物も未成ではあるが、靜かで輝かしく樂しい作品で、色の氣むづかしさや、努力や、畫面の影は些もなかつた。誰れにでも愛することの出來るやうなものだつた。

この二つに比べると「廢屋」(二十五號)は遙かにブッセエされた(押し進められた)作品で繪具の積み重ねが美事な畫面を作るに至つてゐる。白粘土の岡の上に、ひびの入つて二つに割れた卵色の廢屋が無慘に軟い春の曇り日を受けて建つてゐる。若々しい草や木の葉の色とがその相照になつてゐる。平凡で單調で、有りのまゝの自然の一角であるが、それでゐて何物より吾々に親しく、新らしく、深く觸れて來る。これ等の畫に對して批評がましい事などいふのは全く無駄で、唯默つて眺めてゐれば何んとも云へない快い氣分にひたる事が出來る。さうして憐むべき人間の最終に遂する幸福とは要するにそんな瞬間を指すのであらう。(それ等の外に果してどんな幸福が存在するか。數へてみるとどれもこれもあてにならないもの許りである。)

セザンヌの大きい風景に並んでシスレエのそれよりやゝ小さい、セエヌ河遠望とでもいふべき風景が一枚あつた。お孃さんでもかき相に非常に美しい畫であるが、器用な技巧が餘り目立ち過ぎて却つて表現の邪魔になる。それに個性の感銘が薄いため作品の重味が足りない感を抱かせ、到底吾々を飽滿させる藝術ではない。

ルノワルは印象派畫家中でもセザンヌと共に最もテムペラマン(氣稟)に優れた作家たることを深く思はせずに置かない。この二人が印象派中にゐなかつたならば、印象主義は一層早く科學的機械的な弊害に陷つたに相違ない。

「カアニユの露臺」(十號)は可成り晩年の作らしく、さうして十分な老練さを備へてゐるにも拘らず、青年畫家のやうな規帳面さと生眞面目な態度で描かれてゐるのには驚かされる。これこそ一國民、一民族の精髓、良心、その象徵の告示であるといふ感銘を受ける。佛國文化の底力がかうした二三の眞實で人間的な魂のために支持されてゐることを思はないでゐられない。ロマン・ロオランが指して、大通りや、社交界や、劇場や、流行の藝術家や、にせ學者やの外に、屹立して民族の眞の支柱であると稱へたもの、例へばパスツウルのやうな偉大な魂と根本の聯絡を保つものは實に之等の、或は「隱れて表はれた」或は「表はれて隱れた」貴い魂でなければならない。

同じルノワルの「男の顏」と題する十號大の畫布は、珍品であると同時に傑作の一つであることを思はせる。翁が描いた男の肖像といふものは女の肖像の數多いのに比べると、實に寥々たるもので、私の記憶に殘つてゐるのでは、ショッケ氏のと態々シシリアまで追ひかけて行つて描いたといふワグナアの二つ位に過ぎない。その二つに比べるとそれは遙か晩年の作で、成熟した翁のスタイルでほしいまゝに描かれてゐる內面的にも技巧的にも讚嘆に價するものであつた。

他に十五號の野菜の靜物と少女の首の小品があつた。皆なそれぞれの特長をもつたもので飽くことなく眺めた。

ゴッホの花(八號)ゴオガンの人物のあるタイティの風景(十五號)及び靜物、北佛の風景、皆な相當な作品ではあつたがセザンヌやルノワルのもの程、代表的ではなかつた。ゴッホにはもつと恐ろしく物狂はしい作があり、ゴオガンにももつとスタイルの成就された作がある筈である。

聖ゼロオムを描いた和蘭陀古畫と、コルネリス・デボスの子供の肖像とは、ドオミエの三枚の風俗畫及びクウルベエのあるものと共に美しかつた。レムブラント、ドラクロア、ティントレット、コンステエブル、は私には眞僞を云ふほどの權威がない。ベックリンの「眠れるニムフ」とムンクの「男の像」及び「風」は恐ろしく厭な作品であつた。嘗つて日本の知識階級でこれ等の畫家が相應の推賞を得てゐた事を考へ出すと、僅かの間に批評も兎角進歩したものと云はねばならない。

外にモンティチエリ、バスティヤン・ルパアヂ、メンツエル、ミレエの素描等があつたが、一々取上げて云ふほどの作とは思はない。

近藤君と旅館に歸つて午食し、私は一時間許り午睡して再び會場へ戾つた。京都神戸あたりから來てゐる畫家及び畫學生等は中食もしないで、薄暗くなるまで會場をさまよつてゐた。

再び會場へ來たことは決して無益でなかつた。見直す度にいゝ作品は泉のやうにあとからあとから、盡きない感興を漲らせた。學び盡せないほどの內容が次ぎ〳〵に浮び出て來た。

大阪から京都へつく汽車の中で日が全く暮れた。二人はいつまでも今見て來た畫の話に耽つた。セザンヌやルノワルの成就した近代繪畫の偉大な功績を目前に見れば見るほど、マティス等の新しい運動に同情され、その努力が感じられる。今日私は屢々マティスの仕事を考へ出さねばならなかつた。そんな事をも云つた。吾々のかうしていつまでも話し度いも

持に比べると、周圍の通勤者らしい人々は互に話すことの無いのに苦んでゐるやうに見えた。京都驛の樓上で松茸の香のする夕食を濟せて近藤君に別れ、暗い京の街を五條で鴨川を渡つた。なつかしい鴨川は流石に灯に照されて明るく見えた。四條を上つた河沿ひの縄手通りの宿に着いた。

赤萬屋といふのは元々宿屋ではない。賣藥舗である。昔大雅が食客だつたので知られた家だ。その『風藥のんでなほらぬ風の藥』といふ有名な看板や、二三の書畫が殘つてゐる。記念といふものはいゝものだ。古い河沿ひのこの宿に來る度に、なんとなく大雅の昔を思ひ出してみない事はない。私が五六年前、偶然投宿してから兄弟や知友の間に紹介されて、今日では多くの人に重寶されるやうになつた。從つて勝手な我儘もきく。私が一寸來ない間に生れてゐた女の子がもう歩いたり話したりするのは意外といふか不思議なやうだつた。

やがて山下(新太郎)が外で食事を了へて歸つて來た。展覽會の事や、洛北で寫生してゐる有樣などを聞く。お初さんも混つて十二時過ぎまで話し込む。心當てにして來た津田や藤川が入れ違ひに歸京して終つたといふので明日にも歸らうと思つて寢についた。

晴れた河原の朝、對岸に並ぶ木屋町の瓦屋根、櫻の黄い葉、その中を早くから京阪電車が通るので目を醒す。京にゐるといふ感は些細な事々物々から心の中へ這入つて來るので、先頃のやうに名所見物を貪りたい心持はしない。

その日は會場から小山君を誘ひ出して、近藤君と三人瓢亭、南禪寺、金地院の方へ行つた。瓢亭の庭は掃除が綺麗に出來てゐて、清い冷い水が流れてゐる。君のやうに洋風に住んでゐたら、こんな處に來てみると氣持がいゝでせうねと近藤君がいふ。全くその通り非常に氣持がよ過ぎる位いゝ。だから風流は危險なんですよ、と云つて笑つた。夜は吉初といふ家で湯淺君や安井君、長島君も集まつた。近來急に山下君の飲みぶりが上達したのを見て面白く思ふ。

翌朝も好晴。日和ぼつこをしながら、訪ねて來た安井、湯淺君と何といふ事もなく時を過してゐると、時代行列が狹い往來を通つて行く。前の家の二階などでは緋毛氈をさげた窓に大人子供打まじつたまゝ靜かに往來を見下ろしてゐる。それ等が背景になつて行列が引立つ。その外一般の見物人でも落付いてゐて、東京人のやうに騷々しく、氣短でない。全體が時代行列でも鑑賞しようとする氣分になつてゐる。こんな刺戟の少い行樂にひたる事の出來るといふのが、京都のいゝ

處だ。

夕方から南禪寺下河原の長島君の所へ出かけて、重次郎君が獨逸で集めて送つて寄來した澤山の美術書類を閲覽する。大變易くこれ等の本が手に入るといふ話だ。獨逸版の美術書には一流のものは甚だ少いにしろ、高價な佛本の飜譯などが安々と手に入るといふ便宜がある。かうした多寶主義は旅行者などにとつて極めて好都合と云はねばならない。

中村とかいふ河魚の料理で名高い家へ招かれて御馳走になる。主客合せて七人である。長島君が持つて來た畫帖へ湯淺君が西班牙の俗謠をかき、山下君が佛蘭西の流行唄をかき、且つ微醉を帶びて謠ふ。私が戯れに飜譯してやると、藝者が長いとか短いとか文句を訂正しながら、絃に上せて忽ち柔しい聲で歌ふ。皆んなもそれぞれのいゝ悪い聲を出して合唱する。秋の夜らしい興が湧く。美しい人達に送られながら、星の多い三條大橋を渡つて歸舍する。

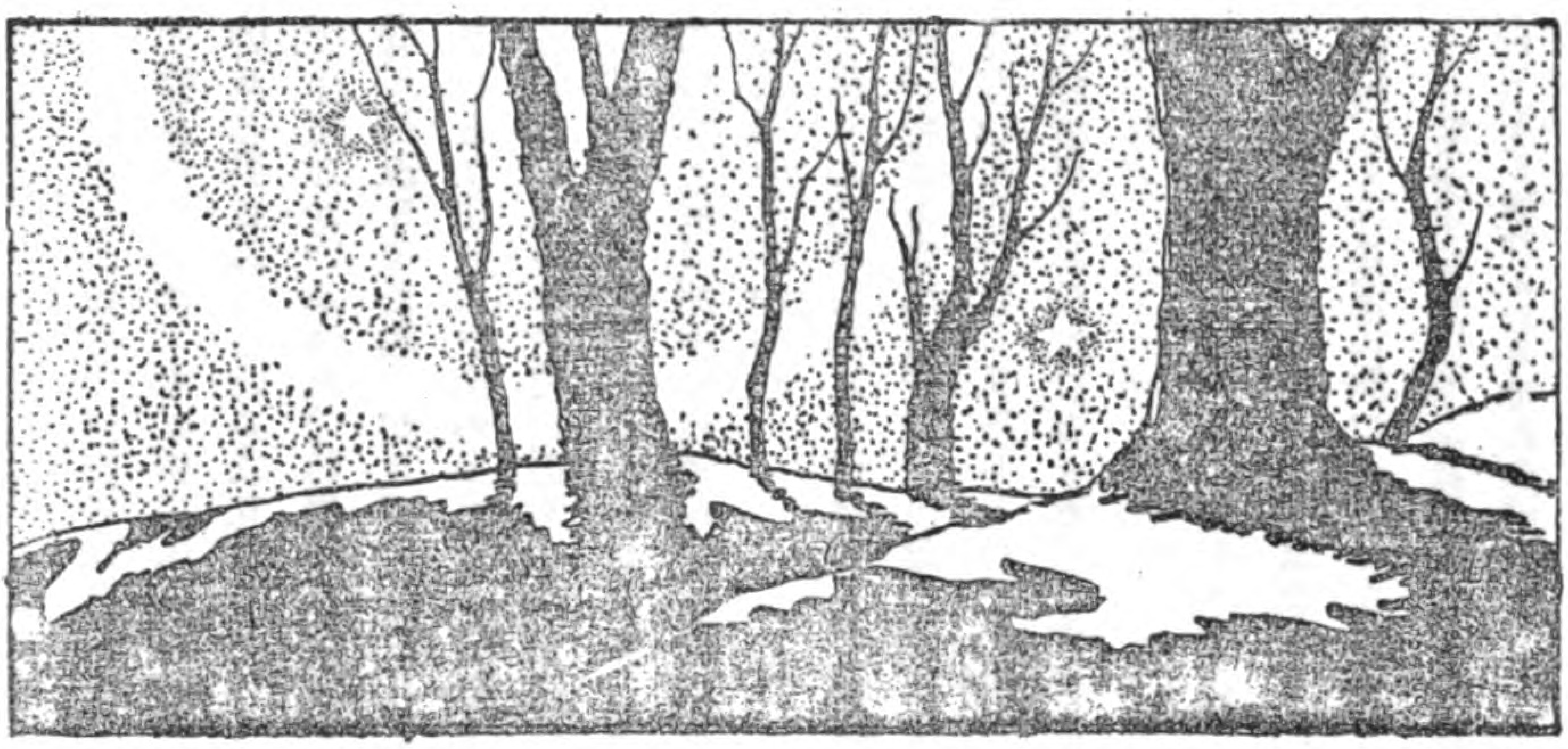
其午前中家兄と柏亭君とが前後して東京と甲府から入洛する筈であつたが、止むを得ない約束があつて朝九時の汽車にのつた。後で聞くと志賀にも一日か二日の事で會ひ損くなつてゐる。この旅行は天氣には幸されたが、人々とは行違ひになる事のみ多かつた。

歸りの汽車に見出す己は、往の汽車にゐた己とは別な人の感がした。凡ての事が日常に向つて動き少くならうとしてゐた。食堂で赤原信子氏と出逢つた。午過ぎると關東の自然と屋根作りとが眼に映り出して、空想をそゝるものは次第に少くなつて行つた。又暫らくはあの滑かで旅情をそゝる京の訛りも聞かない譯である。

藤澤には思ひがけなく妻と子供が出迎へに來てゐてくれて、三年ぶりの旅にも大して疲れのないのを喜ぶものゝやうであつた。

電車待つ間にも先づセザンヌやルノワルの畫の話から初まつて、留守のことなども聞かされた。江の島の暮れて行く海に沿つて馳る電車は乗客もまばらで、岸の波も音のないほど穩かだつた。その靜かさは恰も田舍の閑居の一部に屬したもので、もう自家に歸つたやうな心持を起させた。

（本文中私事に亘つて物語つた點の多かつたのを讀者に謝したいと思ふ。私の周圍を多少識つてゐて下さる方の外には興味も薄からうと恐れるからである。）



ぼんぼんの教授

藤森成吉

寒い二月の初め、大木夫婦は思ひがけない病客にころげ込まれた――。客は野澤と云つて、京都の高等學校の若手の敎授だつた、それは、大木健三に取つてはまだそんなに永い知り合ひではなかつた、大木の舊い友達の島田と云ふのが、やつぱり京都で新聞記者をしてゐたが、野澤はその島田と中學以來の友達だつた、ところが、或る時二人で文學の話をしてゐると、ふと大木の名前が野澤の口にのぼつた、大木は文學や批評の方面に携はつてゐたが、その作品を野澤はいつか愛讀してゐたのだつた、その言葉をきいて、島田はそれは自分の年來の親しい友達の一人だと話した、野澤はひどくびつくりして、ではいつか是非紹介してくれと彼にたのみ込んだ、そんな事がもとになつて、丁度二年ばかり前から、大木と野澤とは手紙をとり交したり、何度か會つたりするやうな關係になつてゐたのだつた。

ところが、此の一月末に、野澤は學校の同僚二三人と一緒に學校の用事で上京して來た、さうして用事を濟ませてから、外の者とわかれて大木の家を訪れ

た、その一週間足らずの奔走のあひだに、彼はすつかり風邪を引き込んで、大木の家へ來るなり寢込んで了つた。

『ただの風邪で、大した事アないでせう、でも、念の爲め醫者に診て貰ひませうかね。』

いろいろと夫婦で看病してやりながら、大木は病人の氣を引いてみるやうに云つた。

『さうして頂きませうか、すると僕も安心ですから。』

ぶこつな性質にも似合はず、野澤はかなり氣が弱かつた、大木は早速、かかりつけの醫者をたのんだ、近所にゐながら仰々しく俥なぞに乘つて來た醫者は、野澤の身體をすつかり檢べて、何も心配な容態ぢやアない、ただ無理をして少しこぢらせただけだから、四五日大事にさへしてゐたら癒るだらう、と云つて、水藥や粉藥を與へた。

『たしかにこぢらせたんです、來る時、寢臺車のスチイムがどうしたのか夜中からとまつちまつたんです、その時急に寒くなつて、思はずくしやみをしましたが、その時風邪にかかつたんですね……。』

野澤は、如何にも醫者の言葉に安心したやうに云つた。

『まア、氣らくにゆつくりして下さい。』

さう云つて、大木はだんだん病人の傍から遠ざかるやうになつた。

一つには病人の身體についても懸念がなくなつたからでもあつたが、一つには、それは大木の退屈さからだつた。

今まで少しづつ會ひながら、ハツキリ野澤の平生がわからずにゐた大木は、さうやつて初めて暫く一つの家に寢起きしてみると、野澤の退屈な人となりがよくわかつて來た、野澤は如何にも話題のない人間だつた、何か話を初めても、すぐその緒が切れるか、又は無味乾燥な議論に變つて了ふかした、議論ばかりではなく、ただの話でも一向面白味がなかつた、三十分……いや、わづか十分位の話でも、もう大木は倦怠と心の空虚を感じた。

一たい、野澤は社會學の專攻だつた、大木も、創作なぞをしながらその方面には深い興味を持つてゐた、何でも自分の

研究の爲めだと考へてゐる野澤は、そんな大木の小說なぞをよむことは、自分の專門の方に非常に利益になる、といつも大木に云つてゐた。大木はかなり急進的な思想を抱いてゐたが、野澤もそんな思想や運動には同感してゐた。以前二人で革命の問題を論じ合つた時も、野澤は大木の革命肯定の意見にほとんどそのまま贊成してゐた。研究慾とか勉強熱と云ふものも、二人はかなり强く持ち合へば、年輩も大木の方がわづか一つの年下だつた。そんないろいろな點から推せば、二人は是非お互ひに話す材料を澤山持つてゐなければいけなかつた。今までは、大木自身もそんな共通點を空想してゐたのだつた。

「いや、あなたなんかは、ほんとに羨ましう御座ります。奧さんが、ああやつてちやんとあなたの思想に共鳴してゐられるんですから――」

以前、野澤はそんな愚痴を彼にこぼした事もあつた。さうして自分達夫婦のあひだが、それに較べて思想的理解が足りないと云つて歎いた。

「僕の妻なぞは、それを思ふとほんとに悲しくなります。僕の仕事なんて云ふことに對しては、妻はほとんどこれッぱかりの理解も持つちやァゐません。あなたは、ほんとに面白くない人だ、妾を棄ッぽかして、始終默つて本ばかり讀んでゐなさる、何か相談をしても相談相手にもなつてくれないし、ほんとうにつまらない、學者つてみんなこんなもんですかしらつて、彼女は口癖に云つてゐます。ところが僕にして見ると、――あなたの小說にもよく出て來ますが、――女の方こそ如何にもこッちを理解してくれないと、いつも不平に思ふんです。何か學問上や思想上の話でも初めれば、すぐ、ああいやだ、女にはそんな面倒な議論なんかわかりません、て云ふでせう、又どうか讀書や考へる習慣をつけさせてやらうと思つて、これを今度の水曜日までによんでお置き、ッて、やさしい本でも貸してやるでせう、水曜日になつて、よんだかッてきいて見ると、てんで一ペエジもよんでゐやァしないんです、さうして、やれ家庭のことだとか、やれ交際の事だと

か、そんなつまらない事ばッかり僕に話し掛けるんです、それを身にしみてきいてやらなけりやァ、今度はすぐ相談相手になつてくれないッて腹を立てるんです、いや、ほんとに困つた者です、なんとか、うまく妻を同化させる工夫はないもんでせうか」

野澤はかなりの正直さで、そんな妻君とのあひだの打ち明け話を訴へた。

「さァ、まァ氣永になさるよりほか仕方ないでせう。」

大木は思はず微笑しながら答へた。

彼は、その前島田などの口から、野澤が今の細君を貰つたのは戀愛結婚だつたと聞かされてゐた、それによると、野澤がまだ學生時代に、島田の郷國の愛媛縣へ一緒に遊びに行つてゐた時、ふと彼は今の細君を見そめた、別にすぐれて美しいと云ふ方ではなかつたが、彼女はその時分から、快活で派手ずきで交際ずきの娘だつた、京都の舊家の一人息子に生れて、ほとんど何の世間と云ふものも知らずに育つて來た野澤は、女にかけても全くのうぶだつた、その彼女の派手やかさに、彼は一も二もなく目をひかされて最初の戀愛をしたのだつた、その話がいい按配にまとまつて、野澤が大學を出て高等學校の講師になると一緒に、二人は新らしい家庭を持つた。

「戀愛なんて云ッたつて、だからいい加減なもんさ、ところが、俺はその時から、こりやァ飛んだまちがひをしたもんだな、と思つてたよ、何しろ野澤は、あんな學問とか勉強とか云ふことよりほか何も知らない人間だらう、それに、片ッぽは、ああ云ふ派手好きな、惡く云へば虛榮と物質慾の女だからね、うまく行かないなァ初めッからわかり切つてる、細君の親達ばかりぢやァなく、彼女自身も、ただ文學士とか講師とか云ふ花々しい名目や生活に惚れて、云はば野澤のところへやつて來たんだ、それが、來て見るとまるでちがつてるだらう、だから、細君はすつかり失望しちまッたんだ。」

島田は不遠慮な調子でそんな事をつけ足した。

實際、結婚後の野澤夫婦はあんまり圓滿には行かなかつた、一緒になつてわづか三月も立たないうちに、里歸りをすると云つて細君は郷里へ歸つて行つた、そのまんま、一月たつても二月たつても、彼女は戻つて來なかつた、手紙ではただ、病氣になつたから靜養したいと云ふのだつた、待ちあぐんだ野澤は、わざわざ二度も彼女の見舞ひかたがた迎へに愛媛まで出かけて行つた、が、彼女はいつも一緒に戻ることを拒んだ、たうとう、彼は激しい神經衰弱にかかつて、身體もやせ衰へれば夜も碌々眠れず、仕事も何も全く手につかなくなつた。

が、さう云ふ苦悶の半年ばかりのあと、思ひがけなく細君はふと又彼のところへ戻つて來た、その時、彼女はもう妊娠何ヶ月の身體だつた、彼女の言葉によれば、それは彼が彼女の郷國へ二度目に行つたとき腹へ出來た彼の子供だつた、――彼女の歸つて來たことによつて、然かも自分の子供まで出來かかつてゐると云ふ言葉によつて、野澤の神經衰弱はすつかりなほつて了つた。

例の細君との思想や氣質のちがひを、大木が本氣に野澤に訴へられたのは、その細君の歸郷中のことだつた、その時分野澤は大木の眼にもハッキリわかるほど惱みやつれた調子を帶びてゐた、中學校時分からずつとキリスト教會に通つてゐた野澤は、ほとんど生れて初めてその信仰にも動搖を感じてゐた、かなり陰欝な色合ひを持つた大木の小說なぞに、彼が同感したのも、重な原因はそこにあつたものらしかつた。

大木は、その憐れな人間の姿にかなり動かされた、丁度そのあと、間もなく彼は講演のため愛媛縣の方へ呼ばれて行つた、そこで、初めて彼は野澤の細君と會つた、――野澤の頼みもあつたので、彼の氣もちに同情してゐた大木は、出來る事なら歸りに細君を連れて一緒に京都まで來よう、と考へたのだつた、が、やつぱり細君は戻らうとは云はずに、あとでひとりで戻つて行つたのだつた。

一たい、野澤は京都人と云つた概念にも似ず、顏の黑いぶこつな感じの男だつた、身體も、痩せてはゐたが骨太でガッ

シリして、皮膚の色も黒く光澤を帶びてゐた、物の云ひぶりもぼきぼきとしてゐれば、身體のこなしも着物も亦その着ぶりも、どことなく無頓着で不精じみてゐた、ただ髮や眼鏡だけは、流石に少し長くして兩方へ分けたり、又キラキラする金緣をかけたりしてゐたが、それも如何にも書生風に間のぬけた調子だつた、細君の方は、彼に較べてずッとハイカラで――今まで島田なぞの口からきいて想像してゐた彼女としては、然し大木はかなり田舍くさく感じたが、――色白の丸ぽちやで、眼つきや頰や喉のあたりに、ひどく男ずきのする肉感的な調子を持つてゐた。

島田から話を聞いたり、さう云ふ實際の細君の姿と彼とを對照して見たりすればするほど、大木は野澤に對して同情を增して行かないわけには行かなかつた、不精や無頓着の點では、大木は野澤にも增した性分だつた、それやこれやで、大木はこの不幸な青年學者に對して同情すると一緒に、細君に對してはかなり不快な氣もちさへ感じてゐた――。

さう云つた關係で、今まで大木と野澤夫婦とは過して來てゐたが、その野澤に對する大木の好感が、今度のわづかの病臥のあひだに、だんだん變つてゆきはじめた。

野澤の話が面白くないと云ふことは、ただ話題が學者風に狹く尠いと云ふばかりではなく、一たい野澤の人間としての面白味がない爲めではないか、と大木は思はずにはゐられなかつた、何かにつけての樣子を見ると、野澤はまるでまだ東西も知らない子供のやうに大木には思はれた、今はどこまで細君との關係がうまく行つてゐるかはわからないながら、今まで細君が野澤を嫌つたのは、決して細君の罪ばかりとは云へなくはないか、何の妻とのあひだの趣味的な話も出來ない男、何かと云へば、ただ概念的な社會學の議論を持ち出すきり、それによつてひき起す細君の退屈さへも感じない男――そんな男を夫としてもつことも、かなりやり切れないことかも知れない、……そんな事まで大木は感じて來た。

が、ただ雜談ばかりではなく、專門の方の知識や思想にかけても、野澤がかなり未熟な頭を持つてゐると云ふ事が、やがて次第に大木にわかり出した。

「今こんな雜誌が來ました、もし氣分がよかつたら、寢ながら見て下さい。」

ただ寢てゐては病人も退屈するだらう、と思ひながら、大木は或る日彼の枕もとへ、今着いたばかりの――大學生の社會運動團體から毎號寄贈されてゐる――薄い小さな雜誌を持つて行つた。

「ありがたう。」

さう云つて、野澤はその雜誌を眼の前へひろげた。

「ドオロナ、……ドオロナつて何の事ですか。」

が、その第一ペエジの上へ黒く大きく横に刷つた標題を見て、野澤は不審さうにたづねた。

「ドオロナ？」

大木はびつくりして繰り返した。

「はア。」

さう云ひながら、野澤は自分の指で標題を指して見せた。

「そりやあドオロナぢやアありません、ナロオドです。」

大木は思はず笑つて云つた、西洋風に左から書いてある片假名を、野澤は逆に右からよんだのだつた、こんな場合、殊に片假名などの場合には、今は大抵左から書きも讀みもすることに定つてゐるのに、野澤も變に日本風な男だな、……笑ひながら大木は思つた。

「ああ、左から讀むんですか、――だが、ナロオドつて何の事ですか。」

野澤はかさねてきいた。

「ナロオドを知らないんですか。」

大木は、びつくりしたやうに野澤の顔を見た。

「知りません、ラテン語か何かですか。」

野澤は平氣な顔つきで云つた。

「戯談云つちやァいけません、ロシア語ですよ、「人民」て云ふ――フ、ナロォドつて有名な言葉があるぢやァありませんか。」

大木は思はず詰問的に云つた。

「いや、そんな言葉は僕ァ知りません、ロシア語は一向に習つたことがありませんから。」

「僕だつて、習つた事なんざァちつともありません、然し、フ、ナロォド位の言葉は、今は常識ぢやァありませんか。」

大木は、もう我慢が出來ないやうに鋭く云ひ放つた。

そんな荒い言葉使ひを野澤へ向つてしたのは、大木にはそれまでほとんど初めてだつた、兎に角客に對して、そんな物の云ひ方をするのは如何にも不躾けだとは感じながら、大木はもうそんな愼しみを飛び越してゐた、あの貴い歴史的な青年運動、たとへ社會運動に少しの興味も持たない人間だとしても、青年である限り決して忘れてはならないやうな大きな運動、……………その名前さへも氣鋭の青年社會學者たるべき野澤が知つてゐないと云ふ發見は、今まで彼を買つてゐただけ、大木の心にほとんど「青年的公憤」とでも云ひたいほどの感情を惹き起させた。

「いや、僕も始終出來るだけ雜誌や新聞は見るやうにしてゐますが、何しろ專門の方の研究が忙しいもんですからな、專門以外のことまでは、仲々手が行き渡りません。」

思ひがけない大木の權幕に、野澤は初めてびつくりしたやうに、ややきまり惡さうに云つた。

「いや、まるきり普通の人だつたら、僕は咎めやァしません、又あなたがアカデミカルな學者を以て任じてゐるかただつ

たら、何もこんな事は云やァしません、然し生きた社會運動や社會思想を研究するあなたが、そんな言葉さへも知らないなんて云ふなァ、そりやァあんまり迂濶すぎやァしませんか、あなた自身を恥かしめるばかりぢやァなく、青年全體を恥かしめるものぢやァありませんか、失禮ですが、もつと勉強されなくちやァいけない、と僕は思ひますよ。」

大木は思ひ切つてつづけた。

「いや、さうどうも仰やられちやァ汗顔ですな。」

野澤は氣まづさうに苦笑して默つた、大木も、同じやうに氣まづくなつてそれなり口をつぐんだ。

それが、二人のあひだの最初に表面へ現はれた食ひちがひだつた。

が、その時以來、思想の方面でも、野澤と自分とが如何にちがつてゐるか、と云ふことが事々に大木にわかり初めた、二人の話は、よく社會問題の方面にふれて行つた、プロレタリヤだの、ブルジョアだの、と云つた言葉が、いつも口癖のやうに取り交された。

「ブルジョアの生活つて云ふものは、まつたく間違つたもんですな、僕の學校時代の友達の一人に、かなりの頭のいい男がゐましたが、それが卒業すると一緒に、或る富豪のとこへ婿入りをしました、その時にやァ、僕もかなり淋しい氣もちがしましたが、今になつて見りやァ反つて氣の毒に思つてゐます、そんな物質的な資本家的な生活は、決して人間のほんとうの幸福ぢやァ御座りませんからね。」

野澤は、その時ふとそんな言葉を口に出した。

「え？　そりやァ意外ですね、そんなふうにあなたは考へてらつしやるんですか。」

大木はびつくりさせられて云つた。

「いや、今は、勿論そんな事は考へてをりません、さう云ふブルジョアには、なつてくれつて頼まれたつて、僕ァ決して

ならうとは思ひません。」
野澤は念を押すやうに繰り返した。
「いや、僕は、あなたのやうな方が、前にそんな事をお考へになつたつて云ふだけでも意外です、然しそれよりもをかしいのは、今のあなたの考へ方です、あなたの考へは、云はばただ凡俗的な常識ッきり、そのそとへ一歩も踏み出してゐないぢやァありませんか、資本家とかブルジョアとか云ふことを、もしそんなふうにあなたが考へておいでになるんなら、僕は大間違ひだと思ひます。」
「さうでせうか、これが普通の人間の考へ方でせうか。」
野澤は思ひがけない反駁を受けたやうに、懐疑的に云つた。
「さうですとも。」
大木はもう野澤の鈍感さに堪へられなくなつて、じりじりして來た。
「そんな金持ちなんぞばかりがブルジョアぢやァ、決してありませんよ、もしあなたが、さう云ふ連中をただぼんやり属つて、それで一ぱし自分は非ブルジョアのつもりになつてゐられるとしたら、そりやァ大ちがひです、ブルジョアを攻撃するんなら、まづあなた自身を――僕と云つても同じことですが、――振り返つて見なくッて、何の價値があるんです？、僕等自身の生活こそまづ恥じなくつて、何の意味がありますっ」
「いや、そりやァ恥じてゐます、勞働者逹の生活に比べりやァ、何と云つても僕逹はインテリゲンチャの生活をしてゐますからね。」
「僕等だつて同じブルジョアでせう、あなたがもしほんとうにさう考へられるんなら、なぜ前云つたやうな言葉があなたの口から出るんでせう。」

大木は突き込んだ。

「いや、そりやァさうかも知れませんが、然し何と云つても、彼等資本家達と僕達とはちがひますよ。」

野澤は、學者的冷靜に習慣づけられたやうな口調で抗辯した。

「が、さう云ふ考へで濟ましてゐられるんなら、プロレタリヤの味方みたいな言葉は一さい仰らない方がいいでせう、どうせ、あなたは自分がプロレタリヤにならうと云ふ苦しみも、又プロレタリヤ自身の苦しみも何も感じちやァゐられないんだから。」……今朝も、あなたは新聞の貧民窟の記事を見て、こんな連中が子供を生むのは罪惡だ、社會政策的見地から云つても、優生學的見地から云つても、出來るだけ早く貧民には强制的に一さい子供を生ませないやうな工夫をしなくちやァ駄目だ、なんて仰つてゐましたね、僕ァその時何も云はずにゐましたが、あなたの社會問題や生活に對する考へ方ッて云ふものは、みんなただその範圍にとどまつてゐられるんですね。」

「貧民窟救濟の問題は、僕ァ前つから考へてゐるんです、然し、そんな今朝の言葉と今の話とは、別に何の關係もない事ちやァ御座りませんか。」

「大にありますとも。」

あんまり自分の信頼を裏切られた氣がして、大木はもうすつかり腹を立てた。

「さう云ふ事は、みんなプロレリタリヤに對するあなたの同情が、ただ皮相的で概念的で、形式的で、不徹底無反省的だつて云ふ、何よりの證據です、あなたは一ぱし同情してやつてゐらつしやる御つもりかも知れませんが、そんな同情は何の役にも立ちやァしません、彼等無產階級に取つちやァ、そんな同情はただ邪魔で迷惑になるばつかしです、然かもさう云ふ事さへもあなたは知らずにゐらつしやるんでせう、それぢやァのんき過ぎます、あなたは無意識に、始終やつぱり自分を彼等の上へおいて考へてゐられるんです。」

大木は、もう野澤の不徹底な見解にいら立つと云ふよりも、彼の自分勝手な自己中心的な傲慢と無智に對して、強い反感を抑えられなくなつて來た。野澤が、なまじつか善良で進歩的であればあるだけ、その無意識的な利己的な心もちはもう到底救はれないもののやうに、大木の心に感じられた。

「さうでせうか、僕等の同情は、反つて彼等の邪魔になんかなるもんでせうか、僕は、自分の心を振りかへつて見ても、別に彼等よりか自分をえらいと考へてゐるとも思ひませんが。」

野澤も、さすがに氣もちを惡くしたやうに云ひ返した。

「さう考へるからなほいけないんです、あなたはクリスチャンだから、例のバイブルの有名な、キリストが或る金持ちの青年に向つて云つた言葉を御存じでせう、彼等の天國に入るは、なほ駱駝の針の穴をとほるよりも難し、ッて云ふ、……あなたは、云はばその青年だと僕ァ思ひますよ。」

昂奮して思はずしやべりつづけながら、大木は病人の——然かも遠來の客としての野澤をも一方に心に浮べてゐた、今の彼に向つてこんな烈しい非難をあびせかけるのは、あんまり心ない態度だと大木は思つた、が、一方からは、もうそんな氣がねをしてはゐられないやうな又ゐる必要のないやうな或る感情が、大木の心を囚へ去つた、彼は野澤の親切な看病が馬鹿らしくさへなつた。

「僕の云ひ方があんまり強すぎるかも知れませんが、あなたは、自分の母親を棄てて顧みないッて云ふ、あのチチエリンの逸話を御存じでせう。」

大木は辯解的に云ひ出した。

「チチエリンて、あのロシアの今の外務大臣ですか。」

「さうです。」

「いゝえ、知りません。」

野澤はききたさうな、が、一方からは、此のうへきいて侮辱されたくないやうな顔つきをして口ごもつた。

「さうですか。」

さう云はれては話して見る氣にもなれなくなつて、大木もそれなり默つた、さうして又書齋の方へ引きあけた。

書齋の机へぼんやりと向ひながら、大木は、然しひとりで議論のつづきを考へた。

革命後、困つてゐる母親や妹を少しも世話をしないと云ふチチエリン、人にきかれれば、彼等は今まで散々ブルジョア的な贅澤な生活をしてくらして來た人間だから、今は抛つておいて差し支へない、と答へると云ふチチエリン、然し自分の乳母は、今まで散々苦勞して來た女だからと云つて、引き取つてあつく世話を見てゐると云ふチチエリン、……そのロシアの革命家の心もちが、今大木にはハッキリとわかるやうな氣もちがした。

ブルジョア的な生活をしてゐる者の不幸には、いや、そのすべての苦樂や悲しみには、彼はどうしても同情が持てないのだ、なぜなら、それはただ表面や形式上のことばかりぢアなく、實に彼等の生活や思想そのものの根本がまちがつてゐるからだ、まづそれをすつかり改めない限り、彼等に同情することは、ただいたづらに彼等を誤まらせるに過ぎない、云はば、間ちがひの上へ間ちがひを重ねる手助けをしてやるのだ、たとへ間ちがひを重ねないまでも、そんなのんきな事に氣をつかつてゐるひまがどうして彼にあらう――。

そのチチエリンの氣もちに似た考へが、自分の心のなかに起つてゐることを大木は感じた、彼は、いくら友だちだと云つても、そんなのんきな心もちでゐる野澤などを、もう世話をしてやる張り合がなくなつたやうな氣もちになつた、病氣などと云つても、野澤の――さうして自分の――生活や考へ方がこんなふうにブルジョア風である限り、畢竟看護も親切も遊戯に過ぎない、むしろ、心づくしなぞをすればするだけ、手あてを充分にすればするだけ、それはいよいよ遊戯化す

ゐのだ、自分達の親切もほんとでなけりァ、野澤の感謝もほんとではない、してやり甲斐も意味もない、みんなどうでもいい、不眞面目な氣まぐればつかりだ、野澤と自分達とが、こんな生活をしてゐる限り、人間的同情だの溫情だのと云ふものは、お互ひのあひだに決して示されもしなければ、感じられもしないのだ。

もしこれが野澤の代りに、あはれな貧乏な勞働者だつたら、――さうしてあんな無智な高慢な氣もちの代りに、謙遜なほんとうに人間らしい心だつたら、それはどんなに世話甲斐のある、ほんきな自由な愉快な感情だらう、さうしてどんなに氣樂に、こんなやむを得ない不人情からすつかり解放されるだらう、……大木は思はず空想をはしらせた――。

それからのち、大木はいよいよ病人の枕もとにゐることが尠くなつた。

今までは、食べ物のほかは、大抵大木が細君のきん子に代つて世話をしてやつてゐた、まるで子供のやうに無能力な病人の枕もとへ坐り込んで、彼はよく吸入器をかけてやつたりしたものだつた、一つはつまらない會話の退屈をさける爲めに、彼は野澤の口を大きくあけさせて、それへ向つてまるで速射砲のやうに白い溶液の霧をかけた、シユウ、シユウ……蒸氣は鳴りながら、すばらしい勢ひで漏斗狀にひろがつた、露の玉が、やがてひつきりなしに黑い野澤の顏から、鼻から、眼から、口からすべり落ちた、その濡れそぼつた顏を、大木は時々手拭ひでふいてやつたりした。

が、だんだん野澤から心が離れるに從つて、大木もそんな手數がいやになれば、又初めひどくよろこんでゐた野澤も、如何にも面倒くさくなつて來たらしかつた。

「もつと大きく口をあけて下さい。」

大儀さうに、小さなお壺口をする野澤を見て、大木は遠慮なく注意して、さうして容赦なく自棄のやうに荒つぽい水蒸氣を送り出した、野澤は仕方なく大きな口をあけてまるで水の涸れた池の鯉のやうに、パクパクやつてゐたが、やがて疲勞と快感とに促されていつも眠り込んで了つた、吸入器を終つて、器械を靜かに片づけながら、いつまでもあたかも、馬鹿の

やうにおんぐりと口をあけて寢入つてゐる野澤の顏を見ると、その精神の弛緩さを大木はののしりたいやうな氣もちになつた、兎にかく病人の友だちへ向つて、こんな感情を起すのはどうしたことだ、と自分へ向つて反省しながら、然しあまりの野澤の他愛無さに、やつぱり大木は腹が立つて來るのを抑えられなかつた。

『もう、今日はやらないわけにやア行きませんか。』

或る日、大木が又その器械を持ち出すのを見て、野澤は閉口したやうに云ひ出した。

『あなたの方さへよけりやア、――ぢやアやめませう。』

大木は野澤の感情を氣づきながら、自分もホッとしたやうな心になつた。

もう二人のあひだの友誼關係なんぞ、どうなつたつて構ふもんか、……そんなふうな荒れた考へにまで大木は變つて行つた。

が、さう云ふ男同志のだんだん不和になつて行く關係には構はず、大木の細君のきん子は、相變らずよく病人の世話を見てやつてゐた。

醫者の注意にも增して、彼女は始終葛湯やパンや粥や牛乳なぞを、病人の爲めに變へて食べさせた、時には、菓子代りに甘い濃いチョコレエトを澤山溶かして、やさしくすすめたりした。

『ほんとにうまう御座ります。』

大木とのあひだが氣づまりになるにつれて、野澤は餘計きん子に心を惹かされた。

『とても、家ぢやアこんなにしちやお貰へません、僕は、一たい牛乳は大好きなんですけれど、妻は僕とちがつて、また大の牛乳嫌ひなんです、それだもんで、うちにゐても充分牛乳が飮めんで僕は閉口してをります。』

野澤は細君の愚痴まじりに、そんな事をきん子へ向つて云つて感謝した、さうして、『お代りを差しあげませうか、』なぞ

と云はれると、二杯も三杯もかへてぐびりぐびりと飲んだり、明日の朝もどつさりくれなぞと、子供のやうに賴み込んだりした。野澤よりもずッと年の尠いきん子は、まるで親切な姉のやうに、その云ふ事をきいて、だんだんよくなるに從つて手製の柔かい西洋料理なぞをすすめて行つた。

『まア、野澤さんて、ほんとに面白い方ですわねえ。』

或る日、然しきん子は、茶の間で夫の大木と食事をしてゐる時云ひ出した。

『どうして？。』

自分達男の氣もちに構はず、女らしく友だちの世話を見てやつてくれる妻に感謝した心もちでゐた大木は、ふと彼女の言葉にサチリカルな調子を感じて、眞顏になつてきき返した。

『だつて、コロッケをあげても、シチユウをあげても、野澤さんたら一々、『これは何ですか。』ッておききになるんでせう、わたしが名前ををしへてあげて、西洋料理はおきらひなんですかッて伺ふと、いや、きらひどころか、大へんおいしくて僕は大すきてす、實は、僕は今まであんまり西洋料理を食べた事がないもんですから、よく名前を知りません、妻が毎日ただ野菜料理ばかり食はせるもんですからな、なんて仰有るんです、京都ッて、西洋料理を食べないところなんでせうか。』

『そんな馬鹿なことがあるもんか、だが、ほんとうに野澤君はそんなことを云つたのか。』

大木はびつくりさせられて云つた。

『わたし、うそなんぞ云やアしませんわ、高等學校の先生なんぞしてゐらッしやりながら、ほんとに珍らしいかたですわねえ、珍らしいッて云へば、まだ思ひがけない事がいくらでもあるんですの、――お子さんがおありなのに、伺つて見たら、野澤さんのお家には、まだ吸入器も、灌腸器械も、檢溫器も何もおありにならないんですッて、濕布や含嗽でさへ、今

度ここへ來て初めてやッたつて云つてらつしやいますわ、まァどうなすつたつて云ふんでせう、野澤さんは兎にかくとして、奥さんが隨分のんきな方でゐらつしやると見えますね。」

きん子は眼を大くしてつづけてしやべつた。

「ふうん、さうか、野澤君は、吸入器は僕にも初めてなやうな事を云つてたが、濕布や含漱までも初めてだとは、一寸おどろいたな、もし實際だとすりやァ、そりやァのんきなんて云ふとこは通り越してゐる。」

大木は二度びつくりしながら云つた。

「ですから、わたしも野澤さんによつくさう云つてあげましたわ、お子さんもおありなのに、それぢやァあんまりのんきすぎますよ、今度お歸りになつたら、是非そんな器械だけは一とほりお備へなさいましッて、さうしたら野澤さんは、いや、歸つたら早速妻に云つて買はせます、こりやァどうも、大へんいい事を敎へて頂きました、どうもいろいろ伺ふと僕等の方は大へんおくれてゐますな、これはこの機會に、一つ大いに改めて能率をあげなくちやァいけません、なんて仰有つてゐました、能率能率つて、よく野澤さんは口癖に仰有いますのね。」

「あんまり馬鹿馬鹿しすぎるな、あんまり無智すぎる、せめてインテリゲンチヤなら、それッ位の用意をしておかないッて云ふ法があるもんか、それぢやァ、一たいインテリゲンチヤとしての誇りもどこにあるんだらう。」

思はず激昂したやうに云ひながら、その時ふと大木は或る考へにぶつつかつた――

それは、やつぱりまだ野澤の細君が鄕里に歸つてゐた時分に、例の島田がひそかに彼へ向つて洩らした野澤の家庭の祕密だつた。

「だが、野澤もまつたく可哀想な男さ。」

島田はさう云つて話し出した……。

『これは、僕と野澤との間ッきり、まだ誰も知つてゐない內密の話だがね、僕はその話や以前の彼女の生活から推して、あの細君が野澤の家へ來る時、果して××だつたかどうかについて、實は疑ひを持てるよ、話つて云ふのはかうだ、結婚式の翌日、野澤がふつと僕の下宿へやつて來てね、『君、君は僕の妻に、今まで何か性的の方面の話でも敎へたことがあるかね』ッてきくんだ、だしぬけの質問に僕は面くらつちまつて『いや、別にない、どうかしたつて云ふのか』ッてきき返したんさ、ところが、野澤は思ひがけないことを云ひ出したんだ『いや、實はゆうべ妻と初めて同衾したら、妻がいきなり、××××××××××××、××××××、××××××、×××××××××××××××××××××××××
×、×××××××××××、××××××××××××××××××××××、××××××××、××××××××
××、×××××××××××××××××、××××××』ッて野澤は打ちあけるぢやァないか、僕はその言葉をきいてびつくりしちまつたね、何しろ野澤の細君にそんなことを前以て云つた覺えなんぞ、僕にやァ一向ないんだからさ、だが、僕はすぐとその時決心した、さうして『いや、あるある、さう云はれちやッ仕樣がない白狀するが、實は一寸奧さんにそんな話をしたよ』ッて云つて、ほんとうに恐縮したらしく頭をかいたんさ、すると野澤はひどく安心したやうな顏つきをして『さうか、君のことだから、僕もきつと何か云つたらうとは思つてゐた、だが、僕だから構はないが、これからは少し注意したまへ』ッて僕を叱るんだ、僕はただ、うん、よし、よしッて云つて、それきりその問題は濟んで了つたがねまァ僕だから無事だつたやうなもんの、細君も隨分輕はづみなことをしたもんさ、——』

その話が、ふと強く再び大木の頭へ甦ッて來た、と、野澤の家の平生の食べ物や飲み物のことも、病氣の手あてや器械類のことも、みんなそれと或る關係があるのではないか、と彼の心に思はれ出した。

『野澤さんは、それから奧さんが自分の思想を理解してくれないッて愚痴をこぼしなさつて、せめて東京のあひだがもう少し近かつたら、始終お宅へ伺はせて、いろいろあなたから敎へて頂きたく思ひます、然し今んところ京都を離れるわけにもゆきませんし、特急電車でも開通しなくちやァ、なかなかちよつと京都から一日泊り位には來られませんから殘念です、なんて仰有いました、やつぱり奧さんのことが氣におかかりなんでせう、さうして又、こつちへ來てつからハガキも何も出さないから、きつと妻は心配してゐませう、いや、怒つてゐるかも知れません、珍らしく旅へ出ると、妙にうちが

心配になるもんですね、然し不思議なことには、どうしてか、子供や妻がどうかなつてゐやァしないかッて云ふ心配より家が火事にでもなりやァしないか、今んころもう燒けて了つてゐやァしないか、なんてばかり思ひます、なんて云つてらつしやいましたよ、ほんとに面白いかた。」

　きん子は笑ひ出した。

「そんなことを云つたか。」

　大本は苦笑しながら、野澤に對する憐憫の感情に動かされた。

×　×　×　×　×　×　×　×

　その日から二三日して、野澤はすつかり平温になつた、と、彼はすぐ京都へ立たうと云ひ出した、別にとめもせずに、大木は倅をたのんで彼をのせて、自分は電車で停車場まで送つて行つた。

「いや、今度はほんとに飛んだ御厄介になりましたね、まるで、皆さんから看病して頂いたり迷惑をかけたりする爲めに、出て來たやうなもんですな。」

　汽車の窓から、野澤はかさねて禮を云つた。

「いや、思ふやうにお世話が出來ずに殘念でした、精々大事にして、よくなつたらシッカリ勉強して下さい。」

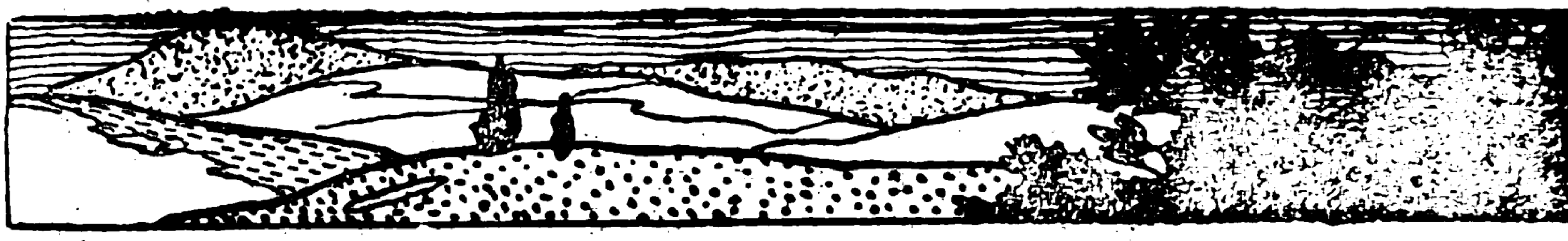
　大木は卒直に云つた。

「有り難う、今度はもう、病氣やら何やらで散々でした、此の次に改めて出なほします、どうも僕は、本をよむにも何をするにも、人並みに能率があがらなくつて困つて了ひます、やつぱり身體が弱いからですからね、――これから歸つたら、もう學校の方はしばらく休んで、一つどこか海岸の方へ轉地してゆつくり身體を丈夫にします、何なら關東の方でもいいんですが、どこかいい場所がありませんか。」

　まるで大きな子供のやうな調子で野澤はきいた。

「知りませんね。」

　大木がそつけない返事をした時、汽笛が鳴つて汽車が動き出した。



鳴蟲山の鹿

若山牧水

鹿のゐていまも鳴くとふ下野の鳴蟲山の峰のまどかさ

友が指す鳴蟲山のまどかなる峰の紅葉は早や過ぎて見ゆ

枯草の荒野につづくいただきの鳴蟲山の紅葉乏しも

大君の御獵の場の峰つづき鳴蟲山に鹿の鳴くとふ

今にして獵とどめずば美しき鹿が歩みを其處に見ずならむ

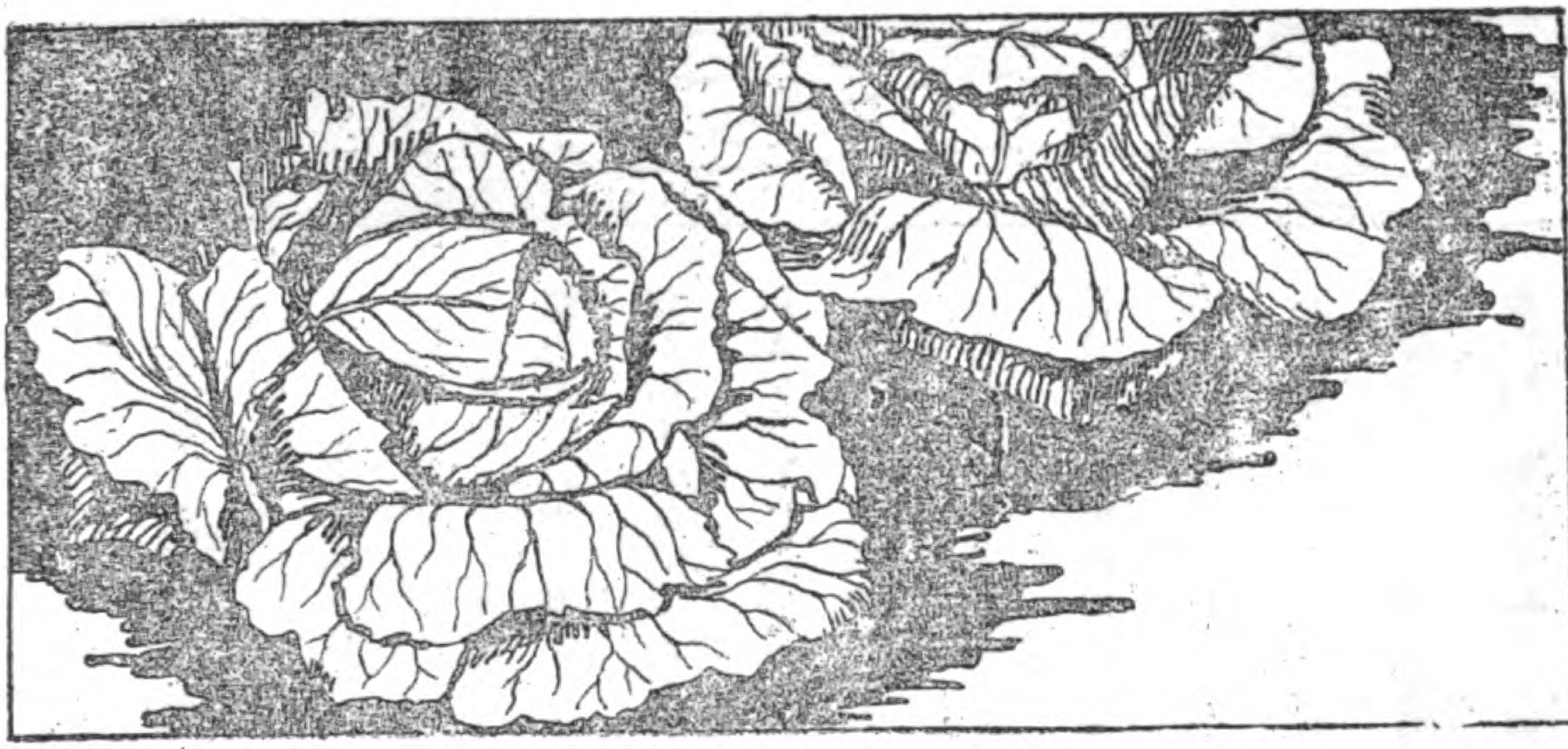
聞きのよき鳴蟲山はうばたまの黑髪山に向ふまろ山

茸狩にゆきて得狩らずかへるさに鳴ける牡鹿を聞きしてふ友

小夜更けて鳴くと云へれどまことはたそがれにたゞ鹿は鳴くとふ

二聲をつづけてあとを鳴かぬといふ鹿の鳴音をわれも聞き度し

鹿の鳴く聲をまぬると酒にゑひしほそきまなこを瞑づるこの友



殘念

里見弴

正月、からだのあいてゐた女優の飛鳥菊野は、舊くからの贔屓で、可なりもう隔遠慮のとれた間柄の河原夫人に招かれて、築地の方の支那料理屋で夕食の御馳走になつた。相客に、河原のうちや劇場の廊下で二三度顔を合せたことのある、大阪の或る貴金屬商の未亡人が見えてゐた。小肥の圓顔に、ちよいと波を打たせた七三がよく似合ひ、土地風でやゝけば〳〵しい色調の衣裳、場馴れてゐる而も仇ッぽい身のこなし、眼使ひ、言葉つき、どこからどう見ても、この増田と云ふ女から、「殊勝らしい未亡人」を感じることは出來なかつた。年にしても四十を越してゐるのが、だまつて十は若く見え、また當人もそれで通さうとしてゐるらしい一體の裝ひ方だつた。無邪氣な、器量を褒めてさへゐれば機嫌のいゝやうな河原の――それほどだから云ふまでもなく若づくりで、實際にも七つ八つ下なのがひよつとすると姉さんに見られさうだつた。役者には年齢がないとはいつても、飛鳥菊野と人に云はれるやうになつてから、いつかもう十年にもなれば、あれ〳〵

と指さゝれるのがうるさい、と云つた氣持も少しは見せたく、その實は氣もさして、却つてそれが年相應に、けれども一白で女優とは肯けるやうに、有繋どことなくあくのぬけた裝ひをこらしてゐた。

以前良人が、正金銀行から上海の支店にやられてゐた頃、都合であとから行つて、一年ばかりそこで暮したことのある河原夫人が、料理の通を云ひながら、老酒を勸めたが、生來あまり好でない上に、すぐ顏へ出るたちの菊野は『まア、結構ですこと』と褒めはしたが、內々その日向臭さに辟易して、銀の盃を、時折ちよつと唇へ觸れさすばかりで、三杯とは重ねなかつた。增田は餘程いけるらしく、折角だけれどあたしは日本酒の方が結構だ、など自分だけそれにして、主人や菊野が銚子をとり上げさへすれば、大抵は綺麗にあけて注がせた。御亭主ぶりに、河原も、眼のなかゞ少しうるんで來るほどに飮んだ。――若くはなく、決して年とつてもゐない女たちの、男を交へない酒宴……酒が普段の謹みを忘れさせる頃には、なんでもない言葉の裏へ一々とろりとした色氣がたまつて來た。みんなそれを意識し、お互に意識してゐる相手の氣持をよく承知し合つてゐながら、一人として、ニヤリと相格を崩すやうな馬鹿らしさがないだけに、調はゞ陰にこもつて、會話の平滑な表面が、目には見えないほどに、しつとりと汗ばんだ態だつた。若もその席に、少し神經の鋭い、七つ八つの男の子が一人ゐたとすれば、なんとも知れない恥しさに、だん／＼首を垂れ、不機嫌になつて行つて、仕舞には、わッと泣きだしたに相違ない。――さう云ふ空氣に、第一に胸をむかつかせだしたのが、菊野だつた。十年來の人氣稼業に躓きなく今日まで來た、――と云ふことは、男を主とした世の中では、それを拒みもせず、さうかと云つて任せきりもせず、不離不卽に陰と陽をくゞりぬけて來たわけだが、その大抵ものに動じない筈の「女優」菊野だつた。

『まア、あんまりお話が面白いんで、ついいゝ氣になつて、いつまでもお喋りをして了ひまして……』

食後の果物もすんで、暫くすると、氣づかれないやうに、また氣づかれるやうに、圓卓の下でちよいと腕時計を見て、菊野はそろ／＼歸り支度の言葉にかゝつた。河原と二人きりなら兎も角も、殆ど初對面に等しい增田未亡人の前には、少

しはきちんとしたところが見せたかつたし、その席上の空氣に對する反感は、いつか増田一人の上に落ちて、早くこの女のそばから離れたかつた。また實際増田には、一言々々(ことごと)馴染が重なるにつけて、なんとなく菊野を小娘ッ子扱ひにするやうな調子が出て來た。自(みづか)ら深く恃(たの)むところがあるらしく、氣持の上でおッかぶせて來られると、成程さきは年上には違ひないが、なんと云つてもこつちは玄人(くろうと)だ、その道の修業でひけをとつてたまるものか、とでも云つた風な、つまらない反撥心が頭を擡げる一方には、相手を色餓鬼のやうにさけすむ心にもなつた。それに、その日は、朝から頭が重くて、一度は電話で斷りを云はうかと思つたのを、折角の招待と我慢して出て來たのだが、一二杯飲んだ酒の加減か、今ではづきん／＼と蟀谷(こめかみ)に響けて、堪へ憎いほどになつて來てゐた。うちで、誰はばからずのう／＼と手足を延ばしたかつた。

「一本いかゞ。」

増田は、けれども落ちつきはらつて、舶來の細巻を並べた煙草入(シガレットケース)を、菊野の前にさし出した。「ごく輕いんですの。」

「有難うございますが、あたくし無重寶でして……」

「あらさう。あなたもあがらなかつたわね。」

云はれると河原は、

「でも、すつてすへないことはないわ。」

と、いたづらじみた笑顔で、手を出して一本ぬき取つた。菊野がすぐマッチをすつて火をつけさせた。

「あなた方は、舞臺では、是非とも喫はなきやならない時があるんだから、普段からちつと稽古してお置きなすつたらどう？」

馴れた手つきで、灰皿に灰を落しながら、増田が云つた。

「さうね、舞臺で煙草にむせたりしたら大騒動だわ。」

河原もさう相槌を打つた。現に或る飜譯劇のあば摺女の役で、巻煙草を吃しながら、臺詞を云ひかけると、うッと咽へ煙がつまつて、あぶなくせき込みさうになつた憶えがあるし、さう云ふ話さへすれば、馬鹿々々しいほどに素人が喜んで聞くくらゐは百も承知でゐたが、一刻も早く切りあげたい場合なので、

『ほんとうに、何から何までお稽古して置かなければなりませんので、あたくしのやうなものは……』

などと、つまらないお座なり云つてから、さて今度は、そろ〳〵座布團を辷つて、『奥樣、あたくし、大へん失禮でございますけれど……』

『まアいゝぢやありませんか。』

と、御主人役は、やつと三分の一ほど喫つた煙草を、火鉢の灰に差して、手近の呼鈴を押しながら、『御一緒に出て、お腹ごなしに、ちつとぶら〳〵歩かうぢやありませんか。』

『そんなことを仰有つたつて、飛鳥さんは賣ッ子だから……』

『まア奥樣！』

と、あでやかに笑つてみせて、『そんなでしたら結構ですけれど……』

『ぢアどなたか待つてる方が……』

『いやね、光枝さんは……』

と、増田はたしなめるやうに、『かう云ふ方たちと始終おつきあひをしてゐながら、どうしてあなたはさう野暮なんでせう。そんなこと、云ふだけ……』

『あら、大へんですわね。』

ひとりで野暮でながつてゐる未亡人の、得意的顔色を見ると、菊野も優越の氣持にふくれ上らずにはゐられなかつた。

そこに生じた餘裕から、また一つには、河原夫人を立てようとする氣持から、一緒に散歩することむしろ自分から進んで承知して了つた。

『いゝ按配に今夜はあつたかいから、歩いてみるのもいゝでせう。』

ちよつと勘定に立つて行つた河原が戻つて來てから、增田もそんなことを云つた。

『えゝ、あつたかいどころか、あたしは暑いくらゐ……。雨にならなければいゝけれど……』

と、まだ赤い頰をして、光枝夫人は、西洋風の高い窓から空を窺いてみたり、子供のやうに嬉しさうだつた。

『さやうですね、あんまり蒸しますから……』

『ひよつとすると、あなたの大好きなものが來るかも知れない。』

『あ、いやでございますわね。さう仰有られたばかりで、あたくしすぐもう體が竦みこんで了ひさうな氣がします。おまけに、こんな三階建だつたりしたひには……』

『あらさう。あなた地震がお嫌ひなの。』

そこへ、そばから增田も口を出して『誰だつて好きな人つてのもないでせうけれど……』

『でもね、この人の地震嫌ひは、ちつと御念が入りすぎてるの。樂屋の階段を轉げ落ちたとか、あたしのとこでも荷物自動車の響を聞いて、眞ッ蒼になつたことがあるし、それァいろ〳〵と逸話があるわねえ。』

『年甲裴もなく、まるで意氣地がございません。』

と、あやまるやうに、輕く頭をさげて『それに、今日の蒸暑いやうな、頭を押えつけられるやうな氣持は、どうも一件の前兆ぢァないかと思はれまして、實はもう今朝から少し……』

『あゝ、痛むんですか。』

と、すぐ河原が引きとつて、増田の方へ、「不思議なことには、地震の來る前には、きつと頭痛がして來るつて云ふんですから、兎も角も當りまへの嫌ひぢやありませんわね。」

「雷の嫌ひな方に、よく前から分る方があるわ。一種動物電氣が強いとでも云ふんでせうか。あたしなんぞ、そこへ行くと、なんに出會つたつて、それア平氣なものよ。つまり無神經なのね。」

そんな話をしながら、身支度を終へて、やがて三人は、とても一月とは思へない温い氣温のなかへ出た。菊野の待せて置いた俥夫は、三四間離れて彼等のあとに從ひ、明石町の廣い通りを、築地橋の方へぶら／＼歩いて行つた。

そとの空氣が、菊野の頭痛を大ぶん輕くした。それに往來なかのことで、會話も先刻のやうにさうへんに色ッぽくなるわけもなく、主に芝居のことに就いて交はされてゐたから、云はずとも菊野が中心めいたところに立たなければならず、さうしてゐれは、自分自身が、稼業の魅力にかゝつて、だん／＼お喋りになつて行つた。そんな風で、大して歩いたとも思はないうちに、木挽町へ出て來た。

「どうです。」

と、増田は二人の顔を窺き込むやうにして、「こゝまで歩いて來たもんなら、ちよつとあたしの宿へよつておいで下さいな。」

「さうね、銀座を少しぶらついて、……もうぢきだわね。」

河原は、まだ／＼話し足りないらしく、すぐに乘り氣になつたが、この上まだ二人に捉まつてゐることは、菊野には堪へられなかつた。

「おア、銀座通りまでお伴しまして、あたくしだけあすこで失禮させて頂きます。」

「いゝぢやありませんか。まだ時間は早いんですよ。増田さんのお宿も、竹川町だからすぐですし、ちよいとお送りして

行きませうよ。私だつてさう永くにお邪魔してゐられないから……あなたは俥を返しちやつて、あたしの自動車で送つておげますから、ねえ、いゝでせう、さうなさいな、ね。」

人氣も業の弱さから、それでもとは云ひかねて、菊野はうやむやに承知させられて了つた。三人づれの美しい女たちは明い銀座通りの人目を恐れた。どんな場合でも、――例へば、葬式の親族席に項垂れてゐる際ですらも、そのことによつて、女の氣持が輕快にされないと云ふことはない。要もない飾窓(ショウウインドウ)を覗いたり、露店の古道具を見おろしたり、立停つたり、二三歩先へ行つたつれに聲をかけたり、無意識の間に、いろ〳〵と自分を目立たせるやうな段取をつけてゐた。

「オウ！」

あたりの人の流よりも、首だけそつくりぬけ出して、愛嬌のいゝ笑ひ顔が近づいて來た。あゝ、惡い人に見つかつた」と菊野が思ふひまもなく、その亞米利加大使館附の武官は、大きな掌(て)を、隣の並んで歩いてゐた增田の前に差し延べ、流暢な日本語で「まア、暫く。いつこちらへ？」

「御機嫌よ！」

增田は、がツくりと首を仰向けて、握られた手を振り動かしながら「一週間ほど前から……」

「さう？　なぜすぐ知らせてくださいません。それで、まだ當分こちら？」

「えゝ、まだ……」

その短い會話の間に、もう一人のつれ、河原を自分の知らない人だと見極めて置いて、すぐ菊野の方へ手を出すと、

「オヽ、お菊さん！」

と、さも親しげに、どこで聞いて來たか本名を呼んで、痛いほど手を握り締めた。

「暫でした。」

「隨分暫く〳〵この節あなた、ちよつともホテルのダンスに來ませんね。」

「えゝ、つい忙しいので……。いづれまたちつと暇になりましたら……。」

「是非おいでなさい　是非々々。珍しい、新しいステップ憶えましたから、敎へませう。」

「えゝ、有難うございます。」

そんなことを話してゐる時には、みんな同じ方角へ歩きだしてゐた。增田は、河原の耳へちよつと何か囁いてから、

「御紹介しませう。河原さんの奧さん。こちらは亞米利加大使館のジャック・ハンターさん……」

「はじめまして。」

日本流に、丁寧に頭をさげただけで、ことさら手を求めなかつた。

「どうぞ……」

手を出しかけてゐた河原の方が、却つてまごついて、聞きとれないほどに呟いた。

「ジャックさん、これから皆さんとあたしの宿屋へ行くところですが、あなたも御一緒にいらつしやいな。」

「有難う。御差支なければ、お伴します」

菊野は、困つたことになつて來たな、と思つた。この、評判の不良青年に、ダンスの歸り、へんなうちへつれ込まれかがつたのは、つい二三ヶ月前の話だ。その時の、苦々しい、むしろ醜惡な場面を思つたなら、それ以來はじめて逢ふ今夜白々しい顔をして、暫くの、ダンスがどうのと云へた義理ではないのだが、そんな恥を知つてゐるほどの男なら、初から問題はない筈だが……こんなことなら、伜を歸さずに、みんな宿屋の門口まで送つたら、自分だけ歸つて了ふのだつた、などと菊野は、心にちり〳〵してゐた。

宿屋の玄關をはひると、增田は、出迎へた女中頭らしい年增に、自分の部屋は荷物や何かごた〳〵と取り散らしてある

から、お客様方をどこかあいてゐる部屋へ御案内してくれ、と頼んだ。お狹くてよろしければ、と、やがて案内されたのは、奥まつた二階の八疊間だつた。そこだけのために、梯段がついてゐて、ほかにはどつちへも通へないやうな、密室と云つた感じの部屋だつた。

「ぢァあたし、こんなものを……」

と、コオトの前をはづしながら、増田が、

「部屋へ行つてぬいで來ますから、ちよつと失禮いたします。」

「どうぞ、ごゆつくり。」

如才なく外國武官は挨拶して、二人の婦人を先に部屋へはひらせてから、自分もスリッパァをぬぎ、隅の方へきちんとかしこまつて坐つた。

「あら、それぢァいけません、どうぞまァづうッとあちらへ。」

主人代りに、河原は、床前の方の席へ彼を誘つたが、

「いゝえ、あなたまァ、どうぞ。」

などと、額の白い、頰の赤い童顔をニコ〳〵させて、日本風の「遠慮」をしてみせたりした。火鉢に火が來、茶道具が運ばれる時分には、床前だけをはづして、みんなの席もそれ〴〵に定つたが、肝心の主人公がなか〳〵出て來なかつた。

一寸見はさばけたやうで、存外すれてはゐない河原は、初對面の外國人の前で、ひどく硬くなつて了つた。

「くたびれたでせう?」

「いゝえ、あたしなんぞ馴とりますから……。奥樣こそ……」

「歩いてみるとやつぱり、可なりありましたわね。」

『え ゝ……』

など ゝ、菊野を相手に、低聲で話すばかりで、時々、胡坐をかけとか、もつと火鉢の方へよつたらどうだとか、男へはほんのさうした口しか利けなかつた。

菊野は、話相手ほしげなジャックの目を、時折自分の頰に感じてゐながら、わざと河原のそばに膝を摺りつけるやうにして坐つてゐた。とりつく島もないので、この際いつそ日本の禮儀の心得でもみせてやらうと思つたが、じろ〳〵女たちへ無禮な視線を向けようともせずに、ジャックは、蟲も殺さないやうな涼しい顏をして控へてゐた。

そして女中が來て、いま増田のところへ、急な用件をもつた客が見えたから、もう三十分ほど失禮する、どうぞ自由にあがつてくれ、と、果實や西洋菓子の鉢を置いて行つた。すぐまた、コニャックとペパミントの、口をぬいたばかりの瓶やグラスも運んで來た。

河原に、給仕しろと囁かれて、菊野は、グラスをジャックの前に置いた。

『あなたは、コニャックでせう。』

ひよいとしたはづみで、馴々しく云つて了つて、すぐ忌々しく思つたが、さう云ふ機會をそのまゝ遁す相手ではなかつた。

『まア〳〵、さう仰有いませんで……』

手早く靑い酒の瓶をとりあげて、河原の前になみ〳〵とついだ。そんな言葉のやりとりから、やつとみんなの口がほどけかけた。それでも菊野は、林檎をむいたり、皿にとつてくばつたり、さう云ふ仕事にばかり廻つて、出來るだけ會話には加はらない算段をしてゐた。そんな風で、暫くの間、當り障りのない世間話が續いたが、ふと時計を出して見て、

『あら、もう十一時よ。あたしちよつとこつちへ電話をかけて來ますからね。』

と、菊野の耳もとに云ひ殘して、すばやく部屋を出て行つて了つた。

襖がしめ切られるか切らないに、すぐジャックは顏をよせて、

「あした、……明後日(あさつて)の日曜に、ホテルに來ませんか。あたし七時には行つてゐます。一緒に食事をしませう。そしてダンス。來ますね。」

菊野は、そつぽを向いて知らん顏をしてゐた。

「菊野さん、來ますね。」

「伺へません。」

「どうして。……あなたおこつてる？」

「いゝえ。」

「おこつても駄目ね。あたし、あなたのことなんでも知つてます。」

云ふと、人さし指のさきで、ちよいと頬を突いた。

「何するの！　あたし、大きい聲を出してよ！」

片一方の目を細くして、にやり〳〵ジャックは笑つてゐた。

菊野は、默つて歸つて了はうと思つた。で、立ち上らうとした。その時疾風(はやて)のやうな音が、忽に近づいて來た。と思ふと、ズウンと重い響が體に傳はつて、ゆさ〳〵と部屋がゆれ始めた。遠くで物の落ちる音がした。ミシ〳〵と柱が鳴つた……夢中で、ひと膝男の方へゐざり寄つたが、そのまゝ疊にひれふすと、

「そばへよつちァいやよ！」

と叫んだ。……外國の男と、——自分の大嫌な男と、酒の瓶などの碎け散つたなかに、折り重つてゐる自分の屍骸を見

た。その淺間しい姿を見おろして立つてゐるのが、彼の女の愛人だつた

「そばへよつちァいやよ!」

もう一度疾風の響が地を匍つて近づくと、家が小舟のやうにゆれ動いた。

「あゝ。殘念だ!」

さう思つたのか、呟いたのか、叫んだのか、菊野には、もう一切が夢だつた。然し、その言葉は、地震そのもの〻驚きよりも、遙に深くジャックの心に觸れた……。

「殘念だ! 殘念だ!」

この女の死を「殘念」でなくするために、ジャックは、ひとりそこから去らなければならない、と痛感した。

「殘念だ! あゝ、殘念だ!」

鎭つて行く動搖のなかで、まだ菊野はそれを叫び續けた。

ジャックは、二人の上に重い梁が落ちて來ないことを信じ切つてゐながらも、眞面目な、悲しい心で、疊に伏しまろんだ女優の姿を見詰めてゐた。——殘念でも仕方がない、いつそうちがつぶれてくれゝばいゝのに、と、もう殆どやまうとしてゐる地震をもの足らなく感じた時には、まるで思ひもかけない泪が、一時に瞼（まぶた）の裏へ熱（あつ）くたまつて來た。



黒谷夜話

中里介山

三

その翌日、雨の晴れ間に熊谷主從の一行は此の古寺を立ち出でた。前日來の旅と違つた處は馬上には男の笠をかぶせた女の人が乗せられて、昨日まで馬上の人であつた熊谷は馬に添うて歩んでゐる。口を取つて行く小兵太と、その行く方角が西へ向つてゐることだけは昨日と變りはない。

手越の宿へ着いた時に此の馬が長者の家の前へ留められた。

『長者どの、長者どの、こゝではお女御(むすめご)が行方知れずになつて定めて御心配でござらうな、併乍ら其の心配は御無用でござるぞ、只今、途中から此の通りお女御を我々がお連れ申して來たから引取らつしやい。』

小兵太は長者の邸の前で大聲をあけて呼び入れると共に、脊伸びをして馬上の女を抱き降ろした。

その聲を聞くと共に、長者の屋敷の中からは有る限りの人が先を爭うて走り出でた。誰れも不安の色に一時に驚喜の影がさして來たものゝやうに走り出した。

『明石様が無事でお戻りになりました。見慣れぬ旅のお方が姫様を助けてお連れ下さいました。』

異口同音な彼等の喜び方の中に下へも置かずに女房は抱きかゝえられて邸の中へつれ

で行かれた。しかと一同に手渡したと見留めた上で小兵太は、

「そんなら、確かにお渡し申したぞへ、二度と間違のないやうに大事にさつしやれよ。」斯う云つて逸早く馬を引ぱり出した。熊谷は、もうずつと先へ進んでゐたから、小兵太は急に空身になつて勇む馬とからみ合つて急がせるのを、二三の従者と一緒に、遮ふやうにして其の馬の前に立ち塞がつたのは手越の長者であつた。

「どうぞ、お待ち下さい、私共に一通りのお禮の言葉を申上げるだけの餘裕をお與へ下さいまし、また此れまでにあなた様方のお助けを蒙りました事情を是非共お聞き申して置かねば此の後がまた危險でたまりません、お急ぎの御用ならば、たつてお暇をとらせるやうな事は致しません、暫らくの間お留まり下さいませ。」

長者は斯う云つて二三の従者に小兵太を引留めさせて置いて、自分は熊谷のあとを追ひかけて行つた。

寛々と歩いて小兵太の追ひつくのを待つてゐた熊谷の袖にすがつて手越の長者は、同じやうに言葉をつくして其の立ち寄りを懇請した。引き留める人々を振り切り／＼小兵太は熊谷の傍までやつて來たが、こゝで主従共に迷惑なといふ面を見合せた。

二人は女を手越の長者の女と聞いて、そこの門前まで連れて來て、打棄るやうに手渡しをして直樣、西へ行つて摺り拔けてしまはうとしたのだ。逃げるのではないがさうしないと、お定まりの、やれ命の親だの、再生の恩だの、それがうるさい。

「では、小兵太、ちつとばかり邪魔をして行かう。」

斯うなつて見ると、それに従ふよりは、これを振り切る方がうるさい。熊谷主従は遂に手越の長者の家へ招かれた。

長者の家では、もとより非常な歓待であつた。長者は自ら熊谷のとりもちをつとめて、此の事件の起るまでのすべてを熊谷に語つて聞かせた。

熊谷は最初から、それを餘り聞きたがらなかつたのだが、聞いて見ると成程と思はれる節がある。聞かうとすれば昨夜來、直接に其の女の口から聞けない事では無かつたが、二人共に何も尋ねずに此處まで來た。長者が問はれずして語る處によると、疑問にすれば疑問の多かつた前夜來の出來事に一通りの了解がついて行く。

長者の女に戀人があつた。と云つても其れは及びもない雲の上人で　一とせ都から鎌倉へ、鎌倉からまた都へ歸る際のかりそめの契りが、明けても暮れても都の空をながめて物を思はせる身となつてゐた。長者の女には、よくさう云つた戀がある。夜毎に客を代へる遊女とは違つて長者の女は本當に戀をするのが痛々しい。

同じ處の長者の女が平重衡に焦れ死んだのは此れより幾らも經たない前の事で、『東路のはにふの小屋のいぶせさに』と詠んで池田の宿の長者の女が囚はれの公卿さんを慰めたのは此れよりずつと後の事であつた。長者の女の相手は、いつでもやんごとなき人々であつて、かりそめに來ては、忽ち手の屆かない處へ行つてしまふから、其の戀は大抵悲劇に落ちて行く。

鎌倉へ下る都のある若い公達と馴染んだのが、此の女の苦しい戀の初まりであつた。それから物思ふ人となつて、明けても暮れても、その君のことばかり思うてゐたが或る時、都へ上るといふ旅のさむらひに賴んで、その君へ消息をしてもらつたことが大きな誤であつた。そのさむらひは、女の思つてゐる公卿さんの家に親近があつて、よく其の人を知つてゐるといふ話であつたから女は喜んで細々と消息と認めて其のさむらひに託したが、不幸にして其の旅のさむらひといふのが天野の四郎であつた。

天野の四郎は、その以前から長者の女の美貌を垣間見てゐたが、今、其の戀の秘密を手に入れることが出來た。實は其の秘密を手に入れんが爲に、京方の旅のさむらひとなつて長者の家に近づいたものである。

天野の四郎に戀の秘密を知られてから後の女は不幸であつた。遂に女を鎌倉へ連れて行つて其處の厳めしい武家の家で保護してもらはなければ、天野の毒手を免れることが出來ないといふ事になつた。女の預けられて行く先は三浦黨のうちのある勇士の家であつたといふ事だ。蛇のやうな天野の眼をのがれる爲に、其處に保護を託されに行く道すがらにあの始末である。天野の四郎は、直樣追ひついて行つてからみついた。天野は働く時は單獨で働くが、その背後にはいつも無數の手下がある。一たび口を開けた時は、いつか見込まれたものゝ其の口中に落ち來らぬは無い。

その天野の手から奪ひ返して來た此の勇者の名前を長者はまだ知らないのだが、それほど押しの利く勇者を尋常には見ることが出來なかつたから、此處で敬重の念も一層ではあるが、思ひやられるのは、此の人の手に依つて無事に取り戻さ

れては來たもの丶、此の人が去つたらどうなる、重しの利く押へのある間はそれで宜しいが、重しが去れば、もと〳〵通り撥ね返さる丶より外はあるまい。天野の四郎は懲らしめられたけれども殺されてゐるのではない、彼が生きてゐる間は其れを抑へるだけの保護者が無い限り其の祟りからのがれる由の有らう筈が無い。

長者の心配するのはそれであつた。あれだけの人の中へ加へてやつてさへあれである。女をこ丶に置くことも出來ないし、また、遠くへうつすことも出來ない。どうか、暫らくの間、こ丶に御逗留をしていたゞく譯には參りますまいか、せめて十日でも、せめて三日でもと熊谷に向つて懇願するのも無理がない。熊谷は長者の懇願を凝と聞いてゐて、暫らく考へ込んでゐたが、急に小兵太を呼び立てた。

「小兵太、小兵太。」

「何か御用がお有りなさるか。」

次の間から小兵太が首を出すと、

「まあ、此處へ來て坐れ、少しばかり相談があるのだ。」

「承りませう。」

　小兵太は遠慮なく入つて來て、主人と長者との對角線に坐つた。

「小兵太、相談といふのは外ではないが、其の相談の前にあたつてお前に誓ひを立て丶もらはねばならぬ。誓ひといふのは、拙者の云ふことに差出口をせぬことだ、手取り早く云へば拙者の云ひ出したことに否應を云はぬことだ。」

「それでは相談ではなく命令といふものでございませう。小兵太は今までとても御命令通りに働いてゐる筈でございます。鎌倉を立つ時にも一切無言でお伴を致しました。うかと口を辷らしたのは足柄道で人の難儀するのを見てゐられなかつたからでございます。仁義道德に關することの外では、命令に文句をつけた覺えはございませぬ。」

「宜しい、それでは云うが、今日からお前とおれとは別れることにする。」

「え丶。」

「さうして、おれは相變らず西へ西へと向つて行くが、お前は東へ歸らうとも、この邊に留まらうとも……

『お待ち下さい、馬はどう致します。』

『馬はお前に任せるのだ。』

『成程、では御主人様はこれから歩立で西へ西へと向つてお出でになる、やつがれは馬を曳いて東へ歸れと仰有る御命令でございますな。』

『先づ、その通り。』

『宜しうございます、つまりお暇が出たのでございますな、悪く云へば小兵太は首になつたのでございます。』

『處で、それを聞いたら、もう一つ頼みがある。』

『前のは命令で今度のはお頼みでございますか。』

『はゝ、大ぶ御機嫌を云つてゐるな。』

『厭味も云はうではございませんか、兎に角これまで出來ないながらも忠義を勵んで、御主人の先途を見屆けようとして來たものを、何等の理由もなく、事情もなきに追放とは情けない振舞でございます、併乍らお約束だから厭味は云つても拒絶は致しません、坂東武士の習ひですから、誓ひを立てた以上は二枚の舌は使ひません。』

『處で其の頼みと云ふのは、拙者はこれから一人で例によつて西へ西へと行くのだが、お前は東へ歸る前に、此の家に暫らく逗留してゐて呉れ……と云ふのは例の天野なにがしといふ盗人が、此の後、何を仕返しに來まいものでもあるまい、その時の用心に、なまなかな者では役に立たないが、今までの行きがかりで小兵太ならば可成り其の役目がつとまるだらう、つまり、當分の間、この家に留まつて、彼奴等がどれほどの仕返しをして來るか、其の目附をしてゐるのだ、殊にあの女房の一身を主にお前が擁護して皆々を安心させてやるのだ、何と、この仕事はお前の日頃好んで云ふ處の仁義道德にも叶つた仕事ではあるまいか、前のは命令で、これは頼みだ。この頼みは拙者一人の頼みではないぞ、こゝにゐる長者をはじめ長者の家族一統の者の頼みだ。』

『成程、さう仰有られると小兵太も意地にも否やは申されませぬ、理由も事情も申渡されず首にされるのは、あんまりいい心持は致さぬが、かりそめにも仁義道德の道にかなひ、弱きを助くるといふ坂東武者の氣負ひになる仕事ならば及ばず

ながら小兵太も後へは引かれませぬ。』

單純率直な小兵太はその性格の通りに單純率直な返答である。熊谷も滿足したが長者も滿足した。併し長者の滿足ぶりのうちには、斯う云つて氣前よく引受けては呉れたが此の小男では、どうやら役者が不足らしく思はれないではない、此の御主人が見立てゝ其の任を託するほどでもあり當人も自ら奮つて其れに當らうとするのだから、お互に相當の信ずる處が無ければ出來ないのだが、長者には幾らか不足が無いではない、併し、二人の話がさう定まつた以上は、どうも浮かくと口は出せない、浮と口を出して、この齒切れのよ過ぎる主從の約定ぶりにケチをつけるやうに當つて却つて後難の種になりはしないか、そこで主人は小兵太に向つて呉々も頭を下げて依頼した。

快く引受けて小兵太は下がつてしまつたが、そのあとで熊谷は長者の納得の行くやうに小兵太の手並のほどを說いて聞かせた。あの男は駿馬と共に何十里走りつゞけても疲れといふものを知らぬ男であること、刀を揮はせても弓を彎かせても主人自分すらが舌を捲くほどの手だれであるといふこと、殊に弓を彎かせたら、かけ鳥も逃がすことではないといふことや、狩場の繩張等を細かく語つて聞かせた。あの男一人陣にゐれば三軍も安んじて夜營をすることが出來る。況んや一人の女性を守り、若干の盜人輩の目附は朝飯前の仕事だといふやうな事を說いて聞かせたので、長者はホッと息を吐いて安心してしまつた。

さうして置いて熊谷は、その翌朝、飄然として此の家を去つてしまつた。誰も一人見送る隙を與へないほどに拔駈をして此の宿を立つてしまつた。

小兵太は厩の前で、馬に秣を與へながら出て行つてしまつた主人を敢て見送らうとも焦らなかつたが、主人を失うた馬も人も涯りなき悲哀の色を漂はして、

『所詮、あゝ云つた氣象の御主人だから、追かけるだけが野暮な話さ、今日からはお前もおれも御主人なしだ、おれ達の主人も御主人なしになつて出かけたのだから、おれ達も御主人なしになつて歸るのが當り前だらう、太夫、お前とおれは當分此の手越の長者の家に厄介になつてゐるのだ、お役目が濟んだら東へ連れて歸つてやるから、當分はこゝの家の居候のつもりでゐろや。』

小兵太は斯う云つて駒の鬣を撫でたが、ふいと思ひ返して離れの方へ行つた。その日の午後、小兵太と長者とは長者の居間で問答をした。
「小兵太樣、あなたの御主人樣といふお方はあれは一體、どういふお方でゐらつしやいますか。」
「素性を云ふなと云はれたから、わしには云へない。」
「でも、外ならぬ私共の事でございます、どうぞお打ち明け下さいまし。」
「そのうちに判るでせうよ、今度の旅はこつそりと夜討をするやうにする旅だから世間へ披露をしたくないと御主人は云はれた。」
「成程、お見受け申すと髻を切つておゐでになりました、よく／＼の御發心とお察し申すのでございます、强ひてお尋ね申上げないのが禮儀かも存じませんが實は、私共の方には、もうその心當りがございますので、若しやとお尋ね申上げて見ました。」
「はて、その心當りを云つてごらんなさい。」
「あのお方は熊谷次郎直實樣でゐらつしやいませう。私は、いつぞや大軍で此の海道をお通りになる時、諸大將の中で、たしかにお見受け申した覺えがあるのでございます、熊谷樣とは、ハツキリ覺えては居りませんでしたが、あの時の一方の旗頭の御方にそれと覺えがございましたから、その時、いろ／＼と思ひ返してゐましたところへ、實は鎌倉殿から、ちよつと前にお觸れがあつたのを拜見して、それと小膝を打つた次第でございます、何と相違はございますまいな。」
「鎌倉殿からどんなお觸れがあつたのです。」
「左樣でございます、熊谷樣が何かお氣に召さぬ事があつて鎌倉を立つておしまひになつたから賴朝公が急いで、そのあとを追つて引留めよとの御沙汰ださうでございます、それと知つたならば枉げてもお留まりを願ふのでした。」
「さう判つては、もう仕方がない、如何にもやつがれの御主人は武藏國私黨（しのたう）の旗頭熊谷殿だ、今度、賴朝公と喧嘩をしたのをきつかけに急に西國へ旅をなさりたい氣持になつたのだ。」
「それで、私も考へ直しました、賴朝公が引留めてさへ留まらぬ方を私共がお留め申したつて無益な事ですから諦めて

しまひましたが、一體、熊谷樣はあゝしてお一人で何方までお出でになるのでございませう。」

「何處へ行くか、やつがれにもよく話しては呉れなかつたが、つまりあれは發心(ほつしん)をなされたのだな。」

そこで小兵太は鎌倉を出た時の顛末から此の道中の途すがら、主人の口から聞いた言葉の節々を長者に話して、おれの主人は强い人でありながら涙脆い性質だといふことを物語つた。手越長者は兼ねてこれをよく心得てゐたものと見えて、

「我々でも源平の勇士方のお噂をする度に其の事が出るのです、一の谷の時も熊谷樣は敦盛卿を助けておやりにならうとしたが味方の者に妨げられて是非なくお首を討たれたさうです、あゝいふ御振舞は功名手柄を爭ふ一遍の武人方には出來ないことです、それと比べて、いつもお話をすることですが、熊谷樣と同じく武藏の猪股黨の小平六則綱樣が平家方の越中の前司盛俊樣をお討取りになつた態度をごらんなさいませ、猪股樣は鹿の角の一二の草かりを容易く引裂くほどの力量を持つておゐでになり八ヶ國に聞えた勇士でございましたが越中の前司樣は人目には二三十人の力を現はしなさるが内々は六七十人で上げ下ろしをする船を一人して押し上げ押し下ろすほどのお力でしたから組み布かれ降參をしてしまひ、敵に油斷をさせて味方の應援の來るのを目あてに欺し討にしてお首を擧げられたといふではありませんか、あれでは實力の爭ではございません、潔い功名とは申されません、熊谷樣ならば敵が强いほど强くおなりなさるでせう。弱ければあはれみといふものがございます、若し、かりに、どうしても敵はない敵に出逢ひました時には潔くその敵に討たれて死ぬことを本望となされませう、決して、欺し討に人を討つて手柄顏をなさるやうな事はございません、いつも近處の人達が集つては戰物語を致します時、越中の前司樣を討つた猪股樣の卑怯を憎むと共に、それと引合に熊谷樣の奥床しさを賞めないものは無いのです、けれども、あゝ云つた御性格のお方が永く武人生活に堪へられるかどうかといふことは、私共にも疑問でございました、たとへて申しますと、西行法師におなりになつた佐藤義淸樣、文覺上人の前身の遠藤盛遠樣、それぞれ皆特色のあるお方でございますが、剛直にして物の哀れをお感じなさることの强い性格は同じことでございます、ですから、私もかねぐ〵、熊谷樣も今日のやうな武人社會の間にあつて、いつまで御安心がつゞきますことか、實は陰ながら其れをお案じ申してゐたやうな譯です、今日のやうな時勢には堪へられないのが本當の武士ではございますまいか、人は本當に生きようとすれば誰でも現在には堪へられなくなります、我々は、ごまかして生きてゐるから、どうにか一生をお茶

を濁して行くのですが世間にはどうしてもごまかしては生きて行けない眞劍のお方が稀にありますものです、その方は行けども行けども涯りなき道を倒るゝまで行かねば止むことの出來ないお方で、熊谷様も慥かにその御性格のお方の一人と存じます、ですから、私共も此の度の御發心を貴いことゝ存じます。」

長者は長者だけの理解を以て熊谷の心事に同情をするらしい。けれども、小兵太は長者だけの理解はないと見える、たゞ主人の一徹を自分の率直で受けて、妙な心理解剖に觸れないところが此の男の身上であるらしい。たゞ行けども涯りなき道を倒るゝまで行かねば止むことの出來ない性格と云つたのが、先夜、足柄下の山道で西へ〳〵と問答して自分が窮してしまつたのと比べて怪訝に感じてゐるの程度らしい。

斯うして小兵太は長者の家の賴まれ人である、晝は主人の殘して行つた馬を驅つて附近を遊び廻つた。夜になると家の人達の居間近い處へ眠つて保護者の役をつとめてゐる。

馬と從者とを置きざりにした熊谷直實は、それから一人旅である。何となく心殘りもあるが、また一枚のぬけ殼を拔ぎ捨てた心持もしないではない。途中、いろ〳〵の事を考へた。

最近に浮島ヶ原の古寺で天野の四郎を火燈口から投げ出した時、外で天野の捨ぜりふのうちに一たびおれの息のかゝつた越中の前司の女はいつか取り戻して泥土の中へ引卸ろして見せるといふやうな事を云つたのが小耳に殘つてゐる。盜人をするほどの奴は大きかれ小さかれ、やりそこねた時は必らず相當の褒味のある捨ぜりふを殘して、脅威を與へて去るのが通例になつてゐる、天野とやらも其の通例に漏れず。生き變り死に變り、ついて廻つて仇をするといふやうな事を云つたが其の時口の端に上つた、越中の前司の女がわからない。

あの女は手越の長者の女であつて見れば越中の前司の女ではない、では越中の前司の女が手越の長者へ養はれて子となつてゐるのではないか、多分、そんな事だらう、海道の名の高い長者の女は必らずしも長者の實子ではない。氏も素性も然るべきものゝ女を養うて子として、その時代の立派な敎養を授けて、いかなる高貴のお客があつても、その取持のお相手として恥かしからぬ者に育てる、官位の高いものも所謂落し胤が、ある事情から、民間に養はれて時とすると、遊女になつて現はれることすらある。あの手越の長者の女も多分、越中の前司の子として生れたのを手越の長者が養うて女として

育てたものだらう。それにしても越中の前司とは何者だ。最近に於て越中の前司といへば越中の前司盛俊の事が先づ頭に浮ぶ。

平家の一族で一の谷の時は山の手の侍大將であつた。力にしては六七十人して上げ下す船を一人で押し上げ押し下す程であつたと云はれる。あの時に猪股の小平六の爲にだまし討ちに討たれてしまつた。多分その人の忘れがたみだらう。併乍ら越中の前司とても、盛俊一人に限つたわけではない。他に何かの緣があつてあの盜人が故らにあゝ云つたものかも知れない。

『越中の前司が娘は泥土にまみれる處まで引き落して、浮れ女の浮き名に曝らされる處まで打ち落して見せる、それまでは預かり主に不足のない熊谷に預けて置く。』

と小賢がしい盜人が遠吠をして行つた。平家が亡んで盛んであつたものゝ運命が瀧のやうに漲つて奈落へ落ちて行く光景をまざ／＼と見てゐる熊谷に取つては、こゝで一人の女の運命が泥土へ落ちようとも、羽衣を着て舞ひ出さうとも、さほどに脅えはしない。

けれども考へるには考へる。戰には負けたくないものである。世に悲慘なるものとて國家の亡びるほど悲慘なるはない。國家の亡ぶる時、女性の虐まるゝほど殘忍なものはない、熊谷はそれを知り過ぎるほど知つてゐる。見飽きるほど見てゐる。壇の浦で海の中から引き上げられた平家の上臈女房たちが殘らず東國の男の情にすがつた。どうかして濱邊へのがれたものは其處の漁師たちが待ち構へてゐた。

何の典侍、何の局といふ女房達が、多愛もなく東國の男の手にすくはれてしまつた。源氏の下つ端の軍卒までが、何の參議の女房といふやうなのをいたはつてゐる。眞黑な漁師がなにがし院の侍女といふのを背負つて、自分の小屋へつれて行つた。今でさへ、室の泊から赤間ヶ關あたりまでの船つきには平家の官女が遊女のいとなみをつゞけて、心なき漁夫や船頭にまで情けを賣つて生きてゐるさうな、生きるのを恥としなければ、公卿や殿上人とたはむれやうとも漁人船頭と契らうとも變りはない筈だ。

『都の女は强い者勝ちで、どうにでもなる。』とあの邊の浦々で云ひ囃してゐた。

戰爭の始は女にあつて其の終も亦女だと其の時の陣中で誰かゞ悟り顔に放言してゐた。成程、さう云へば、すべてが女から出立して女に終るやうにも見える。母の常盤の容色によつて救はれた源氏の子息が、平家の出であつた建禮門院を壇の浦の海上から救ひ上げたといふことで、この源平の盛衰の歴史が終つてゐる。女に始まり女に終るといふことを下らないと聞いてゐたが、それを標準として行けば、たしかにさうなつてゐる。女を奪つたり奪ひ返したりすることが男子の畢生の仕事では淺ましさの限りだ。あの盜人が手越の長者の女を爭ふと云つたのは、その規模が小さくて露骨であるだけの相違で、あの男に取つては眞劍の仕事なのだらう、あゝいふことを云つたりしたりして彼等は生存の興味を見出せばこそ生きてゐるのだ。

厭だ——斯ういふ社會に生きてゐるのは厭だ。虐げらるゝ生涯も厭だが虐げる生涯も厭だ、女となつて男の爲に弄ばるる生活も哀れだが弓矢取りとなつて主君といふものゝ爲に働くのも厭だ、何處かにもつと自由な天地は無いか。もつと生き甲斐のある生涯は無いものか。

熊谷は天野の四郎や、越中の前司の娘の事や、それから引き出された壇の浦の末期の光景の事などを一切頭から振り落して、大空をながめると、青く晴れた秋の空に吸ひ込まれて行く白雲が眼にとまつた。

今の熊谷にはすべてが煩はしくつて堪らなかつたのだ、都へ行つて然るべき解脱の道を求めようとはするのだが果して其の道をつかまへ得られるか得られないか譯らないのだ。然るべき聽法の師を求めようとは思つてゐるのだが果して其の師にぶつゝかれるかどうかも覺束ないのだ。

「三界流轉のうち、恩愛のみ能く斷ち難し、恩を棄てゝ無爲に入る者、眞實の報恩者」といふ一句が、この頃中こたへてゐる。すべてが煩はしくて堪らない彼には一日も早く無爲に入りたいの心がある。恩愛よく斷ち難しとあるのは本當にさうだ。恩愛を棄て得た時が無爲で、無爲が求むるものは恩愛の觀念を振り捨てなければならぬ。その理窟はよく譯つてゐる。見て見るが宜い、此の世上の煩はしい葛藤、その煩はしい葛藤を辛抱して切り拔けて行つても結局何等の收穫といふものゝない煩はしい葛藤は皆、私の恩愛から出立してゐる。

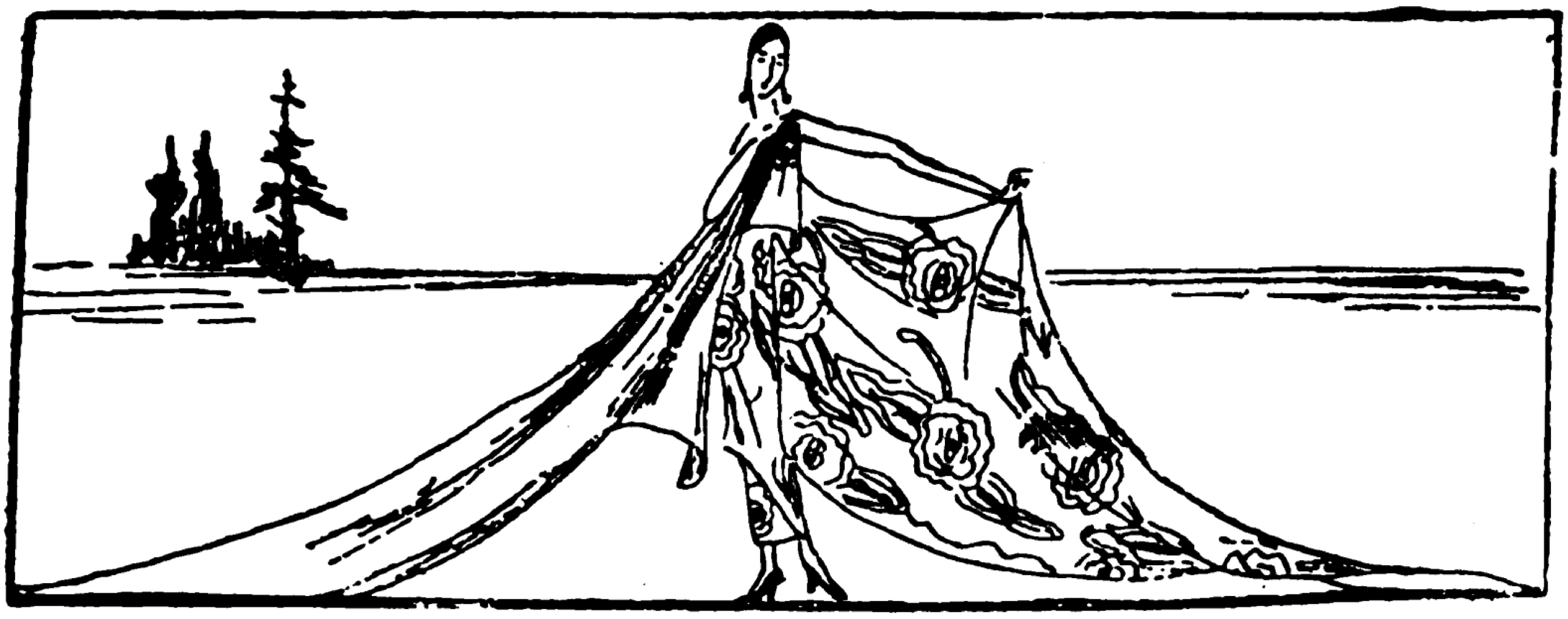
所謂、主人の恩も妻子の愛も此の度は打ち切つて此處まで來たおれだ。これからが無爲の門に入るのだが其の無爲がわ

からない、無爲は犬死をさせる事ではない。確乎不拔の安心の境地だといふ理解はある、絕對無二の信念の據りどころだといふ想像もあるにはある、無爲を求めるのは戰場の苦鬪以上の苦鬪だと心構はして來てゐる。さて無爲の門をどこから叩いて宜いかといふことが勘考中だ。叡山に登らうか、高野に入らうか、兎も角も、都は安居院の聖覺法印を訪ねて見てからの後だ。

「黒谷」へ行くならば先づ安居院の聖覺法印を訪ねてから後にせよとは伊豆の走湯山で云はれた處だ。直接にぶつゝかるには「黒谷の上人」は餘りに偉大であるといふやうな意味から、さう云はれた事が多少共、熊谷の反感を起さないではなかつた。黒谷の上人の偉大といふ噂は聞き飽きるほど聞いてゐる。到る處で、よくそんな事を云つてゐた。この近代での三大人物がある。その一人は平淸盛で他の一人は源賴朝である。その間に立つのが、卽ち黒谷の上人だ、前の二人は近代の歷史的巨人だが、後の上人は前の二人とは趣が違つてゐる。黒谷の上人の唱へ出した法門の大きさは、少し時代を隔てゝゆつくりながめでもしなければ誰にも見果たしが出來まい、併乍らその大きな人物に目のあたり我々が觸れ得ることは幸である。あの人と時代を同じうして生れたといふことは我々の光榮である、と無上に黒谷の上人を渴仰するのは聞き飽きてゐる。誰に向つて聞いても黒谷の上人なる者を眞に偉大なりとせぬ者はない。幾千年の歷史を通じて人間の中へ數へるだけしか生れて來ない男の一人が偶然今日の世に生れて來たものだといふ事は誰も異存なく一致する處であるやうだ。

無論、その時代を同じうして其れほどの人に出逢はすならば、一も二もなく其處へ走せて行かなければならぬ。併乍ら此の男は率直なつむじ曲りである。雷同をすることの嫌ひな男である。

君のやうな野育ちが、そのまゝであの大きな人格にぶつゝかつて見た處で力だふれに過ぎない、まづ聖覺法印に會つて荒ごなしをしてもらつた上で、お目にかゝつて來るがよいといふやうに生物識から勸告されたのが癪だ。法を前にしての今の熊谷は可なり謙虛になつてゐる。人を對象としてはまだ我といふものが拔けきれない。



Trois Balladen

墓に行く男女

(Prelude)

澤田柳吉

女の方にとつては
何が一番に幸福でせう？

さうね！
百夜（もゝよ）を通ふ深草の少將のやうな
熱烈な愛を受ける事でせう

其の意味で
私は貴女にリード百曲をデジケートします
いかゞ？　受けて下さる？

まあ！　隨分詩的ね！
さうして九十九曲御作りになつたらば

深草の少將のやうに死んで下さるの？

ゑゝ！　死にますとも

まあうれしいこと！

成るべく藝術的によ
あのショパンの臨終の時のやうに
肺病でね？

ゑゝ！　なりますとも

さう
樂しみにして御待ちして居りますわ、

あの
今日白孔雀のなかゝら
それは〳〵いゝ詩を見つけました
いま其の詩にふさわしいメロデイが
泉のやうに湧いて居ります
一寸ペンと五線紙を貸して下さい

あら！
どんな詩？　一寸見せてよ
——「コンマとペリオド」——
私大好き、西條さんの詩はどれも私大好き、

必ず　必ず
不朽の傑作を書いてデジケートします
ジユリアに獻じたベエトウヴエンの
ムウンライトソナタのやうな　或は
ショパンがダボニーの爲めに書いた
Dフラットの夜の曲（ノクチユルヌ）のやうな

でもねえ
此の詩は節などつけない方が反つて
氣分がスポイルされないでいゝでせうよ

餘程樂才のある人の手にでもかゝれは――いざしらず、さもなければね(・――!

いつたい

貴女は私の作品のうちで

何が成功してゐると思召す，何が御好き?

さあ!

兎に角一度でも御讀み致したことがないと、

さう

では貴女は私といふ人物を

何う御思ひになつてゐらつしやる ?

何ってとは ?

好き? 其れとも 御きらひ ?

あの……!

申上た後御氣を惡くなさらないこと ?

――・(・――・

――成程ね ! コンマかね !

――ペリオドはね! 矢張りね !

(Intermezzo)

時間といふ事がまだよく解りませんの、

時間といふのは時計のことさ、

では空間と申しますと ?

其れも結局時計のことさ、

では時計はつまり時間なのね ?

さうだよ

同時に時計はつまり空間なのね？

よく理窟を云ふね，それは違ふよ

それでは空間と申しますと？

空間といふのは即ち「空」と「間」だ

なんだかさつぱりわからないわ！

わからない？

（・

痛い！ 痛い！ いたいわよ

歯のあとがこんなについたぢやないの！

だつて林檎のやうな可愛らしい戀をして

僕を見たからさあ！

随分貴女は時間的衝動が激烈ね

だから空間的即ち「空と間で」

つまり貴女の頬を「くうとかんだ」

何んだ　しやれ？

まだ痛いかい？

随分痛かつたわよ！ まだぴり〳〵するわ

まだ痛い？ そんなに僕の側に居たい？

あらいやーだ――（・・・） どうしたんでせう

あなたの瞳は今異様に光つてよ

でもポチの眼のやうで愛くるしいわ

君の眼もゴム人形のやうにパッチリして可愛らしいよ

さう云ふ比較がつまり相對性原理と云ふんでせう？

さうだよ

時間と空間だつて矢つ張りあの
相對性原理なんでせう？

さうだよ

ではつまり「アインスタイン」ね

發音が違ふよ、愛し度い(アイシタイン)んだよ

(Finale)

わたくし此の次は是非共男に生れて來ますわ

僕は此の次は是非共女に生れて來るんだ

さうしたら又(また)──あの──又(また)ね？

又ねつて何んだい

あなたソプラノシンガーになつてね？

わたしピアニストになつてあなたの伴奏するわ

嫌(いや)なこつたい，音樂屋なんかに二度と再び生れて堪るもんかい，

今度女に生れたら、金満家(かねもち)か政治家の女房になるんだい．

だつて伊藤さんところの白蓮さんのやうに
逃け出さなければならないやうになつたら？

さうだね！　困るね！

政治家の奥さんになつて
原さんのやうに夫が若し殺されたら?

そいつも困るね !

それだから矢つ張り音樂家になさいよ.
嫌なこつたい，其んなものになるくらゐなら
石か鐵になる方がまだいゝや

あの
ショッペンハウエルは磁石と鐵を例に引いて
何とか云ひましたね! あなた御存知?

知つてるよ.
盲目的意志と云ふ事に就てだらう ?

だから若し此の次あなたが鐵に生れゝば
私磁石に生れてくるわ

うん それもよからう

さうして あの小さい可愛らしい金の壺の中に
二人して仲よくね ?

うん さうしたら君一生懸命
北を指して突進してくれ給へ
僕は一生懸命南に向つて突進するから.

Op. 27. dada. 1921.



日本最初の印象

アインシュタイン

◇日本人

一、親切で、愉快そう、
二、互に正直、
三、美を喜ぶ、
四、せか〳〵しない、（京都）
五、寫眞機を好む、
六、はにかむ、
七、謙遜、
八、口論をあまりせぬ、

九、日本人の性質には西洋人にない美しいところがある。

◇子　供

一、大人に大切にされてゐる、
二、日本の着物をきた女の子が可愛い。

◇婦　人

一、家庭的、
二、靜かな存在。謙遜、やさしい。

◇人力車

一、日本で唯一つ私の心を痛めるもの、
二、他人を安樂に運ぶ爲めに車をひいて走ることは「人間を下げること」「自由に反對。」

◇自　然

一、海岸線の屈曲の多いこと、
二、山と丘の多きことにより景色の多様、
三、木の葉と枝がやさしく小さきこと、

四、耕地のよきは人口の稠密の爲ならん、
五、富士の美。

◇建　築

一、寺院神社の屋根の形面白きこと、
二、日本の住家の趣味あること、
三、西洋式の建物が美觀をくずしつゝあること、
四、清潔。

◇衣　服

一、やさしく美し、
二、男の日本服は宗敎味あり、（袴）

◇社會生活

一、閉塞的でなく、
二、個人主義少なく、
三、淋しくないやうに見える、（京都）
四、階級反感少なきやう。

◇ホテル

一、心地よし、(京都みやこホテル)

二、贅澤、新奇、面白い、(帝國ホテル)

◇歡迎

一、心こもれる歡待、(神戶)

二、熱誠、(東京驛着)

◇講演

一、日本の聽衆は眞面目、

二、米國の聽衆は熱心、

三、米國では女の聽衆多く、日本では少ない。

◇望みたきこと

一、美しき心もちが外國の影響にて惡くならざること、

二、作法、衣服、建築が獨特の發達をすること。

◇滯在中は

一、自然と人と繪畫とを見たきこと、

二、日本の音樂を聞きたきこと。

——一九二二、一一、一九——

アインスタイン氏を迎へての感想

アインスタイン教授との初對面

東京理科大學教授　長岡半太郎

無線電信は學界の巨人アインスタイン教授が北野丸で大正十一年十一月十七日午後四時神戸港に入ることを報じた、十六日旅裝を整へ雨を冒して神戸に向つた、幸に晩方雨が晴れて翌朝は温暖な好天氣となつた、午後二時稅關のランチに乘つて遂に和田岬沖合に投錨した北野丸に向つた、同行の改造社長山本實彦君や社員と共に北野丸に乘移らんとするけれども二隻のランチが既に橫着けになつて居て容易に梯子に取縋ることができぬ、遠く甲板上に温顏の教授が此方を見詰めて帽子を振つてゐる、予は手紙を取り換したことはあるが一面識もないから教授は予を知つてゐる筈はない、然し寫眞によつて教授は確に彼であることを知つた、暫くして鳩山秀夫君が甲板に現れて教授に近寄り指して予の存在を示した、ところが教授は盛に帽を振つた、是は予に對する挨拶と思つて答禮をした、やがて予は甲板に上るを得て始めて握手をした、群集せる寫眞班は縱橫から教授夫妻のスナップショットを撮るに忙しく、又新聞通信員は教授を取圍んで其感想を聞き筆記してゐる、是や彼やで船中では何にも碌な話をすることは出來なかつた、オリエンタル、ホテルに一時間餘り休憩して京都に向つた、生憎壹等列車のない汽車なので氣の毒に思つて其事を話した、教授はそんなことを氣に懸けずともよろしい、ベルリンでは不斷三等列車に乘つてゐたから二等にも及ばないと言はれたので安心した、教授は至つて質素な風をして邊幅を飾らない人である、平和を好む人である、多趣味の人である、今朝から眼を射つた瀨戸内海の風光は長い航海の疲勞を洗ひ去つた、又日本の土を踏んで殊に物に面白く感じたと語つた。

京都のミヤコホテル、で晩餐の卓上に就くと直に學問上の話が始つた、予も約三十年前の留學時代の諸先生の動靜を尋ねて今昔の感に堪へなかつたが、大戰後の獨逸學者の窮狀は憫然に思つた。教授は金錢に澹泊な人と見えて、餘り財產が多

いとそれ丈荷が重くなつて學問に身が入らぬと語られた、卓上の話が興味を發して、食後煙草を喫しつゝ相對原理やら量子論電子論等の議論に時の移るを知らず、十一時半頃になつてグーテン、アーベンドと手を握つて各自室に入つた。

翌朝の特急列車中で四方山の話が出たが、敎授の物語れる事柄の中で最も予を感激せしめたことは、相對原理に執着する迄の話であつた、敎授が言はるゝには、世の中に種々の研究に從事する人がある、多くはこせ〳〵した一局部と申すべきことを精細に吟味することを樂みとして居る、予は些細なることに捕はれ、齷齪するとは嫌ひである、其故物理學の大綱に關する研究に從事することを考へ、終に相對原理に思ひ當つた、若し此原理を發展することにならなかつたならば、今日予は狂になつてゐるだらう、しかし此の如き宇宙の眞理は一世紀に一度現はるゝかどうだか、甚だ疑はしいから、大望を懷いて終に何にも爲すところがなく、空しく世に忘れらるる人もある、予の如きは幸福な方であると一笑された。

嗚呼巨人、——我邦に缺乏するのは偉人である、獨り學界に於けるのみならず、諸方面に於て偉人の缺乏は痛切に感ぜらるゝ。老人は虎を畫いて猫に似ること勿れと少壯氣鋭の人を戒むるを常としてゐる、我邦に偉人の出でざるは列强に對して最も慚づべき點である、東京驛に世界の大學者を迎へた歡聲は、將來東洋の光輝を發揮し、現時の大缺陷を補塡すべき巨人を生ずべき響であつたやうに感ぜられた。

（十一月十八日）

丈けが高くふとつて見えた

東北理科大學敎授　愛知敬一

僕は一年半前にア君の伯林の御宅で御目にかゝつてをるので、日本で御目にかゝつてもあまり變つた感じも起りません。只幾分か丈けが高く又ふとつてをらるゝ樣に思つただけです。

船で握手した後で直にア君が「君の近頃の論文は見ました」と言はれたのは非常にうれしく感じました。

「相對律の否定」の誤謬指示で新聞話になつてをりますが、之れは「否定」がつまらんものであり、從つて「誤謬の指示」もつまらんものです。上に話の「論文」といふのは、此否定の一條ではないことを附記しておきます。（十一月十八日）

偉大なる目ざしに接して

九州理科大學敎授　桑木彧雄

遇つて見れば十三年前の印象がさながらに思出られて其間に大してふけられたやうにも見えなかつた。素朴の態度風采

はドイツの學者によく見るところで、私が伯林で暫く下宿してゐた家の主人、但し哲學のドクトルであつたが、物ごしがよく氏に似てゐたとは豫て思つてゐたが氏に遇つて見たらば同時に其人まで思起した、併しどうにもその目ざしなどの何とも云へず偉大さを示すことは爭はれないものである。學界の偉人をギョーテイ型、カント型などゝ云つたら何れに屬するか。私はアインスタイン型といふ名がないならば其の偉大さを表はし得ぬであらうなどと思つた。(十一月十九日)

アインシュタイン先生に會ふ

東京高工教授 竹内時男

申込んであつた數學物理學會に於ける論文の發表をも急に延期して國府津迄アインシユタイン先生を出迎へる事にしました。皆樣と同じやうに神戸へ迄とは思つてゐましたが、前日も其の前日も講演の豫約があつて其の意を得なかつたのです。否其よりももつと大きな理由は、私は今急に此の大偉人に接し度くは無かつたからです。私には遠く敬する事に依つてのみ心の裡に滿足を感ずるからです。まのあたりに偉人の音容に接するよりは、彼の魂を込めた著書を暗い燈の蔭で玩味する方が、如何にも私の孤獨な心に應しかつたでせう。其の意味で私にはアインシユタイン先生の來朝は他の皆樣程に嬉ばしくは無かつたのです。が外の方々から薦められて、喜ばしくは思ひつゝも尙重い心を懐きつゝ國府津停車場迄參りました。ドイツ語の會話は平常から少しは復習しては居ましたが、二時間が程停車場で待つ間對話の種類を心の裡に描きつゝ必要な語を暗んじてゐました。日がとつぷりと暮れて冷氣が催す時分偉人を載せて特急車が辷り込みました。先生は恰も食堂にとの事で新聞記者團に混り乍ら列車の後尾で待ちあぐんでゐました。軈て卅分も經てからあの懐しい風丰のアインシユタイン先生が扉を排して入つて來られました。暫らく記者團への御話を傍で聞いて居ました。電燈の下で物優しく靜かに通譯を介して話して居られるさまは、あの御幼年時代の沈默や孤獨を偲ばれて涙ぐましい感じが致しました。夫人が次いで代つて記者團に話される時、私は別室で長岡博士を經て紹介せられました。大きな手で握られた時には、私は一つの語も得出ませんでした。續いて何か仰有つたやうでしたが其も私の耳には入りませんでした。親しげにして然も犯す可からざる眼光を向けられました時、私は茫然として偉大なる包容性―偉人にのみ見得る――を感じたのです。(十一、十一、十八)

再びわが故郷にて先生と相見る欣び

理學士　岡谷辰治

巴里でお目にかゝつた先生を、又故郷でお迎へすることが出來たのは誠に嬉しい次第であります。神戸の宿では、長い航海後のお疲も顧みず御機嫌伺ひに出た私獨りの爲にあのお優しい眼で私をみつめ乍ら、長い間種々の物語りを賜はりました。その上御上京の折は幸ひにも途中より同車する欣びを得て、再び溫顏に接することが出來ました。その時のお話は唯に同じ學問を研究する後輩を激勵指導して下さつたこと許りでなく、又お好きな音樂に就ても數々な興あるお言葉でありました。いつも乍ら、先生に接するときは先生の博學と謙讓の徳と、常に先生には、靄々として春風が吹いて居るやうな溫かさがあるが爲に愈々先生を敬慕する念が深くなります。

（十一月十八日）

底知れぬ深みと落つき

桑木或雄博士夫人　桑木道子

アインスタイン博士！　肖像はかねてから寫眞で見てをりましたが、目のあたり見た瞬間はたゞ重荷を卸してホッと一と息した時と云ふやうな感じがいたしました。底しれぬ深みと落ちつきのある態度、あゝした處から一世を驚かすやうな偉大な考へも湧いて來たものかとつくづく感じました。

夫人も博士におとらぬやさしい方では有ますが、あゝ云ふ偉人をたすけられる程の方ですから、やさしい中にもどこかしつかりとした處のあるのを見受けました。それに又よく始終談笑せられて、そのとぎれる事のないほど多くの話の種を持つて居られるにも驚かされました。

私も九州からの旅路にありますせいか殊にさう思ひますのはあゝして遙々獨逸から來られ又此先どの位旅行を續けられるか判らぬと云ふに其旅裝の簡單質素でいかにも輕々とせられてゐるにも少からぬ感じを深く致しました。（十一月十九日）

校正室から

◆世界的の碩學アインスタイン氏を迎へて、親しくその温容に接し、その聲をきくことが出來たのは、私共の最も喜びとし、誇りとする所です。氏の來朝が如何に多くの人々に大きな響きを與へたか、十八日夜の東京驛に於けるあの熱狂的な歡迎振り！翌十九日慶大講堂に於けるあの緊張し切つた空氣！講演に對するあの渇望的な聽講振りを見ても分ること〻思はれます。

◆か〻る空前の偉人の事柄を出來得る限り愛讀者諸姉にお傳へしたいと思つた〻め從て發行日も少しおくれました。然しそれだけ十二月號の本誌は、自信と誇りとをもてるものを編輯し得たと信じます。

◆ア氏の『日本最初の印象』は短いものですが、上陸後二三日間にあれだけの鋭い觀察は實に恐しいと思ひました。竹內時男氏の『輸入通俗相對性原理』と稻垣守克氏の『アインスタイン氏を迎へて』は、最も興味ある大讀物です。

◆『竹內仁氏の悲劇に就て』に對する諸氏の感想は、私共にいろ〳〵なことを考へさせ、反省を促します。これは竹內仁氏一人の問題ではありません、私共お互ひの問題です。その意味からこの問題に對して書かれた諸氏の感想を見ると、そこにいろ〳〵と敎へられ考へさせられる所がありませう。

◆武者小路實篤氏の『父と娘』は同氏が止むを得ぬ事情のため本號だけは休載すること〻なりましたから、一寸お斷りして置きます、尙ほ「エスペラント講座」も休むことになつたことを、併て筆者並に愛讀者諸姉にお詫びして置ます。

◆本誌新年號は『近代の世界音樂號』とし、世界各國の音樂を網羅した一大壯觀の雜誌を編輯しつ〻あります。殊に音樂の盛大な現今に於て、必ず皆樣の期待に添ふこと〻信じます。

◆ア氏の『相對性原理』に就ての徹底した理論を知りたいと思はる〻方は、本社發行の『改造』アインスタイン號をごらん下さい。同誌には、ア氏の理論硏究者としての學界の權威のみが執筆されて居ります。

◆北川千代氏の『結婚の幻滅』をよむと、何故江口渙氏と離婚しなければならなかつたといふことが分ると同時に、殊にこれから結婚せんとする若い女性に多くの事柄を敎へます。興味中心でなく、お互に自分々々の問題として考へて頂きたいと思ひます。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇注文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

㊞本社廣告取次所 日本電報通信社 博報堂 弘盛舍

大正十一年十一月十七日印刷納本
大正十一年十二月一日發行
(十二月號六拾錢)

編輯兼發行者 印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎

印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 株式會社博文館印刷所

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝(長) 一六三八 二八五四
振替東京 四三〇三 八四〇二

せる本誌を見よ!!

改造社出版目録

◇志賀直哉著
直哉傑作選集 **壽々**

定價貳圓八拾錢 送料拾九錢 四六判上製

四版

秋の澄み渡つた朝空の如き透明な筆の持主である作者は何と云つても小說の大巨匠であり、最高權威である、日本の藝術を語るものは先づ氏のしみじみした作品を味ふべきである。そこに藝術の殿堂はある。

◇野上彌生子著
小說六つ

定價貳圓七拾錢 送料拾九錢 四六判上製

三版

綺羅星と並ぶ創作壇に赤輪唯だ一花、それは野上彌生子である、女流作家も多い、しかし野上氏に比べれば總ての作家は果して比較になるだらうか、氏の半生涯に於ける小說から特に六つを抽出して江湖に發表する。

◇理學博士 石原純著
(増補)アインスタインと相對性理論

定價貳圓貳拾錢 送料拾七錢 四六判上製

卅二版

ニユートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された、本書を一讀せずして敎育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

◇中澤臨川著
電子說から見た世界

定價壹圓八拾錢 送料拾五錢 四六判上製

改題六版

一代の文豪として雷名を轟かした臨川氏は實に東大出の工學士だ、本書は我國に於て類例のない理學的文藝品であり、藝術的滋味に富める科學的世界觀の大傑作、本書は「新社會の基礎」の改訂版である。

◇文學博士 鹿子木員信・饒平名智太郎共著
ガンヂと眞理の把持

定價貳圓參拾錢 送料拾九錢 四六判上製

八版

東洋が現代に有する最大の哲人として印度革命の大立物として共產露西亞のレーニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる「眞理の把持」と最近印度に橫流する理想主義的革命の本體を明にす著者は印度硏究の權威たる鹿子木博士及饒平名氏である。

◇饒平名智太郎編
ガンヂ審判の日

定價壹圓五拾錢 送料拾五錢 四六判上製

五版

我がガンヂは三億印度民生のために囚はれ囹圄の人となつた、審判の日の彼は、さながら審判官を導くが如く法廷は森嚴水を打てるが如き狀態であつた、本書は彼が今回印度官憲に審問されし以後の彼及び印度の行動を描ける我ト民必讀の書。

◇文學博士 朝永三十郎著
カントの平和論

定價壹圓五拾錢 郵稅拾五錢 四六判上製

五版

著者は我國に於て哲學史專攻の第一人者だ、カントの平和論は近代平和論の根源であり、母體であることも一般周知の事だ、政治哲學を根本的に組織的に硏究せんとするものは基礎哲學として本書の一讀を望む。

VIRINA REKONSTRUO
(MONATA REVUO PLEJ ALTAKLASA POR VIRINOJ EN JAPANUJO)
UNU EKZ. 50 SEN; JARABONO 6 JEN.
ELDONEJO: KAIZO-SHA, TOKIO, SHIBA KU, ATAGOSHITA-MACI 1.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十一年十二月一日發行（毎月一回一日發行）
大正十一年十一月十七日印刷納本
第壹卷第參號
十二月號
特價金六拾錢